

2018 年度（平成 30 年度）

博士論文

内発的発展論における主体に関する考察

—ネパールでの実証研究から—

同志社大学大学院

グローバル・スタディーズ研究科

グローバル・スタディーズ専攻 博士課程（後期課程）

氏名：米川安寿

4I131308

# 博士學位論文要旨

論文題目： 内発的发展論における主体に関する考察  
—ネパールでの実証研究から—

氏 名： 米川 安寿

## 要 旨：

本論文は、日本の社会学者である鶴見和子が提唱した内発的发展論に関して、その実践面における可能性について考察したものである。特に、発展の中心を担うとされるキー・パーソンについての分析を行うことを目的としている。

内発的发展論は、社会の近代化に伴い問題となった南北の経済格差、南の貧困や地球環境問題を踏まえ、1976年に提案された理論である。西欧の近代化それ自身は西欧にとって内発的发展であったように、世界の他の地域にも独自の内発的发展があるとする点が特徴である。この理論では、内発的发展を牽引するキー・パーソンの存在が指摘されている。そして内発的发展論とは、こうした主体についての研究であるとされている。しかしながら、キー・パーソンの研究自体は体系的に整理されているわけではない。このため、内発的发展論の展開のために、キー・パーソン論の発展が一層必要である。

本論文では、上記の課題に対し、キー・パーソンがいかに誕生するのかという点に関心を払い、行動の源泉に注目することとした。そこでキー・パーソンを選定し、質問票調査及びライフヒストリーに関するインタビュー調査をネパールにて行った。キー・パーソンを考察するための調査仮説は、マズローの欲求階層理論からヒントを得て、キー・パーソンは自己実現的人間である、とした。このような仮説を設定した理由は、南の国々において活動する当地の人々と出会う中で、マズローの指摘する自己実現的人間の要素があると考えたことによる。この仮説を検証するため、質問票はマズロー理論を土台に作成された既存の研究の質問リストを元に構成した。そして、分析の結果キー・パーソンは確かに自己実現的人間であると判断することができた。自己実現的人間となった具体的背景の分析には、インタビュー調査の資料を活用した。その結果、キー・パーソンたちは人生で偶発的な出会いによるターニングポイントを経験し、これに伴い目的意識・価値観が生まれていたこと、また目標に向かって自己犠牲的な努力をしていたことを見出した。ターニングポイントでは、内発的发展論が重視する「外部との接触」が実際に起こり、人生に決定的な影響を与えていた。つまり内発的发展論の理論的要件に沿っていることも見出した。また、キー・パーソンとなった人々の学歴や家庭環境は様々であり、分析結果からも学歴や子供の頃の経済状態が重要なのではなく、「いかに出会うか」が要であったことが分かり、多様な出会いをもたらす環境が内発的发展のために必要であるとの結論を導いた。

第一章では、内発的発展論についての鶴見の考えを多角的に整理した。鶴見は、タルコット・パーソンズの「先発国は内発的発展、後発国は外発的発展」という考えについて、西欧以外にも独自の内発的発展があるとする。その思想的な由来、信念の底流には、人々の宗教観・精神性への注目がある。さらに南方熊楠や今西錦司を引き合いに出すような、生物を含むアニミズム的な自然観に根ざすものがある。このような内発的発展論の多様な思想的側面に加え、理論的側面、また主体性についての言及や先行研究による内発的発展論の議論などを整理し、本論文の位置づけを示した。

第二章では、近年の開発倫理の議論を踏まえ、内発的発展論が開発倫理の中に位置づけられるものとして整理した。鶴見は、内発的発展論をアニミズムに依拠する動機付けの体系とし、これをプロテスタンティズムの倫理に対置させようとし、倫理という用語を使用している。開発倫理の議論もまた、開発による弊害を反省し、倫理学の視点から評価しようと発展してきた経緯があり、社会の多様な価値を考慮しようとする。特に、開発の中で起こる価値衝突を評価すること、多様性を開発の枠組みにいかに関与させるかといった視点が議論される。つまり、開発倫理は価値や多様性の問題を扱う点で、内発的発展論の思考の枠組みに沿うものであり、倫理的な熟慮を必要とする今後の開発における内発的発展論の有効性、意義を示した。

第三、四章では、本論文で内発的発展を心理的な側面から調査を行うに当たり、これまでの開発の理論と実践における心理学の活用状況について整理した。また、内発的動機付けという観点から進められてきた心理学的な研究成果を整理した。開発事業において、主観に関わる心理学の利用はこれまで難しかったと考えられ、現場においては人々との心の交流があるにも関わらず、理論的な支柱にはならなかったと考えられる。しかし、20世紀後半になって主流アプローチになったエンパワーメントは、その原点が心理的な支援であり、その意味で開発にもすでに心理学の関与がある。最近になり、開発現場での心理学の活用手法をまとめた報告書が JICA (Japan International Cooperation Agency : 独立行政法人国際協力機構) から提出され、実践的活用も少なからず検討されていることが分かる。このような文脈から、今後心理に注意を払う必要性を確認したうえで、筆者が調査を実施するにあたり、心理学者マズローの欲求階層論に着目する根拠と内発的発展論との関連性を整理した。

第五章では、本論文の調査地であるネパールについて、調査分析の事前手続きとして社会経済状態などの一般的な情報を整理した。MDGs (Millennium Development Goals : ミレニアム開発目標) といった、国連の諸活動による開発の状況と、HDI (Human Development Indicator : 人間開発指数) や GDP (Gross National Products : 国内総生産) といった社会経済的側面からみたネパールの現状について整理している。また現在の対ネパール ODA (Official Development Assistance : 政府開発援助) から見た開発支援の状況から、今後の課題や展望についても整理した。ネパールは、MDGs 目標をかなりの程度達成したが、GDP でみると安定的な経済成長はしていない。しかしヒマラヤや熱帯ジャングル等の観光資源があり、また FAO (Food and Agriculture Organization of the United Nations : 国連食糧農業機関) 等の指標で見ると、食糧自給率の高いものがあり、自然資源の豊かさが見いだせる。歴史や文化、伝統の豊かな諸側面も含め、内発的発展にはよい条件であることを俯瞰的に示した。

第六章では、現地調査の報告をし、分析結果を整理した。現地調査では、筆者が選んだ 5 名をキー・パースンとし、質問票調査とインタビュー調査を行った。また、一般標本として 144 名に対し同様の質問票調査を行った。キー・パースンは自己実現的人間であるという仮説の下、記述統計や相関係数分析、統計的検定を利用し、一般とキー・パースンとの比較分析をしている。統計分析では因子分析を利用し、質問票における全質問を 5 因子に限定して分析したところ、マズローの欲求段階に沿った形で分類できることが分かり、質問票の有効性を確認した。そこで、さらに細かく因子分析を行ったところ、全体が 11 因子に分けられた。この中でも、承認欲求は「他者からの承認」「自尊心」に分けられ、自己実現欲求は「自己の価値実現」「自己受容」に分けられた。この 4 因子を比較分析すると、一般標本では、学歴が高いほど全体の満足度は高いが、自己実現欲求は必ずしもよく満足していなかった。これとは逆に、キー・パースンの学歴はそれぞれ異なっているにもかかわらず、大人になってから自己実現欲求、承認欲求の満足度が全般的に高いことが分かった。この傾向を相関係数で見た場合、学歴と承認欲求には相関関係が強くみられたが学歴と自己実現欲求では強い関係が見られないことが分かった。また一般標本でキー・パースンに近いと判断した標本は承認欲求の因子「自尊心」と自己実現の因子「自己受容」が高かったのに対し、キー・パースンはそれに加えて承認欲求の「他者からの承認」、自己実現欲求の「自己の価値実現」も含めた 4 因子すべてが高いことが特徴であった。特に、「他者からの承認」「自己の価値実現」の満足は、キー・パースンに固有の特徴であることが独立性検定で確認できた。以上から、キー・パースンが自己実現的人間の特徴に従っていると判断した。また、そのような人間となった背景について、インタビュー調査から分析した結果、キー・パースンには人生を変化させたターニングポイントー偶発的な出会いーという共通点があり、これがきっかけとなり、鶴見が指摘するような価値明示的な目標が生まれていたことが見出せた。このため内発的発展論の創造性には、子供時代の家庭環境や学歴によるよりも、個々人の価値や目標設定に繋がる「偶発的な出会い」が生まれる豊かな社会交流の場が重要であると考えられた。

第七章では、分析結果を心理学の研究成果から推論するとともに、本論文の結論を整理している。まず「偶発的な出会い」がもたらしたものについて、これまでの心理学の理論や研究成果からどう読み取れるのかを調べ推論を行った。この結果、キー・パースンたちは人生のターニングポイントにおいて自己査定理論で重要とされる自己の能力を発見することができたのではないかと考えられた。これにより自己の成長につながる高い目標設定をなし得たのではないかと示唆を得た。このため、「偶発的な出会い」は、個人にとって興味があり、「自らのできること」に関する目標との出会いであることが必要であるとの含意を見出した。本論文の研究からの含意として、内発的発展のためには、価値観や目標設定をもたらす「偶発的な出会い」に巡り合うことのできる社会交流の豊かな環境が必要であるとの結論を述べた。

## 目 次

# 第一章

## 内発的発展論についての考察

第一節 鶴見和子による内発的発展論の提唱の経緯 .....	1
第二節 内発的発展論の要素の整理 .....	4
(1) 環境への配慮 .....	5
(2) 内発的発展論における「内発性」の強調、西欧に対する独自性 .....	6
(3) 原型理論としての内発的発展論 .....	7
(4) 内発的発展論の模式——中国・タイ・水俣の事例から .....	9
(5) 主体性とキー・パースンの概念 .....	13
(6) キー・パースンに関する先行研究 .....	16
(7) 地域を単位とする意味 .....	17
(8) 民際関係としての内発的発展論 .....	19
(9) 権力の奪取を目指さない社会運動 .....	21
(10) 文明論か、政策論か .....	22
(11) 動機付けとしてのアニミズム .....	25
(12) 鶴見和子のコスモロジー .....	27
(13) 鶴見の内発的発展論と国外の内発的発展の議論の動向 .....	29
第三節 総括 .....	31

# 第二章

## 内発的発展論と開発倫理

第一節 開発倫理と内発的発展論の関係 .....	33
第二節 開発の倫理的問題 .....	34

第三節	開発に対する倫理学からの多様な論争	38
第四節	開発倫理の考え方と価値選択、意味の理解	39
第五節	調査研究者の多様性、社会の多様性と認識的正義	42
第六節	道具としての倫理ではなく、批判的問いかけとしての倫理	44

## 第三章

### 開発における価値の問題、心理の役割と内発的发展論

第一節	開発による疎外	46
第二節	開発と心理学	49
第三節	心理学と内発性——自己目的的活動	52
第四節	内発性と動因	56
第五節	自己調整	59
第六節	内発的发展論における創造性	60
第七節	教育と創造性の関係	63
第八節	マズローの欲求階層理論と内発的動機付け	64

## 第四章

### 内発的发展論におけるキー・パースンとマズロー心理学の活用

第一節	マズローの心理学	67
第二節	キー・パースンとマズローの自己実現的人間	72

## 第五章

### ネパールの開発について

第一節	ネパールの地理	75
第二節	地理的特性と開発問題	77
第三節	ネパールの開発と HDI	82
第四節	ネパール経済の動向	83

第五節	ネパールの経済と資源 .....	84
第六節	ネパールにおける国際支援の現状 .....	85
第七節	ネパールの歴史 .....	91
第八節	ネパールの文化 .....	93

## 第六章

### キー・パースンの心理的側面についての考察

第一節	現代の開発における心理的支援 .....	96
第二節	調査概要（１）キー・パースン調査 .....	99
第三節	調査方法 .....	100
第四節	質問票 .....	103
第五節	調査概要（２）比較のための一般標本調査 .....	105
第六節	調査結果（１）キー・パースン調査の分析から分かること .....	110
第七節	調査結果（２）一般標本調査の分析から分かること .....	116
第八節	５段階欲求の因子分析による確認 .....	122
第九節	平均値を利用した相関関係からの考察 .....	125
第十節	学校教育歴との相関関係 .....	131
第十一節	因子分析及び因子得点による分析 .....	133
第十二節	グラフによる因子得点の比較 .....	137
第十三節	独立性の検定による考察 .....	142
第十四節	人生のターニングポイント .....	149

## 第七章

### 予期せぬ出会いと内発的発展—心理学的見地からの推論—

第一節	調査結果の概要 .....	153
第二節	予期せぬ出会いと目標設定の関連性についての考察 .....	154
第三節	自らに出会うこと、自己概念・自己査定理論からの考察 .....	156
第四節	承認欲求、自尊心との関連性 .....	160
第五節	自己評価の過程と「できること」の発見 .....	161
第六節	自己犠牲的な努力の心理的な意味合い .....	162

第七節 キー・パースンの内発性と、創造性 .....	164
第八節 結論 .....	165
第九節 本研究の限界、課題および可能性 .....	167

## 付録

分析資料 .....	171
資料 1 : 因子分析の出力結果 (過去)	
資料 2 : 因子分析の出力結果 (現在)	
資料 3 : 因子分析の出力結果 2 (過去)	
資料 4 : 因子分析の出力結果 2 (現在)	
資料 5 : 因子得点の最大値・最小値の分析	
資料 6 : 独立性の検定におけるグループ統計量	
資料 7 : 分散分析による平均値の比較に関するグラフ	
資料 8 : 各キー・パースンのインタビュー調査の詳細	
参考文献 .....	196
英語省略記号一覧 .....	215
あとがき—いくつかの懸念 .....	217
謝辞 .....	218

# 第一章

## 内発的発展論についての考察

### 第一節 鶴見和子による内発的発展論の提唱の経緯

この論文は、日本の社会学者鶴見和子により近代化に対抗するもう一つの社会発展の理論として 1976 年に提唱された内発的発展論について考察を深めるものである。特に、内発的発展論の議論の中でも重要なテーマであるキー・パーソンについて、実践面に関する考察を深めることを目的としている。

内発的発展論は、近代化に対するオルタナティブの提唱が目的である。この理論が提唱されたのは、近代化による開発の弊害が世界的に露呈し始めた時期であり、開発や経済発展に対する異議申し立てが盛んに行われていた時期である。例えば環境問題はその一つであり、地球的規模の環境問題や、局地的な公害問題が深刻化していたことから、国連人間環境会議（1972 年）が執り行われるなどして注目され始めた。また、経済開発活動によってもたらされた国際的な貧富の格差の問題もその一つである。世界的な所得格差の拡大もあれば、開発援助によって、支援の受け取り国側の債務負担が逆に重くなり、格差は各所に現れた。右肩上がりの経済発展の限界と、環境問題を指摘した『成長の限界』も 1972 年に出版されている（メドウズ,他 1972）。このため開発の在り方に見直しが求められるようになったのである。こうした潮流において、近代化以外の独自の社会発展の必要性や意義が世界の多様なグループにより考察され始めた。本論で取り扱う内発的発展論も、こうした流れの中であって、鶴見和子により提唱された代替的な発展理論の構築への試みである。

内発的発展論では、近代化がもたらした諸問題に対する解決策として、地域ごとの、自然環境と共生する形でのオリジナリティあふれる生活の流儀の一層の進化を、またそれによる人々の生活の充足を目標とする。特に内発的発展論の特色は、西欧の発展が内発的であり、その他が外発的発展（exogenous development）とする考えに対し、西欧以外の地域にも独自の発展すなわち「内発的発展(endogenous development)」がありうることを強調するところである。

とはいえ、西欧の側からも、近代化の弊害に対するオルタナティブが議論されてきた。鶴見の理論が提出されたのと同時期<sup>1</sup>、前年の 1975 年に、国連の特別総会において、西欧の一員であるスウェーデンのダグ・ハマーショルド財団<sup>2</sup>もまた『もう一つの発展』という報告書を提出し、類似の概念について述べているのである（Dag Hammarskjöld Foundation 1975）。そして鶴見は、これを内発的発展論と同義であるとする。ダグ・ハマーショルド財団によっても、内発性や環境共生という類似の議論がなされており、鶴見と同じ問題意識に立っていることがわかる。それぞれが近代化に対するオルタナティブを提唱している点で、洋の東西を問わず、共通の問題意識が同じ視点から示されたことは、興味深い共時性である。内発的な発展そのものは、洋の東西のどちらにとっても近代化の弊害を癒すにあたって関心を集めていたのである。鶴見は、自身が提唱した内発的発展論を以下のように表現している。

内発的発展論とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と創出すべき社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上すべての人々および集団が、衣食住の基本的欲求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すことである。それは、現存の国内および国際間の格差を生み出す構造を変革することを意味する。

そこへ至る道すじと、そのような目標を実現するであろう社会のすがたと、人々の生活スタイルとは、それぞれの社会および地域の人々および集団によって、固有の自然環境に適合し、文化遺産にもとづき、歴史的条件にしたがって、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出される。したがって、地球規模で内発的発展が進行すれば、それは多系的発展であり、先発後発を問わず、相互に、対等に、活発に、手本交換がおこなわれることになるであろう。

（鶴見 1996：9）

---

<sup>1</sup> 鶴見は、1976年に鶴見（1976）によって内発的発展の用語で議論を始めたとしているが、実際には1985年に柳田国男の近代化に関する議論を内発的発展の視点から英語によって発表している（Tsurumi 1975）。このため実際にはダグ・ハマーショルド財団の報告書と同年から議論が開始されているともいえる。

<sup>2</sup> ダグ・ハマーショルド財団（Dag Hammarskjöld Foundation）とは、1953～61年まで第二代国連事務総長を務めたスウェーデン出身のダグ・ハマーショルドの死後、その資産により、1962年に設立された財団である。国連が目指す基本的な価値を世界で実現し、持続可能で平和な世界の実現を目指すことを理念に研究や活動を行うことを目的としている。<http://www.daghammarskjold.se/>

内発的発展論は、近代化がもたらした諸問題に対する解決策として、地域ごとの、自然環境と共生する形でのオリジナリティあふれる生活の流儀の一層の進化、またそれによる人々の生活の充足を目標としていることがわかる。一方、ダグ・ハマーショルド財団によって提出された「もう一つの発展」では、次のような枠組みが示されている。(1) 人々の必要を満たし、貧困をなくし、(2) 内発的で自律的であること、特にそれは社会の強さによって支えられること (3) 環境と調和すること (4) 社会の構造を変えることである<sup>3</sup>。内発的発展論と比べると、地域性や自然、文化、人々の創造性に依拠する多様性への言及といった概念上の共通性があり、ハマーショルドの枠組においても「もう一つの発展論は内発的であり、自律的である」とし、内発性というキーワードも含まれている (Dag Hammarskjöld Foundation 1975 : 34)。鶴見は同義だと言うけれども、両者の違いは内発的発展論では発展が「内発的」であることを特に強調している点であり、理論の名称にあえて掲げる特色である。西欧の近代化は内発的発展 (endogenous development) であり、これに従属し、それに倣う国々の発展の形式は外発的発展 (exogenous development) であるとして対置したのはタルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) であると鶴見は述べているが<sup>4</sup>、これに対し、西欧の近代化それ自身は西欧の内発的発展であったように、世界のほかの地域にも、独自の発展すなわち「内発的発展」がありうることを強調するのである。「もう一つの発展」では、発展とは人々の発展であり、その発展は「その人々の持っているものに依拠する (It relies on what a human group has)」という点を挙げる<sup>5</sup>。その意味で、「もう一つの発展」が発展そのものの一般的意味を問いなおすのに対し、鶴見の場合は中身としては同一かもしれないが、近代化に追従してきた在り方を反省し、追従しない独自のあり方を視点として強調する。その意味で「もう一つの発展」よりも、目指すものが名称として分かりやすい。オルタナティブな発展の事例として、鶴見は東洋での仏教の開発僧の活動を取り上げ、宗教的な側面を重視した開発の活動を示したり、日本の水俣で取り上げられるような自然への共感といった精神性など、スピリチュアリティを意識している。内発的発展論ではこのような視点から、西欧以外にも内発的な発展がありうることを説得的に紹介している (鶴見 1989a : 46)。

内発的発展論の開発や発展の目標は、「衣食住の基本的欲求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すこと」である。「つくり出すこと」というような能動的な表現によってあらわされる一面をもつ一方で、それぞれの社会の生活文化や流儀に関心を払い、事例を集めて分析するものとしている。つまり観照的な研究姿勢も示しており、動的な面と静的な面の二面性があるような議論の構成となっている。これについて鶴見は、西欧的な一般理論に対抗しようとして理論の一般化に性急になってはならず、むしろ内発的発展論は一般化の度合いの低い原型理論 (Proto-theory) であるとしている (鶴見

<sup>3</sup> Dag Hammarskjöld Foundation (1975 : 28) Elements of a conceptual framework より。5 点項目が示されており、5 点目は早急な行動が必要であり可能である、とされている。

<sup>4</sup> 鶴見 (1996 : 6)。パーソンズの原文は Parsons (1961 : 76-78) を参照。

<sup>5</sup> 注 3 と同様 Elements of a conceptual framework の 2 点目で議論されている。

1996 : 36)。また、当然ではあるが外部者が「発展させる」という他動詞的な Development（開発）ではなく、内部者自身によって「発展する」という自動詞的な Development（発展）を志向している。つまり、本来は多様な世界を、外部者の視点から一般化してみたい近代化理論の傾向に対する反省が徹底されている。そのため、はじめに事例を集めて原型理論の構築に徹する研究が内発的発展論の立場である。

しかし、環境保全・保護の必要性が主張されるとともに、北の国（先進国）が多くの南の国を開発の流れに飲み込んでいく潮流においては、外部者の実践もまた必要であろう。このような意識で内発的発展論が提唱された背景を思えば、外部者自身が内発的発展論の理念に反しない範囲内で、発展に能動的に参加し、実践することもまたこの理論の役目であり、挑戦すべき課題といえるはずである。特に、本当の意味で当地の人々の内発性が促され、近代化へのオルタナティブが実践されるような形で、外部者もまた、その内発的発展に参加できるような在り方が実現されるべきである。

そこで本論文では受け身の事例収集にとどまらず、「外部者が参加できる内発的発展の実践の方法論」を明らかにしたいと考えた。このような問題意識に基づいて着眼点を整理する中で、特に注目したのが内発的発展論におけるキー・パースンの存在である。キー・パースンとは、内発的発展論において、地域を変革する人物として描かれている。鶴見の編著書『内発的発展論』の第 1 章を担当し、鶴見が内発的発展論を議論し始めた頃から共にこの課題に取り組んできた西川は、内発的発展論とは変化を統御し、創出する主体を整備することであると述べる（西川（潤） 1989 : 28-29）。鶴見はこの「主体性の整備」を、キー・パースンの文脈で述べる。すなわち、「多様な発展の経路をきり拓くのは、キー・パースンとしての地域の小さき民である。その意味で、内発的発展論の事例研究は、小さき民の創造性の探究である」とする（鶴見 1996 : 30）。内発的発展の出来事には必ず人の活動があり、その中で重要な役割を担うのがキー・パースンである。したがって、内発的発展論の研究自体がキー・パースンの研究ともいえるのである。しかし、内発的発展論の議論の中で、キー・パースンについての理論的、分析的な詳述は実際のところ少ない。このことは内発的発展の研究や実践に残されている大きな課題の一つであろう。そこで、本論文は主体性の整備、小さき民の創造性に関する理解を深めることを目指し、キー・パースンについての考察を試みることにした。

## 第二節 内発的発展論の要素の整理

本章では、キー・パースンについて研究を進めていくにあたり、その準備として内発的発展論の論点を整理しておきたい。内発的発展論は、要件としては前出のように簡潔にまとめられているが、その要素は多様にちりばめられている。本論でも研究に際して要点を押さえるため、重要と思われる事柄 13 点ほどを抽出し、順に整理する。それによって、内

発的発展論によって立つ思考を明確にし、本論のキー・パーソン研究が的確なものとなるようにする。

### （１）環境への配慮

内発的発展は、近代化論への対抗論として別の在り方を探るために提唱されたものである。確かに、環境問題は近代化の限界を人に突きつける一大事であった。第二次世界大戦後 1950 年代になると、急激なグローバル化は公害や環境破壊という負の側面を露呈するようになったため、世界レベルで関心を集め国連の場で議論されるようになった。たとえば国連人間環境会議は 1972 年にスウェーデンのストックホルムで開催されたが、この時のキーワードは「Only One Earth (かけがえのない地球)」である (Friends of the Earth 1972)。この会議には世界の 113 か国が参加し、世界で初めての最も多くの国が集った環境に関する会議となったとされる。会議の結果、人間環境宣言並びに環境国際行動計画が採択されることとなり、現在も活動を続ける国際連合環境計画 (UNEP : United Nations Environmental Programme) がケニアのナイロビに設立されるという成果を上げた。

この会議が開催される前、1962 年には、レイチェル・カーソン (Rachel Louise Carson) によって『沈黙の春』が発表されている (カーソン 2001)。この著書は農薬汚染による生態系の破壊に警鐘を鳴らすもので、大きな衝撃をもたらした。『沈黙の春』で取り上げられた農薬は DDT がよく知られているが、これは殺虫剤として使用されるジクロロジフェニルトリクロロエタンというものであった。レイチェル・カーソンが著名な作家であったことから、著書の影響は世界に広がり、農薬への注意喚起がもたらされた。この問題は国連人間環境会議でも重要な議題となり、近代工業製品による生態系の破壊に強い意識が向けられることに繋がった。また、この時期は工業の影響による局地的な公害も多発していた。日本の水俣病は 1950 年代に、四日市ぜんそくは 1960 年代に発生している。世界を見ても 1952 年にロンドンスモッグが発生し 1 万人以上の死亡者が出ていた。冬季のロンドンに窒素酸化物が充満し、呼吸器障害をもたらしたのが原因である。アメリカでは 1940 年代に光化学スモッグが発生し、カナダでは水俣病と同じ水銀による健康障害が 1960 年代から発生していた。このほかの環境公害も 20 世紀の中盤には多発するようになり、多くの出来事が環境意識啓発に繋がることとなった<sup>6</sup>。

鶴見は、1976 年から水俣病の公害の調査を始めることとなり、公害問題を通して人間の自然との関わり合い、在り方への関心を深めた。これに近代工業化の拡大による生態系の破壊、経済的な不平等の拡大といった問題意識が複合し合い、内発的発展論やダグ・ハマーショルド財団の報告書などへと結実していくこととなり、持続可能で環境生態系に適合した、近代化とは異なる発展への関心を生み出す契機となった。近代化の理論が、主に経済発展に向けられているのに対し、こうした問題意識が反映された内発的発展論の発展は、

---

<sup>6</sup> 国内外の公害の事例については (佐巻,他 2005) を参照した。

国民国家ではなく、地域に注目し、それぞれの固有の自然環境への適合の必要性が含まれることとなった。そこでは国家ではない、地域の人々の姿が想定される。内発的发展論では、近代化政策の結果としておこった弊害を修復するか、または激化するであろう弊害を予防するための社会運動として、地域の住民によって別の発展のモデルが創出されることが期待されるのである（鶴見 1996 : 27）。キー・パーソンも、このような文脈でとらえられている。

## （２） 内発的发展論における「内発性」の強調、西欧に対する独自性

二つ目は、内発的发展論における内発性の強調である。鶴見がタルコット・パーソンズを引用して言うように、近代化それ自体は西欧発祥であり、西欧にとっての内発的发展であった（鶴見 1989a : 47）。ところが近代化論は、地球上すべての社会に適用することのできる「一般理論」として構築され、そのような理論をあてはめて分析した時に、合わないものは切り捨てるという方式によって議論されてきた（鶴見 1996 : 4,36）。近代化論的发展は、植民地時代、世界大戦時代、冷戦時代、現在を通して今でも世界に広がり続けている。こうした发展の価値は、特に物質的な生活において豊かになることである。しかし、実際の近代化の結果は、物質的な豊かさが達成されたというよりは、富が偏り、格差が拡大する弊害であった（Dag Hammarskjold Foundation 1975 : 25）。また世界中で均質な生産物が販売され、グローバルな資本とメディアを通して、同じ生活スタイルが世界中へ発信され浸透している。近代化理論では、資本と生産のグローバル化により、世界の隅々まで恩恵が波及していくトリクルダウンを主張してきたが、実際のところは失敗と見なされている（仁科 2008 : 218）。量的なトリクルダウンも失敗し、価値観や暮らしの面での質的なトリクルダウンの過程でもまた、行き詰っているといえる。

そこで鶴見和子が指摘するのは、西欧がそうであったように、それ以外の地域にも、それ自身の価値観や内発的な发展の方向性がありうるはずである、ということである。鶴見に影響や示唆を与えた中国の社会学者の費孝通は、中国の個々の事例の分析を通じて、地域は歴史の個性によって、同じ目的（豊かになるという）に達するのに、歩んだ道筋が違ふことを示した（鶴見 1996 : 45）。近代化による均質な暮らしではなく、固有の暮らしの在り方、流儀、发展の経路があるのではないか。内発的发展論はこのような関心を持つ。個別の地域の自然・歴史・風土を背景に、文化的独自性を追求するような、近代化論とは別の在り方である（鶴見 1990 : 266-267,269）。キー・パーソンは、この文脈において、地域の伝統などに依拠して独自の経路の发展を担うものとして捉えられている。

### (3) 原型理論としての内発的發展論

内発的發展論の理論とは、鶴見によれば「原型理論 (Proto-theory)」である。鶴見は、この考えを提示するにあたって、経済学者であり、地域主義の唱道者であった玉野井芳郎から多くを得ている。玉野井は地域主義を提唱する中で、内発的發展論と同じようなアプローチで議論を展開している。鶴見はそうした共通性のある玉野井の思想を参照し「原型理論」という視点を加えたといえる。原型理論についての鶴見の具体的な捉え方と定義は、玉野井芳郎著作集第三巻『地域主義からの出発』(1990) に解説を執筆した鶴見による「原型理論としての地域主義」に記され、その後『内発的發展論』などの著書に生かされている。「原型理論」について具体的には、以下のように記されている。

近代化論は、地球上すべての社会に適用することのできる「一般理論」として構築された。これに対して、内発的發展論は、それぞれ多様な個性をもつ複数の小地域の事例を記述し、比較することをとおして、一般化の度合いの低い仮説あるいは類型を作っていく試みである。

(鶴見 1996 : 36)

内発的發展論において原型理論とは、近代化論のような抽象度の高い一般理論にそれぞれの事例をそれに当てはめていくやり方ではなく、一般化の度合いが低い具体的な事例から類型化をしていくということである。これについて、もう少し具体的な説明は次のように記されている。

カギ概念についての定義ははっきりしている。そして、記述の方法論についての明確な考察があり、それにしたがって有効な記述はある。しかし、まだ仮説の体系が整備されていない、という場合に、それを原型理論と呼ぶのである。

(鶴見 1990 : 265)

鶴見がアーネスト・ネーゲル (Ernest Nagel) を元に近代科学における理論というものの定義<sup>7</sup>を整理したところによると、理論とは次のような要件を揃えているものである。

- (1) 特定の理論の骨組みを示す抽象的な推論法と、基本概念が定義されている
- (2) その理論が説明または予測のために使われるためには、それは観察または実験可能な具体的事実または事例に結合されなければならない。そのために、抽象的な推論法と具体的な事実または事例を結合するための手続きを明示する
- (3) 抽象的な推論法の骨格を一目瞭然とした図で示すモデル、またはよりわかりやすい

---

<sup>7</sup> 原文は、Nagel (1961 : 90-94) を参照。

概念で説明することによって、その抽象的な推論法の骨組みに肉づけすること

(鶴見 1990 : 261)

つまり、基本概念があり、それが説明や予測のために使われることができ、そのための手続きがはっきりとしていること、そして、それらの構造を示すモデルが整理されていることである。原型理論とは、こうした要件を完全には満たさないものである。カギ概念に基づいて情報を集めて整理する記述的な方法はあるが、それらの情報を分析する仮説が完成しておらず、したがって一定の方法論での分析から始めることはできない。そのかわりに、それぞれの具体例から一つ一つの類型を作っていく答えのない試みとして示された。またカギ概念が意味するように、原型理論は一定の理論的な自覚なしでは記述の方法もあり得ないことも意識している。

記述は理論への基礎資料であるばかりでなく、有効な記述は方法論についての明確な考察を前提としている。(鶴見 1990 : 264)

事例レベルの内発性と、理論レベルでの内発性とは、区別して考える必要がある。内発的な発展の事例がなければ、内発的な理論をひき出すことはできない。しかし、内発的な理論、ないしは、少なくともそうした理論への自覚がなければ、たとえ事例はあっても見逃してしまう。(鶴見 1996 : 4)

つまり内発的発展論が示している要件の諸々が、カギ概念である。これによってそうした要件を満たしているような事例を自覚的に収集していくことができる。これが第一の段階となり、そうした要件を満たす事例の個々の特性を分析しつつ類型化を試みていくことが目指されていることが分かる。そうすることによって個別から普遍に至る理論の構築を目指すものであるとする (鶴見 1996 : 18 ; 1990 : 260)。

このような原型理論のアプローチは、鶴見は指摘していないが、演繹法に則る一般理論の適用とは反対の、帰納法的な位置づけであるといえるかもしれない。原型理論とは、このような意味で、事例ベース推論にも近いであろう。事例ベース推論 (case-based reasoning) とは、具体的事例の特殊性を重視し、個別状況を詳細に理解し、類似した状況の記録を丁寧に評価するものである (馬淵 2010 : 15)。これは判例法とアナロジーによるものと同じ仕組みで正当化されていく推論法である。判例では初めにそれぞれの事例の個別性があるが、裁判所による判決が事例ごとに積み重なり、同種の判例として積み重なっていくとき、ほかの裁判にたいするそれらの影響力は強まっていく (馬淵 2010 : 15)。つまり、事例ベース推論の積み重ねとは、ある同種の類型がまとまっていくという意味で、鶴見のいう原型理論に近いであろう。であるとすればそれは、ある一定の類型をまとめていくものでありつつも、ある時には別の発見が加わることにより、変則が加わったりしながら、別の類

型に改変することもあり得るであろう。鶴見も、このような変化の可能性について次のような表現で指摘している。

通常科学として科学集団に認知されているパラダイムは、状況の変化または新しい事実の発見によって変則があらわれても、なかなか新しいパラダイムによってとってかわられることはむずかしい。しばらくの間は、パラダイムの乱立が起きるといわれている。この場合、通常科学が理論であるのに対して、新興パラダイムは原型理論である場合が多い。

(鶴見 1990 : 265)

鶴見の内発的発展論は、一般理論とは違い、一定の決まった型をあてはめるものではなく、地域ごとに歴史や伝統の革新を伴いながら、時間とともに変化していく要素を含むものである。一般理論と違い、原型理論は、変化や変則に対する柔軟性をもつといえる。

#### (4) 内発的発展論の模式——中国・タイ・水俣の事例から

原型理論としての内発的発展論の研究の足掛かりとして、鶴見が取り上げている事例の代表的なものに、中国の地域経済の「模式」による事例や、タイの開発僧を通じた精神的な観点からの社会開発への取り組みの事例、そして水俣病の調査事例から見出したアニミズム的な精神性を表象する事例がある。鶴見の整理では、中国は儒教の思想的背景<sup>8</sup>が、タイではアニミズムと習合した仏教が、水俣では仏教と習合したアニミズムが、それぞれの内発的発展論の精神的背景にあるだろうとする (鶴見 1996 : 207)。内発的発展論において取り入れられているこれら 3 つのケースには共通性と、相違がある。中国の事例では「地域経済の発展過程」に注目し、タイでは「仏教思想に基づいた社会開発」が、水俣においては「自然を人間と同じように思いやるアニミズム的感性」が分析されている。宗教性や精神性がそれぞれ事例に共通しながらも原型理論としてはそれぞれ別種に類型化されるような個性を持つ。

原型理論のための類型化の仕法として、鶴見に示唆を与えたものは、この中でも特に中国の地域経済の発展過程を分析して析出された模式論であろう。この観点を示したのは、中国の社会学者であった費孝通であった。鶴見は、費の模式の考えを内発的発展論の研究の視点として取り入れている (鶴見 1996, 33-36)。費によると、模式とは中国の小城鎮<sup>9</sup>の共通の機能から生まれた異なった発展という客観的な事実から生まれた概念である。発展模式とは、発展の仕方であり、各地域の村や町は地理、歴史、文化などの面でそれぞれ違

<sup>8</sup> 費孝通によると、中国の精神的背景は儒教よりも古いというが、それを鶴見は大同思想ではないかと考えている。

<sup>9</sup> 小城鎮とは、中国の地域の単位である。中国の「省—市—県—郷—村」の 5 つの単位の内、城市（大・中都市）と村の中間にある「社会実態」であり、行政上定義された地域単位である (鶴見 1996 : 68)。

うため、現代経済の発展過程でとられる方針も異なっている（費 1994：251-252）。その異なったやり方をモードとし、比較することができる。それは、やり方は異なっているにしても、伝統的な小農経済は「生きる道を探る」という同一目的、つまり貧しさから逃れ、豊かな生活を得るという共通の目的を持っているからである。（費 1994：255）。費は、「モード」とは「モデル」であると訳している。しかし、これは手本という意味ではなく、それぞれの地域や事例の個別性についての経路であるという（鶴見・大和田 1994：105）。費は、地域経済の発展過程を分析することで、発展には内発型と、外向型、それから内発型と外向型の混合型があるとした。これは主に資本の調達方法の違いに基づき分類されたものである。内発型とは、事業など活動の資本（資金・経営・運営・販売）がすべて地域内で調達される場合を指す。一方の外向型はその逆で、資本を国外に依存する。そしてこれらの混合型として、資本は外から、人材や知恵は内側からといった具合で、内発型が主体となって、外向型を地域住民の生活を豊かにするために役立てる場合が示されている（鶴見・大和田 1994：106-107）。費の指摘するところで重要なのは、技術や資本が外から取り入れられていても、外部に従属しない場合において、内発的であることができる、ということである。すなわち、内向型はもちろんのこと、混合型も内発的発展でありうると考察された（鶴見 1996：98-101）。

このような考え方を軸にして、費は中国のいくつかの内発的発展の事例を類型化している。混合型は、さらに詳細に分類され、考察が深められている。以下は、費のモード論を表に整理したものである。

表 1-1：中国のモード論 類型

(A) 内発型	資金・経営・運輸・販売はすべて内部から提供される。
(B) 外向型	資金・経営・運輸・販売は国外の投資に依存する。
(C) 内発型と外向型の結合	<p>① 外向型が内発型を支配し従属させる</p> <p>② 内発型と外向型とは一つの企業内に役割分担して併存</p> <p>③ 内発型が主体となり、外向型を地域に役立てる</p> <p>資本を外国に依存しても、郷鎮企業が外国の下請けとなって従属するわけではなく、内発的な郷鎮企業が主体となって、外国資本を地域住民のために役立てる場合も内発的発展に該当する</p>

出典：鶴見・大和田（1994）より筆者作成

表 1-2：中国の模式論 事例

模式名	内容	類型
蘇南模式 (江蘇省南部)	<p>【前期】公営工場の解体後、これを受け継いで郷鎮企業となって地方に定着。河川の張り巡らされた地勢を生かして、村の一次産業が町との間で発達した。養蚕・製糸・絹織物・養鶏・養豚・養羊が発達。</p> <p>【後期】長江沿岸工業地帯建設の開始により、国外資本を導入する外向型が増加。 (例：無錫市の通信ケーブル製造会社)</p>	<p>前期：内発型</p> <p>後期：結合型</p>
温州模式 (浙江省南部)	<p>大都市に近いにもかかわらず、産業が発達しなかった。このため、人々は郷里から離れて仕事を求め、輸送業に従事、各地とのネットワークが発展した。</p> <p>改革開放以後、郷里に戻った人々は、文革中に輸送業を通して構築した商業ネットワークを活用し、郷鎮商業が発達した。</p>	結合型
珠江模式 (広東省)	<p>国家の重要な経済解放区として、外国資本の大々的導入があり、輸出型工業が発達した。しかし、外国資本は華僑によるものが多いこと、また輸出型工業により蓄えた利益があったため、技術革新を内発的にを行い、さらに拡大するという内発型の主体性を維持発展させていった。</p>	結合型

出典：鶴見・大和田（1994）を参照し筆者作成

以上は、中国の郷鎮企業の発展に関する費孝通氏の調査について、内発的発展論で紹介されているものを整理したものである<sup>10</sup>。費によると、歴史的に違う経路を辿った地域では、それぞれに時代の社会変動の影響を受けながら固有の発展の型ができていく（鶴見 1996：45）。特に蘇南模式のように、河川が張り巡らされた地形が商業の発展に生かされ、地域産業が生まれた地域とは違い、温州のように都市に近いにも関わらず交通網の発展が乏しく、地域内で商業や農業の発展がなされず、人々が外に仕事を求めていくという形態も見られる。条件が似ていても相違が生まれる不思議が垣間見られる事例である。これは都市に近ければ産業の発展に有利だという通念よりも複雑な個性の生成がみられるという意味で、内発的発展における「固有の経路を辿って」という意味あいがよく理解できる事例である。

<sup>10</sup> 模式の具体的な紹介説明は、鶴見・大和田（1994）を参照。

近代化という言葉が含意するような鳥の目から見た開発ではなく、地域の伝統・歴史や偶発的な影響といった側面から虫の目で経路を見ていくと、同じ産業発展であっても、異なった因果、縁起があることがはっきりと認識できる。さらに、それが内発的であるか、外向型であるか、その結合型であるかといった、資本の調達と利用の側面から類型的にみることができる点が模式論の興味深いアプローチである。

内発的发展論のめざすものは経済発展それ自体ではなく、人間の発展である（鶴見 1999：32）。費の模式論では「産業」を視点に発展を分析しており、その意味では経済活動の発展に関心を寄せている事例である。しかし、産業もまた内発型に転換することを目指すことで地域の人々のために生かし、人間の発展につなげることができる。一方、経済に限らず、内発的发展論では、宗教的な観点が取り上げられていることが興味深い。東南アジアの事例では、仏教の教えを生かし、僧侶が人々に精神的開発を促すアプローチの事例がよく見られる<sup>11</sup>。これらの事例では人々への精神的な啓蒙を通して心の自立を目指し、経済活動はその一環であるのが特徴的である（鶴見 1996：195-198）。例えば、鶴見の扱っている事例では、形骸化した仏教を革新的に解釈して世に訴えた思想的なキー・パーソンとしてブッダダサと、ブッダダサの思想を一部批判的に継承しつつ、仏教思想を土台としたコミュニティーセンターを設立し、人々の自立に実践的に力を入れて行動したスラック・シワラク、そして、同じく仏教思想を根底に据え、自然との循環関係を重視して農業に取り組んだ農民スパック・ブアテスが取り上げられる。いずれも、仏教が自然を包摂したアニミズムの感性をもつ社会主義的な思想であることを表明しつつ、人間が自己の精神を修養し、覚醒しながら自律していくことを、精神面と実践面の両方からサポートする点が特徴的である。実践面では、結果として生活の自立という経済の側面にも関連するが、意味の面では必ずしも貨幣的な問題ではなく、精神生活の側面が重要である。そうした貨幣・非貨幣的な活動を両方含みつつ、人々の心の修養から始める、まずそれを第一に考えるという点が特徴的である。

また、第三の事例として、水俣が挙げられる。この事例では、アニミズムが主として分析されている。水俣病によって多大な苦難を抱えた人々が、自分たちの痛みのみならず、自然の痛みにも心を傾け、訴えている姿が描き出されている点が特徴的である。そのために、自分自身が不治の病を抱えながらも、自然との関係をもう一度取り戻す暮らしの在り方を追求していく水俣病患者たちの生き方が取り上げられている。

以上の 3 つの事例の性質から分かるように、内発的发展論も事例ごとに注目される要素に違いがあり、精神文化的側面から経済活動まで多角的に分析することができ、内発的发展の道筋は非常に多角的に表れてくることが分かる。とはいえ、鶴見が指摘する西欧に対する他の世界の独自の内発的发展という意味で問う時、この 3 つの事例からは、共通点が見いだせる。それは、地域経済を分析している費の中国の事例でも、その背景にあるのが「精神文明」であると表現されることである（鶴見 1999：75,136）。タイにおいても精

<sup>11</sup> 東南アジアの仏教開発の事例は 西川（潤）（2001）に多く寄せられている。

神面の覚醒を目指しているし、水俣の事例でも自然の痛みを感受し、それに応えていこうとする精神性がある。鶴見の関心を注いだ事例には、すべて「精神性」が脈打っている。

鶴見自身、西欧をモデルとした近代化論の根底にキリスト教文明があるとすれば、非西欧社会における内発的発展の基本的な動機づけには、おそらく、それぞれの地域または社会の基層にある宗教が働いているのではないかとしている。そして、内発的発展論に関する動機付けの体系としてのアニミズムを打ち出すに至っている（鶴見 1996 : 207,314）。もし、こうした東洋独特の宗教観や精神性があるとすれば、聖書を土台にした西欧の精神性と、東洋における精神性という二つのモードがあると言い得るものかもしれない。類型化は、多次的に評価されることが分かる。キー・パースンの活動を分析するにしても、経済活動の面からだけでなく、精神・宗教観の面といった多角的な動機付けから分析することに注意したい。

#### （５） 主体性とキー・パースンの概念

内発的発展論の事例では、東南アジアや中国、水俣の例もそうであるように、地域内に理論的もしくは少なくとも実践的キー・パースンが活動していることが特徴である（鶴見 1996 : 207-208）。内発的発展論では、地域で活動し、変化をもたらす事業家や活動家が大変重要な起動力であり、そういった草の根の重要人物をキー・パースンとして扱っている。本論文も、キー・パースンについて調査分析を行うものであるが、ここで内発的発展論におけるキー・パースンの内容を整理する。

内発的発展論におけるキー・パースンの議論は、非常に重要である。キー・パースンとはどのような人物か、キー・パースンについての鶴見自身の理論的な説明は少ないが、内発的発展論において重要な存在であることは、鶴見の説明に表れている。

私はこの仮説「市井三郎のキー・パースン論」を、地域を単位とした小規模な社会変化の事例分析に使うことを提唱したい。地域の小伝統の中に、現在人類が直面している困難な問題を解くかぎを発見し、古いものを新しい環境に照らし合わせてつくりかえ、そうすることによって、多様な発展の経路をきり拓くのは、キー・パースンとしての地域の小さき民である。その意味で、内発的発展の事例研究は、小さき民の創造性の探求である（鶴見 1989a : 59）。

鶴見にとって、内発的発展論は、小さき民の創造性の探究、すなわちキー・パースンの探究であることが分かる。さらに、内発的発展論の事例研究は、意識・社会構造の変化の分析とともに、複数の個人の自己変革の過程を丹念に辿り、社会変化と個人史との結節点を明らかにすることであるとしている（鶴見 1999 : 195）。内発的発展論には地域社会という単位での構造的な研究に加え、それとは別に、その中で活動する個人的事象が研究対象と

なる。西川も、内発的発展論とは変化を統御し、創出する主体的条件の整備であると指摘している（西川（潤）1989, 29）。つまり、内発的発展論の要件を満たすような社会変動を引き起こす主体の存在と機能が根本的な関心事項として浮かび上がる。そのため、個人としてのキー・パースンについても分析していくが必要になる。本論文における調査研究では、この点に注目し、第6、7章において、かけがえのない個人の歴史を定性と定量の両面で深く探っていく。このことによって、鶴見の指摘する個人の自己変革の過程、社会と個人史の結節点を分析してみたい。

注意したいのは、キー・パースンに関しては、現代のビジネスの用語を中心に、重要な人物などをキー・パーソンと呼ぶことが多く、また一般的となっている。しかし、本論では内発的発展論の用語法を踏襲し、鶴見が引用している市井三郎の「キー・パースン」という用語を援用することとする。

これまで社会変動や経済開発が議論される場合、一般にそれは国家や地域といった集団を対象とし、個人として論じられることはあまりなかった。参加型開発では個人の参加が議論されるが、これもあくまで「住民」という集合的なフレームの内部に埋め込まれた個人を考えるものである。新古典派経済学は個人を基礎に理論を構築するが、経済学における個人は抽象的、仮説的なもので、人間の顔が見えるものではない。そのため、場合によっては住民自身の意志による参加ではなく「動員型開発」になってしまうきらいもある（西川（芳）2002：53）。1990年代から応用されている人間開発の考え方は、個人の能力や経済状態など複合的な基準で議論を組み立て、発展の目的を経済ではなく、人々においている。その点では内発的発展論も同じ志である。しかしながら、人間開発指数においては、個々人に配慮していても、「健康、教育、所得」という変数に指標が集約されており、最終的には国民国家単位で集計されているという意味では、国を発展の単位と見てしまうことになる。この意味では、人間開発もまた、発展という目的のための手段になっていると捉えることも可能である。内発的発展論はこの点において、発展を人間の成長プロセスとして捉えるものであり、人間は発展への手段ではなく目的である。そして、より小さな視点として個人そのものに関心を払うことが意識されていることは、人間開発の本来の考え方とも共通し、時代の潮流にあった特色を持つ。

そこで鶴見自身のキー・パースンに関する分析や、内発的発展論の中で事例として挙げられているキー・パースン論をいくつか取り上げて、整理してみたい。

中国[農民企業家]...沈圭生、呉永余、殷錫坤、唐本栄<sup>12</sup>

タイ[仏教開発僧]...ブッダダサ、スラック・シワラク<sup>13</sup>

日本[熊本水俣病の患者]...緒方正人、川本輝夫、浜元二徳、杉本榮子

---

<sup>12</sup> 鶴見（1994）より。

<sup>13</sup> タイと日本の事例は 鶴見（1999）第二部より。

中国の事例では、地域経済の発展経路について研究しているため、キー・パースンとして調査されている対象は企業家である。鶴見の調査報告を見ると、起業のきっかけとなった人物の個人史へ深く切り込むというよりは、業種、工場の従業員数、売上高が主な情報となっている。この事例では、章題をキー・パースンとしながらも、実際は工場規模や製造品の内容の変化といった発展の過程を追っている。鶴見自身はキー・パースン分析について個人の自己変革の過程を丹念に辿り、社会変化と個人史との結節点を明らかにすることであると述べているとはいえ、この事例分析では個人の詳細なライフヒストリーはうかがい知れない。主体性についてのより切り込んだ情報が必要であると思われる。

一方、タイのブッダダサやシワラク僧侶の事例では、僧侶の思想面についての説明が多い。まず、ブッダダサが、当時のタイの仏教の形式の形骸化、特に軍事エリートを支持し、農民を支配下に回すようになった仏道修行者集団（サンガ）について、本来の仏教の在り方を問い直した。いわく、「仏教は本来的には社会主義であり、自然から必要なだけとり、残りは他のものに回したり、貯蓄したりして、自然全体で共有のものとするのである」といい、仏教の本来の思想を再提起した。鶴見はこれを発想的キー・パースンと分類した（鶴見 1989b : 243）。続いて、ブッダダサの教えを批判的に継承したシワラクの場合はそうした発想が実践に移され、教えを受けた知識青年を農村に派遣し、村々の人々と緊密な関係をもち、議論をしながら、農村での暮らしに自然共生的で自律的な暮らしの在り方を普及していったとする事例分析である。鶴見は、シワラクを理論的・実践的キー・パースンとする（鶴見 1989b : 243）。

つまり、キー・パースンというものは、発想的または理論的キー・パースン、あるいは実践的キー・パースンの類型に分けて考察される。そして、前出の中国の企業家たちについて、これを実践的キー・パースンととらえている。水俣の事例では、水俣病患者が自分の人生を、生活面や社会運動の側面から変革していった生活の実践者としての側面から描いている。

水俣に関する事例は多く、鶴見が挙げている人物も多くいるが、『鶴見和子曼荼羅 環の巻』の「水俣」で取り上げられているキー・パースンを見てみると、それぞれが、何らかの形で自然物と非言語的コミュニケーションを交わし、自然と積極的に共生しようとする姿がある。また公害を乗り越える中で、国境を越えて連帯していこうとする実践がある（鶴見 1998c : 57）。例えば緒方正人の事例では、チッソを相手取って法的な手段に訴える訴訟からは退き、一人の人間としてチッソに向き合う姿を取り上げている。この時、チッソの会社の前に座り込む緒方が、やってきた猫と一緒に時を過ごし、猫と共に海の魚を食べる姿が描かれている。緒方と自然とのこうした関係について、鶴見はコミュニケーションという表現を使っている。そのほかの事例も、何らかの自然物との対話的姿勢が垣間見られる。例えば、鶴見（1996 : 177）では、磯のカニと対話をした鬼塚巖、ミツバチを飼った田上義春の共通点について、内なる自然と外なる自然との対話を通して自立を形成していくと表現している。鬼塚については、チッソによって被害を受けた自然にあえてカメラを傾

け、干潟に現れるカニと対話しようとする姿勢が描かれている。田上については、ミツバチを飼い<sup>14</sup>、山で有機的な暮らしをするところから回生の人生を始めた。事例に上がる一人一人は何らかの実践をし、その中で自然物と向き合う姿勢がある。鶴見は、これを発想的であり、同時に実践的なキー・パーソンであるとしている（鶴見 1999 : 184）。そして、発想と実践の内奥にあるのはアニミズムであるとしている。アニミズム的感性により、近代化路線ではなく、自然に根付く在り方を選び、共生への道を歩む実践的キー・パーソンとしてのあり様である。鶴見のキー・パーソン論は、このように人々の宗教性・精神性に注目することや、また発想的・理論的、あるいは実践的なキー・パーソンとして分類することで類型の方法を示している。

#### （6） キー・パーソンに関する先行研究

内発的発展論に関連して、鶴見のあげた事例に続き、ほかの研究者によっても事例の収集がなされてきた。ただし、個人としてのキー・パーソンの事例が多く集まっているとは必ずしもいえない。個人としての情報に切り込んだものもあれば、同じキー・パーソンでも個人としてではなくリーダーという役割を切り取って、地域や社会において果たしている役割を論じるものもある。そこで、本節では、先行研究にある事例を紹介したい。

大きく分類すれば、キー・パーソンの事例としてよく見られるのは、前出の個人としてのキー・パーソンの議論の他に、キー・パーソンに必要な役割を考察し、リーダー論の視点で論じようとするものである。例えば、経済学者である保母武彦が行った研究には、リーダーシップの観点からの分析がある。日本の宮崎県綾町や新潟県塩沢町石打地区、北海道下川町の内発的発展の事例分析で、保母はキー・パーソンが強力なリーダーシップを持ち、「住民が望んでいることに迎合するのではなく、将来の発展方向を見据えて、地域をあるべき方向に導く」意識を持っているという特徴を引き出している（保母 1996 : 180）。他方、まちづくりや国際開発を専門とする北野収の南部メキシコの事例の分析では、リーダーシップ論ではなく、キー・パーソンの性質を「学び」の種類から分類している。それぞれの人が、自分たちの置かれた時代や場所、社会的地位に規定されながらも、その中で開発について考え試行錯誤しながら実践へたどり着くとする（北野 2008）。北野は、キー・パーソンを個人の事例から分析しつつ、より抽象度を上げて「学び」を「知識人」の観点から整理している。たとえば哲学や思想を軸にして議論を展開する「非世俗の知識人」、技術や専門知識を持ち、世俗の手伝いを取り持つ「有機的知識人」、亡命者的・漂泊的で複眼的視野を持つ「永遠の漂泊者」ないし「亡命者」、利益・利害に捉われず、憂慮や愛着によって動機づけられる「アマチュア主義」などが先行研究にもとづいて整理され、北野はこれに加え独自の視点を示している。つまり、過去に世俗の専門家として生きた後、現場に

---

<sup>14</sup> 本論文における事例研究では、第 6.7 章において、ミツバチ・養蜂関係者の事例を多数扱う。人間と自然を有機的につなげる意味で、動物と人間の関係を考えることはアニミズム的視点にも沿うものである。

根差した実践活動へ転じる「脱プロ知識人」、そして、現場からのニーズに基づき、動機づけ・意識化され、目的を遂行するのに必要な最低限の専門的知見や技術を身に付け、草の根で活動する（学歴インテリとは異なった）主体「草の根民衆知識人」である（北野 2008 : 297-302）。また、安藤（2012）による日本の内発的発展の事例分析でも、同様に「学び」の観点からキー・パースンのあり方が指摘されている。まちづくりと経済学を専門とする安藤は、地域住民が自ら問題に直面しながら学び、また学びを他者と共有する過程を経て、活動の発案者となる発想的キー・パースンが、その実践を支える実践的キー・パースンとしての市民との支え合いによって活動を展開するという構図を分析している。つまり、キー・パースン論は、多角的に分析されるものであり、鶴見の言う「個人史」の切り取り方、整理のされ方も議論によって多面的であることに注意が必要である。

本論文では、こうした様々なアプローチから分析された先行研究に続き、キー・パースンの固有の特徴について新たな知見を得るべく、人間の心理的側面に着目し分析を試みることにする。元来、「内発的」という言葉に最も親和的なものは心理学である。特に 20 世紀には内発的動機付けの研究が活発になされ、教育心理学がこの考え方を積極的に取り入れている。心理学において内発的動機付けとは、「それそのものがしたいからする」といった、行動そのものが目的となっている動機のことを指し、報酬など外在的な目的のために努力する外発的動機付けに対比される<sup>15</sup>。内発的動機付けは自発的であり、外発的動機付けよりも質の高い学習効果があるとされ、この点については内発的発展論の議論でも同様に自発性を重視している点で共通する。心理学における内発性の議論は英語での“intrinsic”であり、“endogenous”とは異なるが、鶴見自身、考察の中に心理学者の議論を引用しており、心理学的な知見から見た内発性によってキー・パースンの特色を明らかにすることも重要であると考えられる。この点は、本論文の後半で特に深く掘り下げることになる。

#### （7） 地域を単位とする意味

内発的発展論は、地域を発展の単位として分析する地域主義の立場に立つ。近代化論が国民国家を対象に、国境を一つの枠組みとして考察するのに対し、内発的発展論は、地域を単位とする。例えば先進国が第三世界を従属させるような従属理論、世界全体を対象として中心一周辺の関係から世界の分業の状態を議論する世界システム論ともまた相違い、国家の対照としての地域ではなく、発展それ自体の原点として地域を単位とし、考察を始めるのが内発的発展論の独自性であると打ち出している。地域とは、国家よりも小さい区域であるとしつつも、かならずしも国家の下位体系には限定されない地域を想定する（鶴見 1989a : 50）。これまでの社会科学理論が国民国家を対象としたものであったことは、それ自体が西欧を発祥とすることを考えると、ウェストファリア体制以来の国家権力を前

<sup>15</sup> 今田・北口（2015）によれば、外部からの報酬に反応するのではなく、自らの興味と関心、好奇心によって駆り立てられる行動は内発的動機によるものであり、外在的な報酬を求めて行動するものは外発的動機によるものとされる。

提として存在してきた枠組みを必ずしも比較対象としないことは内発的发展論としても重要である。地域という概念は、本来政府によって線引きされて決まるものとは違い、生活者の伝統や文化、人間関係やエコロジーなど不定形の要素と関連するものであるから、単位の基準を定めるのは難しいものである。

内発的发展論は具体的にどのような基準をもって地域を捉えているのか。鶴見は地域についての基準を考察する際、地域主義の提唱者である玉野井芳郎による定義を活用している。また、参考としてロバート・ダールとエドワード・タフティ (Robert A. Dahl and Edward R. Taft) から次のように引用している。さらに、コミュニティの概念についてはジェシー・バーナード (Jessie Bernard) を引用している。それぞれ、鶴見の『内発的发展論』の記述から引用する。

【玉野井芳郎の地域主義<sup>16)</sup>】

地域主義とは、一定地域の住民が、その地域の風土的個性を背景に、その地域の共同体に対して一体感を持ち、地域の行政的・経済的自立と文化的独立性とを追求することをいう。

【ロバート・ダールとエドワード・タフティ<sup>17)</sup>】

人びとが道徳的責任と政治的影響力を感じ、そして実際にそれを実現してゆくためには、きわめて小さな単位の間を提供する必要がある。

【ジェシー・バーナード<sup>18)</sup>】

〔限定された〕場所 (locale) と、共通の紐帯 (common ties) と、社会的相互作用 (social interaction) である。

(定住農民型のように物理的な場所が当てはまる場合は定冠詞付きの“the community”を、狩猟民のように場所の限定のない場合を“community”と区別する)

(鶴見 1989a : 52-53)

鶴見は、地域の考えを玉野井から学び、その多くを内発的发展論に取り入れているが、玉野井は前出の定義をさらに深める中で、言葉の用法をさらに熟慮している。それは、「風土的個性」という表現を後に「自然・歴史・風土を背景に」と修正したことや、「住民」を「生活者」としている点などがある (鶴見 1990 : 269)。そして、この修正の理由については、とりかえしのつかない一回限りの生命を生きているものとして、「生活者たち」という主体が地域主義の担い手となって登場したと分析している (鶴見 1990 : 270)。また、地域を自然生態系の特徴を共有する村と町の連続体と理解してよいとしている (鶴見 1998c : 34)。

<sup>16)</sup> 玉野井 (1977 : 7)

<sup>17)</sup> ダール, タフティ (1979 : 231) より。(Dahl, Taft (1973 : 140) の和訳)

<sup>18)</sup> Bernard (1973 : 3-5) について鶴見の和訳を引用。

以上のような地域についての考えの流れをまとめてみると、玉野井から摂取した地域の特徴としては、第一に同じエコロジーを背景に、文化や風土が形成され、そうした自然と歴史の条件を共有する自律系を地域とする捉え方である。第二に、外国の定義からは、政治的、道徳的關係を含む相互作用の直接及ぶ人間關係の範圍としての場から捉える地域である。いずれも、線引きすることの難しい、状況によって変化していく要素を持っている。これらは近代化論の依拠する国民国家に対して、国家という枠組みとの対比なしに、場を捉える仕方がよく定義されている。とはいえ、村や町といった連続体という表現にも合わられるように、相互作用の及ぶ範圍も段階的であろうし、地域自体も重層的に捉えることが可能で、比較する相互の事例によって地域の意味が大きく違うケースも出てくる可能性があるという意味ではあいまいさも含まれているといえる。ただ、こうしたあいまいさは、内発的發展論の「原型理論」としての未完の理論形成によるものであり、意味のある曖昧さとも言えよう。

#### （８）民際關係としての内発的發展論

地域主義との関連性で考えられるものとして、民際關係としての内発的發展論がある。鶴見は、内発的發展論を論ずる中で「民際」について紙幅を割いてはいないが、内発的發展論の質的な側面として、人と人との關係、とくに顔の見える固有名詞としての關係が指摘されている（鶴見 1999：354）。これまで、マルクス主義を含む経済学、あるいは社会学、政治学などの普遍的な社会科学の理論は、顔の見えない抽象的な人間像を前提としてきた。しかし、内発的發展論において、地域の各事例から浮かび上がってくる物語には、必ず固有名詞としての人がおり、そうした人々によって各々の事例が出来上がる。

そのため、内発的發展論の事例は地域内の人と人との交流、また異なる地域に住む人と人との交流を含む物語となる。近代化論が国民国家を単位とした政治的關係で國際關係論を語るならば、内発的發展論における關係論は地域を単位とした人々の關係、つまり民際關係論であると考えることができる。鶴見は、著書の中でこれを内発的發展論の要件としては議論していないようであるが、文脈上、民際關係という概念が重要であることが読み取れる。例えば、國際人に対する民際人の特徴として、「民際人は、小さな民の立場から世界をみることになる」としている（鶴見 1998c：129）。内発的發展論は「小さき民の創造性の探究」であるから、ここに「小さき民」に関して民際人としての地域人の姿が垣間見える。さらに、民際活動の現在の新しい潮流は、「国を単位とするよりも、国の下位体系としての地域を単位とした連携」としている（ただし先に述べた通り、鶴見の考えによれば、それは必ずしも国家を比較対象とはしない地域ではある。）（鶴見 1998c：135）。地域を単位とした連携という表現は、内発的發展論において「外部との接触」をしながら歴史や伝統を変革していく動きとつながる。水俣で訴訟活動等を精力的に行った田上義春が、沖縄で見つけた「ひん死の子を抱く女」からヒントを得て、水俣の地に水俣病患者の「母子像」

を立てた点を民際交流の例として鶴見は挙げている。つまり沖縄に住む人々の経験と、水俣の人々の経験が交流し、水俣の経験者たちが、銅像という新たなものを作ったという意味で民際的な創造性が発揮された事例とされる。鶴見は、この民際という考え方を坂本義和から引いている。坂本によれば、民際についての定義は次のようになっている。

民際交流...資本、技術、情報、人間などが交流している状態

民際協力...共通の目的のために共同の行動をとること

民際連帯...共通の目標を実現するために、一方の側での無償の行為を必要とする関係

(坂本 1983 : 34-36)

坂本の定義する民際は、鶴見の内発的发展論とは少し異なり、国家権力に対抗する市民の力の活用について考えているものである。したがって、この場合には坂本の定義が内発的发展論に合致するものではない可能性がある。ただ、民際交流の差し迫った必要性について、坂本が述べているのが戦争の危険への対処や、南北問題、環境問題への対処であるところは、内発的发展論の問題意識と一致している(坂本 1983 : 28)。さらに、こうした民際交流の起点としては、現地の村の宗教的リーダーである僧侶やそれに相当する人々、また農業技術の面でのリーダーなど、地域社会でのオピニオン・リーダーの役割も大きいとされ(坂本 1983 : 32)、内発的发展論におけるキー・パースンの位置づけと重なる議論が見られる。国民国家に対する「市民」が位置付けられているという坂本の定義との概念上の相違を除けば、坂本の「民際」にまつわる議論が内発的发展論における多くの要件に影響を与え、そのために鶴見が民際のテーマを引いていると考えられる。

また、別に民際学の提唱者の一人として、『内発的发展論』(1989)の当初から、鶴見と共著を著している中村尚司がいる。中村は、市場経済における経済主体としての私企業や公権力が、生活過程や自然過程を破壊する場合、それに対して抵抗できるのは、生活行為と経済行為とが矛盾・対立しない存在としての地域住民の共同体であるとし、生活の本拠を共にするものが協力して、新たに経済主体を形成する必要があるとする。そして、そのような共同の場は「地域」以外にあり得ないとしている(中村(尚) 1989 : 233)。中村は1994年に発表した新書において「民際学」を提唱している(中村(尚) 1994)。ここでは、学問としての民際学を提唱し定義している。それは、個別専門分野の科学による部分知としての学問ではなく、全体性の学問であるとする。ツールとしては、相互主義と関係性(ネットワーク)を要素とし、「一人称や二人称で語る学問」として、客観的な分析ではなく当事者性から始めようとする。そして、普通の民衆の生き方がそのまま学問になるとする(中村(尚) 2002 : 225-227)。このような観点から、鶴見が坂本から引用した「民際」は、中村によってもまた提唱され、内発的发展論に息づいている。民際という視点は、鶴見によって詳細には語られていない概念であるが、固有名詞としての個人を尊重し、そうした人々の活動を「一人称や二人称で」取り扱う内発的发展論の問題意識に沿う。そのため本論文

ではあえて内発的発展の人間関係の枠組みとして民際という概念を取り上げておきたいと考えた。

#### (9) 権力の奪取を目指さない社会運動

内発的発展論は、小さき民、民衆の研究であり、またその地域の社会変動を研究するものである。内発性を重視する点からは、それが政府や公的な政策によっては強制されたり、方向づけられたりしないものであるという印象を受ける。政策との関係について、鶴見は第三システムという言葉を用いながら、内発的発展論を位置づけようとする。第三システムとは、マーク・ネルファン (Mark Nerfin) の言葉である。それは第三世界や第三階級といった言葉に由来するものであり、第三システムにおける第一システムは政治権力であり、第二システムが経済システムだとされる。そして第三システムとは、第一システムや第二システムが解決できなかった危機から脱出するために、「人々が自分自身を発展させ、自分たちの持っているものを発展させるために、自分たち自身を組織すること」であり、「人々および人々の連合体の力が、政治権力の奪取をめざさない」場合であるとする<sup>19</sup>。

ネルファンは、「もう一つの発展」報告書を出したダグ・ハマーショルド財団の報告書作成に携わった人物である。鶴見は、権力の奪取を目指さない運動という点に意義を見出している。たとえば、世界システム論を提唱したイマニュエル・ウォーラステイン (Immanuel Wallerstein) のいう社会運動の類が、権力の掌握に成功した途端、資本主義システムの中に取り込まれてしまう矛盾について、こうならない視点を第三システムの観点は提供しているとする。すなわち、権力の奪取を目指さないことによって、たえず自己変革しつつ、地域の構造をつくりかえることができるという視点である (鶴見 1996 : 28)。

鶴見は、柳田国男の「四角いことば、丸いことば」という表現について、関心を示している (鶴見 1998b : 165)。丸いことばは話し言葉を中心として生活する常民のことばであり、四角いことばは知識階級によって語られることばである。柳田は、行政官出身でありながら、人生の半ばで職を辞し、岩手の村に入って人々の民族伝承に耳を傾け、記録した。役人の「四角いことば」を話すために後半生を生きるのではなく、「丸いことば」に耳を傾けることを選んだのである。理論や理屈などをもって世界を扱う四角いことばに対して、霊魂や精霊など、理屈で説明がつかないが、生活に実在するものも含めた民衆の世界、丸いことばがある。これは、内発的発展論の問題意識に通底し、先の世界システム論の権力奪取の問題とも関わると言えよう。丸は四角くなれない。丸いものが四角くなろうとするのではなく、丸い世界が四角い世界の権力の奪取をするのではなく、丸い世界のまま、その変革や進展を展望しているのだとも考えられる。

また、こうした権力奪取を目指さないという考えは、鶴見の生い立ちにも関連しているようである。鶴見の父、鶴見祐輔は政治家として活躍した人物であったが、娘であった鶴

---

<sup>19</sup> 鶴見 (1996 : 28) より Nerfin (1987 : 172) の引用を参照。

見は、「この人（父）の才能からして政治ではなくて、もっと文化的な仕事をすべきで、それに徹すべきでした。ところが男であるから、自分が考えたことを実現するというのは権力を持つことだ、と（考えた）」。

そして、鶴見自身は、生涯をかけて「政治が嫌い」というのと、「権力志向はダメ」というのを信条としているという。政治家だった父や祖父を反面教師にした、とまで述べている（鶴見 1998d : 20-21）。鶴見にとって、権力志向への反意は、内発的発展論の考察過程から出てきたというよりも、鶴見自身の生い立ちにも重なるものであり、自身の思想のバックボーンでもあると見られる。

内発的発展の運動と政策との関係性の面では、鶴見は 2 つの型があるとしている。第一は社会運動としての側面である。政府または地方自治体が政策を推進する際に、特定地域の住民が異議申し立て運動を起こす場合である。そして第二は、政策の一環としての内発的発展であり、地域の住民の自然や伝統に基づいた地域発展の仕法を、政府または地方自治体を取り入れる場合であるとする。また、政策としての内発的発展論という表現は矛盾をはらんでいると指摘し、地域住民の内発性と、政策に伴う強制力との緊張関係が、多かれ少なかれ存続しないかぎり、内発的発展とはいえない、としている（鶴見 1996 : 27）。これらの議論に見られるのは、権力の奪取ではなく「緊張関係」であり、民衆が政府の決定に対応するというよりは民衆に対し政府が反応し対応するという関係性である。近代化論とは上下逆転の構造である。社会運動としての内発的発展論の観点は明瞭である。

#### （10）文明論か、政策論か

内発的発展の研究が広がっていくにつれて、研究ごとに議論や方向性に違いが生まれているという指摘がされている。例えば、龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（2014）の清水らによる共同研究では、2 つの違った内発的発展の定義を紹介している。まず鶴見の内発的発展論について、「後発社会が先進社会の模倣にとどまらず、自己の社会の伝統の上に立ちながら外来のモデルを自己の社会の条件に適合するように創り替えていく発展のあり方」とであると解釈し、また他方では、宮本憲一の内発的発展について「地域の企業・組合などの団体や個人が自発的な学習により計画を立て、自主的な技術開発をもとにして、地域の環境を保全しつつ資源を合理的に利用し、その文化に根ざした経済発展をしながら、地方自治体の手で住民福祉を向上させていくような地域開発」として宮本から引用をしている（清水 2014 : 23）。つまり、内発的発展「論」は、日本において鶴見のみが唱導したものではなく、鶴見が近代化に対するあり方を考察しているのに対し、宮本らが地方経済や自治体のあり方について語っているように、射程の異なるものが存在している。これについては内発的発展を研究する専門家からも指摘があり、中村則弘（2005）や、西川潤（2007）では、捉え方について注意を促している。

まず、中村は、鶴見の内発的発展論を文明論であるとし、他方で宮本らの内発的発展を政策論と位置づけている。鶴見、西川、宇野らが主張した内発的発展論が、非西欧社会を

射程に入れ、南方熊楠、柳田国男、中国では費孝通、タイのブッダダサなどの思想を念頭に置いた、文明論からの出発であるとし、一方で宮本のように地域経済構造についての自治体の取り組みや町づくり、環境問題への地域的対応における「内発的发展性」を養う必要性の指摘といったものは、同じ内発的发展に関する論及でありつつも政策論であるとしている。こうした農村の政策論を議論している研究者としてほかに保母武彦、森友裕一、地方都市経済を議論するものに佐々木雅之や中村剛治郎がいる<sup>20</sup>。中村則弘は、鶴見の内発的发展論が、文明論であるとしたうえで、外来のモデルを自国の伝統の上に立てつつ、作り変えてゆくあり方に関する想定は、実証作業が不十分であり、そのために実証と実践との間に混迷を生じさせたと分析している。そのうえで、政策論としての内発的发展の議論は、文明論としての内発的发展論とは似て非なるものであり、もはや峻別するべきときにいたっている、と指摘している（中村（則） 2005 : 16）。こうした内発的发展論の捉え方の問題については、鶴見とともに仕事に取り組んできた西川からも言及されている。西川は、「内発的发展論は发展に関する物の見方であって、发展そのものではない。」とし、人によって「内発的发展」と「内発的发展論」を混同している場合があるとする（西川（潤） 2007 : 11）。こうした現状の中、政策論の立場に当たる中村剛治郎の場合、関連する著作の文中では西川の内発的发展論に依拠しつつ、鶴見の内発的发展論を引用することはしていない。定義としては宮本らと共有し、表現としては「地域経済学の『内発的发展』論」としているところが見られる（中村（剛） 1990 : 191）。佐々木においても同様である（佐々木 1990 : 134-140）。一方、宮本、中村剛治郎や佐々木と共著で執筆している保母は、文中で鶴見の著書を引用しつつも、議論として地域経済学の内発的发展の議論に向かっている（保母 1990 : 337）。このように内発的发展の議論は、地域経済の政策論を发展させようとする宮本らによる「内発的发展（論）」と、鶴見の文明論としての「内発的发展論」が混在しつつも分化していると見られる。また宮本の文脈を見れば、そもそも鶴見の内発的发展論と同時期に異なった文脈で発生しつつ、相互に参照し合っているものとも考えられる。用語の使用法が混乱するとはいえ、西川が区別したように、「内発的发展論」と「内発的发展（論）」が研究者たちの間で意識的に使い分けられているとも見られる。ちなみに宮本は、自身が提唱している内発的发展論を次のように定義している。

地域の企業・組合などの団体や個人が自発的な学習により計画をたて、自主的な技術開発をもとにして、地域の環境を保全しつつ資源を合理的に利用し、その文化に根ざした経済发展をしながら、地方自治体の手で住民福祉を向上させていくような地域開発を「内発的发展」(endogenous development)と呼んでおきたい。

（宮本（憲） 1989 : 294）

---

<sup>20</sup> 中村（則）（2005 : 12-13）において紹介されている研究者については、中村（剛）（1990）、森友（1991）、佐々木（1992）、保母（1996）などを参照。

宮本は、内発的発展に対するものを、外発的発展（exogenous development）としており、鶴見と共通の表現を用いている。また、上記の定義に対する詳細として、次の 4 点が整理されている。

第一は、地域開発が大企業や政府の事業としてでなく、地元の技術・産業・文化を土台にして、地域内の市場を主な対象として地域の住民が学習し計画し経営するものであることだ。

[...]第二は、環境保全の枠の中で開発を考え、自然の保全や美しい街並みをつくるというアメニティを中心の目的とし、福祉や文化の向上するような総合され、なによりも地元住民の人権の確立をもとめる総合目的をもっているということである。

[...]第三は、産業開発を特定業種に限定せず複雑な産業部門にわたるようにして、付加価値があらゆる段階で地元には帰属するような地域産業連関をはかることである。

[...]第四は、住民参加の制度化をつくり、自治体が住民の意志を体して、その計画にのるように資本や土地所有を規制しうる自治権をもつことである。

（宮本（憲）1989：296-301）

地域経済学からの内発的発展の定義は、行政・企業・地域住民の経済活動における関係性がよく見えるよう定義されている。宮本は著書の中で、「新しい分権と参加という地方自治の確立を土台とした『内発的発展』の道を唱導した」としており（宮本（憲）1989：50）、分権という表現にも表れるように、地域政策の原則について考察し、行政との関係性が議論の前提として設定されているところが文明論としての内発的発展論とは違うところである。研究者の間では、こうした違いが認識されたうえで議論されていることが伺えるが、一般の読者にとって混乱は避けがたいように思われる。今後、文明論としての内発的発展論と、政策論としての内発的発展（論）という視角の相違は強調されるべきであり、この違いはむしろ議論の発展に有効に生かされる必要があろう。

本論文が扱う内発的発展の立場は、主に鶴見和子のキー・パーソン論に貢献する目的をもつという意味で、文明論としての内発的発展論に依拠するものである。本論文での具体的な研究は、鶴見のいう「顔の見える個人」としてのキー・パーソン論の質的側面の探究である。ただし、析出されるデータによっては政策的にも利用可能なものになりうるという意味では、政策論との接合を避けるものではない。

### (11) 動機付けとしてのアニミズム

内発的発展論では仏教、儒教（または大同思想）、アニミズムといった観点から、アジア地域でそれぞれ個性ある事例が扱われているが、鶴見が特に関心を払ったのがアニミズムである。そもそも内発的発展論の想定に持続可能性が盛り込まれるのは、近代化論が解決できなかった問題群を解決する意図があるからである。これは、ネルファンの第三システムの説明にあった通りである。そして、内発的発展論を支える思想としてアニミズムを取り上げるのは、西欧諸国の一神教的な自然支配観に対する、東洋の仏教やアニミズム的な汎神的世界観が、環境共生的な発展に向かう価値観となりうると考えるからである（鶴見, 川田 1989 : ii）。

鶴見が調査した熊本県の水俣における水俣病被害者たちの発言は、アニミズム的な観点を印象付けるものであったとみられる。例えば、被害者である川本輝夫は、水俣病によって、人間以外の生物も同じように苦しんだはずだと述べていたことが紹介されている（鶴見 1998c : 19-20）。被害者たちは、加害者であるチッソ株式会社を法的に訴える行動をとる一方で、暮らしの場面ではアニミズム的な思想に依拠する発言をしている。たとえば、チ・チ・チと鳴く海の神様（船霊さんの声を聴いて漁に出る）がある（鶴見 1998c : 125 ; 1996 : 159）。そんな中、水俣の人々は宗教的な側面では家の仏壇の裏にマリア様の像を置くなど、隠れキリシタンの伝統も合わせ持つ（鶴見 1999 : 45）。広く人間以外の被造物の苦しみを人が訴え、さらにキリスト教をも包摂してしまう宗教観——鶴見によればアニミズムと習合したキリスト教——といった汎神論の世界に生きる感性がある（鶴見 1999 : 52）。水俣の住民が、被害を受けたのが人間だけでなく、魚や動物も同じように苦しんでいると訴える姿は、地域の人々がその自然を感じ取って共存してきた歴史の表れであり、自然を仲間としていることの表れでもある。地域という場における人と自然の結束は協力関係を伴うものであり、一方的な破壊をもたらすことができないものである。このように持続可能な環境との関係性をおのずと持っているというのが、地域の概念——生態系を共有する場であり、政治的な関係性を持つ場——にもつながり、環境共生・地域という視点に思想的につながっていく（鶴見 1998c : 94）。

アニミズムに対する鶴見の関心は、水俣の調査事例以外にも多く共有されている。例えば、柳田国男からは人々の暮らしや山の神々について言い伝える民俗伝承が、南方熊楠からはエコロジー運動の精神が、また自然学を提唱した今西錦司からは生物の持つ直感的世界が、それぞれ内発的発展論に関する書籍の中で紹介されている。柳田・南方からは、妖怪や神々の民族伝承といった靈魂にまつわるアニミズム的伝統とそれを生活文化に含めてきた観点が、南方・今西からは、生物に対して対等なまなざしを向ける生物学者の観点を取り込まれている<sup>21</sup>。それぞれ、日本における学者たちのアニミズム的感性を取りあげてお

---

<sup>21</sup> 柳田が主として民俗学を、今西が自然学を研究していたのに対し、南方はこの両方の研究に打ち込んでいた。柳田民俗学については 後藤・佐藤（1992）、勝又（2010）などを、南方については 中瀬・長谷

り、互いに通じる観点として示されていることがわかる。さらにこれらの学者においていずれも見られるのは、部分知としての科学を超えて、全体的な学問に戻ろうという志向である。あるいは、霊魂や直観をも射程に入れる非科学との親和性である。

鶴見のアニミズムの議論においては、柳田や南方、水俣について議論することが多いが、鶴見の観点を総括する場合に適当なのは、むしろ今西錦司の自然学であると筆者は考えている。今西には「全体としての学問」「直観的世界観」「生態学（生物全体社会）」「共生」など、内発的発展論の要点と重なり合うものが（主に生物世界の観点からではあるが）凝縮されているからである。また、今西はこれらの着眼点を自分自身の研究姿勢としても明確に主張している。例えば南方の「エコロジー」が、部分知の科学としての「生態学」に関するものだったのか、環境保全や地域主義的な社会運動的な趣向のある「エコロジー運動」なのか、という点は不明瞭であると武内（2012）は指摘する。この点、今西は自身ではっきりと立場を明確にしている。部分知となってしまった「生態学」から距離を取り、全体知を目指す生物全体社会としての「自然学」を提唱したのである（今西 1984: 11-13）。

今西の全体知としての自然学とは、自然を社会として見るといった観点として捉えることができる。部分の詳細を究明する自然科学からは見いだせない、生物全体社会としての自然のダイナミクスを、直観や無意識といった領域も含めて考慮するという自然観に依拠しており（今西 1987: 46-60）、アニミズム的コスモロジーに対する傾聴の姿勢が見られる（鶴見 1998c: 266）。そういう意味で内発的発展論における自然の捉え方というものは、今西の立場によって広く包摂されうると考えられる。

特に、この自然学を唱導するにあたり今西が発見したのは、生物種の「すみわけ」であった（今西 1984: 56）。ダーウィンの発見が自然の競争による淘汰の関係であったとするならば、カゲロウのすみわけ行動を発見した今西においては、自然は淘汰関係ではなく、すみわけ能力（共生）によって語られる。少しばかり種の間には差異が出てきたカゲロウは、お互いに少しの距離を置いて、別々にすみ分ける（鶴見 1996: 265）。これは、生物が同種の個体を識別する能力を持ち、また種の帰属性または原型帰属性（プロトアイデンティティ）に関する識別能力を持つ、という発見である（今西 1987: 163）。こうした帰属性は、集団的直観によって把握され、適度な競合や共存の関係、すみわけ関係を持ちながら進化し、多様化していくという捉え方である。今西は、こうしたプロトアイデンティティを持つ種社会が、生物全体社会の究極的単位であると見ている（今西 1987: 163）。この考え方は非常に示唆的である。内発的発展論では地域主義を訴えるわけであるが、地域が同じ生態系を持つ一つの場合であるとされるとき、人間についても種社会的な捉え方ができるかもしれない。

プロトアイデンティティは生物の直感的性質であるとされ、今西は、非科学的と言われても構わないといった豪快さで、自分は直観を重視すると明言する（今西 1987: 156）。その中でも内発的発展論の思想に直結するのが、アイデンティティへの論及である。今西い

---

川(編) (2004)、武内 (2012) などを参照せよ。

わく、現代の社会を維持していく上で文化の位置というものを考えると、やはりアイデンティフィケーションが重要である。手本が目の前にあるのがイミテーションだとすると、お手本なしに、自分の置かれている状況を把握して実現するのがアイデンティフィケーションであるという。つまり、生物のプロトアイデンティティのように、自らを内的に自覚するやり方が現代の社会を維持する文化には必要だというのである（今西 1987 : 156）。

近代化には、他世界の個性を淘汰するというダーウィニズム的側面があるが、今西的な自然観に倣えば、ダーウィンの自然淘汰の競争原理では個性がダメになるわけである。今西はこれを文明批判であるとしている。今西論は「共存原理」であり、種同士がお互いにすみ分けをし、相対立しながらも補うことによって、お互いにお互いを成り立たせていると考える。二つの社会は対等なのであって、これを「同位社会」と呼ぶ、としている（今西 1987 : 219-220）。棲み分けによりそれぞれの多様性を維持するほうが、生態系としての存続の弾力性が高まるということである。今西は、このほかにも種社会はある地域内に集中しているとし（今西 1987 : 214）、種社会と地域の関係を論じているところから、今西の観点には、内発的発展論の地域主義を生物学的に説明するような実証的側面があるとも言えるだろう。

鶴見の中に流れているアニミスティックな内発的発展への思いは、直感（＝靈魂）、棲み分け（＝多様性）、種社会（＝地域社会）、生物社会の対等性（＝相互手本）、アイデンティティ論（内発性）といった今西の発想に集約して見いだせるのである。

## （12） 鶴見和子のコスモロジー

内発的発展論を提唱した鶴見は、アメリカで西洋哲学を学び、プラグマティズムをテーマとした論文を執筆するなど、西洋の学問を修めている。修士論文は「社会科学の方法論としての史的唯物論とインストゥルメンタリズムの比較研究」であった。しかしその後、日本に戻り、抽象度の高い学問から、より具体的な生活史の記録を軸にした民俗学や社会学の分野に入ってしまったわけである（鶴見 1999 : 371-387）。アメリカで学び、のちに日本の民俗学や生活史に展開していくという鶴見の軌跡のなかで、自分の宗教観はアニミズムであり、自らをアニミストと称するに至ったと述べている（鶴見 1998c : 13）。そして自分の目標としてマックス・ウェーバーのピューリタニズムの倫理と資本主義の精神<sup>22</sup>に対応するものとしての『アニミズムの倫理と内発的発展論』の執筆を公言しつつ、完成を待たずに亡くなっている（鶴見 1996 : 314）。鶴見がよく関心をもっていたのは柳田国男、南方熊楠であり、宇宙的なコスモロジーの視点で自然、庶民の暮らしを観察した人物たちであったが、鶴見にとって、西欧科学から後に日本や東洋の事例に目を向けていったことは、自身の思想にもパラダイム転換があったのではないだろうか。西欧の世界観と東洋である日

<sup>22</sup> マックス・ウェーバーの著書は題名『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であるが、ここでは鶴見の議論からそのままピューリタニズムの表記を引用している。

本の世界観に、大きな違いがあったことを示しているのかもしれない。

鶴見の親族の多くは、学者や政治家といった名の知れた人々であり、当時から文化人との交流も盛んであり、したがって日本の文学や芸能とも早くから親しんでいたことが分かる。『鶴見和子曼荼羅』（鶴見 1999）の巻末には、鶴見和子の個人史が時系列で丁寧にとまとめられている。それを見ていくと、4歳の頃には与謝野晶子や有島武郎が自宅を訪れ、鶴見家に本を贈り、それをボロボロになるまで読んだとされている。両親による童謡の読み聞かせも3歳から記録されている。8歳になると日本舞踊を学び始め、9歳の頃には夏目漱石を読み、また弟とは「本読み競争」をしたなど、文学、文化への関心と取り組みは幼い時にすでに始まっている（鶴見 1999：367）。

鶴見家は29歳に世田谷に移転したと記載されているが、その際に家の向かいには、その後鶴見に重要な学問的示唆を与えた柳田国男の邸宅があり、柳田の娘は同級生でもあったという。こうしたことが、後に内発的発展論に結実するような日本人としての意識を根付かせた背景にあったと想像できる（鶴見 1999：374）。

とはいえ、鶴見は、日本人としての素養を養いながら、大学生になるころにはすぐに留学という形で国外との接点も持つようになる。初めての国外旅行は19歳で、父の国際会議出席に同行する形でオーストラリアに初めての旅行に行ったことであったと記されている。この時は第二次世界大戦直前の1937年であり、一般の人が国外に行くことはあまりない時代である。そして開戦直前1940年にはすでに国外留学をし、アメリカのヴァッサー大学で学士論文を提出している。このように、幼少期に日本の伝統文化を身に着け、大人になるとすぐに国外へ出ていくという世界の流れの最先端を走っていた。いわゆる国禁を犯して外国に出た人々を「民際人」の例として紹介している鶴見であるが、自身もまた、時代の先に行く「民際人」だったのであろう。家系は裕福であったが、留学はすべて奨学金によるものであったと弟が記しており<sup>23</sup>、その意味では実際に自主自立の民際的な生き方を実践したものと考えられる。

西欧型ではない別の発展の在り方を模索する原動力は、鶴見自身が幼少期から日本人としてのアイデンティティを涵養していたことに関連していよう。鶴見の衣装は、いつも着物であったといわれる<sup>24</sup>。鶴見の学士論文は興味深いことに「天皇制の社会心理学的基礎」である。はじめてのアメリカにおいて、原点はやはり日本にあることが分かるのである。アジア人、また日本人としてのアイデンティティの深さは、西欧に対する別の個性を、深く内発的に感じたのに違いない。帰国後、雑誌『思想の科学』を刊行し、暮らしの場における人々についての民俗学的な調査が徐々に深まるにつれ、鶴見自身の原点となる日本の伝統文化とアイデンティティは、地域固有の個性を考える内発的発展論へと展開していったのもうなずける。

---

<sup>23</sup> 鶴見（1999）付録冊子の鶴見俊輔による寄稿より。

<sup>24</sup> 鶴見（1998b）付録冊子の小林トミの寄稿をはじめ、着物姿は他者にも印象的に残る鶴見の姿であり、鶴見（1998d）で鶴見は着物について、日本の気候風土に合うものであり、また鶴見にとって魂のよりどころであると語っている。着物は鶴見にとって日本の内発的発展の一つの形として読み取れる。

### (13) 鶴見の内発的発展論と国外の内発的発展の議論の動向

鶴見により提出された内発的発展論は、地域主義であるとはいえ、文明論としての巨視的な理論である。一方 1980 年頃からは、地域経済の政策論の立場から、宮本憲一によっても内発的発展「論」が提唱されたことは先に述べた通りである。両者は、環境保全や地域の自立といった点で共通の考えはあるものの、議論の目的は異なっている。そして、その相違は意識的に区別され、議論されてきた。またこれら以外の研究でも、内発的発展という言葉自身の意味合いから、独自の発展に関する活動の多様な事例が集まっている。したがって、日本国内において、内発的発展という用語から多様な議論が広がってきている。

こうした議論の多様さは、国外へ目を向けても同様である。鶴見は内発的発展論を英語で「**endogenous development**」としており、鶴見が同義だとしたダグ・ハマーショルド財団の報告書でもこの用語が使用されている。しかし、ダグ・ハマーショルド財団の報告書とはまた別の文脈においても、同じ **endogenous development** という用語で議論が展開されているものは多い。国外の議論の多くも、特定の理論を土台とした内発的発展（論）としてではなく、「内発的」な発展という言葉から直接連想される、それぞれの地域の発展という意味で議論がされている。また、**endogenous development** という用語は、経済学の分野では内生的成長の理論としても使われてきたため、同じ用語でまったく違うアプローチで議論されている複雑な経緯がある。本論文で議論するような内発的発展論を経済学など別の議論から区別するために、これを「社会学的な知見からの **endogenous development**」としている文献もある (Vanklay 2011)。社会学的知見からの内発的発展の議論は様々な定義で示されているが、一定の典拠によらないと認めつつ議論を進めているものが見られる (Slee 1994)。とはいえ、どの議論の中身も、近代化の弊害に対するオルタナティブを目指す地域発展という意味で、結局は鶴見の内発的発展論と重なり合っているものがほとんどである。例えば、プロリノーバ (**PROLINNOVA : Promoting Local Innovation**) という非営利団体の活動報告書では、内発的発展とは、地域とその住民の主導で、生活資源の改善のために断続的に続く変革や、新しい手法の適用や、癒しのプロセスであるとしている<sup>25</sup>。この団体は、参加型開発により、農村における住民主導の持続可能な開発を目指す団体であるが、内発的発展は地域の精神性や文化的特性を重視するものと認識している。こうした視点を生かし、開発にはソフト面とハード面があることを学び取り、団体の活動に生かすものとしている<sup>26</sup>。このように、内発的発展の精神は国外の開発団体の実践においても、実践理念に影響を与える役割を果たしている。別の例で、オランダに拠点のある非営利団体ネットワークである ETC のコンパスプログラム (**COMPAS: Comparing and Supporting Endogenous Development**) という内発的発展を実践することを理念としている団体があ

<sup>25</sup> PROLINNOVA working paper 15(作成年非公表)より。 <https://www.prolinnova.net/resources/wpaper>

<sup>26</sup> 前掲 7 頁

る。そこでは内発的発展とは人々の物質的、社会的、精神的なウェルビーイング(Well-being)を目指す地域の開発活動であるとする。この事例では地域の宗教的(精神的)リーダーの役割についての事例を多く集めている。ここでは、精神的リーダーを世界的にネットワークでつなぐなどの試みも行い、リーダーたちが一体感を示し共同声明を出す会議などもしている(ETC-foundation COMPAS 2007: 190,229)。また内発的発展に関して研究をしてきた Ray (1999) では、内発的発展の参加型の取り組みの意義について、近代化による疎外から心理的な癒しをもたらすものであると述べている。コンパスは、農村の発展における「資源」の分類として、天然資源、人的資源、社会的資源、精神的・文化的資源、生産資源を示している(ETC-foundation COMPAS 2007: 129)。このように、国外の議論を見ていくと、内発的発展の議論には精神的な理念が盛り込まれていることが共通事項として見出せる。精神性・宗教性への言及は、鶴見を含めた内発的発展の議論が提供する重要な視点となっているといえる。

国外の内発的発展の議論で、本論の関心の中でも特に興味深いのは、キー・パーソンに関する議論である。コンパスなどのように、精神的リーダーによるリーダーシップを議論しているケース、リーダーたちの地域間交流の意義を議論するものなどがあるが、どれも、内発的発展を目指す地域同士であったり、その中にいるリーダー同士の交流に注目している。こうした議論は、精神的リーダーなど主要人物の存在を所与のものとして扱っており、リーダーがどのように形成されるかに関する研究は議論から漏れている。内発的発展論の視点から考えると、リーダーの存在を所与のものとして分析するだけでなく、そのようなリーダーが生まれる過程などの研究が必要であり、また「外部との接触」に関する視点には、内発的発展を目指す地域間の関わりだけでなく、より多様な主体の間での交流が含まれるべきであるといえる。また、リーダーも宗教的リーダーに限らずビジネスリーダーや文化的リーダーなど多様であり得る。その意味で、原型理論としての内発的発展論は、主体の捉え方ひとつをとっても視野を広げることができる意味で重要であるといえる。

ところで、国外のそれぞれの内発的発展の議論も、外部との接触の重要性を認めている点は内発的発展論と共通である。「内発的」という言葉を用いると、外との接触を全面的に否定し、内側だけから変化を創出するものと捉えられがちであるが、実際の議論は全くその逆であり、外部との交流はどの議論でも常に意識されている。しかしながら、国外の事例では内発的発展を目指す地域主体同士の交流に傾きがちであるように見られるため、どの程度まで「外部」を意識しているのかという議論が必要であろう。一方には内発的発展という語感から外部との接触を否定していると捉える側があり、他方では外部との接触を認めている内発的発展の実践の側があるなど、あいまいさへの懸念から、Ray (2001) では、控えめながらも外部との関係性にあえて目を向けるために「ネオ内発的発展」を提唱するに至っている。「ネオ内発的発展」の考え方は、もともとは EU (European Union: ヨーロッパ連合) における結束政策の中で、農村地域の経済開発のための連携事業が行われ

る中で生まれたものである<sup>27</sup>。多くの国家を含んだ複雑な枠組み内で地域の発展を模索する格闘の中で議論されたものである。ネオ内発的発展では「外部からの影響を排除した、自律的な農村地域の社会経済的発展という考え方は確かに理想的ではあるが、現代ヨーロッパでは実用的な提案ではない」とし、「いかなる地域も外来的な力と内発的力は併存しており地元と外部の相互作用は地域レベルでは必然」とし、広範なプロセス、資源、行動を自分たちで操縦することができるように、地域自らの能力を高めていくことがネオ内発的発展であるとしている（ロウ、他 2012：193）。この点、日本の内発的発展論では、もともと外部との接触は否定されていない訳である。にもかかわらず、日本でも、EUの流れを受けて、ネオ内発的発展論の考え方を取り入れて議論しているケースが見られる。日本でのネオ内発的発展の議論では、内外アクターの力を両方とも生かすことを重視し、論者の小田切によってさらに「双発的発展」という視点も提案されている（小田切 2013）。そこでは鶴見の内発的発展論は引用されておらず、地域経済の文脈では宮本の内発的発展が引用されている。宮本も外部との接触は重要であるとしており、外来の資本や技術を全く否定するものではないとしている（宮本（憲）1989：294）。本来、どの内発的発展の議論でも外部との接触は否定されていないため、日本においては再定義する必要性はなかったともいえる。したがって、内発的発展を議論する際には、多様な文脈から内発的発展（論）に関する議論がされており、また錯綜していることをふまえて、整理していく必要がある。

### 第三節 総括

本章では、内発的発展の議論における多くの要素を整理した。また内発的発展に関しての先行研究に見られる、それぞれの共通性や相違を整理した。本論文では、これらを踏まえたうえで、あくまで鶴見の内発的発展論に依拠して議論を進めたいと考えている。それは、定義や意味が分散しがちな内発的発展を研究する際、鶴見の単独の議論に依拠することによって、かえって論文の視点が定まると考えるからである。

さらに、本論文では内発的発展論の中でも特に、核ともいべきキー・パースンの研究を行う。内発的発展論の中で、維持変革される対象としての地域の伝統は、固有の自然環境や歴史の中から長年をかけて構築されてきたものである。中でもこうした伝統の変革の主体として重視されるのがキー・パースンである。したがって本研究でも、こうした地域の変革のきっかけをもたらすキー・パースンが、どのように生まれてきたのかを研究し、内発的発展が内側から起こる具体的なメカニズムや方法を見出したいと考え、キー・パー

---

<sup>27</sup> LEADER 事業と呼ばれる。LEADER の意味は、フランス語の "Liaison Entre Actions de Développement de l'Économie Rurale" から来ており、意味は 'Links between the rural economy and development actions (農村経済と開発アクションの連携)' である。詳細は European Network for Rural Development ホームページ [https://enrd.ec.europa.eu/leader-clld\\_en#\\_edn1](https://enrd.ec.europa.eu/leader-clld_en#_edn1) を参照。また、結束政策の構成については、阿部（2017：72）の表 7-3 を参照。

スンの研究を行う。内発的发展論と経済発展は同義ではないが、これまでの内発的发展論に出てくる事例では、新たな経済活動に至った活動が多く取り上げられている。発展の活動においては、生活の改善を目指す要素が強く関連するからこそ経済活動の事例が増え、またキー・パーソンが重視されるのであろう。必ずしもビジネスに関わる起業家だけがキー・パーソンの事例でもないということを踏まえ、多様な視点と事例から分析を進めてみたいと考える。

次章では、本論文で内発的发展論を議論することの意義をより広く学術的な視点から整理する。そのために、開発に関する倫理の議論を取り上げる。開発倫理学は、開発における価値の問題を扱い、評価しようとする分野として登場している。内発的发展論は、より広い分野の中では開発倫理の議論の中に位置づけることができ、またその実践のための方法の一つとして捉えられるのではないかと考えられる。内発的发展論を開発倫理に位置づけることによって、提唱されてから 40 年を経た今においてもなお、それが現代的意義をもった重要な理論であることを確認したい。

## 第二章

### 内発的発展論と開発倫理

#### 第一節 開発倫理と内発的発展論の関係

内発的発展論は、近代的な発展や開発に対する倫理的な反省から生まれたものとも捉えられる。実際、鶴見は内発的発展論の議論の中で、度々キリスト教におけるプロテスタンティズムの倫理を取り上げており、この分野への関心を示している。プロテスタンティズムが資本主義の発展に親和性が高く、それに寄与したとするならば、地球規模の生態系の危機に直面している現在、より暴力の少ない動機付けの体系としてアニミズムが役立つのではないかとする（鶴見 1996 : 253）。生態系倫理、あるいは環境倫理に向けて、文化・科学・技術、そして、自然に関するもう一つの考え方として、アニミズムの感覚を基礎にして世界に向けて発信できるようにしたいとする（鶴見 1998c : 9-23）。そして、内発的発展論の到達すべき将来の目標として『アニミズムの倫理と内発的発展論』を、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に対応するものとして執筆する希望を述べていたことは、第一章第二節の（12）で述べたとおりである。

これまで、開発によってもたらされた数々の弊害を踏まえ、開発における倫理の役割が議論されてきた。そして、そのような議論を開発倫理と呼ぶことができる。これまでの開発倫理の研究の成果から、例えばデス・ガスパー（Des Gasper）の考えを参考にすると、開発倫理とは開発政策や開発の活動において、現実にかかる価値衝突の内容を評価し、求められている善さに対応するために、解決のための代替案を評価し提案を出せるような倫理的な価値評価とデザインのフレームワークを提供することである（Gasper 2011）。ひる

がえって鶴見は、内発的发展論は価値明示的な問題意識であり価値中立的ではないとしている（鶴見 1996：22）。このように、内発的发展論の価値明示性は、開発倫理が価値の問題を対象とするという点で一致している。内発的发展論が、開発の負の側面、つまり経済的な格差や環境問題が近代化によってもたらされたということについての反省であり、そしてその代替策として地域の固有性に依拠した個別的发展を求めるとするのは、開発に関する倫理的反省によるといえる。

本章では、開発倫理のこれまでの研究を振り返り、内発的发展論の倫理性との関係で位置づけてみたい。これにより、今後ますます倫理的な配慮が必要になってくる開発活動の流れにおいて、内発的发展論に取り組む意義が明確になると思われるからである。キー・パーソンに関する研究も、そうした開発に対する倫理的なニーズに対応するものとして位置付けられるはずである。

## 第二節 開発の倫理的問題

倫理（Ethics）とは、馬淵（2010）の説明によれば、「してもよいこと」「してはならないこと」を規定するルールや規則に関する学問であり、「いかに生きるべきか」「良く生きるとはどういうことか」といった問題に答えるものである。倫理とは哲学の一部をなすものであり、物事の本質を原点に返って考え直す哲学が倫理的な問いに向かう時、それは道徳哲学と呼ばれ、倫理学と道徳哲学は同義<sup>28</sup>とされる（馬淵 2010）。何が善き生であり、正義であるかといった問題に関しての倫理理論はすでに数多く存在し、例えばカント主義、功利主義、リアリズムやリベラリズムなどがある。これらの倫理理論は、動機、効用、自由、平等など、異なったアプローチから「善さ」を規定する。

これまで、世界のグローバル経済をけん引してきたのは資本主義であったが、資本主義が例えば功利主義に基づいて構成されれば、経済学的に最大多数の幸福を目指すように制度が設計される。

ここでは功利主義を議論するわけではないが、例えば最大多数の最大幸福を目指すことが本当の幸福と言えるかについては議論が分かれるものである。功利主義では、人々を平等に扱い、総効用の最大化を求めるが、それは集計の際に個々人へのウエイトづけを平等にする意味であり、実際の人々の間の効用を平等にするかどうかということではない。また、所得を変数として効用を集計する場合も、所得をどのように福祉として捉えるかといった問題もあり、変数の取り扱いの問題点も議論されている<sup>29</sup>。開発の学問や実践の現場は、このように倫理の問題と切り離せるものではない。経済発展による格差の拡大、貧困問題の深刻化、環境問題といった問題は、経済学における倫理学の理論の適用の問題としても

---

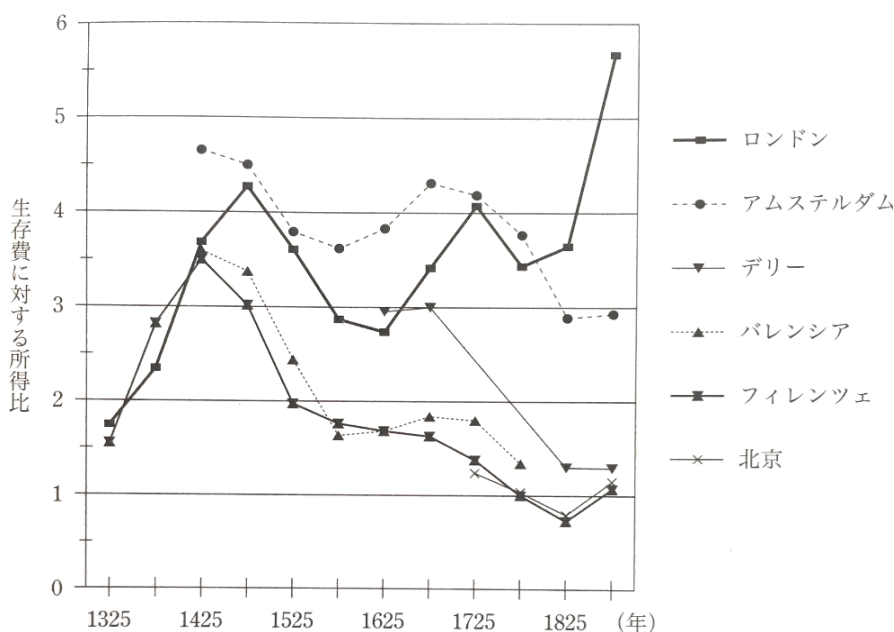
<sup>28</sup> ここでいう道徳や倫理学は、西洋の Moral や Ethics についての解釈である。

<sup>29</sup> セン（1999：18,153,220）などアマルティア・センの著書を参照。

考えられるのである。

いうまでもなく、開発の結果、経済発展により所得の意味で総効用は増大している。しかし、その所得分配は問題であり、不平等や不利益が実際に発生している。例えば、**Global Wealth Report 2017**によると、現在世界の人口の1%が世界の50%の富を保有しているとされる<sup>30</sup>。これを集計して平均値を出せば、すべての人の効用が増大して富を持っているかのように理解されてしまうが、実際の格差は大きい。開発に伴い、一部の人々が豊かになる一方、世界の他の地域で生活レベルが昔よりも悪化してきたという分析もある（アーレン 2012：14-15）。

図 2-1：生存費に対する所得比の国際比較



出典：アーレン（2012：14）

この図では、縦軸の1という基準が、生活に必要な最低レベルの所得を示す。図 2-1によれば、過去、所得が生活の必要以上あったのに対して、時代が進むにつれてほとんど最低限の生活レベルまで所得に落ち込んでいる場所が多くみられることが分かる。時代が進むに従い、以前より状況が悪化するどころか、北京やフィレンツェでは所得が1を下回った時代がある。かたや、6倍にもなるロンドンが見られる。インドのデリーでも植民地支配の進展に伴って生活レベルの悪化が見られる。次の図 2-2、2-3 では、世界銀行のデータから GNI（国民総所得）を示している。これによると、1984年から2017年にかけて世界の所得格差は26倍から54倍以上に膨らんでいることが分かる（表 2-1 参照）。2000年には

<sup>30</sup> Global Wealth Report2017:  
<https://www.credit-suisse.com/corporate/en/articles/news-and-expertise/global-wealth-report-2017-201711.html> [アクセス 2018 年 9 月 18 日]

一時 95 倍の格差であった。図 2-2 では、低所得国の線がグラフには収まらないほど小さく見えるため、低所得国の所得を取り出したものが図 2-3 であるから、いかに格差が大きいかが分かる。また、低所得国の一人当たり GNI は、近年伸び悩んでいることも分かる。世界経済全体は発展しているにもかかわらず、国や個人レベルでみると、大きな格差が生まれたことは、開発における問題であり、適用されてきた経済理論、経済政策に対して倫理的反省を要求するものである。

図 2-2：一人当たり GNI の変化

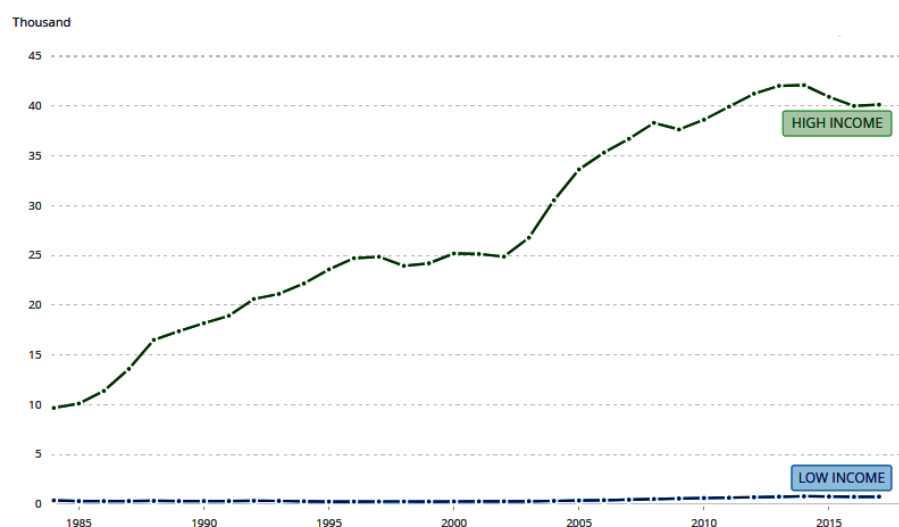
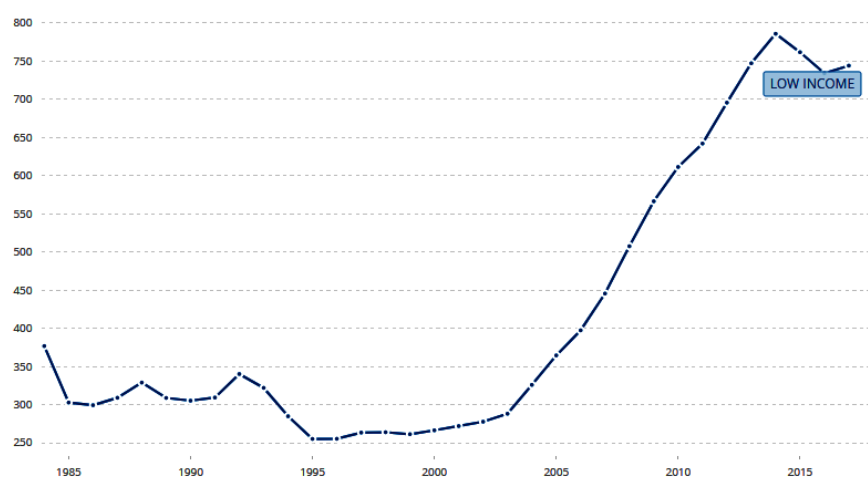


図 2-3：低所得国における一人当たり GNI の変化



出典：World Bank<sup>31</sup>

<sup>31</sup> GNI の高所得国には一人当たり 12,235 米ドル（2017 年）以上の国が、低所得国には 1,005 ドル以下の国が算入されている。グラフの指標は GNI(Current USD)による。

表 2-1：世界の一人当たり GNI 格差の変化

GNI	1984	2000	2017
高所得国	9662	25184	40136
低所得国	377	266	744
格差（倍数）	26	95	54

出典：World bank データをもとに筆者作成

経済開発によって、このように経済格差、貧困、環境問題が逆に深刻化する中、それを解決するために超国家、国家、民間レベルすべてにおいて開発援助、開発協力もまた活発となってきた。しかし北と南の関係において、援助する側、される側といった二分的な関係性が深まると、別の倫理的問題が発生してきた。例えば、宗主国や植民地などの過去の出来事とそれにまつわる立場、裕福層や貧困層、支援する側と支援される側など、開発にまつわるこうした立場関係の意識が、程度の差はあっても北の人々にも南の人々にも植え付けられてしまっている。これをネパールの人類学者ビスタ氏は「貧困化シンドローム」と呼んだ（南 1997：319）。西洋を基準にすることにより、自らの文化を劣位に受け取ってしまうような問題は、センによれば、アイデンティティの暴力として語られている。被植民者意識には、「反発的自己認識」の問題があり、西洋への反発心をもつことにより、自分たちの価値観の中で、本来普遍的で西洋と共通する概念がある場合でも、それまで否定してしまい、結果的に自己のアイデンティティを喪失してしまうという問題である（セン 2011：129）。また、自分を西洋に対する「他者」としてしまうことにより、自己のアイデンティティ自体が他者性を帯びてしまうといったことも指摘される（セン 2011：132）。アフリカなど植民地化を経験した多くの国々では、自らの社会が持っていた伝統や文化が喪われ、アイデンティティが揺らいでしまうことになり、「故郷の喪失」といった状況も見出せる<sup>32</sup>。開発には、経済や環境問題など計測できる問題以外に、精神的な問題も内在しているのである。しかし、ロバート・アレン（Robert C. Allen）（2012）によって示されたように、世界には、かつて生存に必要な以上の所得があったのであり、事足りた暮らし、多様な伝統文化があったことが分かる。ほぼすべての土地が植民地となったアフリカ大陸諸国は、日本の歴史教科書では植民地の歴史しか紹介されていないが、かつて多くの独自の文化や文明が存在していた<sup>33</sup>。経済的な格差や絶対的貧困、暮らしの場における公害や地球環境問題、さらには精神面の問題など、経済開発や経済発展によってもたらされた負の側面は無視できないものである。

このため、開発倫理の学問的体系を整理していく努力の中で、多様な倫理的疑問が呈されてきた。第一に、西欧発の資本主義によって遠い他国に犠牲を負わせてよいのか、という観点がある。トマス・ポッグ（Thomas Pogge）は、これについて消極的義務の重要性を

<sup>32</sup> 峯（1999：27）注釈 24 を参照。

<sup>33</sup> South African History Online、峯（1999）、グラハム（1993）、石川・小浜（2018）を参照。

述べており、「他者に同意なく危害を加えない」義務があるとしている（ポッグ 2010）。『犠牲のピラミッド』を著したピーター・バーガー（Peter Berger）は、開発プロジェクトにおけるリスクやコストの計算に関連する概念として、コストに関する「痛みの計算」があるとしている。これに加えて価値についての問題があるとし、これを「意味の計算」と名付けた（バーガー 1976）。物質的な豊かさは、どのくらい人生の満足につながり、あるいは人生を危険にさらすか。物質は人生や尊厳にとって重要なものであるが、人間の生にとっては十分なものではない。物質の意味とその用途は、人々のそれぞれの価値観に依存する。こうした点において、価値や主観的な意味合いの計算があるというのである。Voices of the Poor の 3 つの巻号では、貧しい人々の Well-being と Ill-being について紹介しており、世界の 60,000 人の被調査者の意見を描き出した。その結論は、経済成長は人間の Well-being を保証するものではないということであった。中高位所得国より上の社会であっても、主観的な Well-being と客観的な Well-being は決して安定して関連しているわけではない<sup>34</sup>。

開発が物質的な発展に限られるべきでないことは、今や多様な研究の成果からも明らかになっており、開発がもたらした歪みに対し、「善き生」とは何かを問う開発の倫理学が必要になっている。

### 第三節 開発に対する倫理学からの多様な論争

開発の問題に関連する倫理学は、それぞれ異なったアプローチで問題に迫っている。例えば国際援助の倫理、環境倫理、世代間倫理などである（馬淵 2010）。世界的貧困に対する援助の必要性についての倫理的証明を議論する系譜では、絶対的貧困や紛争などといった困窮状態にある世界の遠くにいる他者を援助することについて、そうする正当性があるのかどうか、援助する義務があるかどうかといったことを議論している。そこでは、カント哲学やピーター・シンガー（Peter Singer）の援助の義務に関する論証<sup>35</sup>、トマス・ポッグの義務論やジョン・ロールズ（John Rawls）の基本材アプローチなどの議論を基礎に据えて、これらの理論からいかに援助の正統性が導き出せるかが議論されている<sup>36</sup>。他方、環境倫理や世代間倫理など、開発がもたらす多様な不利益について、開発政策とその結果に対していかに倫理学から評価を下すべきであるかを議論するものがある。さらに、

---

<sup>34</sup> Narayan, Petal et al., (1999)、Narayan, Chambers et al., (2000)、Narayan, Petesch (2002) を参照。

<sup>35</sup> シンガー（2014）は功利主義者の立場から、次のような論証を示している。前提①：食料、住居、医療の不足から苦しむことや亡くなることは、悪いことである。前提②：もしあなたが何か悪いことが生じるのを防ぐことができ、しかもほぼ同じくらい重要な何かを犠牲にすることなくそうすることができるのであれば、そのように行わないことは間違っている。前提③：あなたは援助団体に寄付することで、食料、住居、医療の不足からの苦しみや死を防ぐことができ、しかも同じくらい重要な何かを犠牲にすることもしない。結論：したがって、援助団体に寄付しなければ、あなたは間違ったことをしている。

<sup>36</sup> 馬淵（2015；2010）、木山（2013）を参照。

発展そのもののあり方を問い、「本物の発展 (Authentic Development) <sup>37</sup>」のためには、どのような倫理的提案ができるかといった点からの議論もされている。

内発的発展論は発展そのもののあり方を問うという意味で、3つ目の議論に関連するものである。そこで、議論の成果を踏まえ、内発的発展論の開発倫理における位置づけを考察する。

#### 第四節 開発倫理の考え方と価値選択、意味の理解

近代化によってもたらされた諸々の開発問題を倫理的に反省する学問として開発倫理 (Development Ethics) が提唱されているが、日本では開発倫理という用語を用いての議論はほとんど見られない。このため、ここでは開発倫理を一般的に定着した用語としてではなく、国外で議論されている Development Ethics の訳語として使用する。しかしながら、開発倫理という用語は、国外においても今のところ明瞭に定義されているとは言えない。アマルティア・センやヌスバウムが主張するケイパビリティ・アプローチ<sup>38</sup>、また人権など、開発分野に関連する倫理的なフレームワークはすでに存在し、現実に応用されているが、開発倫理という言葉を使っているわけではないことが多い。この用語で研究や議論の発展に取り組んできた源流を探ると、フランスの哲学者ルイ・ジョセフ・レブレ (Louis-Joseph Lebret) に遡る系譜が主流とされている。レブレは、海軍で働き、その後ドミニカ共和国で神父となった社会学者であり哲学者である (Astroulakis 2013 : 101)。1941 年にフランスで Economy and Humanism という運動を起こし、人間開発の先駆けとなる考え方を築いたとされる。この運動は、戦争時の不況などによる混乱の中、利益を得る人がいる一方で、避けられるはずの排除や被害に遭った人たちの経験を反映して発展したとされる (Gasper 2011 : 5)。UNDP の人間開発報告書で人間開発が取り上げられるよりも先に、開発に対する倫理的な考え方を提唱したという意味で、レブレは先駆的であった。その後、議論は広がり、哲学や倫理の観点を現実の開発にいかに応用することができるかについて議論が深められてきている。特に、南北間の不平等だけではなく、北の国の中での不平等など、考察の幅は広い。

レブレに師事し、開発倫理思想を受け継いだデニス・グーレ (Denis Goulet) がこの議論をさらに発展させた人物であると考えられている。理念の側面が強かったレブレから進めて、現実に応用可能な方法論の構築の必要性を強調した。しかし、実際に応用可能なレベルまで研究されたとは言い難いとされる (Astroulakis 2013 : 107)。

<sup>37</sup> Authentic Development とは、Goulet (1996a) によって人間の発展について「経済・社会・政治・文化・自然・価値観」といった要素を満たすものとしている。

<sup>38</sup> センとヌスバウムは、人間の潜在能力や機能の重要性を説くケイパビリティ・アプローチの論者であり、人間開発指数の土台にもなった基礎的な機能に関する議論を深めてきた。特に、センが多様な機能をリスト化しようとしないうのに対し、ヌスバウムはリスト化や閾値の設定を試みるなど、志向の違いがある。これらの議論は人間開発報告書に生かされている (ヌスバウム 2005)。

グーレによると、開発倫理とは、開発の規範に関する分野横断的な新しい思考の枠組みである。その中身は、善き生、善き社会、善き人間関係といった価値に関する問題を扱うものであり、それらは、経済・政治・文化、個人的内容や精神性に関わる。単なる規範的な基準を定める道具としてではなく、発展の目標に対して何が必要かを問うものである。例えば、良い人生とは何であって、そのための社会の基礎はどういうものであり、自然に対して人間がどのような態度をとるか、といった問いを投げかけるものであるとする。このような開発倫理には2つの道筋があり、一つには実践者に必要な方法論と、現場から離れた哲学的な倫理の問題を議論する2つであるとする（Goulet 1996b）。また、哲学者であり市民社会論を議論してきたナイジェル・ダウアー（Nigel Dower）も開発倫理に関連する考察をしており、倫理を個人に関する事柄と社会関係に関する事柄に分けて考えた。倫理は、多くの場合は社会的、政治的、公的な問題に属するものだが、一人一人の行動が開発の行方に影響を与えるという意味で、個人的な問題もあるとする。たとえば、「個人のことにについて他者とどう関係し、行動するべきか」という視点がある一方で、「他者とどのように関係するかが、社会の発展の起こり方や、持続性にも関係する」としている（Dower 2008 : 188-189）。内発的发展論も、個人の内発性に依拠するとしても、同時に地域単位的发展論であるという意味で、ダウアーの指摘するように社会倫理の一部であるといえる。これに関して、ガスパーは評価の対象範囲の多様性について、レベル別に考える必要があると指摘している。それは、1：国際関係、グローバル関係、2：公共政策と国家政策、3：組織運営、4：個人的営みという大きくは4つの次元であり、そうした次元を含めながら議論しなければならないとしている（Gasper 2011 : 7）。

ガスパーは、開発倫理を現在も継続的に考察している一人である。ガスパーは、ダウアーやグーレの議論を参考にして、開発倫理を開発に関する価値についての評価であるとして、次のようにまとめている。

「価値の衝突を診断し、（現実のおよび可能な）政策を評価し、開発の実績を是認したり論駁したり」するために、開発の理論、計画、実践が提示する倫理および価値に関する問題を検証すること。したがって、開発倫理の標準的なトピックには次のような議論が含まれる。

- 一人間の、社会の、および／またはグローバルな発展の意味を構成するものとして提案されているような、そして配慮や優先づけ、法的フレームワークおよび／または公共行動への編入を要請するものとして提案されているような価値。
- 経験および提案されている代替案についての評価
- そのような議論、分析、デザイン、評価、編入、行動のための手法および方法論

（Gasper 2011 : 9）

簡潔に言えば、開発倫理とは、開発政策や開発の活動において、現実にかかる価値衝突の内容を評価し、求められている善さに対応するために、解決のための代替案を出せるような倫理的な価値評価に関する議論である。

ただ、これらの議論から分かるのは、開発倫理の理念や倫理における位置づけ、役割や方針だけであり、具体的に現実の問題に応用できるものではない。このような問題に対して、現実への応用の必要に応えるために、もう一步進めて倫理学と開発の関係性を示したのがニコス・アストローラキス（Nikos Astroulakis）である。アストローラキスは、メタ倫理・規範倫理・応用倫理のそれぞれのレベルに対応する開発倫理の意味合いを整理している（Astroulakis 2013）。

表 2-2：開発倫理パラダイムの倫理的基礎

倫理理論 サブカテゴリー	国際開発に対する 倫理的問い	開発倫理
メタ倫理学	開発の主要な論題は何か	善き生、正義、自然環境の持続可能性
規範倫理学	学問は国際開発を検討することで何を決定できるか（メタ倫理で定義したことから）	倫理的ターゲットおよび倫理的戦略
応用倫理学	適用された政策の含意は何か	グローバル開発倫理

出典：Astroulakis（2013：115）

上の表は、倫理学の体系から開発倫理のフレームを整理したものである。応用倫理としてグローバル開発倫理の理論があるとして、その倫理的ターゲットや戦略の規範は、善き生とはなにか、正義とは何か、持続可能性や自然との共生とは何か、というメタ倫理に属する抽象的な問題に関連付けられてくる。翻って見れば、何が善き生であり、正義であり、環境との共生であるかは、それぞれの文化、伝統、宗教や精神性といった各地域の固有性によっても異なりうるし、そうした相違から出発してそれぞれに異なったターゲットや戦略が策定されることがこの倫理の構造からよく分かる。内発的發展論は地域の固有性から生まれる多様な発展経路に未来を託すが、多様性の根源には、それぞれの地域の善き生、正義や共生の価値観に沿った、異なった開発ターゲットがあり、したがって地域による多様性が生まれてくることが想像できる。アストローラキスのフレームは柔軟でありながら、一定の具体的方法論が見える。

このほか、経済学を専門とする研究者の側からも、倫理的反省を促す評価基準が提案されている。例えばハーマン・デイリー（Herman Edward Daly）は、経済倫理の原理として「持続可能性」「十分性（一人当たりの）」「公平」「効率性」を導き出している（デイリー 2005：309）。経済学およびそれを応用する政策側の議論では、不確かさについての責任も指摘されている。たとえば経済学の理論は不確かな前提や推定に基づいて決断を下すことがほとんどである。このため、こうした分野で専門的ある立場にある人々には、助言や

決定がもたらす不確かさの度合いについて明確に示し、その助言や決定によって貧しい人々が望まない悪い影響を受ける可能性があれば脆弱性について説明しておく必要があると指摘している (Gasper 2011 : 15)。ジョゼフ・スティグリッツ (Joseph Eugene Stiglitz) は、こうした観点に関連する倫理的枠組みを提示している。それは誠実さ (重要な情報を独占しないこと)、公平さ (同じようなケースは同じように扱うこと)、社会正義 (尊厳に対するニーズも含めた基本的ニーズを最低限尊重すること)、責任 (説明責任、説明可能性、外部効果を含める) である (Stiglitz 2005)。

これらの実用性のある原理や基準は、例えばアストローラキスの倫理学の構造的フレームワークに則った形で適用されるものであろう。それぞれの地域の倫理的ターゲットによって地域の発展について多様な政策が作成され、その発展の成果なりプロセスに関しては、デイリーやスティグリッツの経済倫理の約束に沿って評価していくといった流れが想定されるであろう。

## 第五節 調査研究者の多様性、社会の多様性と認識的正義

開発倫理とは、価値に関して多角的な評価をする役割を担うべき学問であり、同時に、地域に固有の社会倫理を構成していくための倫理的フレームを提供する役割を持つ。それは内発的発展論が多様な価値を認めるのと同じ目的をもつものである。ただ、多様性といっても、内発的発展論でいうような地域の固有性による多様性だけを考えればよいわけではない。調査や開発に関わる外部エージェントの世界観に依拠するアウトサイダーの価値観の多様性もあることが指摘されている。例えば、グンナー・ミュルダール (Gunnar Myrdal) は開発の倫理的な実践や調査、評価における、調査研究者の問題について議論している。ミュルダールは、実際の社会調査において、いかに価値中立であることができるかに関心を寄せた。研究者は専門領域の過去の著作の強力な遺産から影響を受けているし、自分のよって立つ社会の文化的、社会的、経済的そして政治的環境から影響を受け、また伝統や環境からも影響を受けており、さらには個人の経歴、体質、性向によっても影響を受けると指摘している (ミュルダール 1971 : 9-11)。こうした影響は研究に体系的なバイアスを生じさせるので、客観的に研究するためには研究者が依拠している価値前提を明示する必要があるとしている (ミュルダール, キング 1974 : 21)。学究者は一つの伝統的な専門領域に狭く問題を限定することで満足するべきではなく、利用可能なツールでもって現実存在する複合的な問題をマスターする必要がある。そして、取り組んでいる問題に合うように、技術を改善し、適合させるように努めなければいけない、とする (ミュルダール 1971 : 19-20)。また、アストローラキスは、開発倫理は社会科学の多様な文化に関連するものであるとする。経学、社会、政治といった多様な学問的アプローチから見れば、それぞれの社会は異なった姿で立ち現われることになり、したがって、異なった社会にお

いては異なった倫理的な発展のパターンがあるとしている (Astroulakis 2013 : 115-116)。

学問の観点から見て、調査研究者自身が多様な価値観に影響を受けていることと、また、学問それぞれの分野特有のアプローチによってしても、社会が多様な姿で描かれることが示されている。つまり、客観性を保ち、社会の多様性を適切に評価するには、まず学者が自身が抱えているバイアスに自覚的になり、それを明示しなければいけないのである。

また、言語の問題も指摘される。開発倫理は、国内、国際、そしてローカルな関係性を見ており、コストとリスク、それを誰が背負っているのかを見ている。特に国際的なフィールドに関する場合、そこでは英語話者以外の声が聞かれることも特徴である。そのため、認知を多様化するためには英語話者以外、また西欧以外の倫理の考え方について、対話を復活させ、強調し、掘っておくことも大切である。ガスパーは、このような多様性について認識的正義 (cognitive justice) という立場を紹介している。言語など非常に多くの次元を含めた認識的な視点から、多様な価値を認め、開発を議論し、専門知識を解放し、非西欧世界の知識をも受容することが大切なのである (Gasper 2011 : 16-17) <sup>39</sup>。

これら、認知の多様性に関する考えは、内発的发展論に通底する。多様な発展はそれ自体が、多様な認知枠組みによってもたらされるものであり、個人からローカル、地域から国家、国際へと段階的に多様性の幅が増していくといえる。これまでのように画一的なフレームで測らずに、地域を単位として、その固有の価値選択を認め、また発展させていこうというのが内発的发展論に他ならない。したがって、倫理的評価をするにあたっては、地域の多様性の他に、アウトサイダーの世界観の多様性、学問分野のアプローチの多様性、言語と文化がもたらす多様性といった多くが影響することについて、意識的に評価し、方法論の策定などがなされる必要がある。このことがこれまでの開発倫理の成果から導出される。

内発的发展論の勘所は、鶴見自身も強調しているように多様性をいかに内発的に生み出していくかというところ、またそのような多様性を認める前提にある。それは、センのいうように、アイデンティティの多様性を認めることであり、調和への道につながるものである。開発プロジェクトに携わる外部者の実践の側面から言えば、外部者がバイアスができるだけでなくして調査や分析、実践することが要請されており、そうして認識の幅を広げることにより、特定の開発プロジェクトや開発政策が、誰に利益をもたらし、誰に不利益をもたらすのかといったことを丁寧に分析し配慮することが要請されている。内発的发展論は、それぞれの地域の発展に対する規範倫理やメタ倫理的側面に気づき、受容していく実践分野であると言える。

開発倫理のこれまでの議論は、第一に国際援助の義務についての倫理的議論、第二に開発政策や実践について計画・評価する議論、そして第三に発展の目的や意味そのものを問

---

<sup>39</sup> バーガー (1976) でも、認識の問題について、これまでの西欧のやり方の押し付けを認識的帝国主義 (cognitive imperialism) と呼び、これに対し各自それぞれの生きる意味の世界を平等に扱うことを認識的顧慮 (cognitive respect) とし、実践の次元ではそれぞれが各自の意味の世界において認識的参加 (cognitive participation) をすることを提案している。(原文は Berger (1976) より。)

う議論に分かれていると見られる。これらの議論の成果から、内発的発展論を位置づける  
とすれば、内発的発展論は第三の議論、すなわち発展の目的や意味を問う巨視的な文明論  
であり、同時に善き生とは何かを個人や地域のレベルから考える微視的なメタ倫理から出  
発するような理論であると言えよう。表 2・2 で示されたアストローラキスの倫理学のフレ  
ームワークを基に考えると、地域における善き生、善き社会、善き人間関係、自然との関係  
といったものを明らかにすることを通して、内発的発展論が目指す固有の発展の経路が生  
まれていく。このプロセスの中で、インサイダーやアウトサイダーは、認識的正義を配慮  
し、自分のバイアスをできるだけ自覚して明示し、多様な発展経路を生むように協力する  
ことが大切である。

デイリーは、これまでわれわれの生活を律している根本原理が変化するとすれば、それ  
は非常に深層に及ぶ変化であり、その結果、われわれがそれをどう呼ぼうと、それは本質  
的に宗教的であるとしている（デイリー 2005：280）。鶴見も内発的発展論は「構造の変  
革」を要すると述べている（鶴見 1996：6）。今後、地域が善き生・善き社会をそれぞれに  
判断し、それに基づいて発展の経路を生み出すとすれば、近代化のバイアスを取り払った  
宗教的・構造的な改革となって表れてくるに違いない。

## 第六節 道具としての倫理ではなく、批判的問いかけとしての倫理

開発倫理学の議論の成果を現実に応用するにあたって、単に倫理規範を制度に適用する  
だけの道具主義の罠に陥るならば、結果的として倫理的でなくなることが懸念される。例  
えばアンドレ・コント・スポンヴィル（Andre Comte-Sponville）は、道徳と経済は無縁で  
あると結論付けている（コント・スポンヴィル 2006）。技術的・科学的であることとは、  
何が可能であり、不可能であるかを明らかにするものであり、可能であることは、実現で  
きることである。例えば、生物学的にクローン技術が可能であるとする場合、生物学が教  
えるのは、「どうすればそれをおこなえるかであって、それをおこなうべきなのかどうか」  
ではない（コント・スポンヴィル 2006：57）。同じように、科学としての経済理論も、そ  
れが工学的な機能である限り、価値に関する問いである「それをするべきかどうか」とい  
う道徳的問題とは無縁であるとしている。コントは、経済—技術—科学を第一の秩序とし、  
第二の秩序を法—政治の秩序、第三の秩序を道徳、第四の秩序を倫理としている。したがっ  
て、第三、第四の秩序「それをするべきかどうか」といった規範に基づいて第一の秩序で  
ある科学技術が運用されるのでない限り、経済学は倫理や道徳とは無縁であるというので  
ある。経済が道徳的であるためには、倫理の枠組みが経済理論や政策に組み込まれればい  
いというよりも、むしろ第一の秩序は第三、第四の秩序に常に批判的に晒され、反省を続  
けていかなくてはならないという。これについては、グーレも同様に警鐘を鳴らしている。  
つまり応用倫理を単に適用するだけであれば、それは開発において道具的な飾り物になる

にすぎないとし、倫理は常に批判的問いかけであるべきであるとする (Goulet 1996b: II)。

鶴見は、内発的発展論は原型理論であるとした。それは、単一のフレームに当てはめてすべてを解釈しようとする近代化理論とは対照的に、個別性を重視する考え方による。鶴見が内発的発展論の研究を事例の研究であり類型化であるとしたのは、内発的発展論が、コントが指摘したように第一の秩序に絡めとられるものにならないように、常に問いかけとして機能する余地を残すためであるとも受け取れる。

以上見てきたように、内発的発展論は、近代化の負の側面にかかわる倫理的な問題意識を持ち、そのような病弊を癒すために提唱されたという意味で、開発倫理の発生の文脈と一致する。それぞれの豊かさを取り戻し、あるいは発展させていくにあたり、アストローラキスが明確に示したように、メタ倫理の次元、すなわち、「何が善き生か」という点について、各自または各自の所属する地域などで合意を得ていくところから始める必要性があり、これが個性化の原点となる。こうしたプロセスが内発的発展論という多様性に繋がっていくという意味で、開発倫理は内発的発展論を理論的にも補強する観点を持つ。そして、多様性を本当の意味で実現するにはアウトサイダー・インサイダーそれぞれの主体が持つ多様な認識の世界について、自覚的になっていかなければいけないという点が、「外部との接触」という内発的発展論の重要な論点とも重なる。このように、内発的発展論は、これまでの開発倫理についての議論の文脈と重なっており、今後世界で必要とされる倫理的反省の機能を持った発展のモデルとして、有効に生かされるべき文明論であるといえる。

ここまで第一章では、内発的発展論の議論の中身について整理し、第二章では、この議論を開発倫理に位置づけて整理した。これにより、内発的発展論が対象とする問題意識と、開発における倫理的実践に関する内発的発展論の意義を整理することができた。次章からは、本論文における調査課題であるキー・パースンの議論に入っていきたい。これまでの整理の通り、内発的発展論は価値明示的であり、キー・パースンは、地域の伝統、自然や歴史の文脈から、独自の発展の経路を生み出していく存在である。だとすれば、キー・パースンの価値観、倫理的判断が地域の発展に影響を与えていくことになる。それは、キー・パースンの心理的な側面にも迫るものであろう。鶴見は、キー・パースンの創造性についての考察で、心理学のアプローチをもって議論をしており、地域の人々、すなわち小さき民の「創造性の探究」が内発的発展論の研究であるとしている。内発的発展論の価値明示性とは、小さき民によって形成されていく創造性によるものである。したがって、価値・倫理・心理・創造性といった要素がキー・パースン研究を進めるうえでも重要な視点として浮かび上がることになる。

これまでの開発においては、人々の創造性や心理、価値観はどのように配慮されてきたのであろうか。そこで次章から、本論文の中心的なテーマとなる開発における価値、心理的な要素とその役割に迫っていきたい。また、鶴見の創造性に関する議論についての考察を深めていきたい。

## 第三章

### 開発における価値の問題、心理の役割と内発的发展論

#### 第一節 開発による疎外

産業革命からの近代化プロセスでは、カール・マルクス（Karl Heinrich Marx）が指摘した労働による疎外が起こり、人間は一人の人間として見られるというよりも、機械のコマとして見られていたといわれる（マルクス 1925）。それは、物質的な疎外でもあり、また精神的な疎外でもあったといえる。植民地において宗主国のための労働に仕えた人々にとっても同様であったであろう。土地から離れ、工場に入り、賃金労働者としての人生を送る人は世界中に広がり、マルクスの指摘した問題は多くの人に共有されるものとなった。

しかし、20 世紀後半になると多くの国が植民地支配から独立するようになり、また国連からは世界人権宣言が出されるなどして、人間の人としての権利が世界で見直され始めた<sup>40</sup>。

一人一人を重視する潮流が生まれ、開発の現場では参加型開発といったボトムアップのプロジェクトも主流になり、草の根の意見を取り入れる配慮が進むようになってきた（齋藤 2002）。このような中、1990 年代には人間開発が国連における開発の重要なパラダイムとなるに至った。人間開発の考え方は、人間的発展を提唱したマブール・ハク（Mahbub ul Haq）らにより、アマルティア・セン（Amartya Sen）のケイパビリティ・アプローチを応用して構築され、開発の指針として採用されるようになった（ハク 1997 : xvi ; セン 2006 : 25）。センやハクらのアイデアは、人間を発展のための機械的なコマとしてみるものではなく、一人一人の人間に内在する潜在能力を生かせる社会を目指すことを理想として

---

<sup>40</sup> United Nations of Human Rights Office of the High Commissioner（1948）を参照。

いる。国連に結実した人間開発指数は、平均寿命、所得、教育を扱うのみではあるが、人間の生の価値に関して、貨幣以外の要素を配慮する数量的基準を与えたという意味で、重要なパラダイム転換をもたらした。

しかしこうした中においても、心理学が開発の中で議論されることは、いまだあまりなされていない。参加型開発が開発プロジェクト手法の主流になり、人間中心主義が新たなパラダイムになったということは、現場活動において開発の担当者は、住民がいかに活動に参加するかということについて、心理的な問題として直面してきたはずである。センのアイデンティティの暴力についての考察や、ビスタの貧困シンドロームへの指摘などは、まさに現地の人々が開発によって感じてきた心理的な問題を指している。まして、人間の良き生（Well-being）とは何か、質的・価値的なものを考える際には、価値観や心理的な要素はむしろ中心的な問題として作用しているはずである。こうした心理学の重要性にも関わらず、開発の手法としては利用が難しかったとされる。

このため、現場主義の専門家からは、心理学の活用と銘打たなくとも、当然のこととして心理面を配慮した考察が現れてくるものである。ロバート・チェンバース（Robert Chambers）は、その最も際立った専門家の一人であろう。チェンバースは、開発する人間が「外部者」であり、開発される「内部者」との関係において、何重にも重なった上下関係があることに、大きな注意を払う（チェンバース 1995）。

チェンバースは、参加型農村調査法（PRA : Participatory Rural Appraisal）や参加型学習調査法（PLA : Participatory Learning Appraisal）の唱道者として知られている。PRAやPLAでは、調査者が農村に入り、人々と直接かかわりながら村の暮らしを理解することを重視する。そして、農村の住民も、調査者とともに自らの状況を理解しながら、それに対する行動意志を明確化するという、参加型の調査法である。参加型開発は今では主流となったが、チェンバースがこうした手法を提唱した1980年代においては、まだプロジェクトがトップダウンの中央による物差しで作られることが中心的な時代であった。

外部者自身が農村を知ることの重要性は、チェンバースの主張の中心を占める考え方である。前出の認識的正義に合致した考え方であり、上から下への流れの開発ではなく、常に下からの声や現実、認識をすくい上げることが、農村を知るうえで重要であると考えるのである。チェンバースは、『第三世界の農村開発』の第三章で紹介しているように、開発に関する多様な理解や知識が「誰の知識か？」ということを深く考えようとする（チェンバース 1995 : 149）。「アウトサイダー」という言葉は、チェンバースが好んで使う言葉である。農村開発に携わるアウトサイダーが、都会的・男性主体・お金持ち主体・近代的な知識・技術の偏重といった傾向のあるスキームで何事も見通してしまうことを問題視する。この結果、その反対側の世界観がないがしろにされる。つまり、田舎、女性、貧しい人々、土着の知識や技術といった部分である（チェンバース 2000 : 154）。チェンバースによると、こうした側面を無視すると、開発プロジェクトにも非効率が生まれる。そのような非効率については、文中でいくつか紹介されている。例えば農村開発では、収入創出

のために牛の飼育が奨励されることが多いが、実際のところ牛は貧しい人にとっては病気の管理、餌の確保、飼育小屋などの手間がかかり、ヤギなどに比べると大きなコストがかかるのが一般的である。したがって、農村でも、牛を飼うことはコストに耐えられる人々にとってのみ有効であり、最も貧しい人々への協力としてはあまり好ましくないとする（チェンバース 1995 : 153）。牛の管理の難しさに対する対案としては、ヤギや鶏を飼うことが挙げられている。ところが、開発指導者がイギリスやフランスなどで教育を受けた人である場合、ヤギやロバといった動物は、「バカ」としてさげすまれる言語的な言い回しの伝統があるために、こうした動物の重要性は、アウトサイダーたちによって潜在的に重視されないと指摘する。アウトサイダーが、自分の価値観に縛られていれば現地の人々のニーズが理解できず、その結果、より非効率的なプロジェクトを推し進めてしまうという可能性が示されている。このほかの例として、水汲みや家庭菜園をする女性の役割の軽視も指摘されている。近年、女性を開発プログラムに入れるという考え方が強くなってきている。しかし経済計算に算入されないが、非常に重要な労働である家の中での女性の仕事を、もっと楽にすることを研究してもよかったのではないかとチェンバースは述べている（チェンバース 1995 : 158）。類似の見解は日本の研究者によっても指摘されている。地域の個性の開発などは、場合によって都会の視点による比較優位の議論に巻き込まれる危険性を孕んでおり、地域が外部との連携を行う時には、都市側からの一方的な選別ではなく、相互の選び合いが必要であるとの指摘がある（西川（芳） 2002 : 49）。

このように、アウトサイダーが都会的・男性主体・お金持ち主体・近代的な知識・技術の偏重をしている場合に、「中心－周辺バイアス」があることが強調される。農村の実情に基づき、中心ではなく周辺から知識をすくい上げ、貧困に対して本当の対策を見出そうというのがチェンバースの主張である。前章の開発倫理についてガスパーが述べていたように、認識的正義という多角的な視点の重視と同じ考え方である（Gasper 2011）。また、先入観を排除して現場から直接学ぶという、人類学の姿勢にも通底する（リオール 2007）。

チェンバースの論考では、直接心理学的な問題を取り扱っているようには見えない。しかしアウトサイダーには、インサイダーである農村の人々が知っていることや思いを無視する可能性があることを主張している点で、認識的な問題であり、また現場で起こりうる心理的な葛藤に注意を向けているといえる。実際に、農村の人がアウトサイダーに対して意見を述べられないという事例も引き合いに出している。

わしらは村議会の議長のようなお金持ちの前では話すことなんてできないよ。おどおどしてしまうんだ。あの人たちにはいつも蔑まれて、何かって言うと叱りとばされるんだ。だから、お金持ちたちが一体何をし、何を書いているのかなんてわかるわけがない。

バングラデシュの土地なし農民（チェンバース 1995 : 199）

興味深いことは、この農民が、同じ国の村議会の議長のような、顔の見える存在にさえ発言ができないと言っているところである。だとすれば、顔の色の違う外国人がやってきた場合に発言するのはさらに困難であると考えられる。このような人間関係であるにもかかわらず、開発プロジェクトが存在する農村では、外国人が何年にもわたって来訪し、農村の人々はそのたびに指導されてきたということになる。

他にも興味深い問題がある。『参加型開発と国際協力』の第五章で指摘されているのは、現在の開発パラダイムには2つの大きな権力の集中があるという点である。権力の一つは、途上国の官僚機構の頂点である中央政府であり、もう一つは、ブレトンウッズ会議で生まれた組織である世界銀行とIMF（International Monetary Fund：国際通貨基金）である。開発政策やその実施の現場では、ブレトンウッズ会議の組織を上位、途上国政府を下位として、二つのセンターが共同して働くとしている（チェンバース 2000：234）。つまり、農村の人々は、身近で起こる開発プロジェクトに対して、意見を述べられるような距離にはいない。さらに言えば、南の国々の政府自体が、主体性や自律的な政策決定権を奪われており、ブレトンウッズ組織に指示される関係性にあるということである。すなわち、農村はおろか、途上国政府自体が、構造的に自律を阻まれていることになる。

チェンバースの論考では、中心－周辺バイアスについての議論が強調され、様々な立場のアウトサイダーが、いかにインサイダーに対して誤解を持ったまま指導しているかということを常に指摘している。その結論は、「変わるのは私たち（アウトサイダー）」である（邦訳『参加型開発と国際協力』の副題は「変わるのは私たち」となっている）。アウトサイダーは自らの立場をわきまえるべきであり、アウトサイダーこそが変わり、中心－周辺バイアスに自覚的になり、態度を変える必要があるのである。

中心－周辺バイアスはバイアスであるから、何が中心で、それが本当に正義であり、最も優れているのかどうかということは、問題にならない。それはあくまでも現代という時代において定着した価値観であるといえる。そのバイアスに支配されているからこそ、自分が指導する立場である、あるいは指導される立場であるという関係が成立する。これは受け止め方の問題であり、心理的な、あるいは認識的な問題である。そのため、認知・心理的な側面は開発にとって非常に中心的で繊細な注意を要する問題だと言える。

## 第二節 開発と心理学

開発協力に関する心理学的な議論が全く存在しないわけではない。入門書である『援助研究入門』では、久木田純が「開発援助と心理学」という章を執筆している（久木田 1996）。これは、開発を心理学から考察した書物として日本で最も早いもののひとつであると考えられる。また、その後も久木田（1998）や 久木田（2010）において、エンパワーメントの議論を中心に心理学から開発に関する議論を進めている。

久木田は、心理学がこれまで開発の議論にうまく取り込まれてこなかった理由として、次の理由を挙げている。それは、学際的な領域である開発に心理的な問題を持ち込むと、プロジェクトのスキームを生み出す中で、主観的な側面が理論化に困難をもたらすのではないかということである（久木田 1996 : 283）。とはいえ、開発の中で注目を浴びてきたエンパワーメント概念はそもそも心理学に関連するものであり、世界大戦後に西欧諸国の貧困家庭のフォローや、帰還した兵士やその家族が抱える心理的なストレスへのケアから始まったということである（久木田 1996 : 298）。1995 年版の人間開発報告書では、人間開発の構成要素として 4 つが挙げられているが、それは「生産性」「公正さ」「持続性」「エンパワーメント」であった（United Nations Development Programme 1995 : 12）。中心概念の一つとなったエンパワーメントが、もともと心理カウンセリングの場面から使われ始めたということは、心理が人間開発にとって大いに関連するものだということである。

久木田によると、エンパワーメントには次のような要素が必要である。まず、エンパワーメントが必要な状態とは、もともと力が奪われており（Dis-empowerment）、それを取り戻す（Empowerment）必要がある場合である。力を取り戻す過程には、まず初めに取り戻すべき「リソース（経済的・社会的・政治的・知識的）」の存在があり、そしてそのリソースへの「アクセス」を取り戻し、管理する「コントロール」と、所有する「オーナーシップ」という要素があるとする。さらに、こうした過程を通して物事に対する自らの「効力感（コンピテンシー）」を取り戻す必要もある。リソース、アクセス、コントロール、オーナーシップ、コンピテンシーの回復という、少なくとも 5 つのパワーを取り戻す必要があるということになる。この中でコントロールには、個人的なものと、組織的なコントロールがあり、組織化や参加といったコミュニティ間の関係性の回復も関連してくる。久木田はエンパワーメントに関する研究を進める中で、こうしたプロセスに関して後年改めて整理している。久木田（1998 : 30-31）の中ではそれを、「エンパワーメント・プロセスのモデル」として発表している。それによると、エンパワーメント・プロセスは第一段階から第五段階までに分けられる。それは、第一段階「基本ニーズレベル」、第二段階「アクセスレベル」、第三段階「意識化レベル」、第四段階「参加レベル」、第五段階「コントロールレベル」の 5 段階である。このようなエンパワーメント階層理論は、本論文の調査分析で議論することになるマズローの欲求階層理論にも重なるものがある。久木田によると、エンパワーメントのプロセスは、一定の順序に沿って起こるものであり、逆のプロセスではないとする。その理由は、エンパワーメントが「個人の意思」「自己の潜在力への気づき」「自信の形成」などがあって初めて起こる、きわめて心理的なプロセスによるものであるからであるとする（久木田 1996 : 300）。具体的な事例として、次のような女性のエンパワーメントの例が挙げられている。

- 1) 日常の基本的ニーズが満たされ、労働時間が減少する（基本ニーズレベル・福祉レベル）
- 2) 土地や融資、さまざまな社会サービス、知識などを獲得できるようになる（リソースへのアクセスレベル）
- 3) 集会などの勉強会に参加することで問題やその構造に気づく（組織化と気づきのレベル）
- 4) 家庭やコミュニティの意思決定に参加する（参加のレベル）
- 5) そのようにして得た力と自由な選択によって、男女間のパワー・バランスが取れてくる（コントロールレベル）

以上に見られる通り、エンパワーメントにはプロセスがあり、これが内発的な動機付けのプロセスと共通しているとする。その意味で、従来の開発プロジェクトは、外発的動機付けの方法論であったため、逆に住民のコントロール、オーナーシップを奪っていた、そして心理的な非力化をもたらすものだったと指摘している（久木田 1996：301）。

久木田（1996）の論考に「内発的動機付け理論の開発への応用」とする小節が設けられ、以上のような議論が展開されていることは興味深い。エンパワーメントのプロセスは、効力感・制御感・所有感・公正感など「感」が付くように、心理的な特徴を有している。したがって、心理的に内的なプロセスでしか生み出せないものである。このことから、内発的發展は、心理学との親和性が高いことが分かる。

久木田によると、1990年代はまだこうしたエンパワーメントのプロセスを十分に生かした開発のパラダイムの定着は起こっていなかった。しかし、現場で活動する人々には、現地の人々との相互作用によってプロジェクトを推進する必要性は理解されていた。そのため、こうした人々によって内発性を意識した現場レベルの取り組みは行われていた。具体的には、アウトサイダーであるプロジェクト担当者は、実際の活動において前面に出るのではなく、コミュニティ主導によるやり方を優先し、アドバイザーとして裏手の役割に徹する。そして住民を内発的に動機づけようと試み、その逆の外発的動機付けを避けようとする。ただ、こうした取り組みは、理論化されておらず、学術的な方法論もなく、したがって現場担当者の名人芸になっていたという（久木田 1996：304）。今後、心理学の開発への適用に向けた課題は、こうした現場の名人芸に頼らない技術的な方法論を発達させることである。このために心理学的なアプローチを体系化する必要がある。本論文でも、いわばキー・パーソンが自然に発生するのに任せるだけではなく、潜在的なキー・パーソンを発掘できるようなフレームや技術的な方法を探ってみたいと考えている。

前述の久木田の論考が収録された『援助研究入門』（1996年）の報告が出てから20年後の2016年に、心理学が実際の支援プロジェクトに役立てられた成果についての報告書がJICAから出ている。「現場の声からひもとく 国際協力の心理学―農村開発分野のプロジェクトを事例として」（2016年JICA報告書）である。この報告書は、現場での活動経験を持つ国

際協力専門員が、長年の活動経験から、心理学に基づいて活動の方法論を理論的に整理している（JICA 2016）。特に、内発的動機付け関連の先行研究をなぞりながら、国際協力での取り組み方を位置づけている。外発的動機付けのように報酬を与えて相手を動かすアメとムチ方式が、かえって相手のやる気をそぐことを踏まえ、心理学者のデシとライアンの自己決定理論を土台にした考察を展開している。

内発的動機付けを心理学的に明らかにした自己決定理論は、1970年代に、心理学者エドワード・デシとリチャード・ライアン（Edward Deci and Richard Ryan）が発表したものとされ、人間に備わっている3つの欲求を説明する。それは、「(自分でやりたい) 自律性」「(能力を発揮したい) 有能感」「(人とかかわりを持ちたい) 関係性」という欲求である（JICA 2016 : 12）。この報告書では、この3つの欲求に対して焦点を合わせたプロジェクトマネジメントを提案している。自律性欲求とは、自らの意思で行動したいという欲求で、例えば宿題をしようとしていた子供に、親が「宿題しなさい！」と指示した時に、苛立つ子供の気持ちに例えられる。自分でしようと思っていたことを、他人に指図されることで、取り組む意義が他律的に変化してしまう。この点に関して、プロジェクトの実施の際には、①決して命令や強制だと受け取られないように、態度や言葉遣いに細心の注意をすべき、②課題を与えるときには必ずその意義を伝えるべき、③課題に対する反発が出て、それを頭ごなしに否定せず、受け止める、といった項目が配慮事項として示されている。次に、有能感を感じたいコンピテンス欲求に関して、次のような配慮事項が示されている。それは、①適切な難易度の設定が不可欠である、②対象者が自分の取り組みを正しく評価できるようにする、③構造を明確にする（何のために・いつ・何を・どれだけすれば、どのような結果を期待できるのか）、といった項目である。コンピテンス欲求のポイントは、久木田の示したような「コントロール」や「オーナーシップ」など、自らの能力で制御し、成果を上げられる範囲の課題設定をすることが重要であるという点である。最後の「関係性欲求」は、良好な人間関係にかかわるものであり、仲間から信頼され、良好なコミュニケーションを保つ欲求のことを意味している。ここでは、①コミットメント、②傾聴、が配慮項目となっている。コミットメントは、困ったときや困難に直面した時に物理的にも心理的にも側にいて、安心できる関係を持つことであり、②の傾聴は、相手を否定せず、真摯に理解を示そうとすることで、信頼関係を築くといったことを目的とする（JICA 2016 : 12-18）。以上のような配慮をプロジェクトに組み込むことにより、人間の欲求を健康的に生かした内発的なプロジェクトの進行を期待できるとしてまとめている。

### 第三節 心理学と内発性—自己目的的活動

JICA報告書では、文筆家であるダニエル・ピンク（Daniel Pink）の著書『モチベーション3.0』（2010）が参考にされている。『モチベーション3.0』では、内発的動機付けに関連

する興味深い視点を紹介している。この著書は心理学を経営の視点から議論しており、労働者管理、人的資源管理の機制を、コンピュータのOS（Operating System：オペレーティングシステム）になぞらえて議論しているところが特色である（ピンク 2010）。この例えは、スマートフォンのOSが頻繁にアップグレードされているのとは比べると分かりやすい。ここではモチベーションの管理を専門とする人間管理コンピュータのOSを想定し、これを‘m’OS（Motivation Operating System）とする例えを活用し、現代に必要な創造性と生産性の関係を議論している。原始時代の人々は、空腹を満たし、生存することを行動の大きな原動力としていたが、ピンクはこれを「モチベーション1.0」とする。この段階を終えると、次第に生産を効率的に管理する時代がくる。この時mOSは、生産する組織側が労働者のモチベーションを制御することになり、賃金でやる気を起こさせるシステムをとる。産業革命以降が典型的であろう。この段階では、人間は基本的に怠け者であると考え、報酬というアメを与え、怠けるとムチで罰を与えることにより、労働者を機械的に働かせる方式を採用しているとし、これを「モチベーション2.0」バージョンとするのである。企業は、そのような労働機制により高い生産性を上げてきた。しかし、近年はビジネスのグローバル化により、ルーティーンでの作業は人件費の安い南の国々か、あるいはロボットによって代替されるようになってきた。今、先進国で必要とされているのは、アイデアをベースとした生産であり、人間に求められるのは創造性であるとする。そのため、アメとムチでは人間を管理できないという壁にぶつかっており、アイデア、創造性を生み出すような新時代のOSを生み出す必要があるという。

このような関心に基づいて、「モチベーション 3.0」で必要となる機制としてピンクが提案する動機付けの要素は「自律性」「熟達」「目的」である。自律性とは、デシとライアンが提案した自己決定理論の「自律性」「有能感」「関係性」にもあったように、内発的に自ら進んで行動したいという欲求である。誰かが決めたことではなく、自分の意思に基づいた行動をしたいという欲求であり、前述の子供に宿題をしなさいという親の言動による他律化の問題である。ピンクが多く事例の中の一つとして紹介している血液検査の調査も参考になる。スウェーデンの研究事例で、献血を有償で行った場合と、無償で行った場合、被験者はどちらに対して献血を多くするかを調べる実験である。選ばれた 153 人は 3 グループに分けられ、グループ 1 は無償での献血、グループ 2 は 50 クローナ（当時 7 ドル程度）を受け取る有償での献血、グループ 3 は 50 クローナをもらうが、献血した人ではなく、代わりに小児がんの子供に寄付する、とした実験である。実験の結果、グループ 1 は 52% が献血を決意した。しかしグループ 2 は、30%にとどまった、というのである。ちなみにグループ 3 は 53%が献血をした。つまり、「交換条件付き」の動機付け（モチベーション 2.0）は、人の前向きな行動をもたらさないことが分かるわけであるが、グループ 3 が示したのは、さらに小児がん患者への貢献という利他的動機付けであれば、行動が前向きになるということであった。人は、交換条件付きで動機づけられるのを嫌い、逆に自らの動機

で行動するのを好む、ということが示された事例である<sup>41</sup>。

次の「熟達」は、ピンクにとってかなり中心的な関心となっている。ピンクは、心理学者ミハイ・チクセントミハイ (Mihalyi Csikszentmihalyi) の主張を多く取り上げて議論しているが、チクセントミハイの主張の軸にある「フロー体験」がポイントである。チクセントミハイは、内発的動機付けの特徴である自己目的的体験 (Autotelic) の心理的状态を「フロー体験」と呼んだ。このフロー体験は、「没頭している状態」についての言葉である。また Autotelic とは、内発的なものであり、Exotelic (外発的) 目的と対置されるものであるとし<sup>42</sup>、内発的動機付けと同じ議論をしている (チクセントミハイ 2010 : 167)。フローの状態にあるとき、人は出来ることと、やらなくてはいけないことが一体となっており、完全に思いのままとなると信じ、一歩先の努力を行うことに無心に没頭するような状態になる (ピンク 2010 : 163-166)。必ずしも難しいことである必要はなく、無心になれる状態のことを言う。つまり、時間を忘れて、その瞬間に深く入り込む状態である。例えばある人は掃除でフローに入るし、ある人は、仕事でフローに入る。ある人は、本を読んでいるときにフローに入るなど、日常の些細な瞬間に訪れるものでもある。ピンクは、このフロー状態を「魂の酸素」と比喻しているが、なぜ、フローは魂の酸素なのか、チクセントミハイのフローを禁止する実験からそれが分かる。実験では、被験者は起床時から午後の 9 時まで、自分の「遊び」や「役に立たないこと」をすることが禁止され、フローに入ると思われること自体が全般に禁止された。すると、実験後の調査で多くの被験者が精神疾患に近い状態に陥ったという。「自分の行動が鈍くなった」「思考が堂々巡りに陥った」「集中力が落ちた」、また眠れなかったり、眠たくなったりといった状態が報告されたという (チクセントミハイ 1991)。これによって、フローは人間にとって精神的な安定に欠かせないことが示された。

フローが、精神安定に寄与するという発見だけでなく、「没頭する」ということ自体が、ピンクのいう「熟達」と密接なものである。自己目的的に事柄に向き合うと、内発的に取り組むので、結果として熟達が達成されることにつながる。したがって、自己目的的活動自体に熟達への道があるとは、内発的發展そのものである。フローにおいては發展することを意識して取り組むというよりは、目的自体に従事することそのものが報酬であるため、結果を目指さずに高い熟達に至る。だとすれば、心理学の見地からは、内発的發展というものは、本質的には目指すものではないということになる。

ピンクは、人間は人生に目的を持ちたい生き物であるとする。その理由は、自律性と、熟達という欲求を支えているのが目的であるからだとする。ピンクによれば、自己目的的に没頭するだけでも価値のある成果が上がるが、より「大きな目的」に結びつけて自己目的的活動に没頭した場合には、非常に生産性が高く、満足度が高くなる、とする (ピンク 2010 : 191)。具体的には、デシが所属していたロチェスター大学の卒業生を追跡調査した

<sup>41</sup> ピンク (2010 : 79) より、Titmuss (1997) の実験結果について。

<sup>42</sup> フローに関しては、スキナーらの研究でも、エンゲージメントとして、同様の状況を指摘している。鹿毛 (2012 : 31)、Skinner et al., (2009)。

時の例がある。卒業生の中で、「外発的抱負」（お金持ちになりたい・認められたい＝利益志向型の目標）を持ったものと、「内発的抱負」（社会に貢献し自らも学び成長したい＝目的志向型の目標）を持ったものがおり、彼らの卒業後の人生満足度を比較したところ、内発的抱負を持っていた学生で、目的を達成しつつあると感じている者は、主観的幸福が高かったのに比べ、外発的抱負を持っていた学生で目的を達成した卒業生は、学生の時よりポジティブな感情が増しているわけではなかったという。逆に、不安や落ち込みなどのネガティブな感情が高まってさえもいたことが分かったのである<sup>43</sup>。つまり、自らの外に基準がある価値を追い求めるのと、自らの中に基準がある価値を生きるのとでは、主観的幸福への貢献の仕方が違ったということである。こうした意味において、モチベーション 3.0 のレベルでは、自己目的的な、内発的目標を持つことが必要だということになる。

ピンクによるモチベーション 3.0 の考察の結果、〈自律性〉〈熟達〉〈目的〉という 3 つの自己目的的な要素が含まれたものであるということが分かったが、前節の自己決定理論における〈自律性〉〈有能感〉〈関係性〉の要素も類似していたように、内発的な活動に関する見解は、互いに似た要素や整合性をもっていることが分かる。

現在、開発の実践的な議論に心理学を用いているものは非常に少なく、久木田や JICA の 2 つの書籍ないしレポートを取り上げるにとどまった。しかし、エンパワーメント理論が開発分野で大いに注目されたのは、現場の活動で直接人に接する時、心理的な関わり合いが避けられないからに他ならない。したがって、これまで見てきた内発的動機付けの諸要素を考慮することは、内発的発展の実践においては特に大切になると考えられる。

鶴見が取り上げている思想家の一人に、ジョン・デュウイ（John Dewey）がいるが、デュウイは著書『人間性と行為』の中で、類似の議論を展開している。それは獲得衝動と創造的衝動についての見解である。デュウイによると、人は創造的衝動と、またそれに伴って獲得衝動の両方を持つものであるとする（デュウイ 1960:115）。金銭などの獲得衝動は、資産家でも労働者でも誰にとっても、あくまでも目的を果たすための手段である。しかし創造性は、獲得の過程に宿っているものでもあり、その後に生まれるものがあるという意味では創造的衝動もまた獲得的であるとする。資産家などとは異なり、普通労働者は、労働の対価に対して心もとない条件を突きつけられているので、単なる生産工程の機械に成り下がり、自己目的のなんらない立場に置かれている。労働者たちは、労働による所得といった獲得そのものに振り回されるよりも、労働者として生活保障感に依存しつつも、労働の合間のつかの間の息抜きを楽しみにすることで、一義的には「目的」を達せられる方に甘んじていると述べている。デュウイは、産業化の時代において、どうして生産過程そのものではなく、生産された製品にばかりに価値がおかれるのかという問いがあるとする。労働者にとって、工場労働は個人的管理下にないたため、なんら生産への愛情が生まれない。そうではなく、労働者に対しても、生産のプロセスにおける創造性を分配するべきであると述べる。本来は、製品ばかりでなく、製造工程にこそ創造性があるべきだというのがデ

---

<sup>43</sup> ピンク（2010：205）より、Niemiec, Ryan, Deci（2009）の調査事例より。

デュウイの考えである（デュウイ 1960：115）。資産家が獲得し、労働者の獲得が少ないという、獲得に関する偏りが、多くの労働者の創造的衝動も抑えているとすると、それはよくないことであり、より多くの人に、獲得衝動が平均的に伸ばされていれば、世の中がもっと良くなっていることはありそうである、とデュウイは述べる（デュウイ 1960：116）。

一方、獲得衝動が強く、富を握る産業界での成功者は、一般に創造的芸術家に等しいとも述べている。確かに、産業界でよく言われるイノベーションには創造性というキーワードもイメージとしてつきものであり、よく成功したビジネスマンには常にクリエイティブというイメージが伴っている。しかし、こうした人々にとっても結局、獲得それ自体は創造的衝動への手段であることには変わらない。であるならば、一握りの人による獲得の結果、その他大勢の人の創造的欲求が抑えられるよりは、より多くの人に、プロセスであり目的としての創造性と、結果としての獲得欲求も持ちうるような環境があれば良好で、なお理想的である、という論考である。デュウイは、効用だけを突き詰めた機能的な製品を生み出すのではなく、製品に美的な側面を備え付けたり、そうしたムダな遊びとしての創造性を付け加えても、効用そのものには悪影響はないとする（デュウイ 1960：115）。しかしながら、大方の製品が機械的に、あるいは機械によって生産されてきた時代の中で、多くの労働者の創造性は生かされることなく、生産過程から自らの個性はすっかり取り除かれてきた。そうすると、当然、労働者にとっては、携わっている生産過程に思い入れが持てず、労働は単なる余暇や生活保障のための、面白くない時間でしかなくなっている、と考察する（デュウイ 1960：114-119）。これはまさに「モチベーション 2.0」に関連する議論である。

このように、鶴見が創造性の考察の中で引用していた社会心理学者のデュウイの論考にも、創造性についてのデシやピンクらと共通の見解が見いだされる。このような議論の要点から分かるのは、内発的な活動のためには、多くの人に創造的であろうと欲することができるようなプロセスが分配される必要があるということである。内発性に関して‘Endogenous’と‘Autotelic’という用語上の違いはあるが、議論の性質から、共通の問題意識に根ざしていると言えよう。

#### 第四節 内発性と動因

これまで見てきたような自己目的的体验、フロー体験、創造的衝動などの内発的動機は、より根底的にはどのようなメカニズムで起こっているのだろうか。内発的動機付けの心理学的なメカニズムについて、これまで多様な研究がなされてきた。ここではそうした先行研究の流れを振り返ってみたい。デシ（1980）の整理によると、内発的な行動の要因については、以下のようにたくさんの研究、考察がなされてきたことが分かる。

表 3-1：動機付け研究の履歴

アプローチ	Approach	提案者
■動因命名	Driving Name	
探索動因	Exploratory Drive	モンゴメリー1954
退屈回避	Avoid boredom	マイヤーズとミラー1954
操作動因	Manipulation drive	ハーロー1953
感性動因	Sensory drive	アイザック1962
視覚的探索	Visual Drive	バドラー1953
■最適不適合 (心理学的過程)	Optimal incongruity (Psychological processes)	
最適不適合	Optimal incongruity	ハント1955、デンバーとアール1957
最適喚起ポテンシャル 順応水準からのズレ	Optimal arousal potential Discrepancy from adaptation level	バーライン1971a マクレランドら1953
■最適覚醒 (生理学的過程)	Optimal arousal potential (Physiological processes)	ヘップ1955、リューバ1955 フィスクとマディ1961
■不確かさの低減	Uncertainty reduction	
不確かさの解消	Resolve uncertainty	ケイガン1972
不協和の低減	Dissonance reduction	フェスティンガー1957
不確かさの低減	Uncertainty reduction	ランツェッタ1971
■有能さと自己決定	Competence and self-determination	
イフェクタンس	Effectance	ホワイ特1959
自己決定	Self-determination	アンジャール1941
主體的因果律	Personal causation	ドゥ・チャームズ1968
有能さと自己決定	Competence and self-determination	デシラ1973

出展： デシ（1980：65）の表1より

心理学の研究手法には、いくつかのアプローチがあり、精神分析、認知論、人間性心理学や行動主義、機械論的立場といったものがあるとされている。これについてマズロー（Abraham Maslow）は、心理学の第一勢力を精神分析学、第二勢力を実験心理学、そして第三勢力を人間性心理学としている（マズロー 1998：xi）。精神分析学は、フロイトが提唱したもので、潜在意識、無意識の影響を考察し、人が自分で意識的に判断したのではない部分に注意を払う。一方、行動主義や認知論的立場などを含む機械論的アプローチは、人間を一つの機械的なものとみなし、投入された刺激への反応のメカニズムに着目する。この場合は、刺激に対する反応から、起こり得る行動を予測することに中心がある。認知論的アプローチは有機的な機械論的アプローチとして、内的な認知枠組みによる意思決定を分析する。こうしたそれぞれのアプローチに対して、人間性心理学の立場は、人間の自由意志<sup>44</sup>を考慮し、健康な人間が成長し、向かっていく方向性を研究する立場である。

内発的動機付けに関するこれまでの研究の流れを見てみると、はじめに自発行動というものについて関心が注がれ、それが動因ではないかとして研究がすすめられたとされる。動因とは、活動や、行動様式を誘発したり動機づけるレディネスの状態であるとされる（ファンデンボス 2013：635）。これは、個人をある目標に対して能動的に努力するように促す動機付けの力を意味する言葉である（Woodworth 1918）。さらに、動因行動の起原を見出すため、はじめにラットでの研究がおこなわれた。探索動因や、退屈動因などが見出された動因の一つである。探索動因とは、ラットが、目の前の物体に対して関心を示して、探

<sup>44</sup> マズローは、人間が統制されたり統制されうると考えるよりも、自由でいたい、自分で選びたいといった主體的感情があることは、そこに自由意志に対する問題が含まれると指摘する。ここに、マズローが人間性心理学において自由意志を考慮していることが伺われる。（マズロー 1973：16）

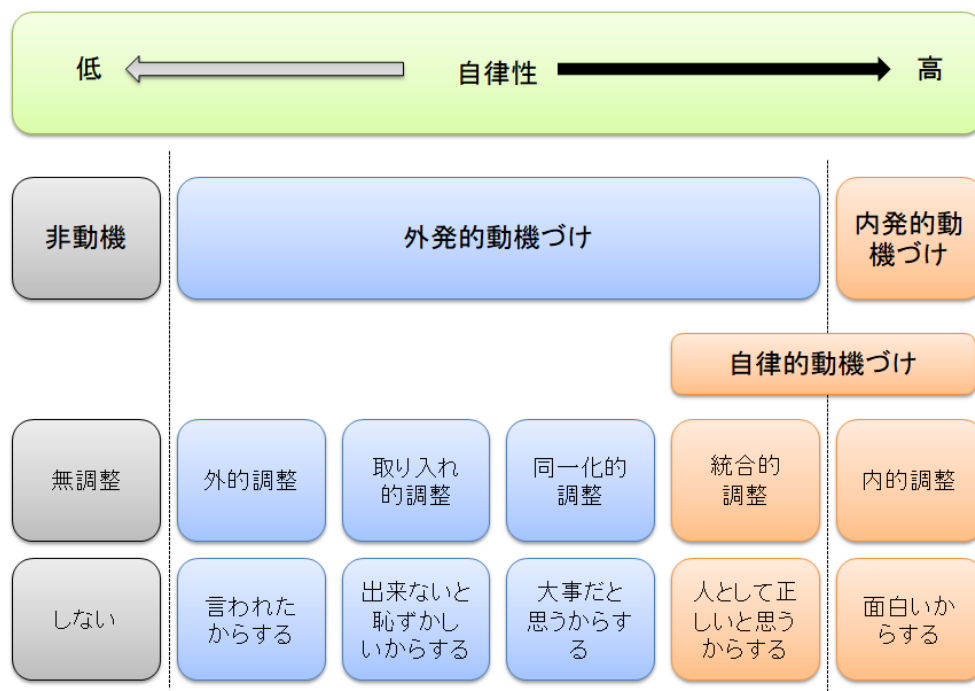
索行動をとることが発見され名づけられた。またこの探索は、ラットが暇という苦痛を回避するための行動ではないかという考察から、退屈動因というものも考察された（デシ 1980 : 26-33）。その後の研究の経過から、動因低減理論が示されている。行動には、生理的なものによる欲求と、心理的なものによる動因に分けられるとしたのは、クラーク・ハル（Clark Leonard Hull）であるとされる。そしてハルは、学習によって動因が低減されるように動機付けされるとした。（Hull 1943）。例えば、空腹の際にビスケットが棚にあることを学習すると、次回の空腹時からは棚に行くことを学習し、これによって空腹動因を低減させる（アイゼンク 2008 : 186）。このように、動機づけられた行動目標に達した時には、動因状態が低減するという学習理論である（ファンデンボス 2013 : 636）。しかしながら、苦痛に対しては、苦痛を減らすための自発行動はみられるものであるが、例えば探索行動はむしろ自発的で接近的な行動である。退屈を減らすためであれば、動因の低減が目的であるが、逆に興味や関心から動いているとすれば動因低減とはいえない。行動はすべて動因の低減が目的だろうか、あるいは、欲求を増幅するのが目的だろうか、こうした視点が出てくることになった。そこで、こうした接近的な要素について説明するための研究が進められた。こうした研究の中で、最適不適合という視点を提唱したのはジョゼフ・ハント（Joseph McVicker Hunt）であるとされる（デシ 1980 : 35-48）。動因低減から視点を変え、動因や欲求は、現在の水準からの不適合の度合いによって決まってくると考えたのである。具体的には、人は、現在の水準からなんらかのズレのある事象に向き合った時、それが好ましくない場合には、動因の低減に向けて動き、好ましい場合は接近的にそのずれと向き合うというのである。しかし、好ましくともあまりにも大きく現状からかけ離れていると、それは好ましくない、回避したい、と感じるので動因低減の行動が起きると考えられた。例えば、自分の手の温度から大きくかけ離れた温度の水に手を付けるのは嫌がり、代わりに自分の手の温度から少しだけ違う温度の水にこのんで手を入れるという実験結果がその例である。しかし、これでは、環境に恵まれ、本人にとって何もズレがない環境にいる人間の内発的な行動が説明できない、とも考えられた。こうした問題について、デシが考えたのは、最適不適合には 2 段階があるというものである。第一には、ハントの提示にあるように、個体は現実の順応水準よりかけ離れた不適合に出会った場合には、その食い違いを低減するための行動にでる。第二には、個体は現実の実際の量と、その個体自信が理想とする最適量に食い違いがある場合に最適刺激作用を追求することに能動的になる、ということである。このように、2 つの機制により、最適不適合の論理は動因低減と、増幅する動因の 2 つがうまく説明される。

このような内発的動機付けの研究は、本論文のキー・パーソン研究に繋がるはずである。なぜなら、キー・パーソンは自ら動機付けされた事柄に積極的に向き合う人々であるため、行動の動機がキー・パーソン自身の最適な水準へ向かっての努力であると理解できるからである。

## 第五節 自己調整

これまで見てきたことから、内発的動機付けは心理学の知見から多角的に研究されてきたことが分かる。特にデシらの自己決定理論は、現在でも多くの心理学の研究で参照されているが、前節でみたように欲求を 3 要素に分けるのは、自己決定理論の小理論の一つである（上淵 2017: 71）。自己決定理論における別の小理論には、有機的統合理論（Organismic Integration Theory）と呼ばれている小理論がある。これは、外発的動機付けから内発的動機付けまでの段階を自律性の程度に応じてグラデーションのように整理したものである（Ryan 2012 : 484）。有機的統合理論は、JICA（2016）でも参考にされており、本研究の考察においても、関連性があると考えられる。

図 3-1：有機的統合理論における動機付けと自律性の構図



出典：Deci, Ryan（1985：139）、櫻井（2012：59）を元に筆者作成

有機的統合理論の考え方によると、外発的動機付けと内発的動機付けは全く別のものではなく、変化していく過程として整理されている。特に、外発的動機付けに分類される統合的調整と、内発的動機付けに当たる内的調整は、どちらも自律的動機付け（自律性の高い動機付け）（Autonomos Motivation）に分類されている（櫻井 2012: 49）。統合的調整とは、社会における規範や正義の観念と、自分自身の信念に葛藤がない場合に、そうした規範を自らに取り入れて動機付けをしている場合を指す。その意味で、真に内発的ではないが、葛藤がないという意味において、方向づけられた行為に自律性が認められる。統合的調整

のように、動機が外発的であったとしても、内発的動機付けに準ずるような自律性の高い動機付けにもなりうることが示されている。またこれについて、統合的調整と内的調整を自律的動機付けとして一括りにして実証研究をした場合、おおむね妥当な結果を得ているとしている（西村・河村・櫻井 2011）。ここで、内発的発展論におけるキー・パーソンについて、心理学的に考えた時、統合的調整の状態を含めるかどうかは、「不条理な苦痛の軽減のために行動する人物」というキー・パーソンに関する表現から判断が出来るであろう。すなわち、「不条理な苦痛の軽減」という正義を取り入れた動機付けであるから、統合的調整を含めた自律的動機付けをキー・パーソン像の範疇としていると捉えられよう。

内発的動機付けに関するこれまでの研究結果を考えると、開発の現場において動機付け研究の成果は役に立つはずである。例えば南の国の人々は、暮らしの場において当然ながらつねにネガティブな最適不適合（困った状態を解消したい）ばかりを持っているわけではないはずである。逆に、日々の楽しみや興味関心など、好ましいことに積極的に接近する行動を行っていることは自明であろう。だとすれば、国際協力の現場において、人々に回避行動が見られた場合には、なぜ回避するのか、その原因を究明することが考えられるであろうし、また接近行動をしている場合には、何に向かって接近し、何に関心を注いでいるのかに基づいて、その社会の問題や人々の持つ関心の方向性や、社会文化的に固有な行動の方向性を考えることにもつながるであろう。動因の低減や動因の増幅（回避や接近）といった視点によって、それぞれが向かう方向について多様性を見出していく際には、科学的な客観性を確保することもあり得るように思われる。例えば、集団の対話の中で、人々が何に盛り上がり、何に静まり返るかといった観察可能な部分から接近と回避の傾向が見いだされるであろうし、積極的な部分を追求していけば人々にとっての自己目的的体验となってより効果の高いプロジェクトになるとも想定できる。前述のピンクやデシラの「自律性」「有能感」「関係性」や、「自律性」「熟達」「目的」といった内発的な活動の性質も、回避行動ではなく接近的な事柄に対するものである。内発的発展における開発とは、人々にとっての正の最適不適合の接近要素を活用することであるとみることができよう。あるいは、不条理な苦痛を軽減するために、統合的調整の動機付けで動いているのかもしれない。キー・パーソンを見るうえで、統合的調整と内的調整の 2 種類があるであろうことは興味深い視点である。この点については本論文において調査結果からも考察を加えることにする。

## 第六節 内発的発展論における創造性

内発的動機付けの研究成果は、内発的発展論にとって役立つものであろう。鶴見は、内発的発展論を、心理学の内発的動機付けの観点から展開したわけではないが、創造性を心理学の観点から読み解こうとしていた。創造性は、鶴見のキー・パーソン論の中でも重要

な議論であり、この点こそ内発的動機付けに関連するところが大きいのである。このことから、内発的発展論は心理学によって説明されるべき部分があるものと捉えられる。そこで本節では、内発的発展論における鶴見の創造性の議論と心理学との関連性を考察する。

鶴見が取り上げた心理学者の議論でフィリップ・ヴァーノン (Philip Ewart Vernon) の創造性がある。もう一つが、心理学者シルヴァノ・アリエティ (Silvano Arieti) の創造性の議論である。また、同じく引用されているデュウイも、心理学とのかかわりが深く、創造的衝動について議論していたのは前出の通りである。鶴見は創造性に関して以下を引用している。

#### 【フィリップ・ヴァーノン】

第一に、創造性とは、「複数の考えの新奇な結合または異常な結合」であり、第二に、「そのような結合が、社会的もしくは理論的価値をもつか、ないしは人々の感情に衝撃を与える」という点である。

(鶴見 1996 : 13)

#### 【シルヴァノ・アリエティ】

創造における、二組の異質な要素の組み合わせを抽出した。第一は、明晰にして判明なる概念と、あいまいにして形の定まらない「内念」(endocept)、第二は、同一律と矛盾律と排中律にもとづくアリストテレスの形式論理と、これらすべての原則を無視し、ものごとの異化よりも同化に重点をおく「古代論理」(paleologic)との、いずれも異質なもののあいだの統合の過程である。

(鶴見 1996 : 13)

創造性とは、いずれも古い物と新しい物とや、異質なものの間の統合の過程により起こるものであるとの考察が共通点となっている。アリエティによると、フロイト理論には一次過程（潜在意識）・二次過程（日常の論理を利用できる顕在意識の働き）があり、そしてアリエティ自身の考えで、異質なものの統合の過程とは、一次過程から二次過程を結びつける働きとしての三次過程であると述べられている（アリエティ 1980 : 9）。フロイトの一次過程とは、「内念」または内概念として潜在意識下でまだ表現されず形の定まっていない、捉えることが難しい要素のことである。一方の二次過程とは、表現された概念に当たり、物事の細部に輪郭を与えて形とし、概念としてあらわす過程である。フロイトによって一次過程と二次過程が説明されたが、アリエティはこれに加えて、内概念が具体的な概念になる、その変化統合の過程（心と物の融合過程）を三次過程としている。すなわち、三次過程が創造性である。アリエティは三次過程を次のように表現している。

独特の機制と形態を持つ三次過程は、心と物の二つの世界を融合し、多くの場合、合理的なものと非合理的なものを融合する。(アリエティ 1980 : 9)

ただアリエティは創造性について、それを独創性と区別する必要があると指摘している。これは内発的発展論の考察の際にも関連するであろう。独創性との違いを理解するために、創造性についてのアリエティの表現を見てみたい。

(a)

創造的な仕事はそれ自体だけでは考えられない。それはまた人間との関係において考えられねばならない。創造的な仕事は、世界と人間存在との間の付加的なきずなを作り上げる。

(アリエティ 1980 : 3)

(b)

創造的な仕事は二つの役割をもつと見ることができる。すなわち、それは新しい次元を加えたり明らかにしたりすることによって、世界を拡大すると同時に、この新しい次元を心の中に経験できる人を豊かにし、発展させる。

(アリエティ 1980 : 3)

(c)

夢のなかには、単に夢をみた人の精神病理や健康状態の反映とみるべきではなく、葛藤を解決しようとする心理的努力とみなされるべきものがある。これらすべての特徴にもかかわらず、夢を創造性の産物とみなすことはできない。若干の例外を除けば、夢は夢を見た人自身にとってのみ価値がある。夢は完全になしは正しく再現することのできない個人的な経験である。夢は概念過程に充分統合できない原始的な機制から大部分成り立っているので、もとの形で人と共有したり、人に伝達することはできない。

(アリエティ 1980 : 7)

以上のアリエティの表現から、独創性と、創造性についての違いは明確である。第一に、独創性は、概念過程（二、三次過程）に充分に至っておらず、一次過程が個人的に体験された部分的な展開とみられることである。第二に、こうした部分的な展開において、それが他者と共有されるものでないという点である。他方、創造性とは、内念がアウトプットされ価値ある概念に昇華したものである。すなわち、他者と共有されうるものである。例えば、夢の中で原子構造についての回答を得た科学者ニールス・ボーアは、その構造の発見により、現在の科学の世界に大きな進展をもたらした。それが夢であったとしても、他

者とも共有でき価値あるものになったならば、それは創造性であると定義できる。同じ夢でも、実際に 3 次過程を経て、現実にも共有される価値に昇華してくこともあり、創造性とは、「世界と人間存在との間の付加的なきずなを作り上げる」ものなのである。先のヴァーノンでも「そのような結合が、社会的もしくは理論的価値をもつか、ないしは人々の感情に衝撃を与える」としていることから、同じことを定義していることが分かる。

鶴見は、こうした創造性の定義を参照し、内発的发展論における要素である「外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出される」という点を導き出している。このことから、内発的发展論における創造性とは、アリエティらの言う創造性のように、実際の世界に価値が表出される必要がある。内発的发展論におけるキー・パーソンとは、独創的ではなく、創造的である必要があり、個人の内面だけではなく社会に対して価値をもたらす地域に変化をもたらす人物像であることを想定していることが分かる。

## 第七節 教育と創造性の関係

内発的发展論は、西欧の近代化に対し、他の世界の独自の在り方に関心を持つ。そして、中でも南の国々におけるオルタナティブな発展を目指しており、南の国々の事例が多く考察されている。本稿もまた、南の国における内発的发展に関心を持っている。

一般に、南の国々は途上国と呼ばれ、就学率や教育年数が短いといった点や、学習環境が不十分であることが問題視され、また発展と教育の関係は常に議論されてきたため、国際支援の対象となってきた<sup>45</sup>。内発的发展論が想定している創造性が発揮されることと、教育の普及状況とは関連するものであろうか。もし関係があるとすれば、教育が十分に行き渡っていない南の国々では創造的な活動は起こりづらいのであろうか。チェンバースの中心—周辺のパイアスがあるとして、先進国の方は創造性が高く、途上国の方では期待しづらいという問題はあるだろうか。アリエティの『創造力』第 15 章の創造性と知能の節を見ると、知能と創造性に相関関係があるかどうかの先行研究の整理がされている。知能も学校のみで養われるとは言えないが、知能と創造性についての見解に一致はない、としている。それどころか、高い知能は個人の資質を抑制することもあるとする。それは、自己批判があまりにも厳しくなったり、文化的環境が提供するものをあまりに早く習得してしまうからである、という（アリエティ 1980:288）。これは、ジョイ・ギルフォード（Joy Paul Guilford）が議論した、創造的思考にとって重要な「拡散的思考」が抑制されるからとも考えられている（アリエティ 1980:5,13）。多様な知識により思考が「収束的思考」になると、創造性は抑制される。つまり、創造性にとって重要なのは拡散的思考ができるかどうか

<sup>45</sup> 2000 年、2015 年に「万人のための教育（EFA: Education for all）」が国際機関によって議論され、2000 年はダカル行動枠組み（Dakar Framework for Action）が、2015 年には仁川宣言が国際的アジェンダとして採択され、すべての人々に教育の機会が普及することを目指している。文部科学省 HP：<http://www.mext.go.jp/unesco/002/006/001/shiryo/attach/1360520.htm>、UNESCO（2015）を参照。

かであるとした<sup>46</sup>。

創造性が必ずしも知能または知識によらないとすれば、学校教育の普及だけが内発的発展論が求める創造性に繋がるわけではないと考えられる。そうであれば、学校教育がどのような状況にある国や地域であっても、創造性を持つ人がいるわけであり、先進国が優位であり、指導をする立場であると考えるのは、こうした点からも間違いであるといえる。それぞれの社会にそれぞれの創造的過程がある。どの世界にも、新しいものと出会い、三次過程を起こす創造力はある、内発的発展は当然可能であるといえる。

このような先行研究の考察から、本論文では、内発的発展論において価値・倫理・創造性に関連する心理についての考察は重要であると考え。このため、本論文の調査分析は、キー・パー孙の内発的な活動がいかにして起こるのかを実例をもとに分析し、心理学の研究成果も参考にして内発的発展の促進についての方法論を明らかにするように試みたい。

## 第八節 マズローの欲求階層理論と内発的動機付け

ここまで多様な先行研究を見てきたが、本論文の研究で取り入れたいのが、欲求を階層構造で直観的に示したマズロー心理学のフレームである。マズローの理論とは、欲求を低次の欲求から、高次の欲求まで 5 段階（生理的欲求・安全性欲求・所属性欲求・承認欲求・自己実現欲求）で示した理論である<sup>47</sup>。マズローは、健康に関する心理学と、人間の創造性について関心を注いだ心理学者であり、欲求階層論も、人間が内的欲求を満足させながら発展していく方向性を研究したものである。特に、創造的人間については強い関心をもって議論し、内発的発展論におけるキー・パー孙に必要な創造性にも関連性があるとみられる「自己実現的人間」という段階を提示している点で興味深いのである。マズローの 5 段階欲求は直観的に分かりやすく、アイデアとして広く受け入れられている。そのため、これまで議論してきた心理学者からもそれぞれ参考にされている。しかしどれにおいても非常に限られた説明・紹介しかされておらず、実践的な活用方法としては議論されていない。このため、本論文でも議論が後手に回ってしまった。マズローの理論が利用されない原因として、実験による検証の難しさと（デシ 1980 : 19-21）、下位の欲求が完全に満足

<sup>46</sup> 拡散的思考とは、例えばキーワードからどれくらいの関連するイメージを出せるかといったような思考である。欧米諸国で算数・数学を教えるときに、 $2 + 3 = 5$  について、 $\bigcirc + \bigcirc = 5$  といった質問形式にし、 $\bigcirc$  のなかを自由に回答させる場合がある。これは拡散的思考に関連するもので、多様な構成を自由に思考させる。一方の  $2 + 3 = \bigcirc$  とするのは収束的思考とされ、多くの情報から一つの回答へ限定をする方向性の思考過程である。ギルフォードの研究については Guilford (1959) を参照。

<sup>47</sup> (原文) Maslow (1987)、(邦訳) マズロー (1987) によって、5 段階欲求は [physiological needs : 生理的欲求]、[safety needs : 安全の欲求]、[belongingness and love needs : 所属と愛の欲求]、[esteem needs : 承認の欲求]、[self-actualization needs : 自己実現の欲求] とそれぞれ表現されている。邦訳に関しては、マズローについて議論する文献によって多少表現に違いが見られるため、本論文でも違う表現をしている場合がある。本論文の中では基本的には [生理的欲求] [安全の欲求/安全性欲求] [愛と所属の欲求/所属性欲求] [承認欲求] [自己実現欲求/自己実現的欲求] などで表現している。

されなければ上位の欲求へ進展しないという誤解が生まれ、これが現実にもそぐわず、理論の限界であることが指摘されている（JICA 2016：20）。しかし、それでも本論文ではマズローの欲求階層論に依拠してキー・パースンの研究を進めてみたいと考える。マズローの理論は、欲求を5段階に分けるものである。最低限の生命の維持を目的とした〈生理的欲求〉〈安全の欲求〉と、人間関係の安定に関連する〈愛と所属の欲求〉〈承認の欲求〉そして、自らの人生の実現を目指す〈自己実現の欲求〉の5段階に分けられる。マズローは、自己実現欲求以外の欲求は自分で満たすことができない欲求であり、環境依存的な〈欠乏欲求〉としている。そして自己実現欲求を環境から独立し自ら満足してゆく〈成長欲求〉として理解する（マズロー 1998：25-33）。また多くの考察において誤解されがちな点ではあるが、マズローは下位の欲求の100%の満足が必要だと言ってはおらず（マズロー 1987：83）、多くの学者や実務家にその意義が見過ごされてしまっているところがあるように思われる。実際は、マズローの欲求階層理論は多くの内発的発展動機付けと理論的に一致するところが多く、この理論を用いてこれまで議論してきた内発的動機付けを整理することが可能だと思われる。例えばデシとライアンの自己決定理論に関しても、マズローの理論に当てはめて説明ができるであろう。すなわち、「関係性欲求」とは所属性欲求・承認欲求に該当し、自律性や有能感は自己実現欲求の段階に該当するという流れで見ることにも出来よう。ピンクの「自律性」「熟達」「目的」といったことも、承認欲求や自己実現欲求のような上位の欲求に該当するであろうし、チクセントミハイの自己目的的体验も、マズローの自己実現的欲求に関連する欲求についての議論だと見なせるであろう。デュウイの創造的欲求などの議論も、上位の欲求に関するものと位置づけられる。また、アリエティらの創造性の議論も、当然ながら、自己実現欲求などの高次の欲求に属するであろう。つまり、これまで見てきた内発的動機付けは、いずれもマズローでいえば、比較的高次の欲求の満足に議論に関連していると考えられる。

これまで内発的動機付けで見てきた論点が比較的高次の欲求に関連するものであるのに対し、ピンクのモチベーション理論で取り上げられたモチベーション1.0や、2.0の段階は、生理的欲求や安全性欲求に該当する、比較的低次の欲求の満足を説明していたように受け取れる。そして、モチベーション3.0が高次の欲求であろうから、そういう意味でピンクの議論はマズローの階層理論と理路が似ている。欲求を全体としてみると、最低限の欲求から、創造的欲求まで幅があることを認めれば、マズローの議論はすべての状態を包括しており、かつ分類がより詳細である。このため研究においては、それぞれの社会の状況を位置づけ理解するのに役立つと考えられるのである。

一方、鶴見の内発的発展論との関連でも示唆が得られる。水俣の事例にあるように、水銀による神経麻痺といった、生命の危機にありながら、なお果敢に社会と向き合い、自然と向き合う人々が描かれている。つまり、キー・パースンというのは、低次の欲求に問題を抱えても、正義のために高次の欲求をもって行動できるような人物を示している可能性があるし、個人のみならず地域的「自己」実現を目指しているという意味で、非常に深淵

な人格像が伺える。であるからこそ、マズローの欲求階層論という欠乏欲求から成長欲求まで広い範疇を押さえる段階的な構造を生かして研究するほうが体系的な知見が得られそうである。

本論文ではこれからマズローの理論をもとに研究を進めたいと考えているが、この立場には、実験による検証不可能性があるとされ、問題点が指摘されている。しかし、提唱者のマズローは、実証の難しさを認めたとうえで、第三の心理学は健康な人々が選択し、発展していく方向性を知るために必要であるとしている<sup>48</sup>。20 世紀前半にフロイトが精神分析学を発達させて以降、神経症の治療を中心とした議論が深まってきたが、20 世紀中ごろからは、病的側面の分析や考察だけではなく、健康な状態の研究に関心をもたれるようになった。マズローが注意したのはこの点であり、神経症などの病的状態に対する研究は健康になるために必要なものである。逆に、病気を治すためには、健康な状態をまずは知る必要があるとした（マズロー 1998 : 7）。マズローの健康心理学への関心は、人間の進化の方向性や最高の可能性（マズロー 1973 : 5）を知ることに関連するものである。内発的發展も、病的な心理というよりは健康な心理とその創造性に関連しているであろう。そういう意味で、これまでの内発的動機付けの研究成果をより俯瞰して整理できるという意味で、本論文の調査はマズローに依拠した形で研究を進めることにした。そこで次章では、マズロー心理学の位置づけと、内発的發展論との関係性を整理し、マズロー理論を本論文で活用する意義を述べたい。そして次々章からの調査分析につなげていく。

---

<sup>48</sup> マズローは、成長する人間を研究する必要性について議論しており、人間の成長する方向性を知るために、成長の良い見本の研究が必要であるとしている。良い見本としての「成長する尖端」は、「実際にやっているところ」の人々であるとする（マズロー 1973 : 7）。マズロー（1973 : 16）においては、人間が統制から自由でありたいと願うことについて、自由意志に対する考えが必要であると考えており、マズロー（1973 : 12）において、進化とは成長すること、すなわち、選んで決めることを意味し、このことは価値づけを意味しているとしている。このことは、「実際にやっているところ」である先端が、何を価値とするかを研究するにあたって、個人の観察や理論的類推も含めて、仮説を作っていく必要があるとしている（マズロー 1998 : xii）。著書の冒頭では、まず実証主義科学における手段中心的傾向に警鐘を鳴らしており、むしろ手段、技術などは利用するものとして、問題設定者として問題への回答を求めていく柔軟な研究姿勢の必要性を説いている（マズロー 1987 : 20）。

## 第四章

### 内発的発展論におけるキー・パースンとマズロー心理学の活用

#### 第一節 マズローの心理学

前章では、内発性について、心理学の先行研究から整理・考察を行った。内発的動機付け理論や自己決定理論、創造性に関する議論などを参考に、心理学の研究成果から、創造性がどのようなものであり、どのように生まれるのかヒントを得ることができた。また、内発的発展論における内発性は、内発的動機付けの内的調整のみならず、外発的動機付けの統合的調整を含むものであることも推察できた。

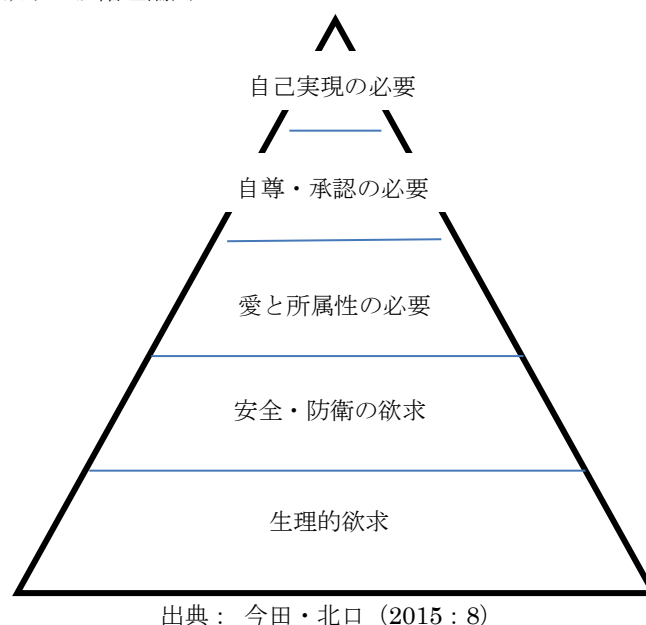
本論文は、キー・パースン論を深めることを目的に調査分析を行うものであるが、前章で振り返った多様な研究の中でも、とりわけマズローの欲求階層論に依拠した研究を行いたいと考えている。それは、第一に、マズローの提唱した欲求段階理論には、内発的動機付けの多様な研究成果や創造性について俯瞰できるような、整理された構造があるからである。第二に、「自己実現的人間」という段階が描かれているからである。自己実現的人間は創造的であり、伝統を保持することにも、変革することにも積極的であるという、内発的発展論と親和的な議論が散見される。第三に、JICA 報告書でも、またシルヴァノ・アリエティなどによっても、マズロー心理学は常に他の心理学者から取り上げられており、マズローが唱道した人間性心理学（ヒューマニスティック心理学）は、広く受け入れられている理論だからである。

しかし、マズローの心理学は実験の難しさに加え、現在の科学では証明ができない自由意志を前提としているため、人間性心理学を実証面で不安定なものとさせている面がある。

JICA 報告書や、シルヴァノ・アリエティなどの著作でも、こうした理由から引用箇所はごく限られ、根拠が弱さが指摘され、それ以上は言及されずにいるのが現状である<sup>49</sup>。しかし例えば経営学の世界では、マズローの欲求5段階説は必ず紹介されるほどであり、実証の段階を踏むのを待たず活用されていることも事実である。このような現状を認識しつつ、本論文では内発的発展論のキー・パーソン研究において、マズローの提唱した欲求5段階説を基にあえて議論を進める。マズローの議論は、誰もが直観的に理解できるような構成であり、生理的欲求から自己実現まで、人間の誰もがもつと思われる欲求を分かりやすく示している。また各個人が自らの人生を振り返って直観的に理解できる。またマズローの理論は、階層構造になっていることから、国際開発の分野でも、支援のカテゴリーとして参照できると考えられる（次章参照）。

マズローの欲求階層理論は、経営学の分野では人的資源管理に活用されることが多いが、開発分野ではあまり利用されていない。本来は一般的な人間の在り方について考察するものであり、人間の成長、発展を経済以外の視点から議論する際に、大いに参考になると考えられ、開発の議論にも親和的であろう。しかし、もし開発の分野において、心理学を人的資源管理のために利用すると言えば、むしろ恣意的になりかねないため、人間の創造性を開花させるといった目的での使用に限って考察されるべきである。マズローの欲求階層論では、人の発達段階は次のように図示される。

図 4-1：マズローの欲求5段階理論図



<sup>49</sup> 茨木（1997）によると、マズローをはじめとした心理学者による人間性理論は、一章あるいは一節を割いて議論されているものがほとんどなく、明確な定義がないという指摘がある。さらに、アメリカでの人間性心理学会の設立以来、動機づけをめぐる新しい見解があまり深まっていない。

マズローが述べる人間の心理構造の議論は、欲求を5段階に分け、それぞれの欲求が満たされれば次の欲求段階へ進むとするものである。生理的欲求の次には安全欲求へ、それが満たされると今度は愛と所属への欲求を持つようになり、その次は信頼や尊敬、自尊という承認についての欲求へと順次段階が上がっていく。さらにこれらが満たされると、最も高次の欲求としての自己実現欲求に到達する。ある程度まで衣食住に困らず、生活環境が安全な人は、愛情を求め、社会からの承認の欲求を持つようになる。マズローによると、欲求は欠乏欲求と、成長欲求に分けられる。その中で、生理的欲求から自尊・承認の欲求までは欠乏欲求とされている。欠乏欲求は、それが満たされないと早晩病気になるものであり（マズロー 1998:26）、しかも他者によって充足されるものだとする（マズロー 1998:42）。生理的欲求に関していえば、例えば食べ物は環境から得られるものであり、自らの体内から得られるものではない。安全も、外的環境の状況に関するものである。他者からの愛情や承認も、同様に、自分以外から満たされる性質のものである。このため、これらの欲求はすべて自分自身で満足することができないことから、欠乏欲求だとされている。ただし欠乏欲求を満足し、これを超えると、人は外的なものによる満足ではなく純粹に自らの内面の欲するところに基づいた自己実現を求めるようになり、これが成長欲求とされ、環境条件から独立した内面による精神活動とされるのである。したがって自己実現的人間は、欠乏欲求を離れたことにより、「生きる準備をしている」のではなく「生きている」と考えられる（マズロー 1987:237）。このため現実の知覚がより有効になり、物事を常に新鮮に捉えることができ、現実とより有効的な関係を築けるようになるという。そして自己・他者・自然を受容し、自発性に富み、単純で素直であるという。共同社会感情を持つが、プライバシーの欲求もあり、自律性を望む。創造性に富み、自己実現のために課題中心的になるといった、多様な特色があるとされる（マズロー 1987:221-307）。マズローは、欠乏欲求である外的環境への依存やそれからの自由を「地理学的自由」と呼び、これに対して環境から独立して自ら自己を生きる成長欲求の状態を「心理学的自由」と呼んでいる（マズロー 1998:44）。心理学的自由では、自らを犠牲にして目的に向かうことが可能になるという意味で、環境からの独立性があると指摘されている。断食をして悟りを求めるようなものである。

人々は当然ながら、生まれ育ったさまざまな社会環境でこれらの欲求を満たしていくことになる。いわゆる最貧困国であっても先進国であっても、人間であるからそれぞれの所属する社会で各欲求を満たし、次の欲求段階へ進むものである。「もう一つの発展」報告書では、南の国々であっても基本的な必要が満たされているところでは文化的な生活が営まれており、広い意味で人々の創造性や社会的結束、活力を包摂していると書かれている（Dag Hammarskjold Foundation 1975:34）。こうした事実も南の国々の人々とその社会について論じる際に重要性を増すはずである。途上国や貧困という言葉で一括りにせず、各々の国や地域で何が満たされ、何が満たされず、人々がどういった欲求の段階にあるかを、GDPなどの計算ではない、より広い枠組みから考えることが重要なのは自明である。

開発学は、南の国々の貧困撲滅や紛争解決を議論することが中心の学問である。貧困や、紛争といえば、まさに食料や水の確保、生命の安全といった、最低限のニーズの満たされない状況と関連する。そうした状況下で、果たして人間が創造性を発揮し、自己実現的な人生を追求できるのか、といったことを考えれば、それは基本的には難しいと想像できるだろう。欲求階層論を参考にすれば、この場合の支援は、決して所属性欲求や承認欲求に対するものではないとの考えが当然ながら浮かぶものであり、むしろ実施すべき支援は生理的及び安全性欲求に対する支援である。他方で、貧困国といわれながらも実態は自給自足ができており、紛争もなく安全な暮らしをしている地域もある。そのような地域においては、躍起になって衣食住や安全の支援をする必要は当然ない。この場合、何の発展を支援するのだろうか。内発的发展論が言うように、地域の人々の創造性に依拠した活動への支援が考えられるであろう。ソーシャル・キャピタルを生かした支援、所属性欲求や承認欲求、自己実現欲求も関係するようなプロジェクトが考えられる。これら異なった状況にある国々は、経済指標をみれば同じ「途上国」とされてしまうが、マズロー理論の視点からは明らかに状況が異なって見える。このように、途上国という括りでまとめてみることをできないという事実の根拠を、マズロー理論からは説明できる可能性がある。マズローの欲求階層論には、状況を峻別して、その地域に何が適しているかを、直観的にも理論的にも示してくれるような分かりやすさがある。生命の最低限のニーズも満たせない厳しい環境下や、その逆の豊かな環境での人間のニーズについて、何かどう違うのかという点は開発学では見過ごせない検討事項であるからこそ、マズローの理論構造は有効なのではないだろうか。

このような理論を提唱したマズローは、個人の人間性、精神的本性について考えた心理学者であった。病気を改善し、また真に生きるためには、人間に備わった精神的本性の在り方を理解し、健康な状態がどういうものかを知る必要がある、という信念を持って研究に取り組んだ（マズロー 1998：7）。1900年代の初めに、フロイトが病的状況についての精神分析を始めたことから、当初心理学は、病的な側面の研究が主流となっていた。しかし、1900年代の半ば以降は、内発的動機付けを始めとし、より健康で積極的な行動の要因の研究も進められるようになり、マズローの研究もこうした流れに沿って、健康心理学という考え方を唱道したのである（マズロー 1998：6）。マズローは、健康心理学を「病気にならない方法」を問うこと以上に効果的なことであるとしている。フロイト心理学が病的な側面を中心に上げてきたことを念頭に置きながら、新たな心理学の誕生の必要性を述べるマズローは、人間の進歩的側面について知るためには、より発達し健康な人間を知る必要があるとしている（マズロー 1973：第一章）。すなわち、健康心理学とは、人間開発の一面もあると見られる。

この視点は、本論文の問題意識に沿うものである。なぜなら「発展」とは、文化や文明の違いに関わらず個人の「健康な心理」を土台にするはずであり、内発的发展も健康な心理状態から始まると考えられるからである。これに関してマズロー自身も次のように述べ

ている。

どのようなかたちの世界がこのような人<sup>50</sup>をつくるのか。病的な文化が病的な人間をつくり、健康な文化が健康な人びとをつくる。だが、病的な個人がその文化をいよいよもって病的にし、また健康な個人がその文化をますます健康にすることも真実である。個人の健康の改善はよい世界をつくる第一歩である。

(マズロー 1998 : 7)

内発的発展論において応用されるべき心理学は、こうした健康心理学の分野であると考えられ、マズローはその提唱者としての位置づけになる。このような理由からも、マズローの欲求階層論の活用には意味があると考えられる。

ただ、欲求を階層構造にした結果、下位の欲求が完全に満足されないと、上位の欲求に上がれない、と誤解されがちな点に関しては前章でも触れた。マズローはそれぞれの階層構造は 100%満足しないと移行できないものではないと明記して誤解を生まないよう注意を促している。また私たち一人一人が、欲求の完全な満足なくしても多様な欲求を持つことを自分自身の人生において経験的に知っている。例えば東日本大震災の際には、多くの人が同じように危機的な状態にあったが（これは生理的欲求や安全性欲求の段階であろう）、物資を争わずに助け合ったことが世界で知られた。人には、自分の身の危険を差し置いて行動する場合があることが分かる。ほかに、マズローの議論を精確に読むと、上位の欲求にある自己実現者は、自己犠牲的な努力ができるため、下位の欲求を犠牲にした行動ができるとの指摘があり（マズロー 1987 : 148,243）、また自己実現欲求に限らず階層内での欲求の移行自体、柔軟性があると指摘されている（マズロー 1987 : 83）。この他にも、マズローの議論はピラミッド型に単純化された故に、誤解されているケースが散見される。たとえば、自己実現は、「自分を大切にしたい」というエゴイズムや「自分を愛したい」というナルシシズムが残存しているという紹介の仕方もみられる（諸富：1999）。しかし、こうした表現も、マズローの指摘にしたがえば違うのである。自己実現者は、共同社会感情を持ち、自我の境界線を取り払うことができる、などとも説明されているからである（マズロー 1987 : 249）。それは、エゴイズム、自己中心性とは反対の性質を示すというのである。本論文では、マズローの自己実現的人間に注目して調査を行うが、こうした誤解を受けがちな点をよく認識しつつ、研究を進める。この理論を土台に議論をするにあたっては、実証された議論として扱うというよりは、広く一般に共有された理論であり、さまざまな議論の場で活用されているという事実を土台にしたいと考える。

---

<sup>50</sup> マズロー（1998 : 7）ここで「このような人」とは健康な心理を持つ人を指している。

## 第二節 キー・パースンとマズローの自己実現的人間

内発的発展論におけるキー・パースンとは、地域に変化をもたらす創造的人物であり、地域の小さき民である。また、鶴見が参照した市井の言葉を使えば痛みを引き受ける創造的人物である。だとすれば、マズローの論理に基づけば、こうした人物は外的環境に左右されない自己実現の段階に到達し、社会的に活動をしている個人であるということができないだろうか。本論文の調査研究において、キー・パースンと関連するものとして、自己実現的人間が考えられる。

マズローの自己実現的人間と、鶴見和子のキー・パースンを同列で議論することができるのかどうか、両者の議論を比較してみると、両者が示す人間像は、異なる分野の研究者であるにも関わらず、非常に近似していることが分かる。例えば、キー・パースンの「不条理な苦痛を軽減するために、みずから創造的な苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身に引き受ける人間」（鶴見 1996 : 30）に対して、マズローの自己実現的人間は「高次の満足を求めて多くを犠牲にし、容易に禁欲生活ができ、主義のためには危険に耐えることができるような人間」である（マズロー 1987 : 148）。さらに、発展や成長に関する両者の議論でも重要な共通点がみられる。例えば鶴見は「地球上すべての人々および集団が衣食住の基本的欲求を充足し、人間としての可能性を十全に発現できる条件を作り出すこと」（鶴見 1996 : 9）が重要であるとするのに対し、マズローは人間の自己同一性について「十全に機能する、または十全たる人間、または個性化した自己、または本当の自己になることなどを意味する」（マズロー 1987 : 144）としている。

マズローの理論は、鶴見がオルタナティブな世界のために内発的発展論を提唱したのとは違い、主として社会のあり方を考察したものではなく個人の精神的本性と成長について議論しているものである。しかし主義のために危険を冒すことができるほどに、低次の欲求から自律的である、ということが心理学的に観察されうるのである<sup>51</sup>。これはキー・パースンの自己犠牲的人間像と重なり、また内発的発展論の示す自律という要件とも重なる。さらに、鶴見の発展観は「人間の可能性を十全に発現できる可能性を作り出すこと」であるが、マズローの議論でも「十全に機能する」ことが自己同一性であるとされている。つまり、人間の心理の健康とは、偽りのない、真の自己を発現させ、自己が「十全に機能する」「十全たる人間」となること、すなわち個性の解放である。両者の発展に対する捉え方は、社会と個人という異なった範囲を対象としているとはいえ、基本的に同じ視点に立っていることが読みとれる。鶴見とマズローの議論を組み合わせることで、キー・パースンという人物像の要件が浮かび上がってくるのである。

とくに、『内発的発展論』の第1章の19世紀ヨーロッパにおける内生思考に関する小節で、西川がシャルル・フーリエ（Francois Marie Charles Fourier）を引用していることに注目したい。そこではイギリスの商業精神の支配により、人間の心が窒息させられている

<sup>51</sup> マズロー（1987 : 155）の第10項より。

ことについて、「本来持つ情念の開放」が重要であるとしているフーリエの主張を引用している（西川（潤）1989：10）。内発的發展論の思想にも、こうした欲求の開放が意識されているとすれば、まさに心理学的側面としてのマズローの考察が関連することになる<sup>52</sup>。

鶴見の發展観、そして、マズローの言う心理学的側面から見た「成長」とは、総括すれば、發展とは個人の意味で「十全」すなわち「その人となること」であり、そうした人々の総体としての社会になることだということになる。それは同時に地域集団の中に自己実現的人間を内包していることも意味することになる。そもそも、「發展」という言葉が英語で **development** であるならば、原義からいうと、「その本質が発現し、展開していくこと」という意味である<sup>53</sup>。發展の言葉の意味もまた、鶴見やマズローが述べていることと一致する。

では、実際に發展途上国と呼ばれてきた南の国で活動するキー・パーソンたちは、地域に変化を起こすような創造的人物であり、それは自己実現的人間であるのだろうか。もしそうであるならば、興味深いことが考えられる。これまでの国際開発事業は、その国に欠けていると西側が判断すること——インフラ・教育・保健医療サービス等々が足りない——に関するものであった。だとすれば、「**Deficiency-Value**」（欠乏欲求：以下 **D-value** とする）に基づいた支援を行ってきたといえる。**D-value** とは、マズローがいう欠乏欲求のことであり、すなわち不足すると病気になるような身体的・心理的に必須の要素である。もし、南の国にも草の根レベルで自己実現的人間がいるとするならば、その国、その地域では **D-value** は満たされ、「**Being-Value**」（成長欲求：以下 **B-value** とする）に至る資源があったのではないか、ということになる。**B-value** とは、マズローのいう成長欲求であり、欠乏や不足を満足させるための欲求ではなく、自分であることを追求する欲求である。実際、マズローの欲求段階を満たすために必要なものは貨幣ではなく、自然環境や家族、コミュニティ、平和といった生活の場にあるものであり、自己実現的人間が育つ土壌は南の国々にもある。マズローによると、こうした人々は他者への共感をもち、伝統文化の維持・変革の両方に積極的な人間である<sup>54</sup>。すなわち、こうした人々の存在は、社会發展をもたらす。**B-value** を生きる人間が草の根に多くいるとすれば、その社会への支援は **D-value** に基づくのではなく、**B-value** 的価値に基づく「協力」による手法が可能といえる<sup>55</sup>。これは鶴見のいう内発的發展の特徴である「相互に手本交換ができる」という要件にもつながるものであろう。**B-value** に基づく人間が多い社会があるなら、本当に貧困国と呼んでいいのか再考すべきであるともいえる。多くの人々が南の国を旅行し、「本当の豊かさ」を考えさせられ

<sup>52</sup> 西川（潤）（1989）第一章より、Fourier（2002〈下〉：27）、「島国による独占について」を参照。

<sup>53</sup> Entymoline： <https://www.etymonline.com/word/development> を参照。

<sup>54</sup> マズロー（1987：260）では、自己実現者が文化を超越しつつも、長期的な目線において、文化の進歩に対する穏やかな長年にわたる関心を示しており、その変化の緩慢さを是認し、その必要性を認めているように見える、と記述している。

<sup>55</sup> マズロー（1987：150）の高次の欲求についての要点 15 項目によると、欲求の最も低いレベルでは心理療法はほとんど役に立たない。一方で欲求のレベルが高くなるほど容易に心理療法がなされうとする。つまり、**D-Value** 的価値は、教育制度の充実や食料供給、医薬品供給といった物質的な支援と関連する分野であり、**B-Value** は愛情やソーシャル・キャピタルのような心理的サービスになるため、区別が必要であると指摘している。

ているという事実は、こうした状況を示しているのではないだろうか。その意味でも、幼少期や現在における生理的欲求や安全性欲求の満足度が現在の自尊・承認、自己実現欲求にどのように影響を与えているかについて考察していけば、開発政策の優先度を考える上でも重要な示唆が得られるはずである。

内発的動機付けにあるような、自ら動機付けされた人間は、マズローの自己実現的人間に重なるものであり、内発的发展論が求める創造的人間とも重なる。南の国において、内発的に動機づけられ、地域レベルで活動する人々を調査すれば、自己実現的人間が見つかるはずである。また、もしそうであれば、南の国には自己実現に至る資源があるということも意味するであろうから、開発における上位下達式の「足りないものを与える、教える」という **Deficiency Value** 的支援から、目指す社会に向かって共に **Being Value** 的価値を追求する、すなわち共同／協働へと、対象となる人々の捉え方、開発者の視点と協力の質を変化させることも考えられる。

本論文では調査として、現地で活動するキー・パーソンと思われる個人について探究し、マズローのいう自己実現的人間であるかを分析する。このことによって、こうした人物を生み出すような、内発的发展の実践的な方法を模索することを目指す。今回、調査分析をするにあたり、調査地として選んだのは南アジアの連邦民主共和国、ネパールである。それは最貧困国の一つと言われる国でありながらも、筆者が滞在してきた中では起業家やキー・パーソンのような人物と出会える機会が多く、農村から都会まで、多様な活動を行う個人が多くみられると感じた国である。そこで次章では、調査分析に入る前に、予備知識の整理として、今回の調査地となったネパールの社会経済、歴史を概観しておきたい。そして、次々章より、実際の現地調査のキー・パーソンを紹介し、説明と分析に切り込んでいきたい。

## 第五章

### ネパールの開発について

#### 第一節 ネパールの地理

本論文では、内発的发展論の具体的な実践方法について考察していくために、キー・パースンとして地域で活躍する人々の心理とライフヒストリーについて調査し、マズローの欲求階層論をヒントに分析を行う。調査は 5 名のキー・パースンを対象としつつ、キー・パースンを一般のグループと対比するために、140 名程度の人々のデータについて分析を行う。本論文の調査の場はネパールであるため、調査結果について分析を深めていく前に、本章ではネパールの一般的な情報を整理しておきたい。以下、ネパールの地理的、経済的な状況、そして歴史文化について概観する。

図 5-1：ネパールの位置



出典： 外務省ホームページ；トップページ＞国・地域＞アジア＞ネパール連邦民主共和国より

ネパール連邦民主共和国は、アジアの一国であり、南アジアに属する人口2,930万人(2017年)の国である(World Bank)。東西に長細い国土で、位置はインドに南と東西の側で接し、チベット自治区とは北の国境が接する内陸国である。標高1,300mの丘陵地帯にある首都カトマンズ(Kathmandu)は世界遺産に登録されており、装飾豊かな寺院と伝統的な木造煉瓦建築が古くから数多く残っている(UNESCO)。紀元前からと考えられる古くから人が住み着き、栄えてきた歴史の長い都市である。国土の北側にはヒマラヤ山脈が連なっており、中央にはマハーバーラタ山脈、南はインドに接する亜熱帯の平地が一面に広がっている。内陸の小さな国であるが、単に大国に挟まれた小さな国とは言えない。ヒマラヤ山脈の中でも世界最高峰のエベレスト山はネパールに位置しており、このため、多くの観光客が登山やトレッキングに訪れる観光国家である。観光資源となっているヒマラヤ山脈は、大きな水瓶のヒマラヤ水系として、世界人口13億人もの生活水源となっていると言われ<sup>56</sup>、重要な位置にある。このように巨大山脈の中にあるため、北は8,000m級の山々がそびえる極寒の世界であるが、他方で南部には標高60m程度の亜熱帯低地が広がり、一国の中に亜熱帯から温帯、寒帯気候、また乾燥気候から熱帯湿潤気候が見られるという自然の多様性は驚くべきものである。南部の熱帯地域には、貴重なインド象やインド犀といった絶滅危惧種を保全するための国立公園が設置されており、保全と同時に自然公園として観光客を招き入れ、サファリを楽しむといった観光も有名である<sup>57</sup>。自然由来の観光資源が多く、ヒマラヤから低地に至る大渓谷を流れる川を利用したダイナミックなラフティングから、山中に存在する巨大な湖周辺にはリゾート地も存在する。また、山中に温泉が湧く場所もあり、山登りの道中で温泉を楽しむこともできる。一般的な施設が整備された観光地もあれば、農村ツーリズムも活発であり、現地の農家や田舎での宿泊を楽しみながら、ゆったりとしたネパールの農村の日常の中で、農業や家畜の世話を楽しむなどの体験型の観光も充実している。夜には明かりの少ないネパールならではの満点の星空を仰ぎ見ることができ、世界中の人々にとって魅力的な観光地の一つとなっている。

近代的な観光地として開発が進んできたものだけでなく、一方では生活や宗教的な必要性から伝統的に継承され実用的に活かされている資源も多い。例えば仏教やヒンズー教の修行・巡礼のために利用される、巡業や山歩きのために人々が作った休憩所も程よい間隔で存在し山中の道程に用意されている。また巡礼者や旅人が休めるように人を宿泊させるといったゲストハウスも多い。巡礼者は、インドやチベット、東南アジアなど、幅広い地域から宗教交流のために訪れている。そのためこうした寺院や宗教巡礼に必要な施設やインフラは、観光としてではなく、実用的な意味合いで存在し続けているのである。

またネパールでは自然、宗教だけでなく民族も多様で、50以上(106以上ともいわれる)

---

<sup>56</sup> AFP通信 2009 年 12 月 8 日の報道より。

<sup>57</sup> チトワン国立公園：<https://www.chitwannationalpark.gov.np/>や、国立公園紹介サイト：<https://www.welcomenepal.com/places-to-see/must-see-national-parks-of-nepal.html> を参照。

にも及ぶ民族が共存して生活している（小野・湯舟 2009）。このため文化や言語が多様でありながらも多数の民族が平和的に共存する感覚を身に付けている。

ネパールは内陸国であり、海の資源に頼ることができないが、内陸国の小規模な国家であるにもかかわらず有形無形の多様な自然文化的バリエーションにより、飽きることのない観光国となり、繰り返し訪れる人が多いのも特徴である。ネパール南部の亜熱帯地域に属するカピルバストゥ（Kapilbastu）という場所は、世界人口の 40% が信仰する仏教の開祖で釈迦となったゴータマ・シッダールタの生まれた場所とされている。そこには世界各国が建設した寺院が集まっており、多くの巡礼者や観光客で常に賑わっている。カピルバストゥはインドとの国境付近に位置することからも、バナラシなどの仏教の聖地をめぐる旅程の一部として、インドからネパールへ流れるコースとしての役目も果たしている。聖地としての役割から、ネパールは巡礼者にとって旅の目的地でもあるのである。

このような自然・宗教・文化的な多様性を存分に秘めたネパールは、一度として他国に支配されることがなかった国でもある。インドや中国という大国に挟まれ、インドがかつてイギリスに支配されていた時期にも、直接の植民地支配を免れた。世界最高峰のエベレストがある山岳国家であることと、南部に存在していた亜熱帯のジャングル、その土地特有の感染症が侵略を難しくしたという地政学的な事情もあったようだ。こうした事情により、ネパールでは伝統文化が千年単位で維持され、発展してきた国である。

ところが、近代的な開発の視点からは、最も発展が遅いとされる後発開発途上国に位置付けられている（United Nations (DESA) 2018）。我が国日本に目を向けると、山国であり、気候も北海道から沖縄まで多様で、気候帯の幅広さも似たものがあり、ネパールには親近感を感じる日本人も多い。内陸国であることと山の厳しい自然環境は、日本とは違い近代化の面ではかなりの障壁であったといえよう。

## 第二節 地理的特性と開発問題

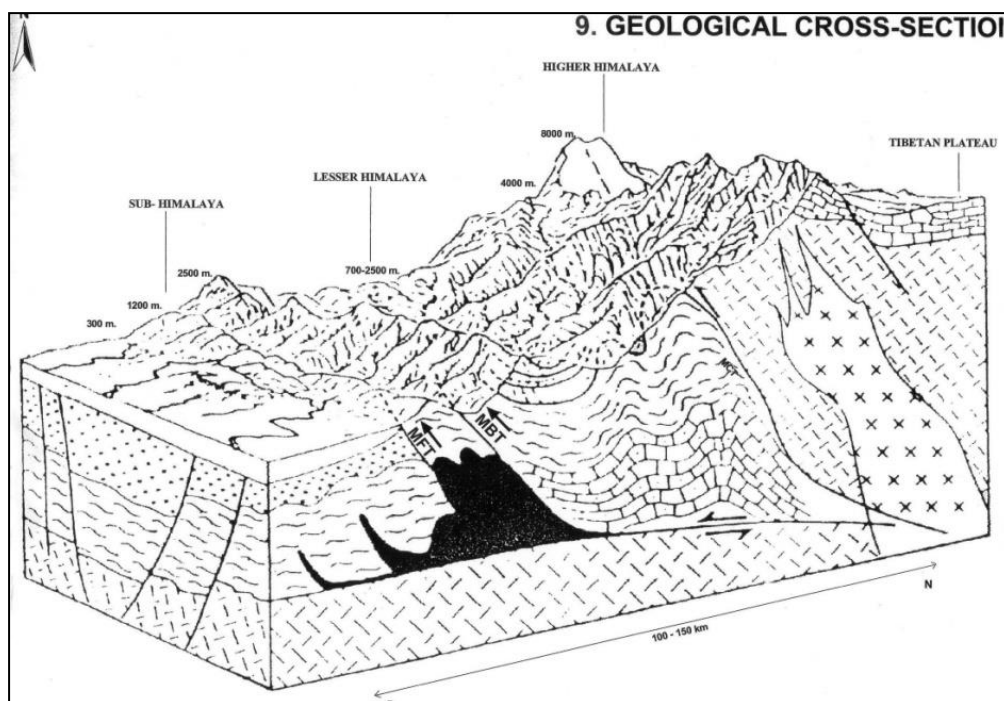
ネパールの開発に大きな影響を及ぼしている原因の一つは自然の多様性と、その背景にある厳しい標高差による生活環境であるといえる。下図 5-2 は、ネパールの地勢を 3 つに分けて示したものである。地図上側は山岳地帯で標高 4,000m～8,000m、地図中央部は丘陵地帯で標高 600m～4,000m、地図下側はタライ平野地帯で標高 0m～600m である。ネパールは日本で例えると奄美大島と同じ程度の緯度にあるが、国土南北 225 km の間に、北側の 8,000m 級の山々から南側の 100m 以下の低地までの甚だしい標高差があり気候も自然も違うため、各地の生活環境を著しく異なったものになっている。

図 5-2：ネパールにおける 3 つの地理区分



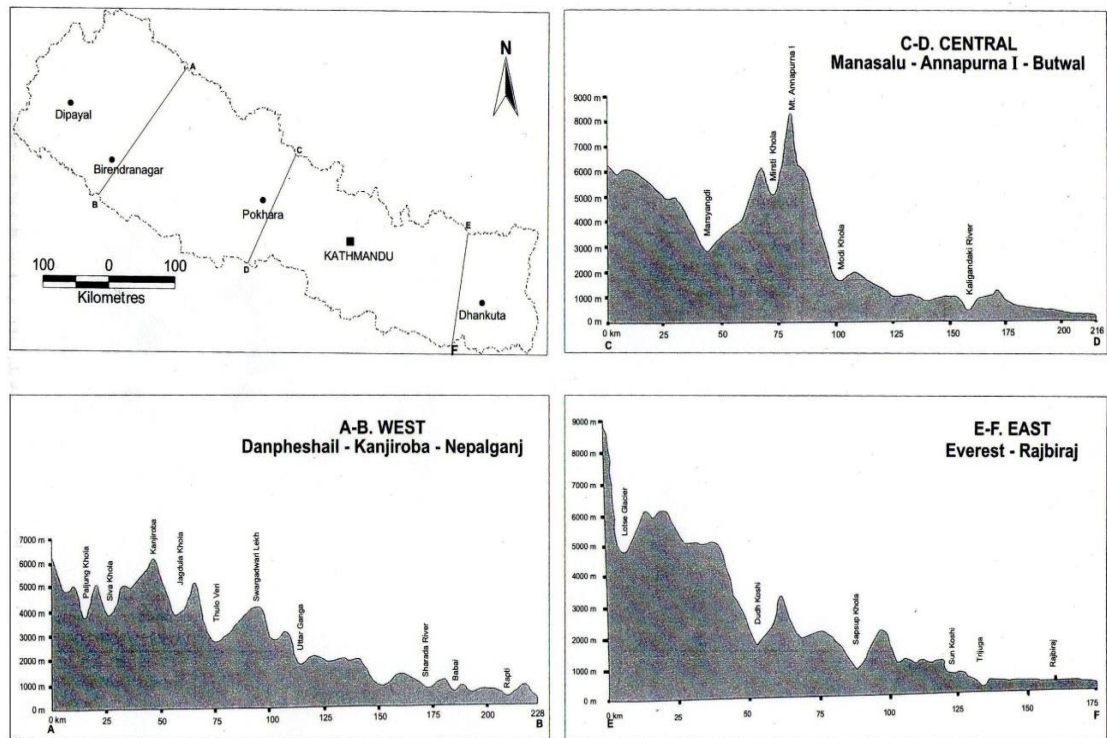
出典：図説ネパール経済 2013 （在ネパール日本国大使館）掲載の地図より作成

図 5-3：ネパール断面図



出典：Gurung (2006) より

図 5-4：ネパール断面図



出典：Gurung（2006）より

図 5-3、5-4 は、ネパールの断面図である。図 5-3 を見ると分かるように、ネパールは北側の山脈から南側の低地まで多様性の大きい国土が広がっていることが分かる。その標高差についても図 5-4 に示されている。図 5-4 の左上の地図で、西側のラインが断面図 A-B、中央が断面図 C-D、東側が断面図 E-F である。これを見ると、国土南北 225km 程度の幅の中で、北側の標高が 6,000m～8,848m、南側が 1,000m 以下という大きな違いがあることが分かる。

図 5-2 の地図上側は山岳地帯で、標高 4,000m～8,000m である。こうした地域は多くが農業に適さない寒冷地帯である。図 5-2、5-3 でみる地図中央部は丘陵地帯で標高 600m～4,000m であり温暖で農業に適している。図 5-2 下側、図 5-3 左側に当たるタライ平野地帯は標高 600m 以下であり、通年を通して熱帯性気候である。図で確認することで、ネパール国内に大きな環境差があることが理解できる。次に、山岳地帯、丘陵地帯、タライ平野について個別に写真で環境を見てみる。

写真 5-1：首都（丘陵地帯）



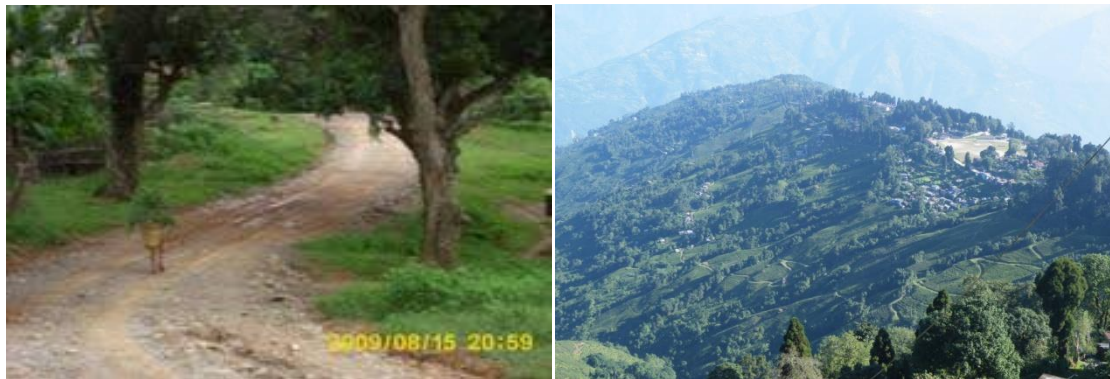
出典：2010 年 11 月、カトマンズにて筆者撮影

写真 5-2：低地（タライ平野部）



出典：2010 年 3 月、ネパールガンジにて筆者撮影

写真 5-3：丘陵地



出典：2009 年 8 月、ゴルカにて筆者撮影

写真 5-4：山岳地



出典：2010 年 3 月、ジュムラにて筆者撮影

写真 5-1 は首都市街地であるが、首都は交通量が多く、道路もコンクリートで固められたところが多い。人も建物も多く、生活するのに必要な多くのものはやはり首都には揃っている。首都は 2 月の時点で早朝の気温は 10 度前後であったが、昼間になると 20 度を超え、半袖でないと暑い。乾燥しており、気温の変化が大きい、通年を通して 18 度前後で温暖な気候にあり住みやすい地域である。しかし、大気汚染により見通しが悪く、写真では本来なら正面に雪化粧をしたヒマラヤ山脈が連なってみるはずであるが、全く見えない。環境問題も首都に集中して表れている。

写真 5-2 の低地を見てみると、一面が平地である。気温は通年を通して 30 度前後であり、人々は熱い気候のために薄着である。平地は交通の便がよく、バイクがあり、人力車があり、インドとの国境に近いこともあって、人の行き来が大変活発である。一般に低地では道路インフラが整い、都市部を中心にかなり便利になってきている。

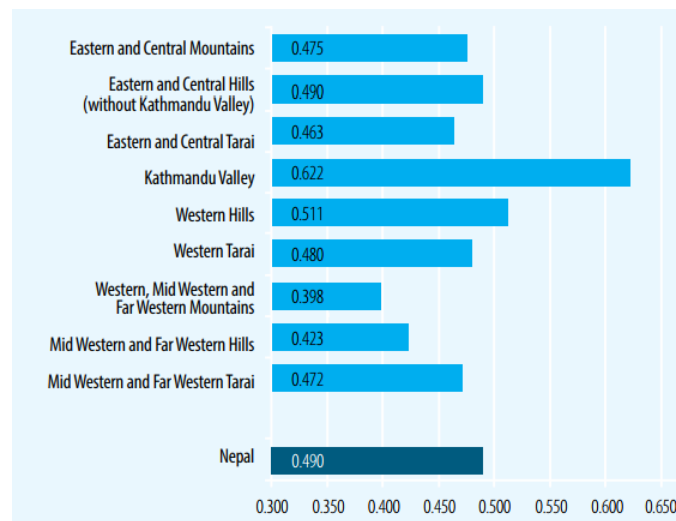
写真 5-3 の丘陵部は、緑が豊かなことが印象的である。傾斜地であり、徒歩での移動は大変であるが、多くの丘陵地帯は緑が豊かで、農業に適した気候が続き、降雨の十分な地域が多い。市場までは遠いことが多く、移動は大変であるが、近年では道路の整備も進んでおり、バスや車の移動も便利になってきている。一方、写真 5-4 の山岳地域を見ると、圧倒的な環境の厳しさがうかがえる。非常に規模の大きい山の中で人々は生活を営んでおり、どの地点からも巨大な山肌が見えるような環境が広がる。厳しい上り坂と下り坂がどこまでも続き、道も整っていないことが多いため、人々は日常的に厳しい山道を歩いて畑まで行き、農作業をしている。時には一日がかりで日用品を買いに市場まで行く。丘陵部とは違い、緑が少なく、寒さが厳しい。一般に気温は変化が大きく、筆者が滞在した 2010 年 3 月上旬は、早朝の気温が零下であった。水も凍る寒さであるが、日中は 20 度程度まで上昇し、陽に焼けるほどになる。この厳しい気候のため、丘陵部とは違い、食糧の生産量も少なく、3 月から 10 月の間の一毛作である。基本的に食糧が不足しているのは山岳地帯の抱えている問題である（米川 2011）。

### 第三節 ネパールの開発と HDI

ネパールには大きな地理的環境差が存在するため、開発も地域によって偏りが生じている。特に山岳地帯では登山客の多い地域のトレッキングコースを除き、道路がほとんどないなど、人の手が十分に届いていない地域も多く存在する。その結果、社会経済的な格差も表れ、人間開発指数といった開発指標を見ても、国内別状況に大きな違いが出ていることが分かる。ネパール国内における人間開発指数（Human Development Indicator : HDI）の違いを示したのが表 5-1 である。下表は、2014 年にネパール政府が UNDP（United Nations Development Programme : 国連開発計画）を通して公表した人間開発報告書のネパール報告書であり、2011 年の人間開発指数の国内状況が示されている（Government of

Nepal/ UNDP(United Nations of Development Programme) 2014)<sup>58</sup>。環境差を配慮して、国土の東部から西部までを区切った方位による分類と、山岳部 (Mountains) と丘陵部 (Hills)、平野部 (Tarai) で区切った地理分類を基本に 9 つの地域別に人間開発指数を公開している。なお、図 5-5 では、同様の内容を地図で示している。

表 5-1：ネパール国内の人間開発指数 (2011 年)



出典：UNDP ネパール報告書 2014 より

人間開発指数は、平均寿命、成人識字率、そして GDP (Gross Domestic Products：国内総生産) についてのデータから計算される。数値の違いを見ると、ネパール国内のばらつきのが大きさが確認できる。特に、都市部と農村の格差は大きく、また地理分類では首都が属する丘陵部の値が比較的高く、そして山岳部の値が一番低い。首都の属する中央開発地区が先頭に立ち、西へ行くほど環境が厳しい。これは、おおよそネパールの社会インフラの整備状況に沿った違いともとれるような状況となっている。

#### 第四節 ネパール経済の動向

ネパールは、世界銀行のデータによると、2017 年現在の人口が 2,930 万人、GDP は 240 億米ドル、一人当たり GDP では 848 米ドルとなっている (World Bank ; IMF 2017)。いずれも増加傾向にあるが、経済成長率そのものは安定して伸びているわけではなく、大きな変動がみられる。おおむね 1980 年後半からはプラス成長ながらも、例えば 2014 年の経済成長率は 6% に対し、2015 年のネパール大地震を経て、2016 年は 0.4% まで下落してお

<sup>58</sup> ネパール政府の公表している国内詳細が分かる資料として最新である。

り、時々、社会環境に強く影響を受けている（World Bank）。主要産業は農業であり、農業の生産高は GDP の 3 割を占め、労働人口の 70% を吸収している。国連食糧農業機関（Food and Agriculture Organization : FAO）の統計によると、2013 年ネパールの平均 1 日カロリー摂取可能量は 2,673Kcal で、世界では 175 か国中 112 位である（FAO STAT）。日本の厚生労働省が発表している日本人の一日の必要カロリーは、成人 18 歳以上で年齢や性別別にみた場合、最大値 3,050kcal（活動レベルが大きい）、最小値 1,650kcal（活動レベル低い）で、最大値と最小値の平均でみると一日 2,350kcal となるっている（厚生労働省 2015）。ネパールは、食料供給の面で見ると、この平均値に到達していることが分かる。2,350kcal とは、天井（880Kcal）を 3 回食べている量として想像が可能である<sup>59</sup>。つまりネパール国内では均等に食料が配分されるとすると、十分なカロリーが摂取できる状況となっているが、国内での食料配分の不均等が見られ、生産量と実際の供給量や摂取量の違いなど、考慮が必要である（Gurung 2006 : 137）。

国内での失業率は ILO（International Labor Organization : 国際労働機関）の見積もりで 2017 年は 2.7% であり、日本の 2.8% と大差がない（World Bank ; 総務省統計局 2018）。これは、大部分が農業労働へ吸収されているからだと考えられる。2017 年、雇用人口の 71.7% は農業人口であり、GDP では一次産業が 27% を占める状況にあるが、比較すると工業雇用人口は 8.1%（GDP13.5%）、サービス産業人口 20.1%（GDP51.5%）となっている。農村の経済への寄与が少ない現状である（World Bank）。食料自給率として、穀物自給率を見てみると、2013 年は 98.7% であり（FAO STAT 2013）、国内での需要を満たせる量の生産をしていることが分かる。三分野の成長率は、それぞれ生産額は増え続けているが、上下の変動が激しくサービス部門の成長率が最も高い。農業の成長率が 2016 年に 0.02%、2017 年に 5.3% で、工業部門が 2016 年に -6.3%、2017 年に 10.9% と上下を繰り返しながら長期的に上昇している。サービス部門は 2015 年に 4.8%、2016 年に 2.0% となっており、部門間での比較が難しい（World Bank）。とはいえ、サービス部門の雇用人口は 20.1% にも関わらず、GDP の 51.5% を占めているから、こちらも雇用人口の多い農業に比べると大きな格差である。

## 第五節 ネパールの経済と資源

ネパールは、険しい山に阻まれており、貿易によるメリットを得にくい。貿易統計を利用し、ネパールの貿易の中身について現在輸出貿易で上位にあるものを見てみると、コーヒーやお茶といった嗜好飲料、野菜やフルーツといった食品、アパレルやカーペットなどの布製品となっている（UN comtrade 2017）。

---

<sup>59</sup> ビタリア製菓株式会社ホームページにある食品別カロリー早見表を参照。

表 5-2：ネパールの対世界貿易額の上位品目（2017 年）

Ranking	Commodity	Trade Value (US\$)	Percentage of Total value
1	Coffee, tea, mate and spices	78667966	10.6
2	Man-made staple fibres	75010467	10.1
3	Carpets and other textile floor coverings	68790241	9.3
4	Apparel and clothing accessories; not knitted or crocheted	58653350	7.9
5	Preparations of vegetables, fruit, nuts or other parts of plants	45454255	6.1
6	Iron and steel	42642542	5.8
7	Textiles, made up articles; sets; worn clothing and worn textile articles; rags	32262556	4.4
8	Man-made filaments; strip and the like of man-made textile materials	30853424	4.2
9	Food industries, residues and wastes thereof; prepared animal fodder	30741356	4.2
10	Vegetable textile fibres; paper yarn and woven fabrics of paper yarn	26604756	3.6

出典： UN comtrade データベースより筆者作成

工業に関しては内陸国のデメリットがあるネパールであるが、自然資源を生かした生産物や製品に強みがあることが分かる。観光などのサービス産業収入が国家の半分近くをしめることもあり、観光の推進と共に、比較優位があり交易条件の良い一次産業製品への付加価値づくりがネパールの成長戦略として考えられる。

ネパールでは農業は大きな労働を吸収しているが、観光国でもあるため、観光との関連で、農村でのオーガニック農業の推進による食品マーケットにも大きな可能性があると考えられる。また、自然資源が豊富なイメージから、オーガニック関連製品はネパールのブランドイメージづくりに貢献するものであろう。比較優位の強い動植物性油脂やエッセンシャルオイルなどはこれに関連し、天然素材で付加価値を高めていくことが重要である。

また、ネパールの国際貿易の特徴として、インドへの大規模な依存という側面がある。ネパールルピーは、為替レートがインドルピーに紐づけられており固定レートであるため、インド経済にダイレクトに左右される。またインドとは資本・金融勘定以外の取引は自由化されていることもあり、ネパールにとってインドは最大の取引相手国となっている（外務省（日本）b 2013： 8（3 章））。2009 年～2016 年の間の輸出割合を見ると、内訳はインドだけで 64.2%を占め、中国は 2.4%と、同じ隣国であるにもかかわらず圧倒的な貿易量の差を見せつけている。ちなみに同期間のインドからの輸入割合は 63.9%、中国は 12.2%となっており、輸入の方は中国への依存度も高い。しかしながら、インドと中国で 5 倍ほどの差がある点からも、インドへの経済依存の大きさは確固たるものであることが分かる<sup>60</sup>。

## 第六節 ネパールにおける国際支援の現状

貿易の強みとして自然資源に恵まれたネパールであるが、国際的には最貧困国にランクインされ、経済支援が続けられている。はたして経済支援は適切な分野に対して行われているのであろうか。

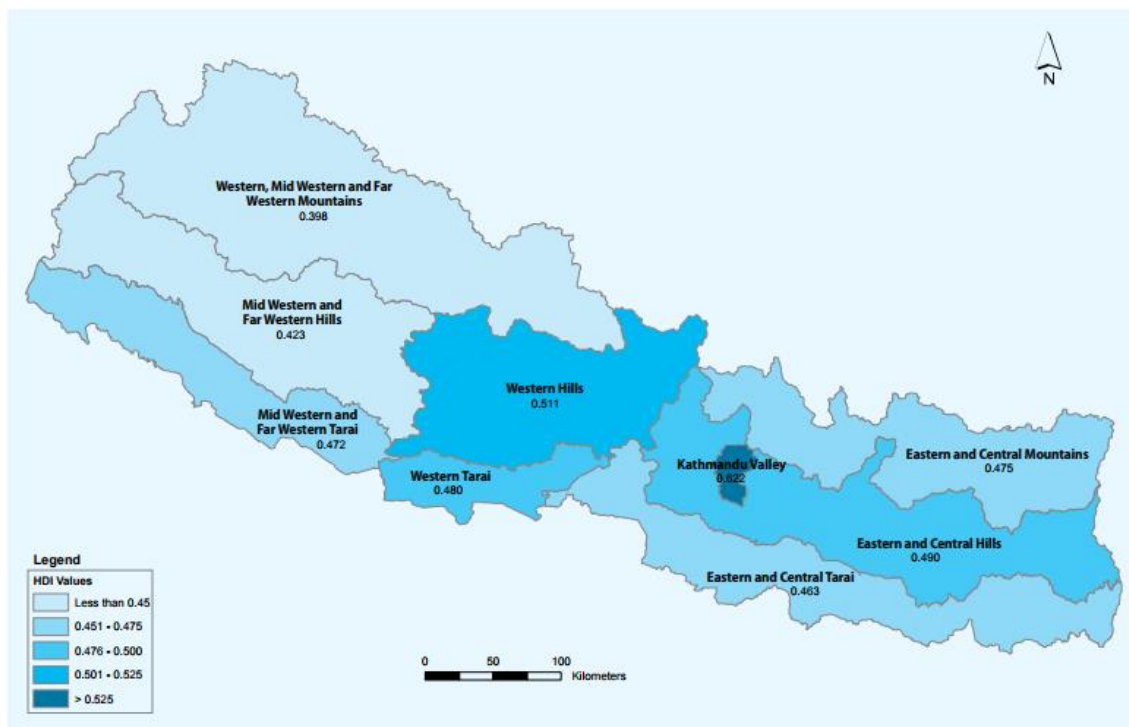
<sup>60</sup> Government of Nepal Ministry of Commerce and Supplies, 2018 データベースより。

開発支援の目的は、第一に貧困を削減することとされている。貧困とは、絶対的貧困と相対的貧困に分けられ、このうち世銀により 2011 年に国際貧困線として定められた一日 1.9 米ドル以下の絶対的貧困率はネパールでは 15% (2010 年) となっており、これは南アジアでは最も低い (World Bank)。ただ、ネパール国内では都市部と地方で状況が違い、特に極西部山岳地域の貧困率が高くなるため、国内の貧困ギャップが大きいのが現状である。例えば、ネパール政府が定める国内貧困線として 2011 年の状況を見てみると、ネパールは消費額が一日で約 53 ルピーが貧困線とされており、2011 年は全国で 25.16% が貧困線以下となっている。しかし国内の詳細な状況を見てみると都市部が 21.44% であるのに対して、極西部は 45.61% といった具合に大きく差が開いている (ADB 2017; Government of Nepal (NPCS) 2012)。一方、NLSS-2010/2011 (National Living Standard Survey) の報告書 *Poverty in Nepal* でネパールが定めているカロリーベースの国内貧困線は、2,220Kcal を一日に摂取できる量となっている。食料とその他の日用必需品を購入する合計額として年間 19,261 ネパールルピー程度が国内貧困線であるが、これは一日 53 ルピー程度であり、米ドルにして 0.65 ドル (2012 年 3 月 31 日時点の為替レート) である。これは世界銀行が国際貧困線 (購買力平価) として定めた一日 1.9 米ドルと比べると大幅に低いものであることに注意が必要である (Government of Nepal (NPCS) 2012 : 17)。

貧困についてこうした現状がある点について人間開発目標におけるこれまでの変遷を見てみると、ネパールの開発状況は、2017 年の HDI 指数でみて 189 か国中 149 位であり指数は 0.574 である。平均寿命は 70.6 歳まで高まってきており、HDI 中位開発国に入っている。HDI の現在のトップはノルウェーの 0.953 であり、平均寿命が 82.3 歳、教育年数平均値は 12.7 年、一人当たり GNI 所得 67,614 米ドル (PPP 2011 年) である。ネパールでは教育年数平均値が 4.9 年、一人当たり GNI 所得 2,471 米ドル (PPP 2011 年) である。最低がニジェールで指数 0.354 の平均寿命 60.4 歳、教育年数平均値 2.0 年で一人当たり GNI 所得 906 米ドル (PPP 2011 年) である (UNDP)。

ネパールの MDGs (Millennium Development Goals : ミレニアム開発目標) の達成状況を見てみると、妊産婦死亡率は 10 万人当たり 2015 年で 258 人まで減少し、出産介助を受ける割合は 60% まで増加した。2014 年世界の平均が妊産婦死亡率 10 万人当たり 216 人であるから、ネパールはこれにほぼ近づくことができている。5 歳児以下乳児死亡率を見てみると、1,000 人当たり死亡率が 1990 年に 108 人だったのが 2015 年に 33 人となり、こちらも目標値だった 36 人を下回り激減させてきた (Government of Nepal (NPCS) 2016)。2015 年の段階で、教育・雇用・衛生環境の普及の 3 項目以外はおおよそ達成できたと判断されている (Government of Nepal (NPCS) 2016)。

図 5-5：ネパールの国内 HDI 指数（2011 年）



出典：HDI ネパール報告書 2014 年

ミレニアム開発目標をおおむね達成しているとはいえ、ネパールにおける国内格差は著しいものがある。上図はネパール政府が公表している最新の HDI 報告書で 2011 年の国内の詳細を示したものであるが、極西部の HDI 指数 0.398 を見てみるならば、2011 年に 179 か国中 172 位だったアフガニスタンと同等のレベルとなってくるし、首都カトマンズの 0.622 は 122 位の南アフリカ共和国（0.619）と同程度ということになり、約 50 位分の差があることが分かる（Government of Nepal, UNDP 2014；UNDP 2011）。極西部といった、山が陰しくインフラ等の整備が難しい地域については、自然の制約を認識し、さらなる工夫をこらした改善が必要であるといえる。

ネパールでは MDGs の目標も前述のようにかなり達成されたが、詳細を見ると、次のようになっている。MDGs とは国連により国際アジェンダとされた国際開発目標であり、Millennium Development Goals として知られる。その課題は、8つの目標に対し、設定した改善目標値に向けて、2000 年～2015 年の間に達成を目指していくというものである。

表 5-3 : MDGs 達成状況

目標	内容	1990	2000	2015 目標値	2015 達成値
1	1 日 1 ドル未満で生活する人々の割合 (US\$ :PPP)	33.5	NA	17	16.4
2	初等教育における就学率	38	63	100	89.4
3	初等教育における男子生徒に対する女子生徒 の比率 (男子を 1 とした場合の女子の人数)	0.56	0.79	1	1.09
4	5 歳児未満時の死亡数 (1,000 人あたり)	108	64	36	33
5	妊産婦の死亡数 (出生児 10 万人あたり)	850	415	213	258
6	15~49 歳の HIV 感染率 (100 人あたりの年間新規感染者数の推定値)	NA	0.15	拡大を食い 止め減少さ せる	0.03
7	改良飲料水源を継続して利用できる人口の割 合	46	73	73	83.6

出典：数値は Nepal National Planning Commission より Nepal and the Millennium Development Goals-Final Status Report 2000-2015)

ミレニアム開発目標については多く達成している傾向がみられる。上表は、ミレニアム開発目標の代表的な指標について示したものであり、ネパール政府がミレニアム開発目標の期間終了後に最終報告書として公表しているものの一部を抜粋している。これを見ると、教育に関しては初等教育の完全普及という目標には到達できなかったが、普及度は 1990 年代の 4 割から 2015 年には 9 割まで高まってきており、完全達成に近い状態となっている。妊産婦死亡率も、ほぼ目標値の達成に近づいている。表の 2015 年達成値で、濃い塗りつぶしは達成済みであり、薄い塗りつぶしはおおよそ達成という区分としている。全体を見ると、達成できた項目が多い。とはいえ、例えば教育に関していえば、私立と公立学校の教育サービスの違い、また地方と都市の施設設備やアクセスの違いにより、実際に受けることができるサービスの質は大幅に異なっているみられ、こうした点は留意が必要である (米川 2011)。

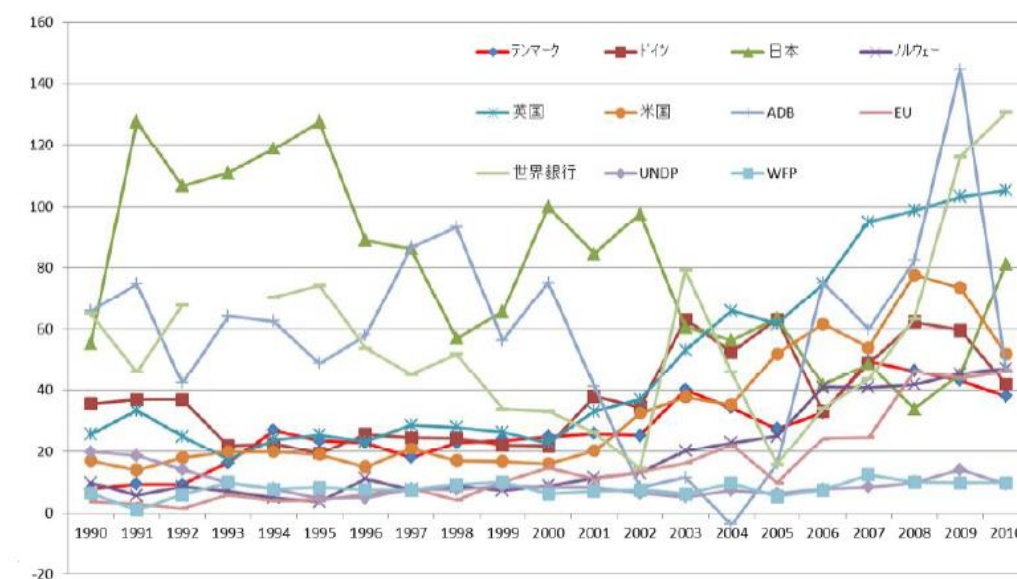
MDGs のように基本的人権にかかわる条件を広範に整えるためには、多くの社会インフラの整備が必要になり、ODA (Official Development Assistance : 政府開発援助) や海外直接投資などの資金流入によるさまざまなプロジェクトが影響を及ぼす。日本のネパールへの支援に関して、外務省の国別開発協力方針 (平成 28 年) を見てみると、ネパールに対しては他国よりも多くのページを割いて開発方針が書かれていることがわかる。第一にインドと中国の間にあることによる政治的重要性が指摘され、ネパールの安定は国際的な安定にも関わるとしている。その上で、1990 年代からの政変に続く 2015 年の憲法改正に伴って、日本政府として今後の政治的な安定に寄与すること、そのためガバナンスの改善が

求められるとしている。そして同年に発生した地震に対する防災の必要性ということに対しては、防災先進国としての日本の役割も記されている。ネパール政府は最貧困国を 2022 年までに脱することを目指しており、そのためにインフラ・社会インフラの整備の必要性があるとしている。さらに国民の 7 割が農業に従事しているにもかかわらず農業の生産性が低いことをふまえ、農業部門への対策をはじめ持続可能な開発、自然保全といった多様な内容が開発計画として記載されている（外務省（日本）a）。

これまで、日本がネパールに対して行ってきた支援について「図説ネパール経済」（2013 年）を参照してみると、1969～2011 年度末までの日本の対ネパール開発援助額累計額の内、無償資金協力が 1,894.5 億円（全体の 60.1%）、次いで借款 638.9 億円（20.3%）、技術協力 617.8 億円（19.6%）となっている。無償資金協力が圧倒的に多いのは最貧困国への配慮とされている。その支援内容の内訳を見てみると、多いものは農業（18%）・教育（9%）・インフラ（17%）、債務救済（10%）となっている（在ネパール日本国大使館 2013：27）。

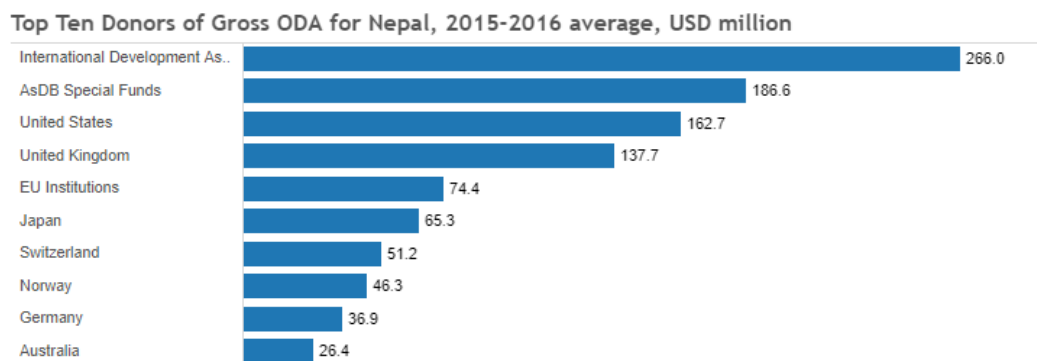
次に、ネパールに対する国際的な ODA 支援額の比較を見てみると、日本は 1990 年から常にネパールにとって最も重要な支援国家であり続けていたことが分かる。2008 年に向かって徐々に支援額が下がって 6 位に落ち込んだが、2010 年には、世界銀行・イギリスに次いで第三位に戻っている（外務省（日本）b：15）。表 5-4 で 2015～2016 年のデータを見てみると、約 6,530 万米ドルであるが、アメリカの 1 億 6,270 万米ドルにくらべると 3 分の 1 程度となってきている。支援の額で比較するものではないが、国家間関係という意味においてネパールにとっての日本の重要性は依然として高いことが分かる（OECD）。

図 5-6：世界の対ネパール ODA 支援金額



出典： 外務省（日本）b（2013）より。単位：百万米ドル

表 5-4：上位 10 か国または組織によるネパール ODA 支援額



出典：OECD/DAC 支出総額ベース 単位：百万米ドル 2015-2016 年

外務省ネパール報告では、ADB（Asian Development Bank：アジア開発銀行）、IDA（International Development Association：国際開発協会）、UNDP（United Nations of Development Programme：国連開発計画）といった国際機関、そして EU、北欧、イギリス、ドイツ、アメリカ、インド・中国・日本といった多くの国の対ネパール援助の概略を示している。それによると、金融機関である ADB・世界銀行は経済成長や生産活動の活発化を課題として設定しつつ、実際には教育やインフラに多くの投資をしている。また、国連開発計画ではガバナンスや雇用や所得の増加といったことを課題としつつ、弱者のエンパワーメントや政策環境の整備といった面にも課題を設定している。

これに対して、各国の支援に関してしてみると、北欧や EU などは和平プロセスに対するガバナンスの改善に関心と課題を設定しつつ、教育や持続可能な開発にも力を入れている。アメリカやイギリスは民主化とガバナンスを始め、教育や保健、防災も課題としている。近隣国であるインドは、ネパールの対インド意識を踏まえ、小規模な支援を実施しており、教育支援や農村開発、保健医療支援を行っている。中国はこれに対して、道路やダム建設といったインフラに対して多くの資金を提供している。それぞれ国、組織の立ち位置や特色により、支援内容には違いがあることが分かる（外務省（日本）b：20-23（4章））。

日本についてみると、1969 年から 2005 年にかけて、有償資金協力は 638.89 億円、無償資金協力は 1,679.95 億円、技術協力は 529.17 億円である。このうち、有償資金協力では、主に水力発電に対する支援としてのダム関連施設の整備や防災の協力となっている。これに対して無償資金協力では食糧増産 20%、運輸交通に 17%の資金が割かれ、大きな割合を占めている。電気・エネルギーと保健医療にはそれぞれ 8%を当てている。教育については 5%であり、日本の支援において食料やインフラが大きな部分であり、教育支援の優先度は高いとは言えないようである。技術協力においては、医療施設や技術支援、農村開発と環境保全を合わせたプロジェクト支援、防災支援などが実施されている（外務省（日本）

b : 25-26 (4 章))。

外務省の国別開発協力方針では、教育は、保健医療や農業と並んで課題として設定されているが、無償資金協力のこれまでの経過を見ると、農業に多く配分されていることが分かる。

## 第七節 ネパールの歴史

ここまで、ネパールの社会経済開発の状況を議論してきたが、ここではネパールの歴史について理解するため、ネパールの古代～現代までの歴史を、佐伯による『ネパール全史』（佐伯 2003）を基に整理してみる。また、現代期でも特に人民運動によって民主化が進んできた 1990 年代からの動きは、『現代ネパールの政治と社会』（南・石井(編) 2015) を参照する。

ネパールはインドとチベットに挟まれた小国であるが、太古の時代、インド亜大陸がユーラシア大陸から離れていた時には海底にあったとされている。その痕跡は、ヒマラヤの高山地域で貝殻の化石が出てくることから確認され、またヒマラヤ岩塩などからもそうした太古の痕跡が見られる。ぶつかり合った大陸の盛り上がりにより出来上がっているヒマラヤは、毎年数ミリ～数センチで高くなっており、今も造山が続くアルプス・ヒマラヤ造山帯に位置づけられている。

このような地理的位置にあるネパールの歴史の起源は明瞭ではなく、一般的に始まりは伝説として受け継がれている。現在のカトマンズ盆地は、古代に巨大な湖であったとされ、それを剣で切り裂き、水を押し流して盆地を作り上げたのはマンジュシュリ（文殊菩薩）であるとされる。こうして始まるカトマンズ盆地の神話的歴史の一方、史実として知られているのは紀元前に仏陀がインド文化圏で活動したことである。現在ネパールのルンビニには、仏陀誕生地のカピルバストゥがある。仏教はネパールの歴史にとって重要である。

### 古代期

現在のネパール国土の支配の起源に関して実証的に始まりとされているのは、ネパールを統治したインド・アーリア系のリッチャヴィ王族である。この王族は、もともとカトマンズ盆地に住んでいた非インド・アーリア系民族を支配し、王朝を築いたとされ、その期間は紀元後 5 世紀～9 世紀前半までとされている。したがって、歴史の起源として、伝説（有史以前）→釈迦誕生（紀元前）→リッチャヴィ王朝時代（5 世紀～）という流れで歴史の記録が進んでいる。

## 中世期

9 世紀ごろからリッチャヴィ王朝が衰退し始めると、ネパールにおける中世期が始まる。この時期は現在のカトマンズ盆地を中心にデーヴァ姓を名乗る王族による支配が続き、カトマンズ盆地を支配しはじめる。しかし、デーヴァ王朝はマッラ王族の台頭によって退き、14 世紀ごろになるとスティティ・マッラ王がマッラ王朝を確立し、カトマンズを中心に支配を始めた。ただこの時も支配はネパール全土には及ばなかったため、実際には現在のネパール国土の西側ではカサ（カス）族によるカサ王国（カサ・マッラ）が、タライ地方ではティルフット王国（カルナータ王国）が支配し、現在のネパール領域でみると 3 大勢力が支配していたとみられている。

マッラ王朝は前後期に分けられ、後期は、カトマンズ盆地内でバドガオン（バクタプル）とパタン（ラリトプル）、カトマンズ（カンティプル）をそれぞれ別の勢力が統治する三都王国の状態になっていた。この三都王国時代は、それぞれの都市間での文化的な競い合いも功を奏して、今でもカトマンズの文化的な土台となっている美術・建築・文化伝統の大部分を築いたとされている。この時期はネパールにおける経済の繁栄期でありカトマンズ盆地の黄金期とされる。

## 近代期

中世の後半、カトマンズ盆地では都市文化の発展が隆盛を極め、その後衰退の時期が 18 世紀にやってくる。このころネパールの中部のガンダギ地方を支配していたゴルカ王朝がカトマンズ盆地に攻め入り、マッラ王朝を滅ぼし、カトマンズ地方までの広い範囲を支配するゴルカ王朝時代がやってくる。ゴルカ王は支配力を拡大し、現在のネパールにほぼ匹敵する全土の支配を確立した。当初は王朝としてグルカの王族が政権を握っていたが、王族の支配が弱まった 19 世紀に軍務大臣であったジャンガ・バハドゥール・ラナにより実際の政治実権を握られることとなり、以後は政治的にはラナ専制政治時代となる。ラナ政権は、インドを支配していたイギリスとの交流が深く、この時代には西洋風の建築様式を取り入れ、カトマンズ盆地の美術建築にさらなる広がりをもたらしている。

## 現代期

現代期に突入しラナ専制政治体制に反対運動がおこると、1951 年にラナ政治体制が崩壊し、再び王政復古の動きが起こった。これが現代期の幕開けとなっている。当初、政党政治による内閣が成立したが、多政党による政治に混乱が生じると、当時の国王が政党結社を禁止・廃止し、国王親政に切り替えた。その後、国王を頂点とするパンチャヤート制度が導入された。パンチャヤート体制とは、中央から地方まで段階的（村落・市町／郡／県／国家の 4 段階）に行政体制を敷き、また職能分類（青年・女性・農民・労働者・退役軍人・壮年など）ごとに議員を選任するなど、分権的な支配体制を想定したものであった。しかし、地方から中央に階層的になっている支配構造は、実際は国王を最高の統治者とし

ており、結果的には国王に実権が集中する仕組みとなっていた。こうした中央集権体制への不満から、1990 年になり民主化運動が勃発することとなった。その後 1990 年 11 月には国王がパンチャヤート制度の廃止を宣言することとなり、主権在民の立憲君主制、複数政党政治による議会制度が敷かれた。ただ、国王をトップとする政治のもとでは引き続き権力が不安定な状態が続き、1990 年代後半からマオイスト（毛沢東派）集団が活動を活発化させ王制廃止を目指し全国で人民運動を強化していった。

2006 年、人民運動Ⅱにおいてようやくマオイストと政府間で包括平和協定が成立し、2008 年 5 月に制憲議会選挙が実施され、マオイスト党が政権を握った。その年の 5 月にはネパール王制が廃止され国王は政治から追放され、ネパールは連邦民主共和国へと変化した。

しかし、その後のネパールでの連邦制の確立には、少数民族の自治権等の細かな議論で衝突が繰り返され、憲法の制定に至らず、延期が繰り返されていった。2015 年にはネパール大地震（ネパール・ゴルカ地震）が発生したが、これを機に危機感を強めた政府は憲法制定を実現させた。少数民族の自治権争いに決着がつかないままの憲法制定となり、ネパール政府に対するインドからの制裁が実施され、ガソリン等の燃料供給が止められた。これにより地震後の不安な社会情勢をさらに悪化させることとなった。

## 第八節 ネパールの文化

ネパールは、18 世紀、一度イギリス・ネパール戦争を経験している。これはインドを支配していたイギリスの東インド会社との勢力争いであり、領土拡大を目指すゴルカ王朝と、同じく支配権拡大を目指すイギリス側との戦いである。ネパール側は降伏することになったが、植民地支配は免れ、グルカ兵の忠誠心の高さと勇敢さを認めたイギリス側は、これ以降グルカ兵をイギリスの領土紛争に傭兵として利用してきた歴史がある。

外国とも立ち向かい、植民地を経験しなかったネパールは、文化的な資産が破壊されず、自国あるいはネパールという領域で多数の民族により醸成されてきた伝統文化が継承されてきた。このことは前節の歴史を振り返ると明らかである。歴史の中で政治勢力の盛衰は繰り返されたが、グローバルヘゲモニーによる植民地支配からは逃れ、自国のアイデンティティを大きく損なわずに済んだことは、大きな意味を持つであろう。ネパールにおける伝統文化は現在まで変化、革新、更新されてきたものとして現存している。このため、チャングナラヤン寺院はじめ、カトマンズ盆地には 10 世紀以前に建造された建造物が保存されている。伝統も、ヒンズー文化圏と仏教文化圏を中心に、宗教が融合した独特の文化様式が発展し、見事に習合した美術的遺産や景観の保存が現在でも継続されている。こうして繁栄した都市文化を中心に、カトマンズ盆地全体が世界文化遺産となっている（UNESCO）。

また、自然環境に関しても、南部の熱帯平地であるタライ平野から中山間部、カトマンズに至るまで、降雨量が豊かであり、山岳部以外であれば食料の生産環境にも恵まれている（Gurung 2006）。このため、ネパールではこうした収穫物を利用したお祭りが多く開催されており、社会的交流の機会も多いため人々の紐帯も太く、ソーシャル・キャピタルとしての資源も安定していると考えられる。

ネパールでは、民族の分だけ多くのお祭りもあり、多様である。民族ごとのお祭りに加え、国家としてのお祭りもあり、また国際的なイベントも取り入れられている。一年を通して催しがつづくため、社会的な行事で大変忙しい文化習慣を持っている。以下は、2017年からの1年間のお祭りをリストしたものである。

3月27日	ゴータジャトラ（馬の日）
4月5日	ラム・ナバミ
4月14日	ネパールの新年
4月26日	母の日
5月1日	メーデー
5月10日	ブッダ・ジャヤンティ（ブッダの生誕祭）
5月29日	共和国記念日
6月29日	ロパイ・ジャトラ（田植え祭り）
7月13日	イド・アル=フィトル（ラマダン終了を祝う祭り）
7月28日	ジャナイ・プルニマ
8月8日	ガイ・ジャトラ（牛祭り）
8月14日	クリシュナ神誕生記念日
8月21日	父の日
8月24日	ティージ（女性の祭りで女性のみ休み）
8月26日	リシ・パンチャミ（女性のみ休み）
9月2日	インドラ・ジャトラ（インドラ神の祭り）
9月27日～10月5日	ダサイン（収穫祭）
10月17日～21日	光の祭り（ティハール/ヒンドゥー教の祭事）
12月3日	ヨマリ・プルニマ
12月25日	クリスマス
12月30日	タム・ロサル（グルン族のお正月）
2018年	
1月15日	マーゲ・サ克蘭ティー
1月30日	殉教者の日
2月13日	シバ・ラトリー

2月19日	民主主義の日
3月2日	水掛け祭り（ホーリー）
3月8日	国際女性の日

出典：特定非営利活動法人途上国観光支援センターHP を参照

お祭りの一覧からわかるように、ネパールでは土着のメジャーな宗教関連行事以外にも、クリスマスやラマダンといった、多様な宗教行事が取り入れられている。現代でも文化の融合と発展が起こり続けているという見方ができる。お祭りの多さは、豊かな食料生産によるとみられるが、国土の大部分は年間降雨量 1,000 mm以上であり、畑作並びに稲作が可能な緑豊かな環境である。ネパールの緯度は沖縄と同程度であり、標高の高い地域においても温暖な場所も多い。穀物農業生産量についてみると、全体としては必要量より 0.5%ほど多く生産している（2001/02-2002/03 年）（WFP/FAO(Nepal) 2007）。もちろん、山岳部等で生産不足であり、南部で生産過剰となっているが、国内で食料の配分がうまくいけば、食料自給ができる現状がある。つまりネパールは伝統文化の維持継承発展を支えるための十分な食料生産が可能であり、今後も国としての文化や都市の形成を独自に展開していくことが可能な国であろう。

以上見てきたように、最貧困国といわれながらも農業自給率も高く、MDGs では多くの項目を達成し、今後の展開も期待される。経済においては貿易面でインドへの依存が大きい。観光による国際的なサービス業もネパールにとって重要であり、特に自然資源や文化資源を生かした観光国としては、農産物によるマーケットの発展など、考えられる戦略も多様である。海のない内陸国であるネパールは、工業化によって国外との取引を活性化させようとしても、多くの点から不利であるため、観光に関連付けられた産業部門、自然を生かした産業が重要であると考えられる。

内発的発展論の研究においても、伝統文化が維持継承されてきた社会的土壌は重要であろう。このため、ネパール国民は多様な分野で活動している。当研究においてキー・パーソンとして調査する活動家を含めて、筆者の知る活動家たちも多様な分野で活躍している。例えば都市部の起業家に限らず、農村でエコツーリズムに取り組む人であったり、有機農業を実践する者であったり、一次産業の起業者も探す多くいることが分かる。また、自国の貧困問題を改善しようと協力する個人や国内 NGO も多数ある。本論文では、内発的発展論で取り上げられているキー・パーソンに注目し研究するが、ネパールでは地域を変革し、発展させていく主体としてのキー・パーソンを、さまざまな分野で見つけることができる。こうした人々のうち、国外の団体の指示に基づいて活動をしているわけではなく、自らの意思で自律的、主体的に活動をしている人が実際に多くいる。そこで次章からは、ネパールで活動するキー・パーソンを取り上げ、分析を行っていく。

## 第六章

### キー・パースンの心理的側面についての考察

#### 第一節 現代の開発における心理的支援

本論文では、内発的发展論のキー・パースン研究に寄与することを目指し、マズローの欲求階層理論における自己実現的人間像をもとに、キー・パースンについて検討する。本章では「キー・パースンは自己実現的人間である」という仮説を立て、これを検証していくこととする。この仮説が意味のあるものであれば、キー・パースン論の発展に寄与することができる。というのも、鶴見らが指摘するように、内発的发展論において変化をけん引するのがキー・パースンであるから、内発的发展を促そうとするなら、外部者はキー・パースンを探し、プロジェクトのカウンターパートとして協力することが最も考えられる方法である。あるいは、キー・パースンが見つからない場合は養成したり発掘することが考えられるであろう。キー・パースンが自己実現的人間であるとの仮説が正しければ、支援としては自己実現的人間が生まれるような環境整備をすればよいという提案が可能である。とはいえ、支援として生み出すといえ、個人の自律的な内発性ではなく外発的な趣がある。しかし本研究では、近代化の勢いに対抗する意味で、外からの働きかけの場合でも内発的な発展が起こり得る方法を探究してみたい。マズローが言うには、自己実現欲求は心理学的自由であり、環境から自由な心理状態である。しかし、自由であることは、環境との相互作用がないということではないだろう。

外からの働きかけによるそのような方法は、第一には人々が自己実現的欲求よりも下位の欲求を満足させられる環境を作ることであるといえる。これによって、より多くの人々

が、自らの自己実現的欲求、目的意識に沿って内発的に活動できるようになる。ただ、これだけであれば、インフラ整備や教育、保健医療の普及、紛争解決といったこれまでの開発で取り組んできたプロジェクトやその目標と何ら変わりがないということにもなりうる。自己実現欲求よりも下位の欲求は、こうした支援によって満足される欲求が多いからである。しかし、本論文の関心に沿えば現在の支援には疑問を挟むことができる。これまでの開発への支援の多くは、生理的欲求や安全性欲求といった、最低限の欲求の支援に関するものが多いと言えそうだからである。所属性欲求や承認欲求といったものは、こうした最低限の欠乏欲求より段階の高い欲求であるが、これまでの開発支援はこれらをどれほど射程に入れていただろうか。一般的な国際協力や開発支援を整理してみると、次の表 6-1 のようにまとめられる。こうした支援をマズローの欲求階層論に当てはめるとすれば、どこに該当するだろうか。これを考察するために、図 6-1 で欲求階層論との対照関係の図示を試みた。

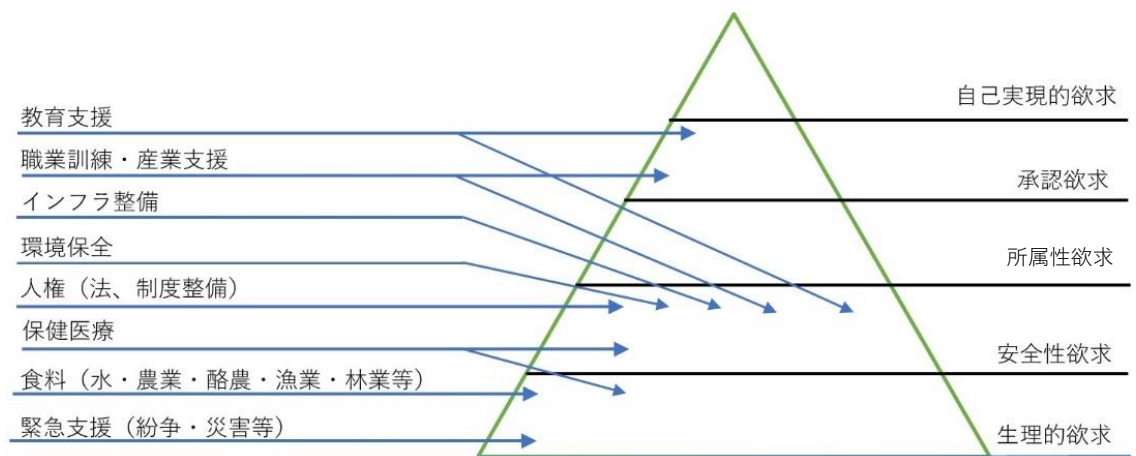
表 6-1：国際協力、開発支援の分野

分類		内容
1	制度整備	法律、制度、計画など
2	インフラ	水資源開発、航空・空港、都市衛生、測量・地図、上水道、電気通信、鉄道、気象・地震、道路、運輸交通一般、海運・船舶、公益事業一般、河川・砂防、港湾、下水道、陸運、社会基盤一般、都市開発・土地造成、建築・住宅、通信・放送一般、放送、情報・広報、統計、行政一般、開発計画一般、総合・地域開発、財政・金融、電力、エネルギー一般、新・再生エネルギーなど
3	職業訓練 産業支援	商業経営、貿易、観光一般、観光施設、 養蚕、農業機械、農産加工、家畜衛生、農業土木、林業森林保全、林産加工、水産加工、 機械工業、鉄鋼・非鉄金属、鉱業、繊維工業、化学工業、食品工業、工業一般、パ ルプ木材製品、その他工業など
4	食糧支援	水産、農業一般、畜産、畜産加工など
5	教育支援 社会福祉支援	体育、文化、科学、教育、高等教育、人的資源一般、職業訓練など 児童、女性の自立支援・所得向上・エンパワーメント、社会福祉、労働など
6	保健・医療	人口・家族計画、保健・医療、基礎保健など
7	緊急支援	自然災害・戦後紛争後復興など
8	環境保全	緊急性の少ない防災や森林保全、海洋保全、など全般

出典：各種テキストをもとに筆者作成<sup>61</sup>

<sup>61</sup> モリッシュ (2000)、友松・桂井 (編) (2006)、友松 (編) (2005)、浅野 (2005)、林 (2008)、下村、他 (2016) を元に分類を工夫し、作成。

図 6-1：一般的な開発支援とマズローの欲求 5 段階説の対照



出典：筆者作成

緊急支援、食糧支援、保健医療支援、環境保全、インフラ整備、職業訓練や産業支援といった雇用支援、そして教育支援は、開発プロジェクトの中でも中心的なものであろう。それぞれの支援が、マズローの欲求 5 段階説に倣えば、どの段階に該当するのかを考察してみると、おおよそ上図のようになるのではないだろうか。すなわち、緊急支援や食料支援、保健医療支援といったものは、生命の維持、生命の安全という最低限度に関わる側面の安全保障を試みるものである。このため、矢印は生理的欲求と安全性欲求の方に向かっている。次に、人権や環境保全、インフラ整備や、職業支援、産業振興支援などの雇用対策関連、教育支援といったものは、そのほとんどが、安全性欲求の充足に該当するのではないだろうか。人間にとって、もし欲求のほとんどすべてが剥奪された場合には、純粋に飢えなどの生理的欲求だけが欲するものとなり、主要な動機付けになる。これらが比較的良好に満たされた際、もし安全と保護が極度に危険にさらされている場合には、安全だけを求めて生きているような状態が想定される（マズロー 1987：56-61）。であれば、多くの開発プロジェクトは、生きるか死ぬかという状態に陥らないための安全保障の支援であると考えられるはずである。また教育支援は開発の中でも重要な項目であるが、これも安全性欲求に関わると考えられる（将来の生活保障や経済発展）。また当研究の調査分析結果でも析出されたが、教育は結果的に承認欲求にも関係してくると思われる。同様に、職業訓練といった雇用対策も生活の安全性欲求と関連し、同時に人から認められるといった承認欲求に関係するであろう。全体を通してみると、上図の構造に倣えば現状の国際開発支援は、生理的欲求、安全性欲求の問題を土台に構成されており、派生的に承認欲求の満足に影響するといったような状態であるとみられる。あらゆる支援が最終的には自己実現に貢献するわけであるが、現状の国際支援は、より下位の欲求の保証支援であり、より上位である自己実現の欲求支援ではないと考えられる。本論文の研究目的として、この区別は重要である。

この分類が適切かどうかは議論の余地がある。しかし、もし自己実現欲求が、所属性欲求や承認欲求といった社会的欲求がある程度満たされたのちに來るのであれば、内発的發展に基づいた開発プロジェクトのためには、所属性欲求や承認欲求への支援・協力も含まれるべきであるという論理となる。少なくとも、現在の国際支援や国際協力が、所属性欲求や承認欲求の満足を目指してなされているとはいえないであろうから、内発的發展論は、どちらかといえばこうした支援の必要性に訴えることになるのではないかと考える。

内発的發展を進めるために、以上のような提言をするには、実際にキー・パーソンとして活動をしている人々を調査し、そうした人々の欲求段階や、それを支えてきた人生の経験について調査をし、データや実例に基づいて内発性の発動要因を考察することが必要となってくる。そうすることで、実際にキー・パーソンがマズローの欲求 5 段階説の自己実現的人間というフレームで語れるものなのか、あるいはキー・パーソンとなるには他の要因が考えられるのかどうかを考察することができるようになる。

そこで、筆者が出会ったキー・パーソンを対象に調査を行い、キー・パーソンと自己実現的人間の関係を明らかにすることを試みる。次節では、当調査における調査で選び出した 5 名のキー・パーソンの分析について述べる。また、キー・パーソンの性質をよりよく理解するために、同様に一般標本を集め比較検討をすることとした。

## 第二節 調査概要（1）キー・パーソン調査

当調査では、キー・パーソンは自己実現的人間であるという仮説に基づいてフィールド調査を実施し、分析を進める。筆者はネパール生まれであり、ネパールとの関わりが深いため、これまで農村の人々と協力して森林保全型養蜂への協働的活動を 2011 年より実践している。養蜂を通じた環境保全活動をしてきた中で、人間関係のネットワークが広がり、現地で交友関係を深めてきた中で、キー・パーソンであると考えられる人々にも多く出会うことができた。そして、こうした人々には特に関心を払って交流を続けてきた。そこで、この中から特に筆者との付き合いが深く、心を開いてくれる草の根の活動家や地元の起業家 5 名に対し調査への協力を依頼することとした。5 名で統計的な代表性は得られないが、典型的なキー・パーソンを選ぶことができたと自負しており、量的な視点に加えて質的な調査を合わせて行うことで分析に役立つ資料となるよう配慮した。次の表で示す 5 人が、その調査対象者である。養蜂・蜂蜜関係者が多いのは、筆者が養蜂の分野で活動していたことが影響している。

表 6-2：調査対象者概要

調査対象者 (民族)	職業・役職	仕事内容	最終学歴
A) 男性 30 代 (Chepang)	地域の主たるはちみつ集荷担当者 (養蜂家から蜂蜜を収集)	ハチミツの集荷・出荷、生産支援、販売	10 年生
B) 男性 40 代 (Gurung)	首都圏はちみつ専門店 社長 (養蜂家と取引)	はちみつの仕入れ、生産支援、販売	SLC
C) 女性 50 代 (Newar)	首都圏はちみつ専門店 社長 (養蜂家と取引)	はちみつの仕入れ、生産支援、販売	修士
D) 男性 40 代 (Bahun)	取締役員 (首都圏で活動する NGO)	環境啓発活動、NGO マネジメント、ごみ収集処理	学士
E) 男性 30 代 (Newar)	私的自治組合の所属教師、演奏者	コミュニティのフルーツ教師、ステージ演奏者	学士

出典：筆者作成

対象者の属性については幅広さを持たせるよう意識して選んでいる。5 人のうち 1 人が女性起業家で、2 名が男性起業家、1 名は男性で環境 NGO 創業メンバーの 1 人、1 名が男性でコミュニティの伝統音楽継承者である。年齢は 50 代 (1 人)、40 代 (2 人)、30 代 (2 人) であり、民族は、Bahun (1 人)、Chepang (1 人)、Gurung (1 人)、Newar (2 人) とし、民族的にもばらつきがある。ネパールは多民族国家であり、2011 年のネパール国勢調査<sup>62</sup>によると 126 のグループを集計しているが、対象者が 1 つの民族に集中しないように努めた。また地方出身者 3 人、都市出身者 2 人となっている。学校教育歴については、表 6-8 にて、分類を解説している。

### 第三節 調査方法

以上の 5 名を、キー・パースンとして選び、マズローの心理学的な質問票調査を実施した。調査結果をもって、自己実現の人間と一致するかどうか、あるいはキー・パースンとなった要因が人生のどのような出来事の中に見出せるかをナラティブから調べることにした。以下は調査に関する詳細である。

調査目的：キー・パースンの心理学的特徴を探ることにより、それが自己実現の人間の像に該当するかどうかを探る。また現在までのライフヒストリーを明らかにする。

仮説：キー・パースンは自己実現の人間である。

調査対象者：起業家、社会活動家や伝統文化の継承者であり、ネパール国内に在住し続け

<sup>62</sup> Government of Nepal (NPCS) (2012), National Population and Housing Census (2011)より。

る意志を持つもの。

調査方法：質問票による調査、インタビューによる調査（半構造化インタビュー）

- （１） 質問票調査：マズロー欲求階層理論を土台にして構成された質問票
- （２） ライフヒストリーの調査：人生の印象深い記憶を用紙に書き出してもらう
- （３） ライフヒストリーのヒアリング調査：インタビュー形式

場所：調査対象者の事務所や店舗、滞在地

流れ：初回ヒアリング 2 時間程度→質問票紙回答→第 2 回ヒアリング 1 時間程度

実施日：2017 年 5 月 10 日～20 日、一人当たり 3～4 時間

まず、インタビュー調査の結果を概要として次の表にまとめた。なお、インタビュー調査の詳細な内容は、末尾の資料 8 に掲載している。

表 6-3：調査対象者のライフヒストリー概要

調査対象者の概要	
A	ネパールの地方出身。最も貧しいといわれる民族の一つで、子供のころは住む場所や食べ物など物質的なことに苦勞し、学校でもよい教育を受けられなかった。これを問題だとは思いつつも、学校から抜け出して自然や友達と繋がる楽しさも知る。21 歳ごろの環境 NGO との出会いをきっかけに、村での養蜂の普及活動とハチミツの取引を始めるようになり、現在では村の傍の幹線道路沿線で店も構え、村に収入をもたらした村が豊かになるよう努力している。
B	ネパールの地方出身。子供の頃は農家で育ち、農作業などの肉体労働も手伝った。家族が軍隊に所属しており、家計は比較的裕福な方だったが、親の酒癖が悪く、家庭環境や教育環境も悪かった。大人になると村の青年が一般的に考えるのと同様、国外に出稼ぎに出た。ここで外国の発展の模様を見、またキリスト教に出会い、心の道を歩むことを学んだ。その結果、ネパールの社会に対しできることをしながら自国で居場所を作ることに意義を見出し、帰国後ハチミツ専門店を設立した。蜂蜜生産者には前払金や生産者を優遇した価格で買い取るなどの配慮をし、村の生活の改善につなげている。
C	ネパールの首都圏出身。両親は布製品の卸と製造をする工場を持ち、比較的裕福であったが、保守的なところがあり、女性の社会進出に後ろ向きだった。そんな家庭でも大学・大学院まで進学し、女性としての自立を目指した。オランダの国際協力機関のプロジェクトで職を得て、担当したのが養蜂だった。それをきっかけにハチミツ専門店を設立し、生産された蜂蜜のマーケティングの場として専門店を運営している。
D	ネパールの地方出身。村では普通の農家に生まれたが、子供のころから社会貢献意識をもって活動していた。14 歳で良い学校へ行くために地方都市に一人で出て、下宿をしながら学業を修めた。同じ村の別民族の女性と結婚したが、村では受け入れられず、村を出た。知らない街で暮らしを立てる苦勞を経験したが、首都に出たとき、同じ村の出身の仲間から環境 NGO で働いてみないかと声をかけられ、中心メンバーになり今に至る。地方都市の学校時代はエッセイコンテストで入賞し、詩を作る自分の能力に目覚めた。今、環境 NGO での啓発活動に自作の詩や歌を積極的に活用している。
E	ネパールの首都圏出身。子供のころは比較的貧しく、学校は私立から公立へ転向するなどの苦勞をし、青春時代は特に気持ち荒れていた。ネワール族で、コミュニティの文化である踊りや楽器を学んで演奏するが、18 歳のころにコミュニティのフルートコンテストで 2 位を受賞した。これがきっかけでもっと音楽を学びたいと音楽学校に通うようになり、この道に進み、現在は同コミュニティのフルート教師であり、またステージ演奏者となった。特に、今まで使わなかった楽譜での演奏を取り入れて指導している。

出典：筆者作成

今回の調査ではキー・パースンを次のような基準で選んだ。まず、ネパールに今後住む予定であること。次に、誰かに指示されたものではなく、「自らの意思です」という、内発的動機付けで活動をしている人物であること。なおかつそれが、国や地域といった自分の所属する空間に対して貢献する目的があること。また地域的な活動以外でも、創造性という意味で新規事業に関わってきたこと、または伝統の維持継承発展に携わっていることなどを重視した。

例えばキー・パースン A は、より多くの村人に養蜂による利益を還元しようと、養蜂箱や資材を購入し、自ら地域投資を行う。これは、例えば中国の蘇南モードで例示されたような「反哺」、すなわち、地域の企業は地域に利益の一部を還元して役立てるというあり方に近い行動をとっている（鶴見 1996 : 106）。次第に巻き込む村人が増えてくると、植樹といった地域の自然保全活動を行う展開も見せている。これを北野の知識人の整理<sup>63</sup>で考えると A は草の根民衆知識人になろう。次の B はパキスタンのスラムで下水道整備事業を草の根の住民ベースで行うように働きかけたオランギパイロットプロジェクト（OPP : Orangi Pilot Project）の Khan 博士ように、外部からやってきた人物として地域に事業のきっかけをもたらし、資金が不足する場合には投資するなどのサポートを行っている（Khan 1998）。主体性は地域住民にありながら、事業のパートナーとして継続的に関わる仕事をしている。B は外国経験を持つ人物であるという点も、OPP の事例と同様であり、これは北野の分析にならえば「漂泊者」知識人になろう。C は、オランダ国際支援団体から学んだ事業ノウハウを引き継ぎ、養蜂を行う農村の支援や、ハチミツのマーケティングを担当している形となり、法人格のある会社を設立して女性起業家としての手腕を発揮している「有機的」知識人であろう。D および E は、自然保護・文化や伝統の継承といった、ネパールの美的な資産の保全を行う。特に D は、環境保護に関する詩を創作して教材にするなどの活動をしており、これは仏教の事例にあったブッダダサ（鶴見 1996 : 195）のように思想面の啓発を行う。事業に対し実践的でありながら発想的キー・パースンのような役割を担っていると言える。E は、バリ島の伝統的カーストとコミュニティの結束関係の事例（中谷 2001）のように、ネワール族の伝統的地域組合の中で、音楽の伝統継承という仕事をしている教師として重要な存在である。その中で、新たに楽譜の制作を始め、これまでになかった音符の記録やそれによる学習を取り入れるなど伝統の革新の側面に関係している実践的キー・パースンであろう。このように、今回のキー・パースンの選定にあたっては、鶴見のいう実践的キー・パースンを中心に、その土地にとどまる意思をもって、社会性および持続可能な事業性を持つ地域活動に携わる人物を巻き込むことができた。

---

<sup>63</sup> 北野（2008）を参照。または本論文第一章第二節（6）にて北野の知識人について紹介している。

#### 第四節 質問票

次で示す表 6-4 は、今回使用した質問票である。筆者は心理学を専門としていないため、独自に質問票を構成するより先行研究で利用されているものを土台にすることが有効であると判断した。そこで質問票は、タオルミーナ (Taormina .R.J.) とガオ (Gao .J.H) が 2013 年に利用した質問票<sup>64</sup>を土台に作成した (Taormina, Gao 2013)。この質問票では、「毎日吸う空気は清浄か」といった質問 (生理的欲求) から、「自分自身のあらゆる側面を完全に受け入れている」 (自己実現的欲求) という質問まで、マズローの欲求階層にそった質問が用意されている。各カテゴリーには 10~15 の質問が含まれている。これを参考に質問票を作成し、回答はチェック式の 5 段階回答 (よくない・それほどでもない・適当・よい・とてもよい) とした。記述言語はネパール語を用いた。また当調査では、現在と、16 歳までの過去の記憶という 2 つの人生の時期について別々に回答してもらっており、2 つの時間軸で比較できるようにした。

第 1 回目のヒアリングでは、筆者の関心に沿って約 2 時間程度のライフヒストリーのインタビューを個別に行った。質問は、今の仕事にたどり着くまでの経緯、という視点を軸に据えた。この質問に沿って、回答者が回答する内容に合わせ、疑問点などを追加的にヒアリングしていった。また、2 回目のインタビューでは、人生で最も印象深かった出来事を書き出してもらい、これをもとにインタビューを進める形をとった。これは、質問票への回答を依頼した際に、別紙 (表 6-5) として手渡し、人生で印象に残った出来事に関して最低 10 点以上記述してもらうよう事前に準備を依頼した。後日の面接では、その別紙を参照し、調査対象者の主観に沿って口頭で説明を受けた。記憶に残っている経験を書いてもらうことにより、筆者も想定できない経験について情報が得られるようにすることが目的であった。インタビュー調査のまとめは、2 回分のインタビュー内容を時系列でまとめて整理した (付録資料 8 参照)。

分析中、グラフで示している A~E の区分は、前出の表で示したキー・パースン A~E に対応する。また前掲の表 6-3 のライフヒストリーの概要から、要点を抽出したものとして表 6-23 を用意しており、人生のターニングポイントとなった出来事をまとめている。

---

<sup>64</sup> Taormina, Gao (2013) は、マズローの欲求 5 段階説にのっとったアンケート調査を実施している。

表 6-4 : 質問票の項目一覧

No.	Nepali(नेपाली語:実施言語)	English(英語)	データ上の記号	
Psychological Satisfaction Scale: 生理的欲求			現在	過去
1	दैनिक स्वस्थकर खानाको अवस्था	The quality of the food I eat every day	1c1	1p1
2	दैनिक पुरने गरि खाना भएको अवस्था	The amount of food that I eat every day	1c2	1p2
3	सफा पिउने पानी	The quality of the water I drink every day	1c3	1p3
4	सफा पिउने पानीको पर्याप्तता	The amount of water that I drink every day	1c4	1p4
5	जाडो याममा तातो-न्यानो बनाउने स्थिति	The amount of heating I have when the weather is cold	1c5	1p5
6	धेरै गर्मि याममा सितल बनाउने स्थिति	The amount of cooling I have when the weather is hot	1c6	1p6
7	सास फेर्ने सफा हावाको स्थिति	The quality of the air I breathe every day	1c7	1p7
8	स्वास्थ्यको स्थिति	Every aspect of my physical health	1c8	1p8
9	पर्याप्त सुत्ने समय	The amount of sleep I get to feel thoroughly relaxed	1c9	1p9
10	निन्द्राको स्थिति	The quality of sleep I get to feel fully refreshed	1c10	1p10
11	स्वस्थ रहनको लागि व्यायाम	The amount of exercise I get to keep me healthy	1c11	1p11
12	सुगठित शरीरको लागि व्यायाम	The type of exercise I get to keep my body toned	1c12	1p12
13	आफ्नो शारीरिक बलको अवस्था	My overall physical strength	1c13	1p13
Safety Security Satisfaction Scale: 安全・防衛の欲求				
1	घर-बासको स्थिति	The quality of the house/apartment I am living in	2c1	2p1
2	आफ्नो लागि घरमा पर्याप्त ठाँउ	The space available for me in my house/apartment	2c2	2p2
3	घरमा रहदा सुरक्षाको स्थिति	How secure I am in my house/apartment	2c3	2p3
4	शारीरिक आक्रमणको भय	How safe I am from being physically attacked	2c4	2p4
5	आफ्नो छिमेक-इलाकामा सुरक्षा	The safety of my neighborhood	2c5	2p5
6	रोग आदि बाट सुरक्षा	How safe I am from catching any diseases	2c6	2p6
7	बिपदकालमा पाउन सक्ने सुरक्षा	How secure I am from disasters	2c7	2p7
8	बालाबरणमा आउन सक्ने प्रतिकूल स्थिति बाट सुरक्षा	How protected I am from dangers in the environment	2c8	2p8
9	पहरीले दिने सुरक्षा	The protection that the police provide for me	2c9	2p9
10	राज्यको कानूनबाट पाउने सुरक्षा	The protection that the law provides for me	2c10	2p10
11	आतंककारीबाट सुरक्षा	How safe I am from destructive terrorist acts	2c11	2p11
12	युद्ध भयबाट सुरक्षा	How safe I am from acts of war	2c12	2p12
13	आर्थिक मामलामा सुरक्षित	My financial security	2c13	2p13
14	आवश्यक परेका बेला ऋण-सापटको सहयोग	My ability to get money whenever I need it	2c14	2p14
Belongingness Satisfaction Scale: 愛と所属性の欲求				
1	चिनेका मान्छेसंगको आपसी जानकारी	The amount of rapport I share with the people I know	3c1	3p1
2	साथि-संगीसंगको सामिप्यता	The quality of the relationships I have with my friends	3c2	3p2
3	पति वा पत्नीबाट प्राप्त स्नेह	The love I receive from my spouse/partner	3c3	3p3
4	आफ्नो परिवार भित्रको सहजता	The intimacy I share with my immediate family	3c4	3p4
5	कामगर्मी ठाँउमा साथीहरु संगको सहजता	The camaraderie I share with my colleagues	3c5	3p5
6	सम्बन्धित समुदायमा आफ्नो आवश्यकता	How much I am welcomed in my community	3c6	3p6
7	नाता सम्बन्धमा सहजता	The warmth I share with my relatives	3c7	3p7
8	साथीहरुबाट भावनात्मक सहयोग	The emotional support I receive from my friends	3c8	3p8
9	परिवारमा संगै बिताउने समय	The feeling of togetherness I have with my family	3c9	3p9
10	पति वा पत्नीबाट पाउने हेरविचार	How much I am cared for by my spouse/partner	3c10	3p10
11	आफ्ना साथि-संगीसंग सुख-दुखका कुरा गर्ने स्थिति	The happiness I share with my companions	3c11	3p11
12	विशवास गरेका मान्छेबाट पाउने साहानुभूती	The sympathy I receive from my confidants	3c12	3p12
13	आफ्ना साथिहरुसंगको रमाइलो समय	The enjoyment I share with associates	3c13	3p13
14	साथि-संगीबाट प्राप्त स्नेह	The affection shown to me by my friends	3c14	3p14
15	आफ्ना सहयोगीसंगको सामिप्यता	The closeness I feel with my associates	3c15	3p15
Esteem Needs Satisfaction Scale: 自尊・承認の欲求				
1	अरूबाट प्राप्त प्रशंसा	The admiration given to me by others	4c1	4p1
2	धेरैजसो मानिसले आफूप्रति दर्शाउने सम्मान भाव	The honor that many people give me	4c2	4p2
3	अरूले देख्दा आफ्नो इज्जत	The prestige I have in the eyes of other people	4c3	4p3
4	अरूले आफूप्रति गरेको मूल्यांकन	How highly other people think of me	4c4	4p4
5	आफैलाई आफ्नो स्वाभाव कस्तो लाग्छ	How much I like the person that I am	4c5	4p5
6	आफूप्रति कति बिस्वस्त छु	How sure I am of myself	4c6	4p6
7	मा आफैलाई कति आदर गर्छु, कति सन्तुष्ट छु	How much respect I have for myself	4c7	4p7
8	आफ्ना व्यक्तिगत गुणहरु कस्तो लाग्छ	All the good qualities I have as a person	4c8	4p8
9	समाजलाई आफ्नो आवश्यकताको महसुस	My sense of self-worth	4c9	4p9
10	आफूप्रतिको सकारात्मक सोच	How positive I feel about myself as a person	4c10	4p10
Selfactualization Satisfaction Scale: 自己実現の欲求				
1	आफ्नो ब्यक्तिगत स्वाभाव प्रतिको सन्तुष्टि	I am totally comfortable with all facets of my personality.	5c1	5p1
2	आफ्नो इच्छा पूरा भएको महसुस	I feel that I am completely self-fulfilled.	5c2	5p2
3	आफूले हुन खोजेको जस्तो व्यक्त भएको महसुस	I am now being the person I always wanted to be.	5c3	5p3
4	आफ्ना सबै भित्रि इच्छाहरु पूरा भएझैं लागेको	I am finally realizing all of my innermost desires.	5c4	5p4
5	आफूले चाहेको चिजमा समय दिन सक्ने अवस्था	I indulge myself as much as I want.	5c5	5p5
6	अहिले आफूले जिवनमा चाहेका सबै चिज प्राप्त भए नभएको	I am now enjoying everything I ever wanted from my life.	5c6	5p6
7	आफ्ना जीवनका सबै परिस्थिति प्रति सकारात्मक भए नभएको स्थिति	I completely accept all aspects of myself.	5c7	5p7
8	आफ्ना क्रियाकलापहरु आफ्नो मान्यता अनुसार छन्-छैनन्	My actions are always according to my own values.	5c8	5p8
9	आफ्नो जिवन चाहे अनुसार बिताउन सक्ने नसकेको	I am living my life the way I want.	5c9	5p9
10	आफूलाई गर्न मन लागेको कुरा चाहेको बेला जहिलेपनि गर्न सकिने	I do the things I like to do whenever I want.	5c10	5p10
11	आफ्नो क्षमताको काम गरेर पूर्णता पाए नपाएको	I am actually living up to all of my capabilities.	5c11	5p11
12	पूर्णरूपमा जिवन बाचेको अनुभूति	I am living my life to the fullest.	5c12	5p12

出典：筆者作成〔拡大資料添付〕

表 6-5：人生における印象深い出来事書き出し用紙のサンプル（インタビュー用）自由記述

1) Impressive Experience（英語訳）	2) जीवनमा छाप पारेका अनुभवहरु（実施言語）
What impact the experience brought to your life	ति अनुभवले आफ्नो जीवनमा पारेका प्रभाव केहि भए
	（空欄：自由に書き出してもらおう）

出典：筆者作成

## 第五節 調査概要（2）比較のための一般標本調査

前節までキー・パースン 5 名の調査概要を示したが、キー・パースンを一般の人々と比較することで分析を深めるため、併せて行った一般標本調査の概要を示しておきたい。一般標本調査では、キー・パースンとの比較対象として、雇われて働く人全般や、個人商店のオーナー、農業従事者、職人などを対象とする調査を実施した。年齢は基本的に 30 代以上とし、都市部と農村部を両方含めるようにした。

調査は 150 名ほどに行い、データの質の良いもの 144 名のデータを利用している。キー・パースンに対して行ったものと同じチェック式の質問票を使用し、一般調査ではインタビュー調査はしていない。ここでは回答を統計処理して分析を行い、傾向を明らかにすることで 5 名のキー・パースンとの違いが量的に見いだせるかどうか検討することが目的である。調査の概要は次のようにまとめられる。

調査目的：キー・パースンの特徴を一般との比較から分析すること。

仮説：一般の人々はキー・パースンとは異なった心理的傾向、または特徴がある。

調査対象者：雇われて働く人全般、個人商店のオーナー、農業、職人などの人々、基本的に 30 代以上が対象

調査方法：質問票による調査

場所：調査対象者の事務所や店舗、滞在地

流れ：直接出向いて記入を依頼、または会社・工場などグループ単位で記入を依頼する。

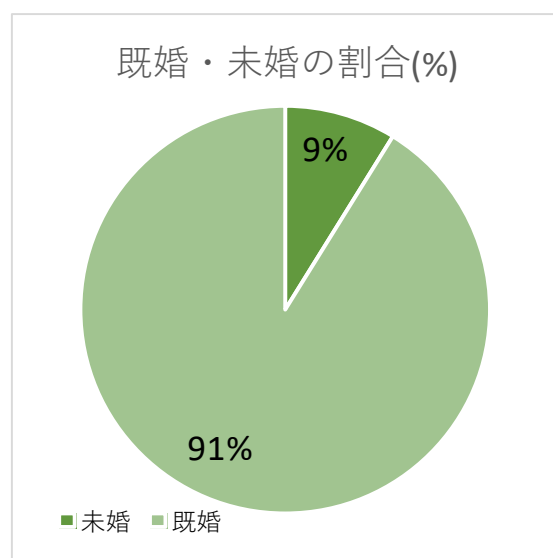
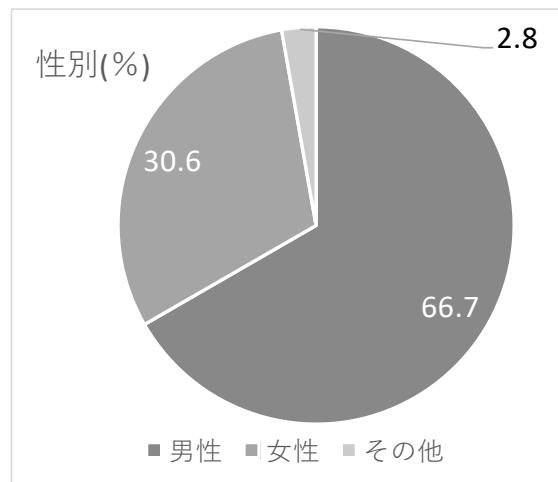
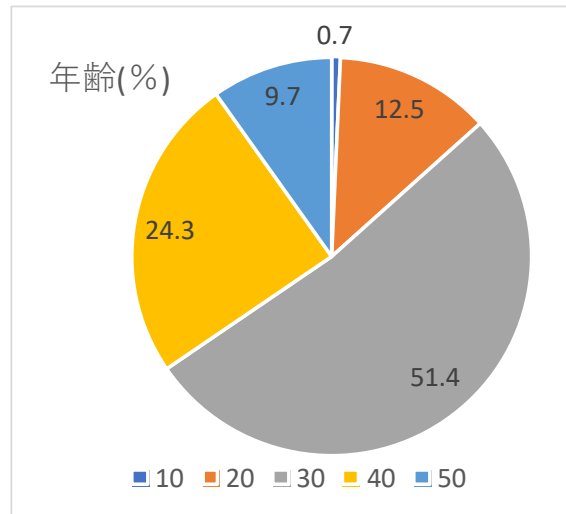
実施日：2017 年 8 月 4 日～16 日

収集したサンプル数：144

分析方法：記述統計、因子分析、相関分析（統計ソフト SPSS Statistics 24.0.0.0）

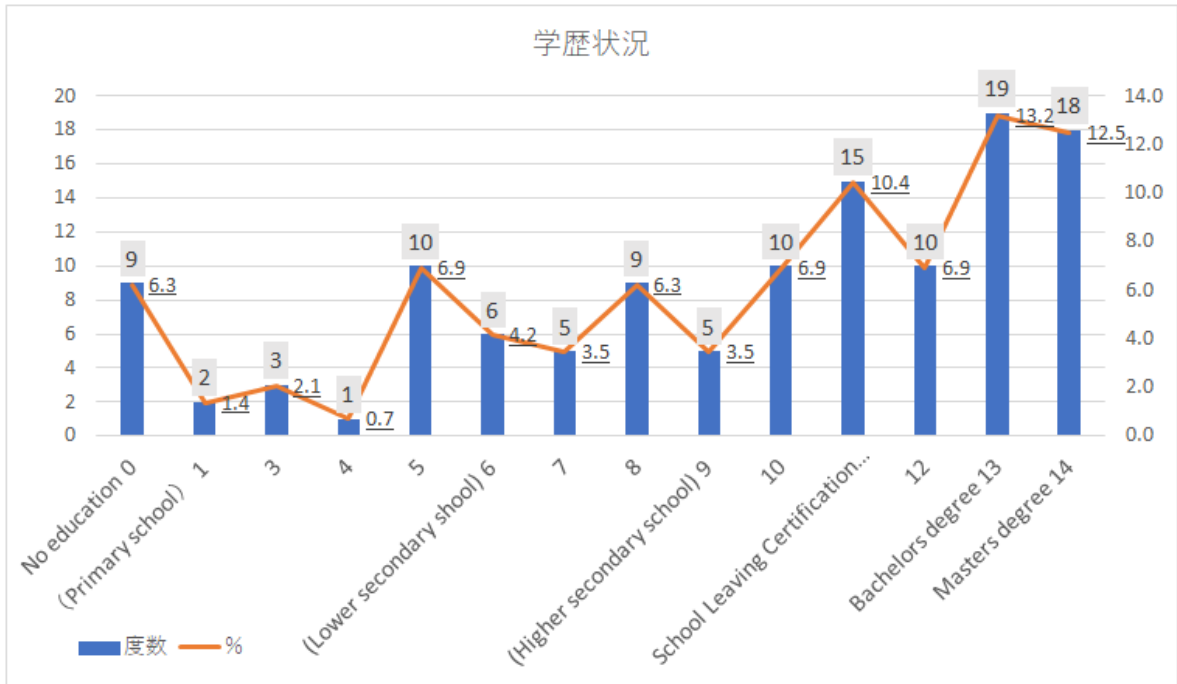
以上から、はじめに 144 名の記述統計量を次の図に示す。

図 6-2：年齢(10 歳区分)、性別、結婚状況の内訳



出典：筆者作成

図 6-3：最終学歴の内訳（下線付きの数値は％値、網掛け付きの数値は度数）



出典：筆者作成

表 6-6：年齢および性別の内訳

Age				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 10	1	0.7	0.7	0.7
20	18	12.5	12.7	13.4
30	74	51.4	52.1	65.5
40	35	24.3	24.6	90.1
50	14	9.7	9.9	100.0
合計	142	98.6	100.0	
欠損 システム欠損値	2	1.4		
合計	144	100.0		

Gender				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 Male	96	66.7	66.7	66.7
Female	44	30.6	30.6	97.2
Other	4	2.8	2.8	100.0
合計	144	100.0	100.0	

出典：筆者作成

表 6-7：結婚状況、職業、学校教育歴の内訳

Marital status				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 Not married	10	6.9	8.8	8.8
Married	103	71.5	91.2	100.0
合計	113	78.5	100.0	
欠損 システム欠損値	31	21.5		
合計	144	100.0		

Education				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 No education 0	9	6.3	7.4	7.4
<Primary school> 1	2	1.4	1.6	9.0
3	3	2.1	2.5	11.5
4	1	0.7	0.8	12.3
5	10	6.9	8.2	20.5
(Lower secondary school) 6	6	4.2	4.9	25.4
7	5	3.5	4.1	29.5
8	9	6.3	7.4	36.9
(Higher secondary school) 9	5	3.5	4.1	41.0
10	10	6.9	8.2	49.2
School Leaving Certification (SCL) Passed 11	15	10.4	12.3	61.5
12	10	6.9	8.2	69.7
Bachelors degree 13	19	13.2	15.6	85.2
Masters degree 14	18	12.5	14.8	100.0
合計	122	84.7	100.0	
欠損 システム欠損値	22	15.3		
合計	144	100.0		

Job				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 Street Vendor	3	2.1	2.3	2.3
Business	33	22.9	25.0	27.3
Officer	39	27.1	29.5	56.8
Farmer	18	12.5	13.6	70.5
Factory worker	4	2.8	3.0	73.5
Teacher	3	2.1	2.3	75.8
Security guard	2	1.4	1.5	77.3
Taxi or car Driver	5	3.5	3.8	81.1
Waste management	8	5.6	6.1	87.1
House worker	7	4.9	5.3	92.4
Public officer	6	4.2	4.5	97.0
Artist	1	0.7	0.8	97.7
Carpenter	3	2.1	2.3	100.0
合計	132	91.7	100.0	
欠損 システム欠損値	12	8.3		
合計	144	100.0		

出典：筆者作成

今回、30 代以上を対象に調査した結果、半数に当たる 51.4 %が 30 代となった。40 代は 42.3%、50 代は 9.7%である。このうち、既婚者は全体の 71.5%である。ネパールでは、現状でほとんどの人が 20 代のうちに結婚するため、このような結果になっている(ただし結婚に関しては回答無しが 21.5%)。

今回の調査では、主として 30 代以上を対象に質問票を配布したが、その理由は 30 代であれば自分の人生をどう考えるか、自己実現はできているか等、社会人経験も踏まえつつ我に返って考える年齢であると考えたためである。また 10 代 20 代も少数含まれているが、排除せずに分析することとした。

男女比は男性 66.7%、女性 30.6%で、女性は男性の半分に近いが、家事や育児、農作業に従事する人のサンプルが弱かったのが一つの原因となったと考えている。UNDP による GII (Gender Inequality Index : 男女格差指数) を見ると、ネパールは 2017 年の報告では 189 か国中 149 位である。全体として順位は低い、労働参加率の部分を見てみると、女

性の労働参加率は 82.7%で、男性の 85.9%とほぼ拮抗している（UNDP）。実際、筆者の観察でも女性をよく活動している。今回は、配布した中で夫婦に頼んで男性が回答することが多かったことや、会社などでは男性が多いといった原因によって回答者にゆがみが出てしまったと考えている。これらの点は今回の課題として留意しておきたい。

性別に関しては、ネパールでは、入国管理局等の申告書等において性別に「その他」を入れていることから、今回の調査にもこれを適用した。その結果、2.8%の回答者はこれを選択した。

職業分類についてみると、全体の 22.9%が商売、27.1%が会社員、農業関係は 27.1%、他は 1～5%となった。商売は主に個人事業を指している。一方の会社員は、被雇用者として会社で働く人々で、具体的には企業で働く人以外に保育士や公務員、縫製工場の工員などのさまざまな被雇用者を入れている。商売や会社員は大分類になるため、母数大きいことも自然な流れであると考えられる。ネパールでは 7 割の人が農業に従事しているとされるが、今回は調査地が主に首都圏であったため、上記のような結果となっていることに留意して分析を進めたい。

今回の調査結果で予想外だったのは学歴の集計結果である。ネパールは 2017 年の HDI レポートで、平均期待就学年数は 12.2 年であるが、平均実績就学年数 4.9 年である<sup>65</sup>。高校まで卒業する人は就学年齢人口の 16%である。ところが、今回の集計結果では、学士や修士卒業者が 10%強を占める結果となっている。首都圏在住者へのアンケートが 143 サンプル中の 100 を占めるからであることが影響していると考えられる。今回の一般調査の特性として、ここを踏まえつつの議論としたい。なお、ネパールの学校制度の分類については次のようになっている。

表 6-8：ネパールの学校制度と、当調査におけるデータ上の分類

学校制度	データ上の数値	説明
	0	教育を受けていない場合
1～5 年生	1～5	小学校（Primary School）
6～10 年生	6～10	中学校（Secondary School）
SLC 検定試験	11	学校卒業資格検定 School Leaving Certification（略称 SLC）
11～12 年生	12 (11 年生はゼロのため)	高等学校（Higher secondary：ネパールで Ten Plus Two と呼ばれ、高等学校に当たるともいえる。）

<sup>65</sup> UNDP によると、平均期待就学年数とは、就学年齢に達した児童が、現状の就学率が維持される想定の場合に達成すると思われる就学年数である。平均実績就学年数はこれに対し、25 歳以上の人々が受けた実際の就学年数の平均値である。【平均期待就学年数：<http://hdr.undp.org/en/indicators/69706>】【平均実績就学年数：<http://hdr.undp.org/en/indicators/103006>】〔アクセス 2018 年 9 月 9 日〕。ネパールでは、25 歳以上の人の中で受けた教育は多様であるのに対し、近年の就学状況の改善により、期待年数と実績年数の開きが大きくなっていると考えられる。

大学、大学院	13 学士 14 修士	大学以上 今回の調査では博士号は回答者がいなかった。
--------	----------------	-------------------------------

出典：筆者作成

表 6-9：HDI レポートにおける教育データ

Education	Expected years of schooling (years)	12.2
Expected years of schooling (years)	12.2	
Adult literacy rate (% ages 15 and older)	64.7	
Government expenditure on education (% of GDP)	4.7	
Gross enrolment ratio: pre-primary (% of preschool-age children)	85	
Gross enrolment ratio, primary (% of primary school-age population)	135	
Gross enrolment ratio, secondary (% of secondary school-age population)	67	
Gross enrolment ratio, tertiary (% of tertiary school-age population)	16	
Mean years of schooling (years)	4.1	
Population with at least some secondary education (% aged 25 and older)	32.0	
Primary school dropout rate (% of primary school cohort)	29.9	
Primary school teachers trained to teach (%)	94	
Pupil-teacher ratio, primary school (number of pupils per teacher)	23	

出典：国連開発計画 Human development report ホームページ <http://hdr.undp.org/en/data>

次節以降の分析では、まず標本の記述統計からの考察を行い、その次に、統計分析による考察を加える。多様な角度から分析し、今回の調査から分かりうるキー・パースンの特徴を見いだしてみたい。

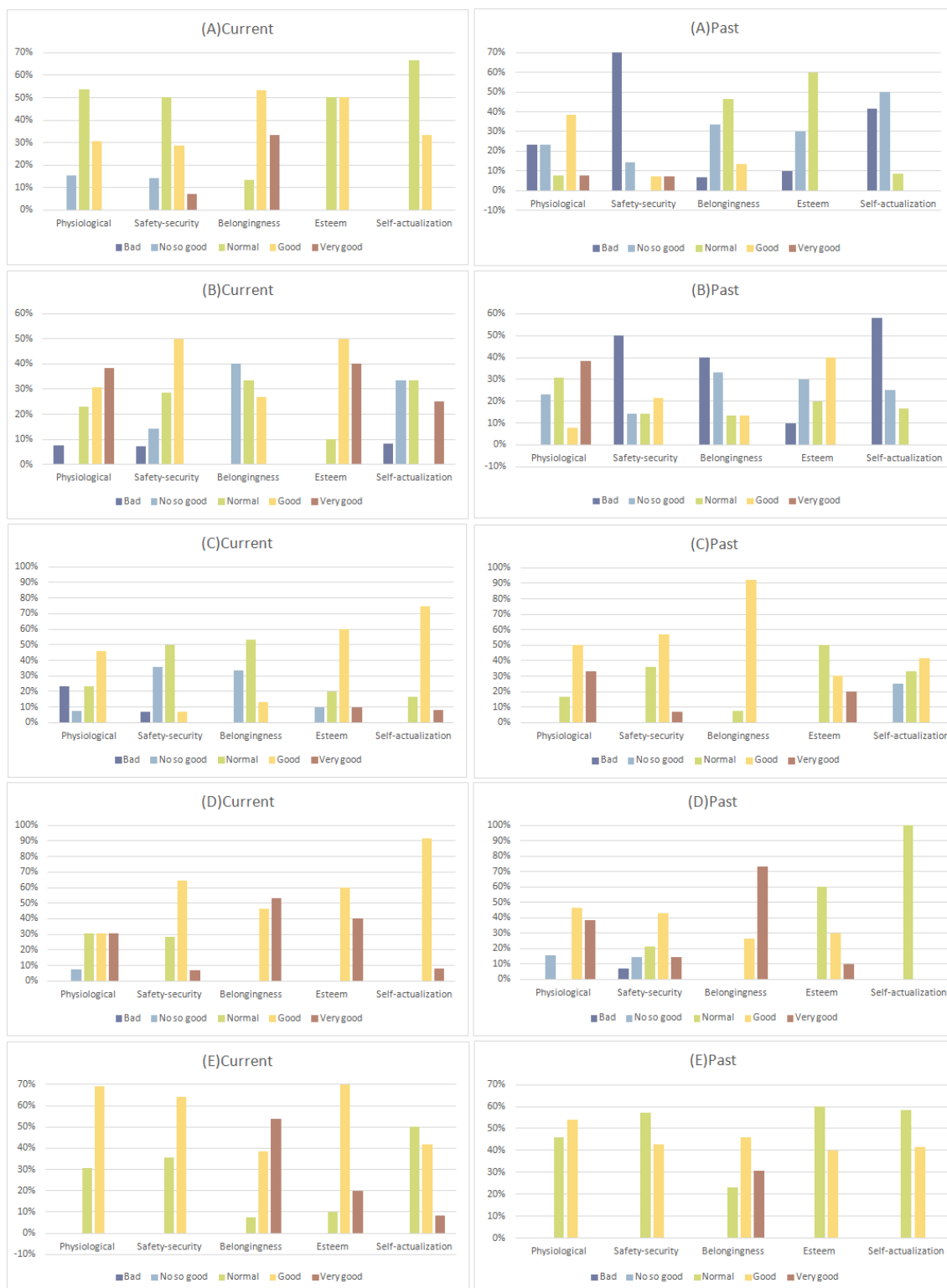
はじめに、単純集計から分析をしてみたい。たとえば「普通」から「とてもよい」までのポジティブな範囲にどれくらいチェックをしているかを計算し、「よくない」あるいは「それほどでもない」というネガティブな回答との対比で、その欲求の満足を考え、分析する。その後、より詳細な分析に進み、相関係数や、因子分析などの統計分析を行い、総合的な考察を行っていく。

本調査では年齢、性別、結婚状況や仕事といった、多様な属性を収集している。その中でも、分析の一つの視点として学校教育歴をコーホート要因として捉えてみることにした。子供の頃の欲求満足に対して、家族の経済的要因が特に学校歴に影響すると想定されるため、過去と現在の変化を分析することに役立つのではないかと考えたためである。そのため、次節以降の分析で、学校教育歴による分析を活用していくこととする。

## 第六節 調査結果（１）キー・パースン調査の分析から分かること

まず初めに、キー・パースンのデータから見ていきたい。次の図 6-4 は、キー・パースン 5 名の回答を、個別に集計したものである。

図 6-4：各調査対象者の回答割合集計結果（Current：現在について／Past：過去について）



Current						Past					
						A					
	Bad	No so good	Normal	Good	Very good		Bad	No so good	Normal	Good	Very good
Physiological	0%	15%	54%	31%	0%	100%	23%	23%	8%	38%	8%
Safety-security	0%	14%	50%	29%	7%	100%	71%	14%	0%	7%	7%
Belongingness	0%	0%	13%	53%	33%	100%	7%	33%	47%	13%	0%
Esteem	0%	0%	50%	50%	0%	100%	10%	30%	60%	0%	0%
Self-actualization	0%	0%	67%	33%	0%	100%	42%	50%	8%	0%	0%
						B					
	Bad	No so good	Normal	Good	Very good		Bad	No so good	Normal	Good	Very good
Physiological	8%	0%	23%	31%	38%	100%	0%	23%	31%	8%	38%
Safety-security	7%	14%	29%	50%	0%	100%	50%	14%	14%	21%	0%
Belongingness	0%	40%	33%	27%	0%	100%	40%	33%	13%	13%	0%
Esteem	0%	0%	10%	50%	40%	100%	10%	30%	20%	40%	0%
Self-actualization	8%	33%	33%	0%	25%	100%	58%	25%	17%	0%	0%
						C					
	Bad	No so good	Normal	Good	Very good		Bad	No so good	Normal	Good	Very good
Physiological	23%	8%	23%	46%	0%	100%	0%	0%	17%	50%	33%
Safety-security	7%	36%	50%	7%	0%	100%	0%	0%	36%	57%	7%
Belongingness	0%	33%	53%	13%	0%	100%	0%	0%	8%	92%	0%
Esteem	0%	10%	20%	60%	10%	100%	0%	0%	50%	30%	20%
Self-actualization	0%	0%	17%	75%	8%	100%	0%	25%	33%	42%	0%
						D					
	Bad	No so good	Normal	Good	Very good		Bad	No so good	Normal	Good	Very good
Physiological	0%	8%	31%	31%	31%	100%	0%	15%	0%	46%	38%
Safety-security	0%	0%	29%	64%	7%	100%	7%	14%	21%	43%	14%
Belongingness	0%	0%	0%	47%	53%	100%	0%	0%	0%	27%	73%
Esteem	0%	0%	0%	60%	40%	100%	0%	0%	60%	30%	10%
Self-actualization	0%	0%	0%	92%	8%	100%	0%	0%	100%	0%	0%
						E					
	Bad	No so good	Normal	Good	Very good		Bad	No so good	Normal	Good	Very good
Physiological	0%	0%	31%	69%	0%	100%	0%	0%	46%	54%	0%
Safety-security	0%	0%	36%	64%	0%	100%	0%	0%	57%	43%	0%
Belongingness	0%	0%	8%	38%	54%	100%	0%	0%	23%	46%	31%
Esteem	0%	0%	10%	70%	20%	100%	0%	0%	60%	40%	0%
Self-actualization	0%	0%	50%	42%	8%	100%	0%	0%	58%	42%	0%

出典：筆者作成

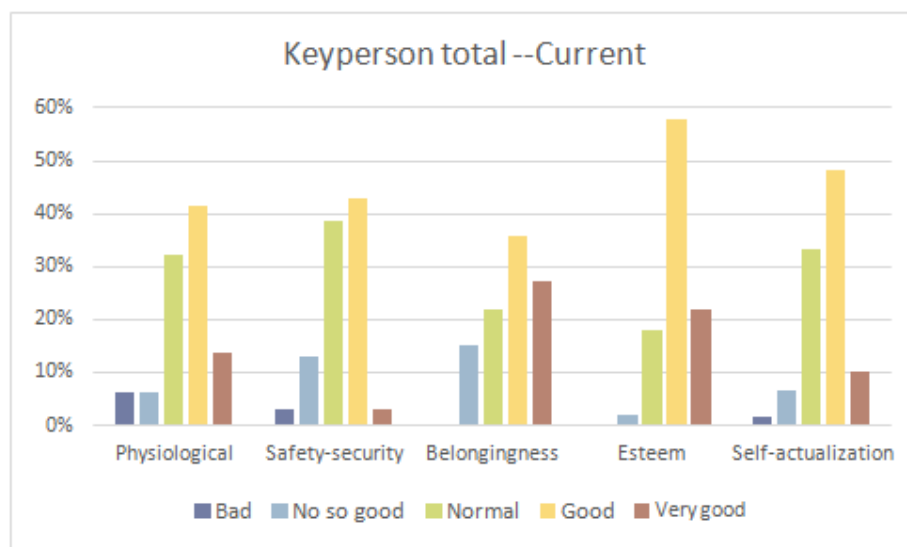
図の左側が質問に対する現在（Current）の評価について、右側が、過去（Past）の評価となっている。それぞれ、例えば生理的欲求の「悪い」にチェックを入れている割合や、「とても良い」にチェックを入れた割合を棒グラフの形で示している。

5名とも、大人になって状況の改善があり、また学校歴が長い人ほど、子供の頃の状況により評価をしているように見られる。

次に、図 6-5 では、5名の回答を一つに合算してグラフに集計したものを示している。ここでは、「よくない～とてもよい」について、5名分を合わせて1つとしてみた場合の回答の状況を割合で示している。さらに、図 6-6 は、5名のそれぞれの状況を一つの表で比較できるように整理している。具体的には 5名について、それぞれの欲求段階で「普通～とても良い」に回答した割合（つまり、回答のなかでも、ポジティブな回答の割合）のみを算出した。これにより 1つのグラフでキー・パースンの間の比較ができるようになっている。例えば図 6-6 で、A は、過去の生理的欲求に関する質問のうち、50%強が「普通～とても良い」というポジティブな範囲で回答をしていることが分かり、生理的欲求の満足度はおよそ中程度という見方ができる。

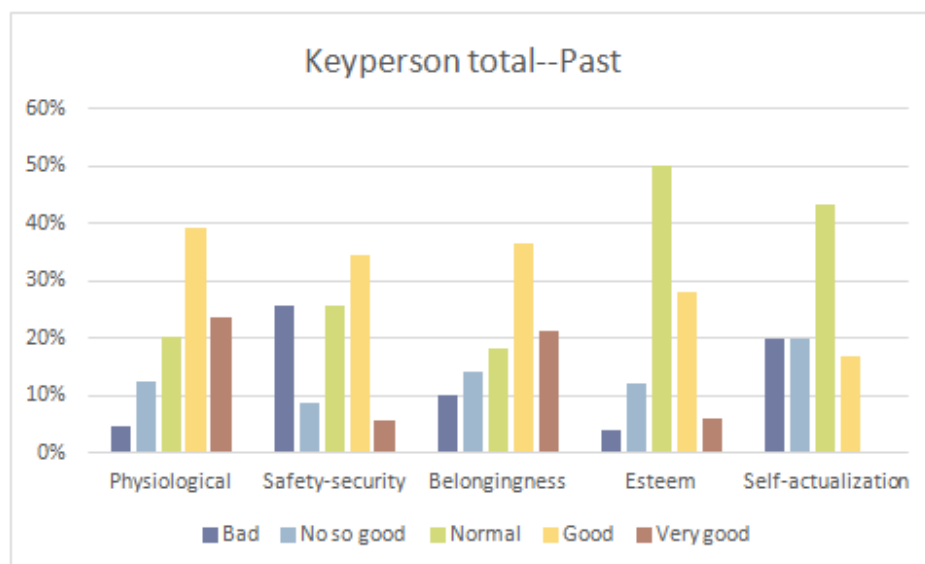
図 6-5 : 5名の総計による集計

【現在について】



Current	Bad	No so good	Normal	Good	Very good	Total
Physiological	6%	6%	32%	42%	14%	100%
Safety-security	3%	13%	39%	43%	3%	100%
Belongingness	0%	15%	22%	36%	27%	100%
Esteem	0%	2%	18%	58%	22%	100%
Self-actualization	2%	7%	33%	48%	10%	100%

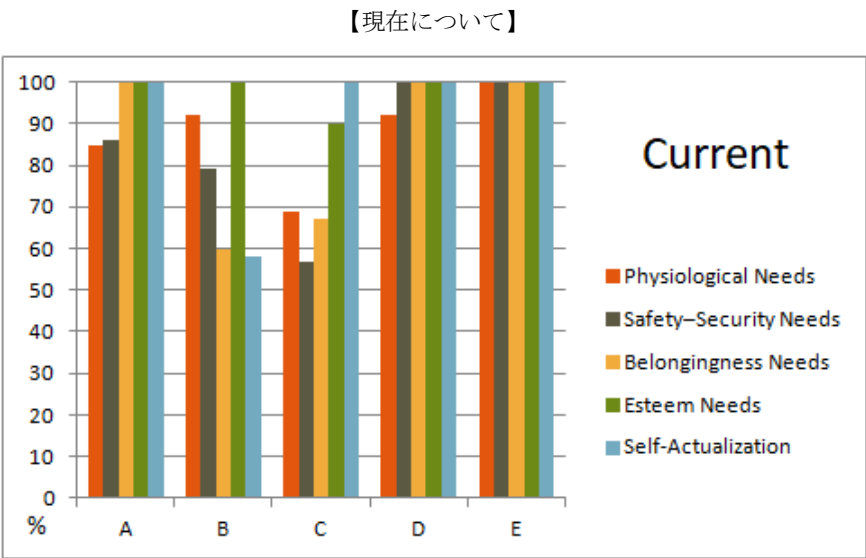
【過去について】



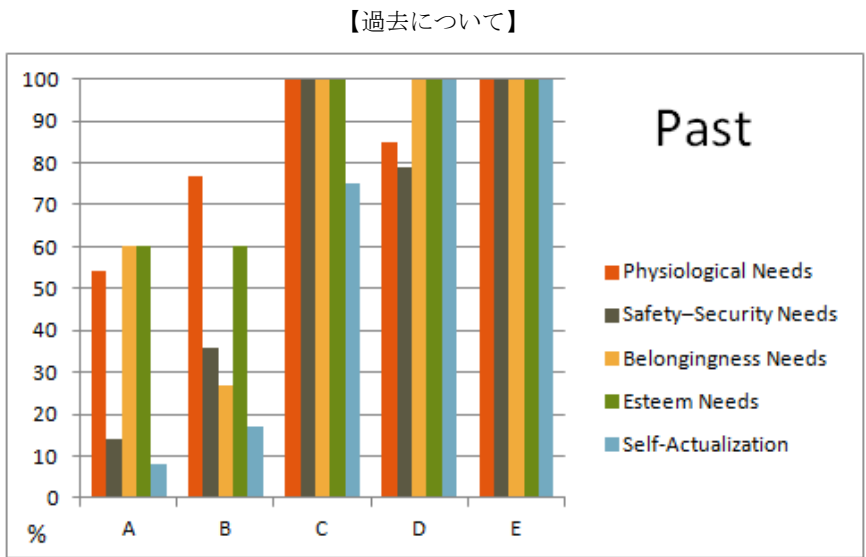
Past	Bad	No so good	Normal	Good	Very good	Total
Physiological	5%	13%	20%	39%	23%	100%
Safety-security	26%	9%	26%	34%	6%	100%
Belongingness	10%	14%	18%	37%	21%	100%
Esteem	4%	12%	50%	28%	6%	100%
Self-actualization	20%	20%	43%	17%	0%	100%

出典：筆者作成

図 6-6 : 5 名それぞれの過去の各階層の満足度（「普通～とてもいい」へのチェック率）



Current(%)	A	B	C	D	E
Physiological Needs	85	92	69	92	100
Safety-Security Needs	86	57	100	100	100
Belongingness Needs	100	60	67	100	100
Esteem Needs	100	100	90	100	100
Self-Actualization	100	58	100	100	100



Past(%)	A	B	C	D	E
Physiological Needs	54	77	100	85	100
Safety-Security Needs	14	36	100	79	100
Belongingness Needs	60	27	100	100	100
Esteem Needs	60	60	100	100	100
Self-Actualization	8	17	75	100	100

出典：筆者作成

図 6-5 で 5 名の合算で見た場合は、キー・パースンたちは自尊の欲求や、自己実現の欲求を中心に大幅に改善していることが読み取れる。ただ、図 6-4 によって 5 名を個別に比べると、学校教育歴が長い方が全体の満足度が高いように見られる。また図 6-6 を見た時、かならずしも学校教育歴の長さに比例せず、不規則な変化もみられることが分かる。たとえば、最も学校教育歴が長く修士を卒業した C が、大人になって満足度が下がっている点である。子供の頃の欠乏が満たされて自己実現も急上昇したケース A、欠乏はかなり満たされたが自己実現はあまり変化していないケース B、子供の頃より欠乏欲求の満足が低下したにもかかわらず自己実現は上昇しているケース C、もともと良好で、大人になってからさらに良好な E と D の 4 つのタイプがみられ、ばらつきがある。学校教育歴はもっとも短い A が、修士課程を修了した C よりも、大人になってからの満足度が高くなっていることは興味深い。

子供の頃に関するポジティブな回答の割合が比較的少ない A と B は、地方出身者であった。A は少数民族で狩猟民族であり、子供の頃は家がなく雨をしのぎ寒さをしのぐために、肉体的な厳しさを感じていたとヒアリングで回答している。B については、家族の酒癖が悪く、家庭環境に辟易していたと振り返る。理由は異なるが、これらが子供時代の安全欲求の満足度の低さに反映しているとみられる。C と D は、子供の頃の経済状況が周囲と比較して良好であったとしており、子供の頃の満足度が高い。E は周囲より貧しく、苦勞したと語るが、前向きな捉え方によりネガティブな回答とならなかったとみられる。C のように大人になってから生理的欲求や安全欲求が低くなるケースについては、首都圏の大気、水質汚染、治安への不信などが影響していることがヒアリングより分かった。また、所属性欲求の満足度が相対的に低くなる B や C のケースは、競争社会の中で忙しく、思うような対人交流ができないことが影響していると述べる。B については比較的、慎重な回答をする人物であることも満足度が低いことに影響しているとみられ、キー・パースン個人の性格が回答に影響している部分も見受けられる。

グラフの傾向から、自己実現指標は大人になるとどの人も高まっているが、子供の頃はそれぞれ違っていた。このため、大人になる過程では、学校教育歴に関係のない要因によって自己実現欲求を満足するような何らかの変化があったといえるであろう。ただ、どの調査対象者も、相対的に子供の頃の承認欲求の満足度が高い。子供の頃、欲求の満足が高い項目から数えると、承認欲求はどれも 1 番か 2 番目となっている。もしそうであるとすると、子供の頃にすでに自己実現的欲求に進むステップに近づいていたといえるかもしれない。この点は注目する必要がある。

承認欲求の効果について考察をすると、心理学者ローゼンバーグの自尊心の心理学的効果が参考になる。人は高い自尊感情を持つことによって、(a)ストレス耐性が強まり、(b)達成への強い動機付けをもち、(c)他者と接する際にあまり緊張せず好意的に評価される、な

どのポジティブな面がもたらされるとする<sup>66</sup>。すなわち、自尊心がある場合には目的に向かって（動機付け）自己犠牲を惜しまず（ストレス耐性）努力できるということである。また、経営の成功理論であるダニエル・キムの「成功循環モデル」Kim（2011）では、組織活動において、①関係の質➡②思考の質➡③行動の質➡④結果の質の順で成功する組織の在り方を説いているが、はじめに人間の関係の質を向上させること、すなわち相互承認が成功の鍵であるとし、ここでも承認欲求の重要性が指摘されている。承認欲求が相対的に満たされていたとすると、自己実現的欲求に近い状態となると考えられる。しかし、グラフの傾向からは、承認欲求以外の項目では満足度が低い場合も多い。欠乏欲求の満足度にばらつきがあることについて、これが自己実現を妨げるかという点に関しては、欲求は100%満足していなければ次の段階に進めない訳ではなく、各階層への移行は柔軟であるとマズローは指摘しており（マズロー 1998：83）、他の欲求階層の満足度が低いからと言って、必ずしもマズロー理論の整合性が崩れるというわけでもない。承認欲求がよく満足されていたことは、自己実現に向けて生きるステップが整っていたという可能性が考えられる。つまり、キー・パースンとして変化発展していく中で、承認欲求はよい影響を与えていた可能性が考えられるであろう。

以上から、記述統計による仮説への検討結果としては、ほとんどのキー・パースンが自己実現欲求を100%ポジティブに評価していた点（図6-6）で、自己実現的人間であると、まずは判断できよう。次節では、一般の標本を参照して、比較を通して知見を深めたい。

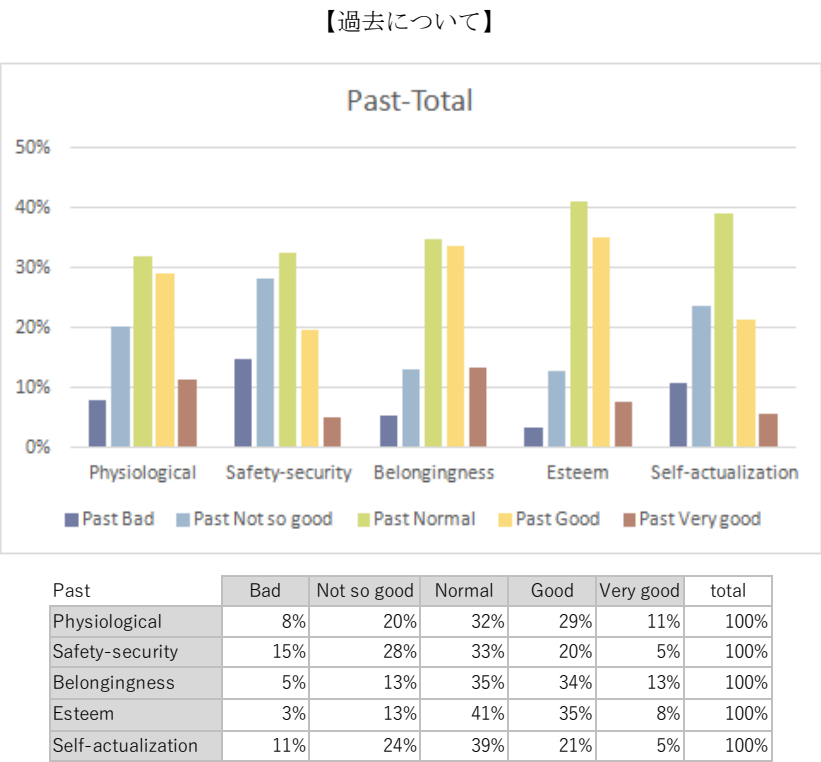
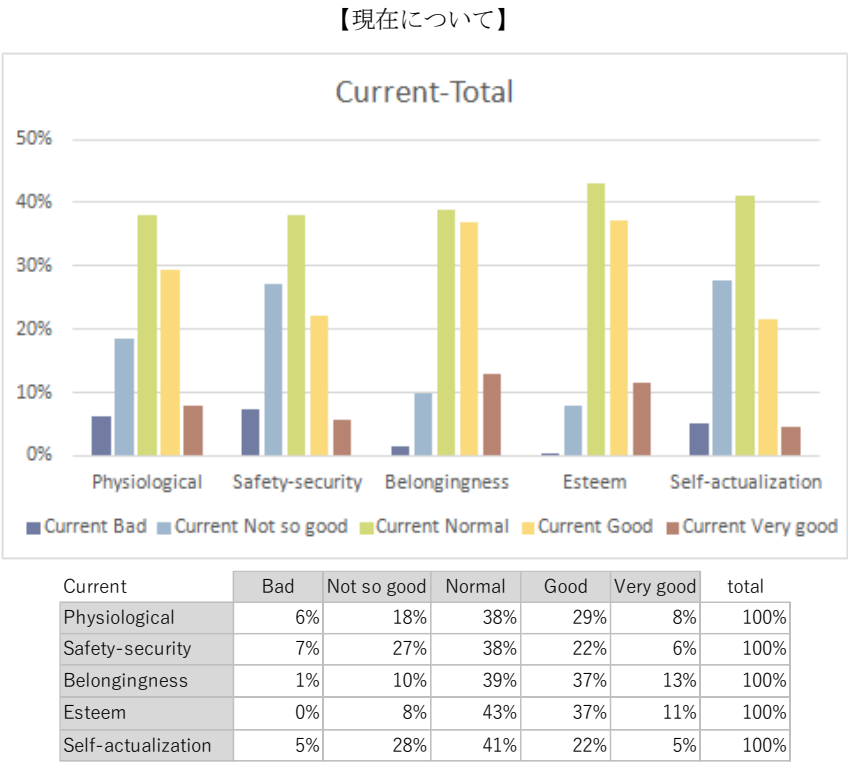
## 第七節 調査結果（2）一般標本調査の分析から分かること

まず初めに、一般標本として集めた144名の回答の総計を示したものを図6-7で示した（キー・パースンの図6-5に対応）。図6-8では学校教育歴別に分け、「普通～とても良い」のポジティブ回答割合の集計結果を示した（キー・パースンの図6-6に対応）。最後に、図6-9において学校教育歴別のグループごとに過去と現在の回答状況を示した（キー・パースンの図6-4に対応）。

---

<sup>66</sup> 藤原（2009：67）におけるRosenburg（1965）について指摘を参照。

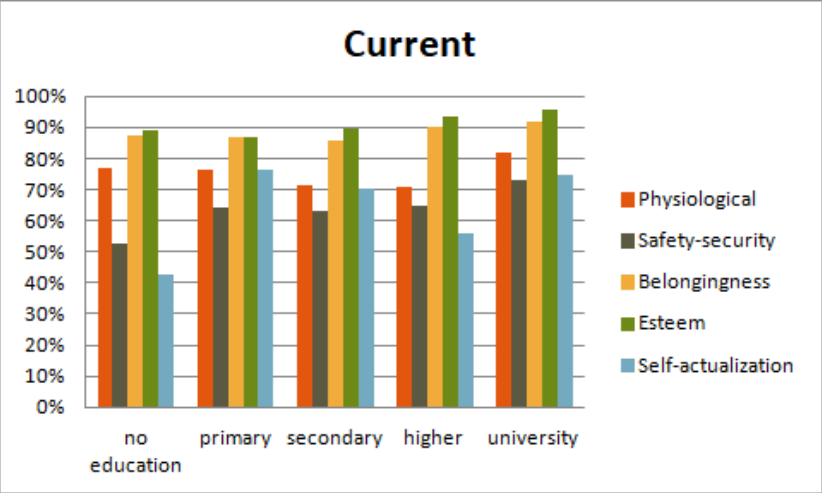
図 6-7：一般標本の回答全体を合算して見た場合の欲求階層別満足度



出典：筆者作成

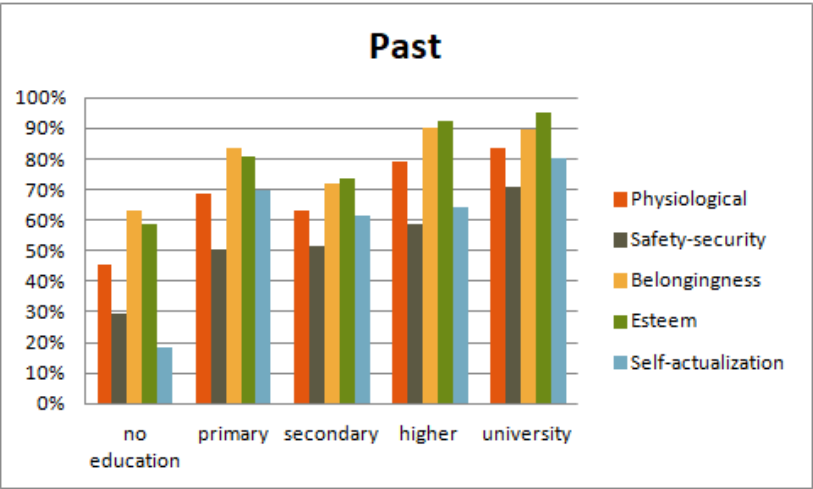
図 6-8：一般標本全体を学校教育歴別のグループ毎に合算して一覧にして見た場合の欲求階層別満足度

【現在について】



Current	no education	primary	secondary	higher	university
Physiological	77%	76%	71%	71%	82%
Safety-security	52%	64%	63%	65%	73%
Belongingness	87%	87%	86%	90%	92%
Esteem	89%	87%	89%	94%	95%
Self-actualization	43%	76%	71%	56%	75%

【過去について】



Past	no education	primary	secondary	higher	university
Physiological	46%	69%	63%	79%	84%
Safety-security	29%	50%	52%	59%	71%
Belongingness	63%	83%	72%	90%	90%
Esteem	59%	81%	74%	92%	95%
Self-actualization	19%	70%	61%	64%	80%

出典：筆者作成

図 6-9：一般標本全体を学校教育歴別グループ毎に合算して見た場合の欲求階層別満足度



Current						Past						
no education												
	Bad	Not so good	Normal	Good	Very good		Bad	Not so good	Normal	Good	Very good	
Physiological	4%	19%	32%	26%	19%	100% Physiological	15%	40%	34%	9%	3%	100%
Safety-security	20%	28%	33%	7%	12%	100% Safety-security	38%	33%	22%	2%	5%	100%
Belongingness	2%	10%	56%	16%	16%	100% Belongingness	8%	29%	43%	14%	6%	100%
Esteem	2%	9%	56%	14%	19%	100% Esteem	14%	27%	43%	12%	3%	100%
Self-actualization	19%	38%	22%	13%	7%	100% Self-actualization	51%	31%	17%	2%	0%	100%
primari education 1~5year												
	Bad	Not so good	Normal	Good	Very good		Bad	Not so good	Normal	Good	Very good	
Physiological	6%	17%	49%	25%	2%	100% Physiological	7%	25%	46%	20%	4%	100%
Safety-security	7%	29%	45%	18%	0%	100% Safety-security	15%	35%	34%	16%	0%	100%
Belongingness	2%	11%	55%	28%	4%	100% Belongingness	5%	12%	52%	27%	4%	100%
Esteem	0%	13%	61%	25%	1%	100% Esteem	2%	17%	53%	26%	2%	100%
Self-actualization	3%	21%	59%	16%	1%	100% Self-actualization	9%	21%	46%	21%	3%	100%
secondary education 6~10 year												
	Bad	Not so good	Normal	Good	Very good		Bad	Not so good	Normal	Good	Very good	
Physiological	6%	23%	43%	22%	6%	100% Physiological	11%	26%	30%	24%	9%	100%
Safety-security	8%	29%	42%	18%	3%	100% Safety-security	19%	29%	31%	16%	4%	100%
Belongingness	3%	11%	45%	32%	9%	100% Belongingness	9%	19%	34%	26%	12%	100%
Esteem	1%	10%	46%	35%	9%	100% Esteem	6%	21%	46%	22%	7%	100%
Self-actualization	6%	24%	46%	19%	6%	100% Self-actualization	12%	27%	42%	15%	3%	100%
higher education 11~12 year (11: SLC passed 12: 12year passed)												
	Bad	Not so good	Normal	Good	Very good		Bad	Not so good	Normal	Good	Very good	
Physiological	8%	21%	34%	32%	5%	100% Physiological	6%	15%	32%	36%	12%	100%
Safety-security	5%	31%	39%	21%	4%	100% Safety-security	9%	32%	38%	15%	6%	100%
Belongingness	0%	10%	35%	42%	13%	100% Belongingness	3%	7%	35%	42%	13%	100%
Esteem	0%	6%	40%	41%	12%	100% Esteem	0%	8%	37%	47%	8%	100%
Self-actualization	3%	41%	32%	22%	2%	100% Self-actualization	3%	33%	38%	20%	6%	100%
University education 13~14 year (13: Bachelor 14: Master)												
	Bad	Not so good	Normal	Good	Very good		Bad	Not so good	Normal	Good	Very good	
Physiological	5%	13%	33%	38%	12%	100% Physiological	5%	11%	27%	38%	18%	100%
Safety-security	5%	22%	32%	32%	9%	100% Safety-security	9%	20%	32%	32%	7%	100%
Belongingness	1%	8%	24%	48%	20%	100% Belongingness	3%	7%	25%	43%	22%	100%
Esteem	0%	5%	31%	48%	16%	100% Esteem	1%	3%	33%	50%	12%	100%
Self-actualization	3%	23%	40%	28%	6%	100% Self-actualization	6%	14%	38%	32%	10%	100%

出典：筆者作成

図 6-7 から分かることは、欲求満足は大人になると若干改善しているように見られることである。ほぼすべての項目で、ネガティブな回答が減り、ポジティブな回答が増えていることが分かる。しかしながらグラフの変化は目視では分かりづらいほどの微妙な改善であり、大きな変化かどうかは判断が難しい。そこで、図 6-8 において、学校教育歴別の総計を出してみることにした。ここでは、キー・パースン分析の図 6-6 と同じ集計方法で、学校教育歴別に、「普通～とても良い」の範囲にチェックした割合で表示している。すると、子供の頃に関して学校教育歴が長いほうが全体の満足度が高まっていることがよく分かる。しかし、これが大人になると、全体の満足度が高まり、グラフでは違いが分かりづらい状態にまで高まっている。とはいえ、学校教育歴が長い方が安全性欲求・所属性欲求・承認欲求の満足度が相対的に高く、生理的欲求と自己実現欲求の学歴別の差は分かりづらい。特に、自己実現欲求についてみると、学校教育歴の上昇とともに改善しているとは言えず、逆に高学歴な場合には子供のころより若干悪化していることが分かる。安全性欲求にある程度の学校教育歴による差が見られるのは、経済状態からくる生活保障感の不安によるものではないかと推察できる。しかし、高学歴層で自己実現欲求が改善しないのはなぜであろうか。この図では、「普通～とても良い」を一元化しているため見やすいが、一方

で大雑把ではある。そこで、5段階の回答を区別したものとして、図6-9を示した。

図6-9を見ると、学校経験のない人々の欄でのみ、子供の頃に「悪い・それほどでもない」といった回答が過去に大きく目立ち、少しでも学校に行っていると、悪いとの回答は少なくなることが見て取れる。一方、「普通～とても良い」に当たるプラスの面を見ると、学校教育歴が長くなるにつれて、回答が多いことが見て取れる。つまり、一般標本を見る場合、学校教育歴の長いほうが、よさの度合いが強いことが分かる。

しかし、興味深いのは、やはり **Higher** 及び、**University** レベルの教育を受けた者の方が、大人になってからの欲求満足度が全体的に悪化している項目が多いということである。特に、本論文が関心を向ける自己実現レベルや承認欲求は、ポイントが下がっていることが多い。特に自己実現欲求では、子供の時よりも「あまり良くない」といった部分が増えている。学校教育歴が長い方が、人生の選択肢も増えて様々な活動がしやすいという前提に立つとして、若干の悪化をしているのはなぜだろうか。キー・パースンの場合には学校教育歴に関わらず大人になってすべての回答が「普通～とても良い」の範囲に収まっているのとは大いに違う点である。以上の一般標本の記述統計から考察したことを以下にまとめた。

- 1) 学校教育歴が長い方が、全体の欲求満足は今も昔もよい。
- 2) 自己実現欲求について学校教育歴別の過去と現在の変化を見ると、学校教育歴の長い方が大人になると自己実現欲求の満足が微妙に悪化する。
- 3) 学校教育歴の短い人は、他の層に比べて子供から大人になって大幅な改善がみられる。

以上について、キー・パースンの回答と比較すると興味深いことが分かる。第一に、一般標本も、キー・パースンも、子供の頃よりも大人の頃に全体の回答が良くなるのは同じである。第二に、学校教育歴が長いほど、子供の頃の各回答の傾向はよく、この点も共通している。キー・パースンと一般標本の違いとしては、5人とも大人になったときに学校教育歴に関係なく自己実現欲求の改善はとても大きい（ただし、キー・パースン B のみ若干改善の度合いは低い）。ところがキー・パースンたちは自己実現欲求が改善されたにもかかわらず、生理的欲求から所属性欲求については、学歴に比例せず大人になってからの回答にばらつきがみられる。例えば、修士を卒業した C では、大人になってから生理的欲求から所属性欲求に「悪い・いうほどでもない」が現れてくる。また、SLCを終えた B は大人になって自己実現欲求はよくなっているが、それでも「悪い・いうほどでもない」が残っており、所属性欲求も「いうほどでもない」との回答が大きくなっている。

キー・パースンも、一般の多くの人々と同じで特段すべての欲求がとても良好というわけではないようである。しかし、大人になると自己実現の満足度が高いという点が際立っているであろうことが分かる。この点はキー・パースンの特徴である可能性がある。

キー・パーソンは学校教育歴や子供の頃の暮らしの環境について育ちが様々であるにもかかわらず、一般と違って大人になって自己実現的欲求が大幅に満足しているという共通点については、学校教育歴、それを支える経済状態や家庭環境ではなく、むしろ他の要因が各人の人生に影響を与えているということが推察される。そこで、次に記述統計の分析から一步踏み込み、相関分析と統計的分析を行い、これまでの推察についてさらに考察を深めたい。

## 第八節 5段階欲求の因子分析による確認

今回の調査で使用した質問票の質問数は一人当たり合計 64 項目に上る。非常に多くの質問内容が含まれているため、この質問項目について因子分析をすることで、共通因子が見られるかを統計的に確認することとした。

今回、統計解析に利用するのは、SPSS Statistics バージョン 24.0.0.0 である。こちらに回答者すべての回答を読み込み、質問全項目について因子分析を行った。

まず、マズローの欲求階層論が 5 段階とされているために、全質問に対し、5 つの因子抽出の分析にかけ、結果を見てみることにした。結果を見ていくにあたり、64 の質問を判別しやすくするように、各質問項目にそれぞれ記号を割り当てることにした。表記は次の通りの規則によって割り当てた。

表 6-10：欲求階層に対する対応記号表

欲求階層名	過去	現在
(1) 生理的欲求	1p	1c
(2) 安全性欲求	2p	2c
(3) 所属性欲求	3p	3c
(4) 承認欲求	4p	4c
(5) 自己実現欲求	5p	5c

(表示例) 現在の生理的欲求の質問 1 番目 ➡ 1c1

(意味：現在‘current’の欲求第 1 階層の質問 1 つ目)

過去の承認欲求の質問 8 番目 ➡ 4p8

(意味：過去‘past’の欲求第 4 階層の質問 8 つ目)

※詳細な対応表は表 6-4 にも記載している

次の表 6-11 は、抽出した 5 因子に対してそれぞれの質問項目がもつ寄与率を示す因子負荷量が析出されたものである。因子負荷量は、数値が高いほうが、該当する因子との関係が強い（寄与率が高い）と見ることができ、負荷量が小さいと、その因子との関連は少ないと見ることができる。したがって、ある因子に対する寄与率の高い質問項目の集合が 1 つの共通の意味を持つグループであると見ることができる。

分析結果によると、過去回答についての 5 つの成分を取り出すと、58%程度の説明ができるという結果となった。現在については同じように 55%程度説明できるとする結果が出た。質問の量が 64 に及び、回答者数が 144 あることを考えると、5 つの因子で 5 割の説明力であれば、因子分析の結果は参考に値するといえる。

そこで、表では因子負荷量の 0.5 以上のものを網掛けで見やすくしている。表の網掛け部分のまとまりを見てみると、ちょうどマズローの主張する欲求 5 段階の階層に沿って因子が分類できていることが分かる。具体的には、過去の質問リストを見ると 5 段階欲求が 4 つの因子に分けられ、一方、現在の回答に関しては、そのまま 5 つの因子に分けられそうである。具体的には以下のような共通因子を見出せる。

#### 【過去】

成分 1 : 自己実現欲求

成分 2 (および 4) :

愛情と所属の欲求および承認欲求

成分 3 : 生理的欲求

成分 5 : 安全性欲求

#### 【現在】

成分 1 : 生理的欲求

成分 2 : 自己実現欲求

成分 3 : 愛情と所属の欲求

成分 4 : 承認欲求

成分 5 : 安全性欲求

表 6-11：欲求 5 段階理論に基づいた 5 因子抽出の結果（回転後の因子負荷量）

	過去）回転後の成分行列*				
	成分(58.348%)				
	1(13.9%)	2(12.4%)	3(10.9%)	4(10.8%)	5(10.2%)
1p1	0.693	0.008	0.002	0.032	0.162
1p2	0.680	0.164	0.060	0.174	0.402
1p3	0.075	0.165	0.655	0.162	-0.021
1p4	0.284	0.308	0.414	-0.138	0.219
1p5	0.168	-0.115	0.557	-0.109	0.209
1p6	-0.061	0.078	0.480	-0.020	0.565
1p7	-0.084	0.126	0.563	0.028	0.061
1p8	0.605	0.192	0.179	-0.044	0.091
1p9	0.364	0.165	0.494	-0.243	0.221
1p10	0.184	0.050	0.471	0.164	0.052
1p11	-0.281	0.158	0.681	0.323	-0.071
1p12	-0.239	0.184	0.639	0.372	0.175
1p13	0.456	0.096	0.001	0.289	-0.113
2p1	0.333	0.280	0.204	0.327	0.377
2p2	0.239	0.126	0.274	0.305	0.262
2p3	0.148	0.473	0.195	0.494	0.026
2p4	-0.163	-0.137	0.155	0.537	0.553
2p5	0.203	-0.055	0.141	0.234	0.572
2p6	0.246	0.211	0.449	0.278	0.512
2p7	0.420	0.137	0.027	0.005	0.753
2p8	0.236	0.158	0.117	-0.022	0.771
2p9	0.073	0.183	0.057	-0.275	0.735
2p10	-0.083	0.642	-0.004	-0.069	0.453
2p11	-0.029	0.046	0.057	0.095	0.684
2p12	0.061	0.101	-0.028	0.081	0.862
2p13	0.724	-0.041	0.148	0.173	0.264
2p14	0.580	-0.104	-0.049	0.372	0.195
3p1	0.252	0.529	0.182	0.276	0.197
3p2	0.196	0.626	0.253	-0.013	0.283
3p3	0.660	0.239	-0.091	-0.024	0.278
3p4	0.744	0.291	-0.114	-0.234	0.174
3p5	0.315	0.359	0.256	0.314	0.147
3p6	0.177	0.824	0.215	0.159	0.123
3p7	0.020	0.798	0.125	0.057	0.056
3p8	-0.020	0.577	0.440	0.347	0.091
3p9	0.672	0.128	-0.243	-0.299	0.295
3p10	0.297	0.415	-0.326	-0.039	0.412
3p11	0.277	0.465	0.245	0.418	0.279
3p12	-0.104	0.336	0.067	0.654	0.060
3p13	-0.015	-0.124	0.329	0.690	0.074
3p14	0.085	0.331	0.462	0.539	0.013
3p15	0.004	0.479	0.333	0.334	0.245
4p1	0.150	0.518	0.036	0.457	0.130
4p2	0.041	0.555	0.228	0.419	0.379
4p3	0.004	0.724	0.069	0.362	0.283
4p4	0.019	0.582	0.459	0.258	0.209
4p5	0.192	0.465	0.048	0.285	-0.081
4p6	-0.207	0.261	0.040	0.648	0.053
4p7	0.208	0.088	0.020	0.602	0.099
4p8	0.080	0.232	0.009	0.779	-0.057
4p9	0.142	0.589	0.007	0.356	-0.096
4p10	0.292	0.575	-0.198	0.510	-0.030
5p1	0.128	0.324	0.134	0.670	0.035
5p2	0.503	0.034	0.625	0.265	0.210
5p3	0.031	0.310	0.521	0.130	0.219
5p4	0.497	0.068	0.537	0.181	0.331
5p5	0.531	0.164	0.102	0.412	0.322
5p6	0.515	0.032	0.460	0.118	0.399
5p7	0.624	0.002	0.329	0.227	0.158
5p8	0.640	0.430	0.281	0.059	0.038
5p9	0.559	0.037	0.638	0.154	-0.046
5p10	0.682	0.300	0.373	0.100	0.159
5p11	0.677	0.302	0.452	-0.092	-0.140
5p12	0.552	0.101	0.414	0.191	0.025

因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエカマックス法

a. 11 回の反復で回転が収束。

	現在）回転後の成分行列*				
	成分(55.312%)				
	1(12.6%)	2(11.4%)	3(11.1%)	4(11.0%)	5(9.1%)
1c1	0.652	-0.035	0.175	0.055	0.315
1c2	0.665	0.118	0.138	0.322	0.161
1c3	0.654	-0.102	0.223	-0.054	0.415
1c4	0.629	-0.014	0.332	-0.215	0.332
1c5	0.649	0.216	0.281	0.146	0.174
1c6	0.598	0.257	0.200	0.215	0.112
1c7	0.440	0.218	0.411	-0.329	0.332
1c8	0.617	0.127	0.053	0.295	0.378
1c9	0.436	0.361	0.129	0.013	0.306
1c10	0.502	0.142	0.303	0.084	0.099
1c11	0.524	0.331	0.187	-0.161	-0.207
1c12	0.513	0.281	0.187	-0.082	-0.127
1c13	0.575	0.347	-0.054	0.194	0.042
2c1	0.506	0.357	0.012	0.385	0.308
2c2	0.491	0.394	0.085	0.385	0.308
2c3	0.449	0.403	0.140	0.166	0.376
2c4	0.604	0.368	0.176	0.093	0.312
2c5	0.420	0.344	0.189	0.057	0.277
2c6	0.641	0.190	0.154	0.061	0.451
2c7	0.249	0.296	0.104	0.107	0.658
2c8	0.372	0.064	0.307	0.025	0.676
2c9	0.324	-0.031	0.095	0.112	0.682
2c10	-0.022	0.138	0.059	0.060	0.656
2c11	0.035	0.260	0.155	0.184	0.614
2c12	-0.090	0.142	0.013	-0.037	0.743
2c13	0.189	0.537	0.186	0.064	0.399
2c14	0.153	0.505	0.133	0.219	0.347
3c1	0.028	0.192	0.396	0.429	0.111
3c2	0.098	0.282	0.631	0.207	0.203
3c3	-0.152	-0.005	0.204	0.716	0.246
3c4	-0.297	0.106	0.429	0.564	0.211
3c5	0.155	0.178	0.484	0.408	0.092
3c6	0.137	0.174	0.626	0.282	0.189
3c7	0.244	0.141	0.475	0.471	0.197
3c8	0.205	-0.044	0.637	0.136	0.303
3c9	-0.185	0.300	0.225	0.527	0.277
3c10	-0.251	0.068	0.249	0.742	0.319
3c11	0.187	0.124	0.620	0.169	0.108
3c12	0.120	0.125	0.530	0.252	0.143
3c13	0.197	0.136	0.634	0.120	0.161
3c14	0.140	0.161	0.793	0.070	0.075
3c15	0.221	0.150	0.600	0.361	0.069
4c1	0.115	0.384	0.627	0.263	0.116
4c2	0.248	0.384	0.387	0.408	0.174
4c3	0.262	0.240	0.463	0.238	0.169
4c4	0.096	0.254	0.449	0.213	0.115
4c5	-0.066	-0.017	0.359	0.633	0.001
4c6	0.207	-0.010	0.158	0.767	0.111
4c7	0.352	0.057	0.125	0.646	0.091
4c8	0.289	0.284	0.117	0.563	-0.134
4c9	-0.023	0.254	0.331	0.224	0.105
4c10	0.088	0.239	0.107	0.705	-0.027
5c1	0.352	0.330	0.068	0.473	-0.104
5c2	0.242	0.709	0.241	0.134	0.049
5c3	0.070	0.713	0.101	0.103	0.325
5c4	0.226	0.745	0.157	0.036	0.154
5c5	-0.019	0.687	0.140	0.202	0.325
5c6	0.365	0.608	0.202	0.214	0.185
5c7	0.364	0.324	0.121	0.411	0.203
5c8	0.227	0.376	0.354	0.496	0.031
5c9	0.033	0.672	0.349	0.244	0.048
5c10	-0.019	0.657	0.388	0.068	0.351
5c11	0.357	0.340	0.277	0.187	0.279
5c12	0.274	0.616	0.097	0.178	0.250

因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエカマックス法

a. 28 回の反復で回転が収束。

出典：筆者作成

過去の回答に関しては、愛情と所属の欲求および承認欲求が一つのまとまりを帯びているように考えられるが、これは大きな括りで社会性欲求という因子とみることもできよう。この質問票が設定している質問の内容と実際の回答者の回答傾向から、うまく 5 段階欲求に沿った因子が抽出されたといえる。つまりマズローの欲求階層論の妥当性が見いだせたわけで、これを基に分析する有効性が見出だせたといえる。

## 第九節 平均値を利用した相関関係からの考察

前節まで見てきた図表では、一般標本について個別の回答者については見ておらず、全体の合計や学歴別の合計からの比較であった。各回答者における相互の関係性は分からなかった。本節からは、回答者を個別に見て相互の関連性を計算していくことで、より詳細な欲求階層間の関係を捉えてみたい。はじめに、平均値を利用した欲求階層間の相関分析を行い、続いて、統計解析によって因子分析から考察を行う。

次の表では、現在と過去について、それぞれ平均値を基にして算出した 5 段階の欲求階層間の相関関係を一覧で見ることができるようにした。質問票では、各欲求階層に対してそれぞれ 10~15 程度の質問項目があるが、すべての質問に対する相関係数を計算すると膨大な量となるため、欲求階層毎に平均値を求めることで相関関係を見とじた。回答は、それぞれ「悪い〜とても良い」がチェックされているが、ここではそれらを数量データとしてそれぞれの回答に対して 1~5 点を配分し、欲求カテゴリー毎の平均値をとる。ここではこの平均値をそれぞれの階層の満足度として見る。例えば、承認欲求のカテゴリーの全 10 質問中、悪いが 5 個、とても良いが 5 個の回答者あれば、 $(1 \times 5 + 5 \times 5) \div 10 = 3$  で、この回答者の承認欲求満足度は 3 とみる。

この場合、例で示したように回答に大きなばらつきがあっても平均化することによりそれを考慮しないため、この点には留意し、分析することとした。以上のようにして、それぞれの満足度について欲求階層間の相関を過去と現在に分けて見るができるようにしているのが次の表である。

表 6-12：平均値から算出した相関係数表（一般標本）

一般標本全体の相関											
		P1	P2	P3	P4	P5	C1	C2	C3	C4	C5
P1	Pearson の相関係数	1	.643**	.665**	.629**	.633**	.471**	.395**	.443**	.479**	.287**
	有意確率 (両側)		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.001
	度数	144	140	144	144	143	144	142	144	144	141
P2	Pearson の相関係数	.643**	1	.653**	.537**	.609**	.427**	.656**	.520**	.394**	.375**
	有意確率 (両側)	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	140	140	140	140	139	140	140	140	140	137
P3	Pearson の相関係数	.665**	.653**	1	.719**	.650**	.254**	.282**	.593**	.406**	.190*
	有意確率 (両側)	0.000	0.000		0.000	0.000	0.002	0.001	0.000	0.000	0.024
	度数	144	140	144	144	143	144	142	144	144	141
P4	Pearson の相関係数	.629**	.537**	.719**	1	.645**	0.096	.165*	.390**	.540**	0.131
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000		0.000	0.254	0.050	0.000	0.000	0.121
	度数	144	140	144	144	143	144	142	144	144	141
P5	Pearson の相関係数	.633**	.609**	.650**	.645**	1	.241**	.307**	.427**	.384**	.392**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000	0.000		0.004	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	143	139	143	143	143	143	141	143	143	141
C1	Pearson の相関係数	.471**	.427**	.254**	0.096	.241**	1	.641**	.487**	.440**	.527**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.002	0.254	0.004		0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	144	140	144	144	143	144	142	144	144	141
C2	Pearson の相関係数	.395**	.656**	.282**	.165*	.307**	.641**	1	.544**	.466**	.581**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.001	0.050	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000
	度数	142	140	142	142	141	142	142	142	142	139
C3	Pearson の相関係数	.443**	.520**	.593**	.390**	.427**	.487**	.544**	1	.627**	.524**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000
	度数	144	140	144	144	143	144	142	144	144	141
C4	Pearson の相関係数	.479**	.394**	.406**	.540**	.384**	.440**	.466**	.627**	1	.584**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000
	度数	144	140	144	144	143	144	142	144	144	141
C5	Pearson の相関係数	.287**	.375**	.190*	0.131	.392**	.527**	.581**	.524**	.584**	1
	有意確率 (両側)	0.001	0.000	0.024	0.121	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	
	度数	141	137	141	141	141	141	139	141	141	141

\*\*, 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

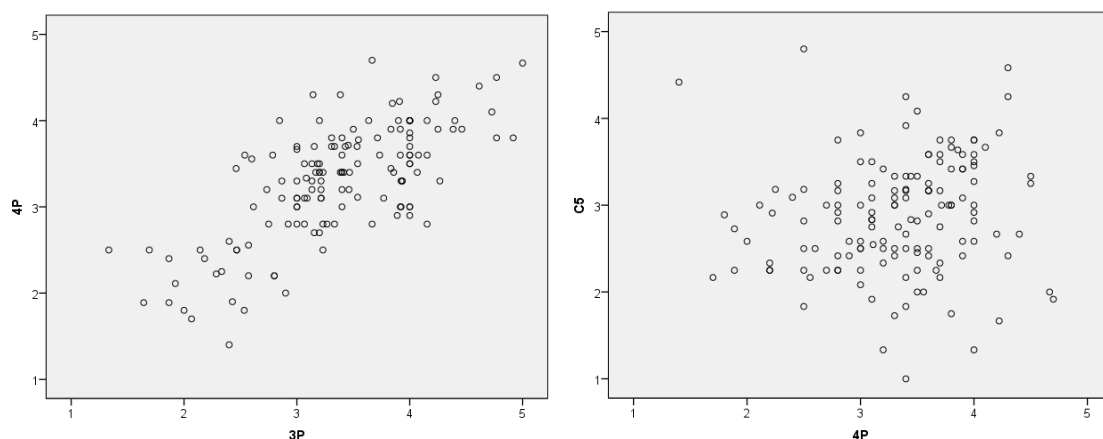
\*, 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

出典：筆者作成

この分析では、0.5 以上の相関係数（1%水準で有意）を見ていくこととし、その部分を網掛けしている。相関係数で見るのは、比較する項目同士の比例の関係性である。例えば X 軸 Y 軸のグラフで、横軸の数値が大きくなれば、縦軸の項目も大きくなるという、そういった連関性を見るものである。相関係数が高いほど、比較する項目同士は、お互いに関連していると判断できる分析方法である。図から分かるのは、子供の頃の 5 段階欲求階層は、どの階層もそれぞれ正の相関が強いことである（P と P の交差部分：表の左上半分）。しか

も、2P と 4P（過去の安全性欲求と承認欲求）の関連性を除き、その相関係数は押しなべて 0.6 以上であり、特に 3P と 4P（過去の所属性欲求と承認欲求）に関しては、相関係数 0.7 以上となっている。子供の頃のこうした相関係数の高さは、例えば所属性欲求の回答点数が高い人は、承認欲求も高いという関係性があることを意味する。参考に、2つの相関散布図を見てみよう。

図 6-10：散布図のサンプル（1）



出典：筆者作成

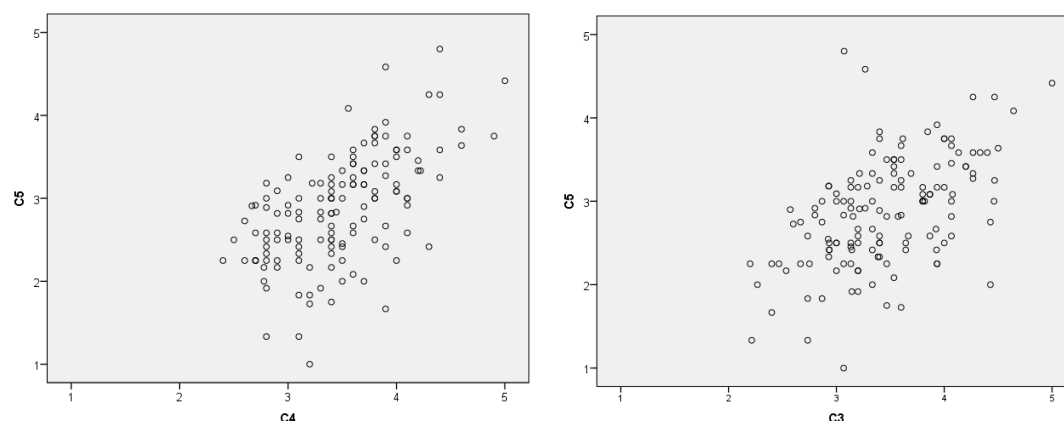
上図は、左が相関係数 0.719 の過去の所属性欲求(3P)と承認欲求(4P)の関係性を示した散布図であり、右は、相関係数の低い過去の承認欲求(4P)と、現在の自己実現欲求(5C)の関係性を示した散布図（相関係数 0.131）である。図を見るとわかるように、前者は、目視でも直線的な関係性が見られる。すなわち過去の所属性欲求の回答点数が高い人は、承認欲求も高く、逆に所属性欲求の点数が低い人は、承認欲求の点数も低い、という関係性がわかるのである。一方、相関係数の低い 4P と 5C（過去の承認欲求と現在の自己実現欲求）では直線的な関係性があるということが難しい。つまり、人によっては過去の承認欲求が高いが、現在の自己実現は低いし、またはその逆など、回答には相互に関連が見られないことが分かる。

したがってこの表から、過去の欲求の満足度は 5 段階すべてにおいて相互に正の比例関係が強いということが分かる。生理的欲求の満足度の高い人は自己実現的欲求まですべて 5 段階の欲求満足度が比較的高く、一方で、子供の頃の生理的欲求の満足度が良くない人は、子供の頃の他の 5 段階欲求の満足もよくなかった、というようにすべてが互いに正の相関を持っている。とはいえ、大人になると、こうした関係性が弱くなっていることがわかる。

現在の相関関係を示している領域を見ると（C と C の交差部分：表の右下半分）、相関係数が 0.5~0.6 に該当する項目が 7 項目あるが、子供の頃よりも全体的に関連性が弱くなっ

ていることが分かる。このうち、C1 と C2（現在の生理的欲求と安全欲求）、C3 と C4（現在の所属性欲求と承認欲求）の相関係数が 0.6 台である。つまり、現在の生理的欲求の満足度高いと、安全性欲求も満足度が高く、満足度が低いともう一方も低いということである。所属性欲求と承認欲求も同様である。興味深いのは、現在の欲求について、自己実現欲求の欄、すなわち C5 の部分を見てみると、すべての欲求階層との相関係数が 0.5 台となっていることである。つまり自己実現欲求は大人になっても他のすべての欲求の満足と関連性が比較的強く見られることがわかる。2 つの散布図を見てみよう。

図 6-11：散布図のサンプル（2）



出典：筆者作成

上図の左側は C4 と C5（現在の承認欲求と自己実現欲求）で、右側が C3 と C5（現在の所属性欲求と自己実現欲求）である。どちらも、目視で右肩上がりの関係が捉えられる。左側の方で考えると、相関係数 0.584（1%で有意）で、現在の承認欲求と自己実現欲求に相関関係があるといえる。また、所属性欲求と自己実現欲求はそれよりも少し弱い相関係数 0.524（1%水準で有意）で、こちらも正の相関がみられる。

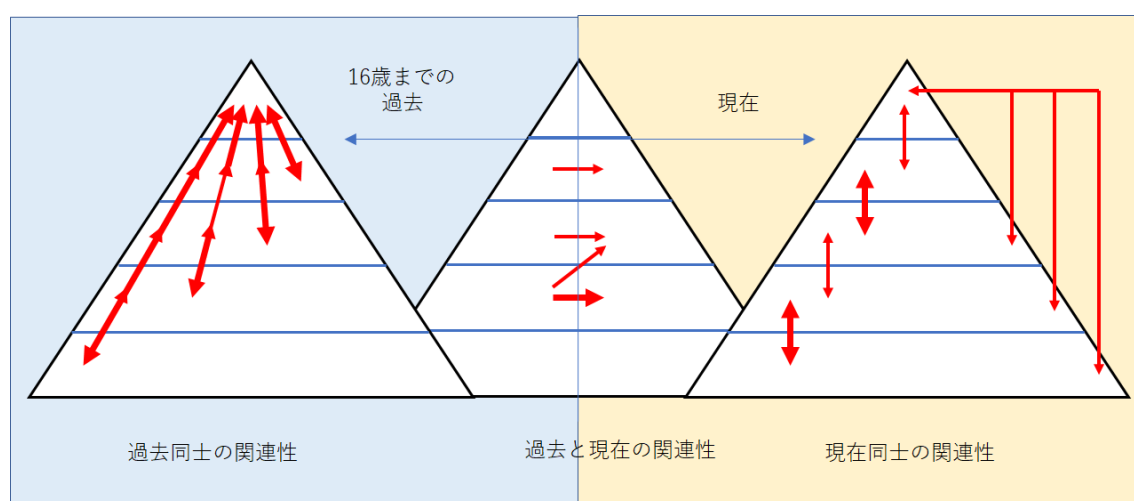
この例のように、自己実現欲求は各階層とそれぞれ、このような正の相関係数 0.5 台で関係しているということが分かり、当研究においては興味深い結果である。子供の頃は、自己実現欲求と他階層との相関係数は 0.6 台であったため、大人になったときの方が、回答者それぞれの受け止め方に違いは出てくるとはいえる。しかしそれでも自己実現欲求について言えば、他階層との間に比較的強い関連性が残っていることが読み取れるのである。

次に、過去と現在という、別の時間軸における相関関係を見ておきたい（P と C の交差部分）。相関係数が 0.5 以上 1%水準で有意なのは P2:C2（過去と現在の安全性欲求；相関係数 0.656）、P2:C3（過去の安全性欲求と現在の所属性欲求；相関係数 0.52）、P3:C3（過去と現在の所属性欲求；相関係数 0.593）、P4:C4（過去と現在の承認欲求；相関係数 0.54）の 4 つとなっている。順に説明すれば、過去に安全欲求の満足度が高いほど、現在の安全性欲求と所属性欲求の満足度が高い。過去の所属性欲求の満足度が高ければ、現在の所属

性欲求の満足度は高い。そして、過去の承認欲求の満足度が高ければ、現在の承認欲求の満足度も高い。

以上の傾向を図によって見やすくまとめると、次のようになった。これまで見てきた表で、相関係数が 0.5 以上（1%水準で有意）の項目を、矢印で図示したものである。過去の欲求階層間、現在の欲求階層間の関係は、両側の矢印で、現在と過去の関係は、過去から現在を指した矢印で示している。矢印のうち、細い線で示しているのは相関係数が 0.5 台の関係であり、太い線は 0.6 以上の関係の項目である。

図 6-12：相関係数 0.5 以上の階層の関係図



出典：筆者作成

これまで考察した平均値によって相関関係を見た場合に分かることは次のようにまとめられた。

- 1) 子供の頃はどの欲求階層間でもお互いに強い正の相関を示す。
- 2) 大人になると、欲求階層間の相関は子供の頃よりは弱くなるが、それでも自己実現の欲求はすべての階層との正の相関が強い。
- 3) 子供から大人への時間軸で比較した場合には、相関関係にあるものが少なく、すなわち、子供から大人になる中で、状況には連続的ではない変化があると見られる。

次に、同じように平均値を利用し、キー・パースン 5 名のデータから計算された相関係数を参考程度に確認しておきたい。5 名では信頼できる統計的結果とは言えないため、あくまでも相関係数の非常に強い物を参考程度に見ることとする。

表 6-13：平均値から算出した相関係数表（キー・パースン）

		キー・パースンの相関									
		P1	P2	P3	P4	P5	C1	C2	C3	C4	C5
P1	Pearson の相関係数	1	0.828	0.597	.908*	0.629	0.098	-0.194	-0.311	0.486	0.659
	有意確率 (両側)		0.084	0.288	0.033	0.256	0.875	0.755	0.611	0.407	0.226
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
P2	Pearson の相関係数	0.828	1	0.862	.985**	.956*	-0.060	-0.038	0.058	0.277	0.818
	有意確率 (両側)	0.084		0.060	0.002	0.011	0.924	0.951	0.926	0.652	0.091
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
P3	Pearson の相関係数	0.597	0.862	1	0.792	.899*	-0.026	0.298	0.499	0.226	.944*
	有意確率 (両側)	0.288	0.060		0.110	0.038	0.967	0.626	0.393	0.715	0.016
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
P4	Pearson の相関係数	.908*	.985**	0.792	1	.891*	-0.035	-0.124	-0.087	0.329	0.778
	有意確率 (両側)	0.033	0.002	0.110		0.042	0.955	0.842	0.889	0.588	0.121
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
P5	Pearson の相関係数	0.629	.956*	.899*	.891*	1	-0.088	0.097	0.277	0.173	0.796
	有意確率 (両側)	0.256	0.011	0.038	0.042		0.888	0.876	0.651	0.781	0.107
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
C1	Pearson の相関係数	0.098	-0.060	-0.026	-0.035	-0.088	1	0.743	0.277	.917*	-0.231
	有意確率 (両側)	0.875	0.924	0.967	0.955	0.888		0.150	0.652	0.028	0.708
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
C2	Pearson の相関係数	-0.194	-0.038	0.298	-0.124	0.097	0.743	1	0.847	0.586	0.065
	有意確率 (両側)	0.755	0.951	0.626	0.842	0.876	0.150		0.070	0.299	0.917
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
C3	Pearson の相関係数	-0.311	0.058	0.499	-0.087	0.277	0.277	0.847	1	0.134	0.315
	有意確率 (両側)	0.611	0.926	0.393	0.889	0.651	0.652	0.070		0.830	0.605
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
C4	Pearson の相関係数	0.486	0.277	0.226	0.329	0.173	.917*	0.586	0.134	1	0.074
	有意確率 (両側)	0.407	0.652	0.715	0.588	0.781	0.028	0.299	0.830		0.906
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
C5	Pearson の相関係数	0.659	0.818	.944*	0.778	0.796	-0.231	0.065	0.315	0.074	1
	有意確率 (両側)	0.226	0.091	0.016	0.121	0.107	0.708	0.917	0.605	0.906	
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

出典：筆者作成

ここでは、厳しく見て相関係数が 0.8 以上、有意水準 5% 以上のものだけを参考にしてみたい。すると、次の項目が該当していることが分かる。

表 6-14：相関係数の 0.8 以上、有意水準 5%以上の階層の整理

階層	相関係数（*は 5%、**は 1%水準で有意）
現在の生理的欲求／現在の承認欲求	0.917*
過去の所属性欲求／現在の自己実現欲求	0.944*
過去の安全性欲求／過去の承認欲求	0.985**
過去の安全性欲求／過去の自己実現欲求	0.956*
過去の承認欲求／過去の自己実現欲求	0.891*
過去の生理的欲求／過去の承認欲求	0.908*
過去の所属性欲求／過去の自己実現欲求	0.899*

出典：筆者作成

有意水準は、サンプル数が少ないと低くなるが、それでも 7 つ該当した項目のうちの 4 つが自己実現欲求と関係している。また、4 つが承認欲求と関連している。キー・パーソンにおいても、自己実現欲求は欲求階層から受ける影響が多いことが推察される。また、承認欲求の影響も強いとみられる。

## 第十節 学校教育歴との相関関係

一般の標本における記述統計の分析でから学校教育歴による比較をした際に、学校教育歴が長い方が全体の欲求満足は高いように見られたが、学校教育歴が長くても自己実現欲求が下がっているという点があった。キー・パーソンはこれに対して、大人になって総じて自己実現が一般よりも顕著に改善している点など、一般とは異なった特徴が見られた。そのため、学校教育歴やそれを支えるといえる出身家庭の経済環境がキー・パーソンに最も大きな影響を与えたのではなく、別の要因があると考えられる。そこで、ここでは平均値を利用して、一般の人々について学校教育歴と欲求満足の相関関係を見ておきたい。

表 6-15：平均値から算出した学歴と欲求各階層の相関係数表（一般標本）

一般全体相関

Education		P1	P2	P3	P4	P5	C1	C2	C3	C4	C5	
Education	Pearson の相関係数	1	.405**	.409**	.391**	.492**	.432**	0.133	.286**	.373**	.363**	.202*
	有意確率 (両側)		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.145	0.002	0.000	0.000	0.027
	度数	122	122	118	122	122	121	122	120	122	122	120

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

\*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

一般男性相関

Education		1P	2P	3P	4P	5P	1C	2C	3C	4C	5C	
Education	Pearson の相関係数	1	.467**	.478**	.394**	.520**	.493**	0.100	0.219	.334**	.369**	0.144
	有意確率 (両側)		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.376	0.052	0.002	0.001	0.209
	度数	80	80	78	80	80	79	80	79	80	80	78

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

\*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

一般女性相関

Education		1P	2P	3P	4P	5P	1C	2C	3C	4C	5C	
Education	Pearson の相関係数	1	0.282	0.201	.402*	.494**	0.296	0.256	.512**	.559**	.439**	.399*
	有意確率 (両側)		0.086	0.240	0.012	0.002	0.071	0.121	0.001	0.000	0.006	0.013
	度数	38	38	36	38	38	38	38	37	38	38	38

\*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

出典：筆者作成

ここでは、欲求階層毎の平均値と学校教育歴を数量データと見立てて数値をあて（表 6-8）相関係数を分析している。これを見てわかるのは、過去・現在についてどちらも、相関関係が 0.5 以上あるものがないということである。男女別でみた場合、男性は子供の頃に教育歴と承認欲求の関連性が 0.5 以上（1%水準）で見られ、大人になるとどの項目も強い関連性がみられない。女性では子供の頃に関連性の対項目がなく、大人になって学校教育歴と安全性欲求・所属性欲求との相関関係が高く、いわば性差が見られる。女性も子供の頃、相対的に見れば学校教育歴と関連性の強いのは承認欲求である（1%水準で相関係数 0.494）。したがって、学校教育歴は子供の頃の承認欲求とは比較的関連しているようである。

一方、自己実現欲求は学校教育歴との相関があるとは言えない結果を示している。これは先に見た記述的統計での考察と同じである。記述統計で見た場合に高学歴の方が自己実現欲求の満足度が下がっていたように、そしてキー・パースンの学校教育歴は様々であったにも関わらず自己実現欲求はかなり満足していたように、学校教育歴によって自己実現欲求欲求が満たされるとはいいいがたいようである。

一般的には、教育を受けられるということは子供を継続して学校に行かせることができる家庭の経済状態があるという因果関係があろう。また、親が子供を学校に通わせるのは、子供の将来の発展のためだろうから、それは自己実現と近い関係にあると想像される。ところが、子供の頃の経済状態や学校教育そのものと、自己実現欲求に直接的な相関が見いだせないということは興味深く、キー・パースン論の探究において重要な点とみられる。つまり内発的発展のためには、家庭の経済状態や学校教育以外の部分をも含めて、人間の

発展というものを多角的に考慮していく必要があることが推察される。平均値による相関分析で得た視点でまとめると、次のようになる。

- ① 欲求の満足と学校教育との相関係数を参照すると各欲求階層との間に明確に強い関連は見られないが、承認欲求とは相対的に高い相関を示す。
- ② 自己実現欲求については、学校教育歴の影響はあまり認められない。

## 第十一節 因子分析及び因子得点による分析

前節までは平均値による相関分析であり、「悪い～とても良い」への回答について、回答の分散具合を考慮しないで分析したものであった。本節では、こうした分散状態も考慮し、より精確な分析を行うこととする。そのために因子分析を利用し、質問と回答の傾向から、より共通性のある質問項目をグループ化する。回答傾向が似た質問群を小グループとして、より詳しい関連性の分析につなげたい。

手順として、まず 5 段階欲求について、それぞれ階層毎に別々に因子分析を行った。前節での因子分析では、全質問を 5 つの成分で抽出し確認したのに対し、今回は、欲求階層ごとに個別に因子の抽出をする。つまり、一つの欲求階層内にも、違う特徴を持つ質問があれば、それをさらに区分するようにする。5 段階でみれば同じ階層に属するとはいえ、質問には違う性質のものも含まれている可能性があるからである。そこで、別の因子に分けられるものは別のものとして分け、詳細な分析を試みる。この分析では、一般標本とキー・パースンのデータを統合して統計量を析出し、共通の基準で析出されたデータを使って、一般とキー・パースンを比較していきたい。

階層毎に因子分析を行った結果、次の表 6-16 のような因子に分解することができた。具体的には所属欲求は 3 因子に、それ以外は各階層ともそれぞれ 2 因子に追加的に分類できた。したがって、5 段階欲求全体でみると合計 11 因子に分解することができた。因子分析による統計量等の出力結果については、章末の資料 1～4 に掲載している。またそれぞれの因子に表のような名称を与え、説明を簡単にするために、各因子に記号を当てた。

表 6-16：因子分析による共通因子の分類結果

欲求階層	因子名称	記号表記（過去）	記号表記（現在）
（１）生理的欲求	1 肉体的必要(Physical needs)	P1.1	C1.1
	2 肉体的健康(Physical health/strength)	P1.2	C1.2
（２）安全性欲求	1 家計状況(Housing security)	P2.1	C2.1
	2 生活環境状況(Environmental security)	P2.2	C2.2
（３）所属性欲求	1 家族からの愛情(Family love)	P3.1	C3.1
	2 コミュニティからの愛情(Community love)	P3.2	C3.2
	3 所属社会との親密さや喜びの共有状況 (Share closeness and happiness)	P3.3	C3.3
（４）承認欲求	1 他者からの承認状況(Approved by society)	P4.1	C4.1
	2 自尊心の状況(Self-respect)	P4.2	C4.2
（５）自己実現欲求	1 自己の価値の実現状況(Self-value)	P5.1	C5.1
	2 自己受容の状況(Self-personality)	P5.2	C5.2

出典：筆者作成

それぞれ、因子負荷量を算出すると同時に、エカマックス法にて回転させたときの因子得点を析出した。因子得点とは、因子分析の結果得られた因子負荷量をもとに、回答者毎に該当する因子に対して一つの数値を出したものである。つまり、もともと 2 つの質問項目には 2 つの回答があったのに対して、それらを 1 つの因子として数字を析出したものである。

この因子得点をもとに、前節と同じように相関係数の分析、並びに学校教育歴との比較分析を行った。また、その後、各因子についてキー・パースンと一般標本との間で独立性の検定分析を行うことにより、両者に明確な違いが見られるかを検証した。

注意が必要なのは、因子分類をした場合、同一欲求階層内で区分された因子の間には相関が認められないことである。そのため、相関係数の計算については、こうした同一欲求階層内の因子で相関関係を見るのではなく、欲求階層の違う因子間で相関分析が可能であり、それを見ることとする。

また、平均値での相関分析では、一般標本とキー・パースンをそれぞれ分けて分析したが、因子得点では欠損値が増えるため、キー・パースンのサンプル数が限定されてしまう項目がある。これでは比較に適さないため、この分析では、キー・パースンも含めた標本全体を分析することとする。そして、改めて両者を比較するために、グラフによる比較分析によってこれを補うこととする。

表 6-17：因子得点による相関係数表（標本全体（キー・パースン含））

		相関																											
		Past physical needs	Past physical health	Past environment security	Past housing security	Past family love	Past community love	Past share closeness & happiness	Past approved by society	Past self-respect	Past self values	Past self personality	Current physical needs	Current physical strength	Current environment security	Current housing security	Current family love	Current community love	Current share closeness & happiness	Current approved by society	Current self-respect	Current self values	Current self personality						
Past physical needs	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	1	0.000	.217*	.324**	.549**	0.173	-0.107	.329**	.201*	.329**	.346**	.369**	0.032	0.133	.324**	.228*	0.183	0.093	.312**	.281**	0.147	.283**						
Past physical health	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.119	1	.057	.336**	-0.239	0.247	.481**	.287**	.156	0.150	.262**	.209*	.422**	0.161	.328**	0.085	.365**	.222*	0.157	.290**	.233*	.267**						
Past environment security	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046	.542							
Past housing security	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.119	.057	.000	1	.000	.446**	0.072	0.252	0.168	0.165	.320**	.154	-0.076	.452**	-0.114	0.047	0.157	0.133	.230*	-0.048	.199*	-0.061						
Past family love	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046						
Past community love	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046					
Past share closeness & happiness	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046				
Past approved by society	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	.000	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046			
Past self-respect	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	.000	.000	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046		
Past self values	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046	
Past self personality	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.034	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	1	0.000	0.002	0.633	0.091	0.097	0.128	0.002	0.129	0.452	0.000	0.277	0.660	0.143	0.216	0.018	0.629	0.046
Current physical needs	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.369**	.209*	.154	.415**	.208	-0.046	-0.136	.187*	-0.116	0.100	0.131	1	0.000	.363**	.611**	0.088	.296**	.305**	.409**	.223*	.450**	.267**						
Current physical strength	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.000	.028	0.129	0.000	0.180	0.772	0.384	0.047	0.222	0.320	0.195	0.000	0.000	0.390	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.016	0.000	0.007						
Current environment security	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current housing security	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current family love	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current community love	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current share closeness & happiness	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current approved by society	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current self-respect	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current self values	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						
Current self personality	Pearson の相関係数 有差検定 (両側) 意味	.032	.422**	-0.076	.424**	-0.268	0.065	-0.045	-0.003	0.069	0.012	0.000	1	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125	0.125						

出典：筆者作成〔拡大資料添付〕

上表における網掛け部分は、相関係数が 0.4 以上（1%水準）の場合を示している。因子分析では、0.5 以上の係数が少ない。このため、念のため 0.4 以上から参照してみることにした。これを参照すると、現在を示す領域（右下）で、自己実現欲求に関する 2 因子は、他の階層に比べて相関関係が高いものが比較的多いことが分かる。具体的には自己の価値実現 (Self value) が、肉体的欲求 (Physical needs) と家計の状況 (Housing security)、

他者からの承認（Approved by society）との関係でやや高い相関を示す。自己受容（Self personality）は家計状況（Housing security）、自尊心（Self respect）と高い相関関係を示している。つまり、自己実現欲求は、家計状況に関すること、および承認欲求階層との関係が強いとみられるのである。

事前に検討した平均値による相関関係と、この因子得点による分析の違いは、平均値が「良くない～とても良い」までのチェックのばらつきを考慮していないのに対し、因子分類をしたものは、回答傾向の近いものをグループにして見るため、より精度の高い関連性を分析できるところにある。平均値による相関関係では、子供の頃に相関する項目で係数の高いものが多く、大人になるとそれが減った。しかし、因子分析では、大人になってから相関が相対的に高いものが多くみられ、なおかつ自己実現欲求との関係が高いものが多くみられる。このことは興味深い。自己実現欲求が他の階層と関連性が高いというのは、平均値で見た場合も同じであったため、自己実現欲求の他の階層との関連性は多角的に見てかなり強いと考えられる。

他方、子供の頃には、肉体的必要（Physical needs）と家族からの愛情（Family love）が 0.549 で高い相関を示し、また大人になって肉体的欲求（Physical needs）と家計の状況（Housing security）は 0.611 と、この中で一番高い相関を示している。したがって、自己実現を語る前に、最も下位の欲求を満足させる重要性は認識しておかなければいけないだろう。

次に、学校教育歴との関係も見ておきたい。これは因子得点に基づいた 11 の欲求と、学校教育歴を数量データとして見た場合の相関係数である。

表 6-18：学歴レベルと、各因子との相関関係

相関													
過去		Education	Past physical needs	Past physical health	Past housing security	Past environment security	Past family love	Past community love	Past share closeness & happiness	Past approved by society	Past self-respect	Past self values	Past self personality
Education	Pearson の相関係数	1	.374**	0.195	.301**	0.153	0.077	.333*	.337*	.397**	.402**	0.187	.375**
	有意確率 (両側)		0.000	0.055	0.004	0.152	0.649	0.044	0.042	0.000	0.000	0.074	0.000
	度数	122	97	97	89	89	37	37	37	100	100	92	92

現在		Education	Current physical needs	Current physical strength	Current housing security	Current environment security	Current family love	Current community love	Current share closeness & happiness	Current approved by society	Current self-respect	Current self values	Current self personality
Education	Pearson の相関係数	1	0.169	-0.144	.221*	-0.016	0.157	.225*	0.100	0.128	.358**	0.100	.244*
	有意確率 (両側)		0.091	0.151	0.043	0.882	0.136	0.032	0.347	0.177	0.000	0.328	0.016
	度数	122	101	101	84	84	91	91	91	113	113	97	97

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

\*、相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

出典：筆者作成

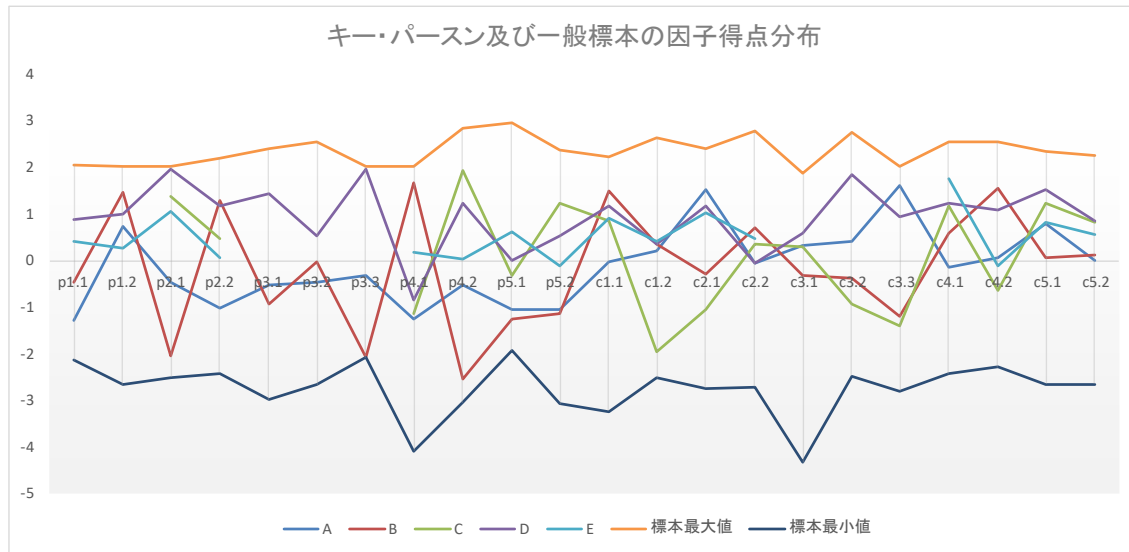
表 6-15 で回答の平均値と学校教育歴との関係をみたとき、高い相関関係を示すものはあまりなく、承認欲求が唯一、相対的に関係性が強いと見られた。因子による分類をした場合でも結果は同じであり、学校教育歴が相関する項目は少ないことが分かる。相対的には 0.402 に上る子供の頃の承認欲求との関連は高く、この観点も平均値の場合と同じである。学校教育歴は、主に子供の頃の家庭や社会関係のリソースの量に関連していると想像されるが、やはり自尊の欲求の満足と関連することがわかる。大人になるとこの関係は薄れるが、それでも他の欲求階層よりは高い 0.358 である。したがって、相対的に学校教育年数が自尊心に与えている影響は認められるだろう。しかし、自己実現欲求との関係は、その限りではない。

記述的統計で確認した図 6-6 や 6-8 (「普通～とても良い」のチェック率) で見たときも、一般標本で承認欲求の満足は、どの学歴層でも他の欲求階層の満足度と比べると上位であるが、自己実現の上がり方はそうではなかった。つまり、学校教育歴と承認欲求との関係は強いが、自己実現欲求との関係ではないらしいことが、すべての分析で同様に確認できた。一方のキー・パーソンは、承認欲求のみならず高い自己実現に到達したのであるから、学校教育歴(や家庭の経済環境)ではない何らか他のプッシュ要因があったことが、因子分析からも改めて分かる。

## 第十二節 グラフによる因子得点の比較

前節では、標本全体の分析となったため、本節では、改めて一般標本とキー・パーソンの比較を行う。次に示す図 6-13, 14, 15 は、キー・パーソンの因子得点を個別にプロットしたものと、一般標本について標本中の因子得点の最大値と最小値のみをプロットして示したものである。図中では、描かれている直線の中でも一番外側にあるのが一般標本の最大値と最小値であり、内側にある 5 本のプロットラインがキー・パーソンたちの因子得点である。また、具体的な数値は、末尾付録の資料 5 に添付している。

図 6-13： キー・パースンの因子得点と、一般の因子得点の最大値と最小値を比較



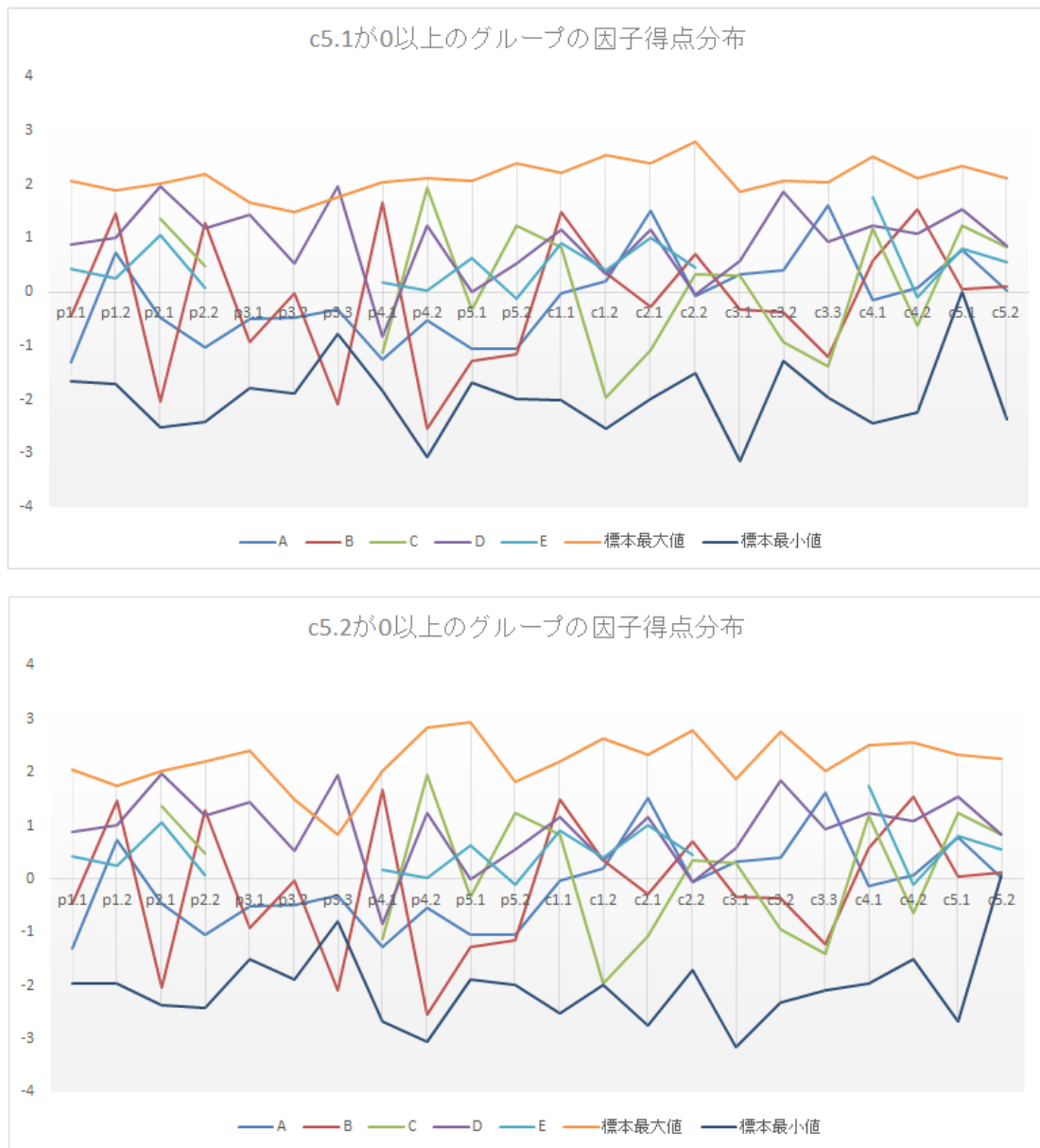
出典：筆者作成

因子得点は、数量データを基準化するため、ゼロを回答者の平均値としており、平均を基準に比較することができる。グラフを見ると、キー・パースンは、子供の頃は一般のグループと同じように、欲求満足状態が悪い人も良い人も同じようにばらついて分布をしているが、大人になると得点が高くなる項目が増えてくるように見える。特に、**c1.1,c2.2,c4.1,c4.2,c5.1,c5.2**ではキー・パースンの多くがゼロ以上の得点を占めている。

中でも、5名のキー・パースンすべてにおいてゼロ以上となったのは、**c5.1,c5.2**のような、自己実現欲求であることが分かる。また、ほぼゼロ以上の項目で見ると、**c1.1**「肉体的必要」、**c2.2**「生活環境状況」、**c4.1**「他者からの承認」である。それに比べて、**c4.2**「自尊の状況」は、若干得点が下がっているが、キー・パースン C の得点が低いためである。これらの意味を解釈すると、キー・パースンたちは比較的よく外的環境から受け入れられ、自分に大変満足しているということである。キー・パースンたちは、環境に恵まれ、自尊心を持つが、それ以上に他者から認められていると感じ、自己実現がよく達成されていると読むことができる。

したがって、キー・パースンは全体の流れとして高次の欲求が高い得点の方へ収束してきているように見られる。この部分に一般との比較においてなんらかの違いが見いだせないかと考えた。そこで、一般標本グループから、それぞれ **c4.1,c4.2,c5.1,c5.2** がゼロ以上の高得点グループを抽出し、そのグループ内での最大値、最小値と、キー・パースンの得点分布を調べてみることにした。

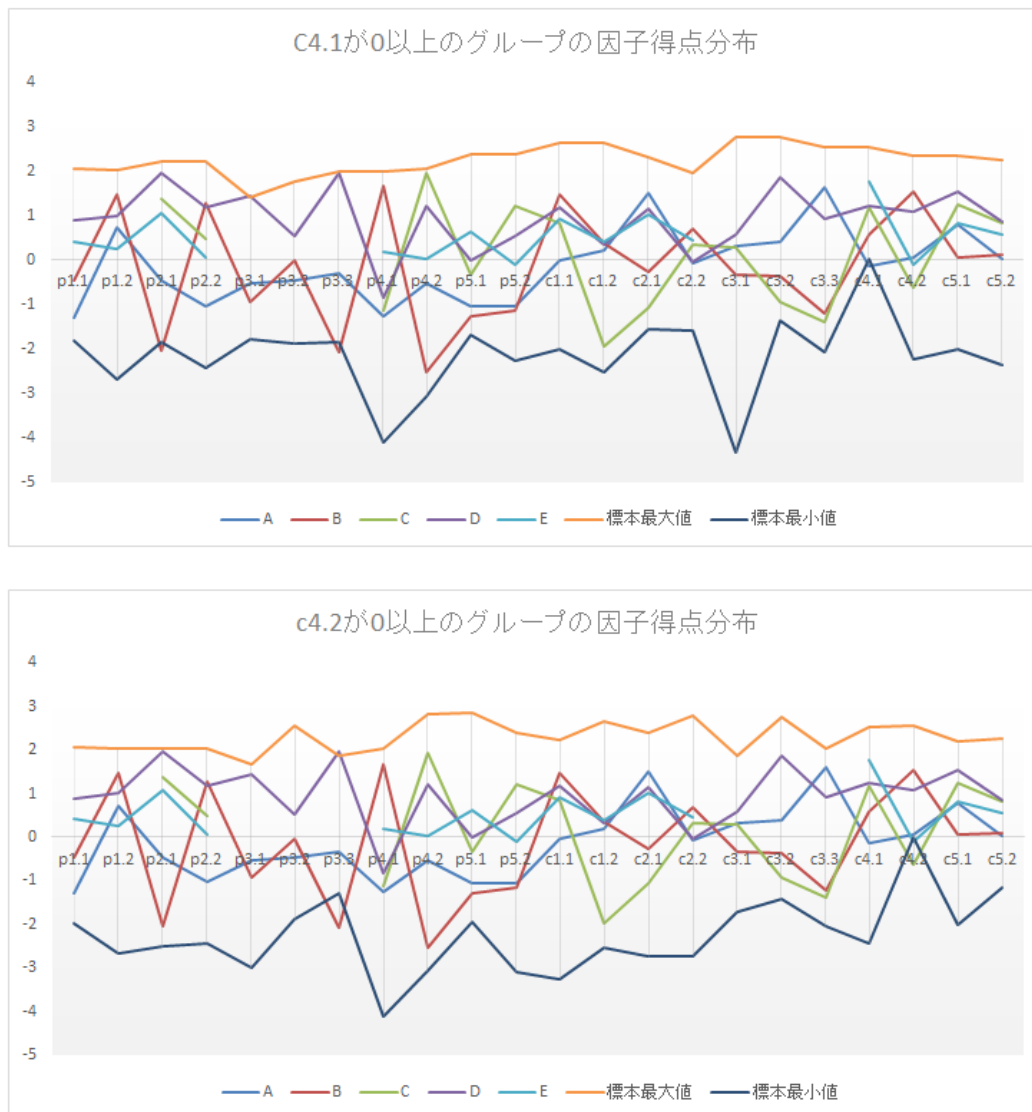
図 6-14 : C5.1、5.2 がゼロ以上のグループの得点分布



出典：筆者作成

上表では、それぞれ c5.1（上）、c5.2（下）でゼロ以上を示した一般の標本について、グループの最大値と最小値をプロットし、キー・パースンのそれと比較している。ここで分かるのは、自己実現的欲求のどちらかがゼロ以上を示したグループであるからといって、もう一方の欲求も得点がゼロ以上であったり、承認欲求の方も高いなど特徴的な部分がないことである。また、一般標本の得点の幅も、特段にキー・パースンに似ているといった感じもない。そこで、承認欲求 c4.1,4.2 についても確認してみた。

図 6-15 : C4.1、4.2 がゼロ以上のグループの得点分布



出典：筆者作成

こちらでは、c4.1（上）および、c4.2（下）のゼロ以上の一般標本を基準に最大値や最小値を見てみると、c4.2 を基準にした時は c5.2 も同様に高く、またキー・パースンの得点の動きと多少似た、高次の欲求に向かって得点が高いところに収束していくような様子が見受けられる。c4.2 は Self-respect (自尊心の状況) という因子であり、c5.2 は Self-personality (自己受容の状況) という因子であるから、一般で c4.2 が高いグループは、「自分を尊敬し、また自己を受け入れている」ということが分かる。たしかに、前出の相関係数の表 6-17 でも、c4.2 と c5.2 は相関係数が 0.522\*\* と高かった。

このように、一般のグループで c4.2 の高い人に注目すると、キー・パースンに近い様子が見いだされる。c4.2 からヒントを得て、c5.2 がゼロ以上のグループにもう一度視点を戻

してみると、確かに c4.2 の得点も高い。ただ、c4.2 がゼロ以上のグループから見るほうが、全体的には得点が高い。これは、自己実現的欲求における自己受容の状態は、承認欲求の中でも、特に自尊心からの影響を強く受けるということであろう。マズローの欲求階層の理路と一致するといえる。

もしも、この c4.2 の満足度の高いグループを、キー・パースンに近いグループと仮定して考察するとすれば、一般とは違い、キー・パースンは自尊心や自己受容の高さに以外に、c4.1（他者からの承認）も c5.1（自分の価値実現）も含めたすべての得点が高いというところが特徴になろう。つまり、キー・パースンたちは承認欲求と自己実現欲求をトータルに満足しているということになる。

自尊心を持つことは、確かに自己受容につながるであろう。しかし、それと他者から自分を認めてもらっていると感じること、自分の価値を生かしていると感じているかどうかということは質が違ふようである。質の違う要素を含めてすべて実現しているのがキー・パースンなのかもしれない。

ちなみに、次の表 6-19 にあるように、c4.2 がゼロ以上の得点を示したグループは、学校教育歴の長い人が多い。これは、教育との相関係数を見た時に、自尊心の項目が教育と関連していたことでも再確認できる。教育レベルは、確かに自尊心の項目と相関係数が高く、これまでの考察と整合的である。とはいえ、学校教育歴と自尊心について満足していても、自分の価値をいかに実現するか、社会から評価されていると感じるかは別の問題であるのかもしれない。キー・パースンはこの部分もクリアし、得点が高いわけである。

表 6-19 : c4.2 がゼロ以上の一般標本のグループの学校教育歴

Education	該当者数	サンプル合計	サンプルに対する割合
University	22	37	59%
Higher	17	25	68%
Secondary	12	35	34%
Primary	3	16	19%
No education	3	9	33%
Total	57	122	47%

出典：筆者作成

これまでの分析から、キー・パースンがどのような特徴を持つかということについて、以下のようにまとめたい。

- ① キー・パースンとは、承認欲求、自己実現欲求の 4 因子すべての項目において、満足度が一般標本よりも高い。
- ② 一般標本で、キー・パースンに近い特色を持つと考えられるのは、承認欲求の中でも、自尊心を高めた人々であり、これらの人々は、同時に自己実現欲求における自己受容の得点も高い傾向にある。しかし、キー・パースンと違い、他者からの承認の満足度、

また自らの価値を生きている感覚についての得点は、キー・パースン程には高くない。

- ③ 自尊心の状況が良いグループは高学歴の人が多いが、このグループでも自分の価値を実現できているという項目ではキー・パースンほど得点がないことから、自己実現欲求は学校教育歴の長さとは関係が少ないと見られる。

### 第十三節 独立性の検定による考察

前節は、承認欲求・自己実現欲求においてゼロ以上の値をとる一般標本とキー・パースンの比較であり、またグラフを目視しての考察を行った。本節では因子得点を利用し、キー・パースンと一般標本全体との間に統計的な差異が認められるかどうかを独立性の検定により確認する。まず初めに、過去の 11 因子について、一般とキー・パースンについて独立性の検定を行い、続いて同じように現在についての両者の独立性の検定を、そして最後に現在と過去の因子得点の差分について、両者の独立性の検定を行う。これにより、一般とキー・パースンについて差異があり、区別できる項目を判別する。

比較対象となる一般標本とキー・パースンではサンプル数に大きな差があるが、検定統計量には 2 つのグループのそれぞれのサンプル数が反映されているため、統計的判断は可能となっている。

表 6-20、21、22 で、左の項目の内、黒く塗りつぶしているのが、独立性の検定で有意な差が認められた項目である。有意な差が認められた項目はキー・パースンと一般標本で異なっていることを示す。

検定結果の見方は、まず、F 値に対する有意確率によって等分散性を確認する。等分散性に関する有意確率が 5%以下であれば、等分散性は棄却され、母分散が 2 つのグループで異なる場合の平均値の差の検討を行う。等分散性に関する有意確率が 5%を越えていれば、母分散が 2 つのグループで等しいとして、平均値の差の検定を行う。平均値の差が有意か否かは有意確率が 5%以下であるか否かによって判断する。

表 6-20 : 過去の独立性の検定結果

独立サンプルの検定										
		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
Past physical needs	等分散を仮定する	0.033	0.857	0.224	117	0.823	0.11442589	0.51068074	-0.89695056	1.12580233
	等分散を仮定しない			0.232	3.230	0.830	0.11442589	0.49231563	-1.39114643	1.61999820
Past physical health	等分散を仮定する	2.062	0.154	-1.777	117	0.078	-0.89578859	0.50403203	-1.89399762	0.10242044
	等分散を仮定しない			-3.326	3.872	0.031	-0.89578859	0.26930612	-1.65332055	-0.13825663
Past environment security	等分散を仮定する	4.028	0.047	-0.866	110	0.389	-0.39651670	0.45806071	-1.30428551	0.51125212
	等分散を仮定しない			-0.541	4.134	0.617	-0.39651670	0.73336747	-2.40691479	1.61388140
Past housing security	等分散を仮定する	0.128	0.721	-0.913	110	0.363	-0.41820214	0.45788536	-1.32562344	0.48921917
	等分散を仮定しない			-0.963	4.430	0.385	-0.41820214	0.43424222	-1.57906044	0.74265617
Past family love	等分散を仮定する	0.333	0.566	0.000	51	1.000	0.00023408	0.60021782	-1.20475348	1.20522164
	等分散を仮定しない			0.000	2.152	1.000	0.00023408	0.74406798	-2.99408644	2.99455460
Past community love	等分散を仮定する	1.189	0.281	-0.023	51	0.982	-0.01389644	0.60021467	-1.21887767	1.19108479
	等分散を仮定しない			-0.043	3.112	0.968	-0.01389644	0.32466971	-1.02635779	0.99856491
Past share closeness & happiness	等分散を仮定する	3.425	0.070	0.258	51	0.798	0.15466193	0.59982699	-1.04954099	1.35886485
	等分散を仮定しない			0.131	2.053	0.907	0.15466193	1.17650689	-4.78516712	5.09449098
Past approved by society	等分散を仮定する	0.438	0.509	0.624	124	0.534	0.28550053	0.45747860	-0.61997777	1.19097883
	等分散を仮定しない			0.515	4.221	0.633	0.28550053	0.55474133	-1.22341651	1.79441757
Past self-respect	等分散を仮定する	3.044	0.083	-0.061	124	0.951	-0.02814598	0.45818951	-0.93503136	0.87873941
	等分散を仮定しない			-0.036	4.104	0.973	-0.02814598	0.78122776	-2.17569121	2.11939925
Past self values	等分散を仮定する	0.557	0.457	0.918	113	0.361	0.41995045	0.45758122	-0.48660048	1.32650139
	等分散を仮定しない			1.168	4.638	0.299	0.41995045	0.35967198	-0.52676112	1.36666203
Past self personality	等分散を仮定する	0.002	0.962	0.243	113	0.808	0.11164979	0.45916332	-0.79803556	1.02133514
	等分散を仮定しない			0.239	4.357	0.822	0.11164979	0.46729716	-1.14486649	1.36816607

出典：筆者作成

表 6-21：現在の独立性の検定結果

独立サンプルの検定										
		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤 差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
Current physical needs	等分散を仮 定する	2.621	0.108	-2.031	123	0.044	-0.91552642	0.45079104	-1.80783964	-0.02321320
	等分散を仮 定しない			-3.409	5.107	0.018	-0.91552642	0.26855120	-1.60152553	-0.22952731
Current physical strength	等分散を仮 定する	0.059	0.808	0.293	123	0.770	0.13425358	0.45812724	-0.77258119	1.04108835
	等分散を仮 定しない			0.287	4.326	0.787	0.13425358	0.46708795	-1.12495818	1.39346534
Current housing security	等分散を仮 定する	3.645	0.059	-0.636	103	0.526	-0.29249404	0.45957396	-1.20395059	0.61896252
	等分散を仮 定しない			-1.625	8.610	0.140	-0.29249404	0.18002910	-0.70257512	0.11758705
Current environment security	等分散を仮 定する	0.242	0.624	-1.082	103	0.282	-0.49555915	0.45788052	-1.40365717	0.41253888
	等分散を仮 定しない			-0.990	4.335	0.374	-0.49555915	0.50063330	-1.84413165	0.85301336
Current share closeness & happiness	等分散を仮 定する	2.878	0.093	0.023	110	0.982	0.01178748	0.51148304	-1.00185185	1.02542681
	等分散を仮 定しない			0.015	3.095	0.989	0.01178748	0.76427533	-2.37891108	2.40248603
Current community love	等分散を仮 定する	0.097	0.756	-0.486	110	0.628	-0.24848604	0.51093526	-1.26103980	0.76406772
	等分散を仮 定しない			-0.406	3.153	0.711	-0.24848604	0.61262913	-2.14580030	1.64882822
Current family love	等分散を仮 定する	2.059	0.154	-0.443	110	0.658	-0.22652008	0.51102808	-1.23925778	0.78621762
	等分散を仮 定しない			-1.045	4.715	0.347	-0.22652008	0.21686913	-0.79429978	0.34125962
Current approved by society	等分散を仮 定する	0.782	0.378	-2.132	136	0.035	-0.95895537	0.44975876	-1.84838065	-0.06953010
	等分散を仮 定しない			-2.859	4.585	0.039	-0.95895537	0.33544320	-1.84525010	-0.07266065
Current self- respect	等分散を仮 定する	0.097	0.757	-0.892	136	0.374	-0.40646530	0.45588361	-1.30800284	0.49507223
	等分散を仮 定しない			-0.991	4.386	0.373	-0.40646530	0.41014708	-1.50677451	0.69384391
Current self values	等分散を仮 定する	2.258	0.136	-2.053	120	0.042	-0.92521003	0.45072326	-1.81761071	-0.03280935
	等分散を仮 定しない			-3.451	5.145	0.017	-0.92521003	0.26806684	-1.60848938	-0.24193068
Current self personality	等分散を仮 定する	2.952	0.088	-1.088	120	0.279	-0.49633008	0.45632449	-1.39982081	0.40716065
	等分散を仮 定しない			-2.490	6.574	0.044	-0.49633008	0.19933962	-0.97396120	-0.01869895

出典：筆者作成

表 6-22：現在と過去の差分についての独立性の検定結果

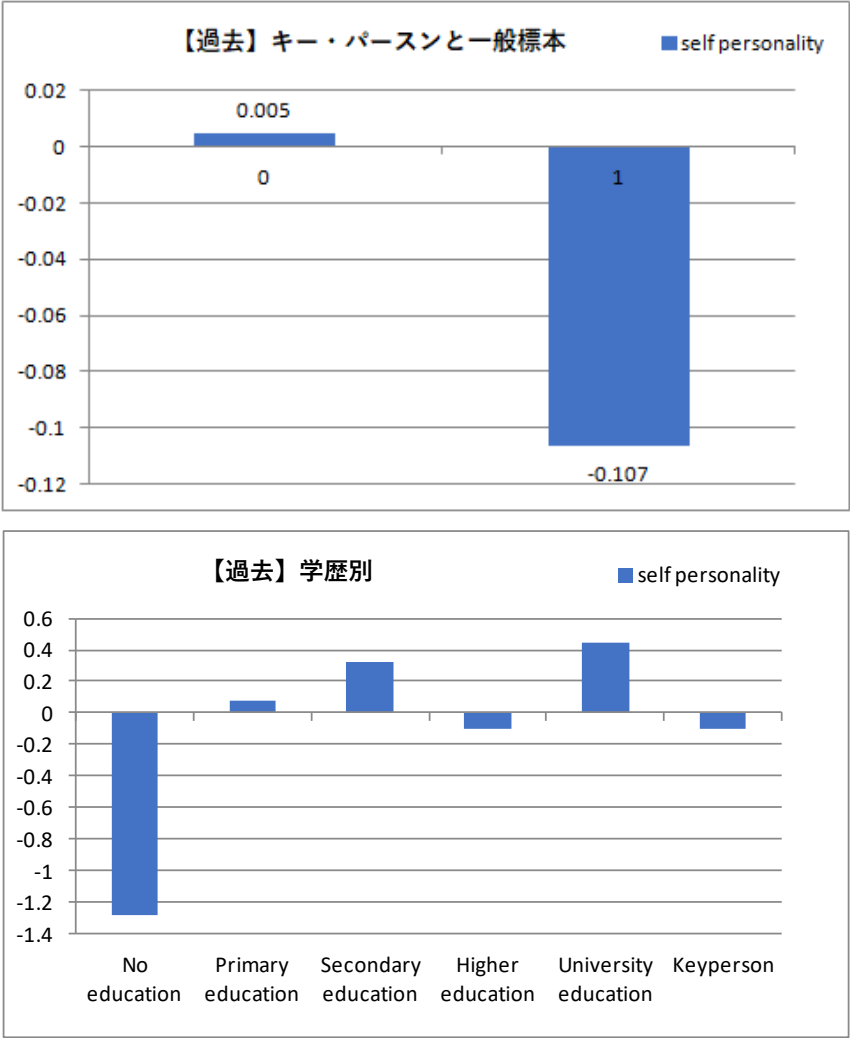
独立サンプルの検定										
		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤 差	差の 95% 信頼区間	
physical needs	等分散を仮 定する	0.409	0.524	-1.760	109	0.081	-1.00606	0.57151	-2.13878	0.12666
	等分散を仮 定しない			-2.541	3.515	0.072	-1.00606	0.39585	-2.16757	0.15546
physical strength	等分散を仮 定する	2.141	0.146	1.016	109	0.312	0.54158	0.53288	-0.51458	1.59774
	等分散を仮 定しない			1.953	4.015	0.122	0.54158	0.27734	-0.22731	1.31047
housing security	等分散を仮 定する	0.097	0.756	0.179	91	0.858	0.08528	0.47695	-0.86212	1.03268
	等分散を仮 定しない			0.215	4.713	0.839	0.08528	0.39675	-0.95360	1.12416
environment security	等分散を仮 定する	5.199	0.025	-0.384	91	0.702	-0.18344	0.47810	-1.13312	0.76624
	等分散を仮 定しない			-0.220	4.131	0.836	-0.18344	0.83242	-2.46602	2.09914
share closeness & happiness	等分散を仮 定する	0.013	0.909	-0.532	47	0.598	-0.33338	0.62712	-1.59497	0.92822
	等分散を仮 定しない			-0.605	2.363	0.598	-0.33338	0.55082	-2.38628	1.71953
community love	等分散を仮 定する	0.008	0.927	-1.356	47	0.182	-0.96490	0.71162	-2.39650	0.46670
	等分散を仮 定しない			-1.815	2.534	0.184	-0.96490	0.53167	-2.84711	0.91730
family love	等分散を仮 定する	0.341	0.562	-0.822	47	0.415	-0.56298	0.68503	-1.94108	0.81511
	等分散を仮 定しない			-0.639	2.151	0.584	-0.56298	0.88151	-4.11142	2.98545
approved by society	等分散を仮 定する	0.053	0.818	-2.374	120	0.019	-1.30490	0.54967	-2.39321	-0.21660
	等分散を仮 定しない			-2.117	4.271	0.097	-1.30490	0.61635	-2.97415	0.36434
self- respect	等分散を仮 定する	9.506	0.003	-0.899	120	0.371	-0.39981	0.44496	-1.28079	0.48117
	等分散を仮 定しない			-0.371	4.046	0.730	-0.39981	1.07883	-3.38163	2.58201
self values	等分散を仮 定する	1.378	0.243	-2.376	107	0.019	-1.34058	0.56427	-2.45918	-0.22199
	等分散を仮 定しない			-4.300	5.589	0.006	-1.34058	0.31174	-2.11721	-0.56395
self personality	等分散を仮 定する	2.139	0.146	-1.014	107	0.313	-0.61514	0.60693	-1.81831	0.58804
	等分散を仮 定しない			-1.907	5.757	0.107	-0.61514	0.32264	-1.41278	0.18251

出典：筆者作成

上の 3 つの表で、一般標本とキー・パースンの間で違いが見いだされた項目を、黒に塗りつぶしている。まず過去の検定の結果では、一般の標本とキー・パースンについて、明確な違いが認められるものがないことが示された。すなわち、前節の最大値や最小値のグ

ラフで視覚的に見てきたように、子供時代はキー・パースンも一般標本との明瞭な違いが見いだせないようである。これを分かりやすく示すために、一般標本とキー・パースンの平均値の違いをグラフに示した。これは表 6-20 の〈平均値の差〉に関係するものであるが、両者の平均値は末尾付録の資料 7 に添付してある。

図 6-16：過去の自己受容に関する平均値の差



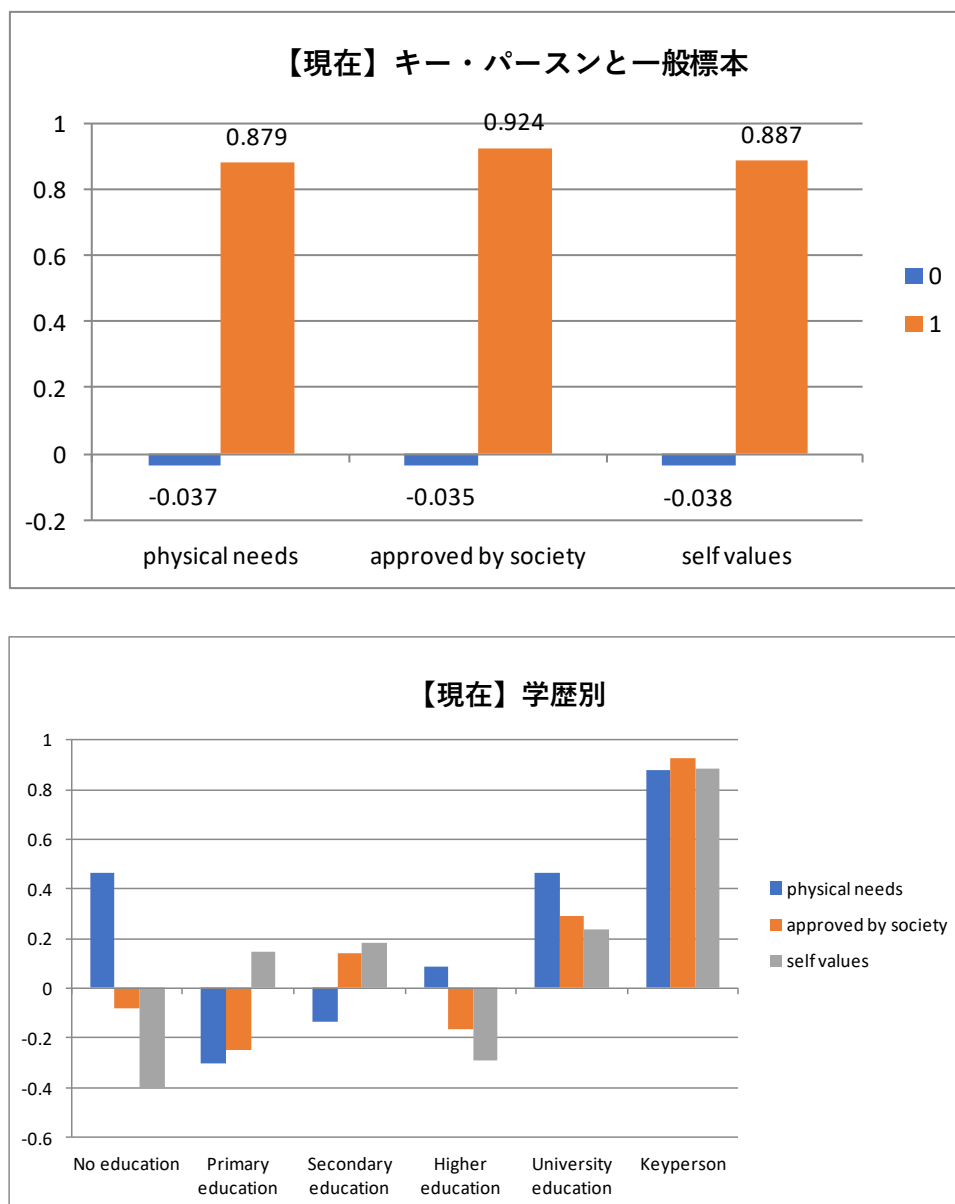
キー・パースン=1、一般標本=0（出典：筆者作成）

上表は、独立性の検定で、有意な項目が見つからなかった過去のサンプルとして、self-personality（自己受容の状況）について平均値をグラフ化したものである。一般標本とキー・パースンを比較した上のグラフで、両者の平均値の差は 0.11 である。下は学歴別に分解して平均値を示したグラフであるが、キー・パースンと一般標本で明確に違いが見いだせないことがわかる。

続いて、現在について見てみると、3 項目で一般標本とキー・パースンについて有意な差

異が認められる項目がある。Physical needs（肉体的必要）、Approved by society（他者からの承認）、Self-values（自己の価値実現）である。こちらも、グラフで同様に見てみよう。

図 6-17：現在の肉体的必要、他者からの承認、自己の価値実現に関する平均値の差

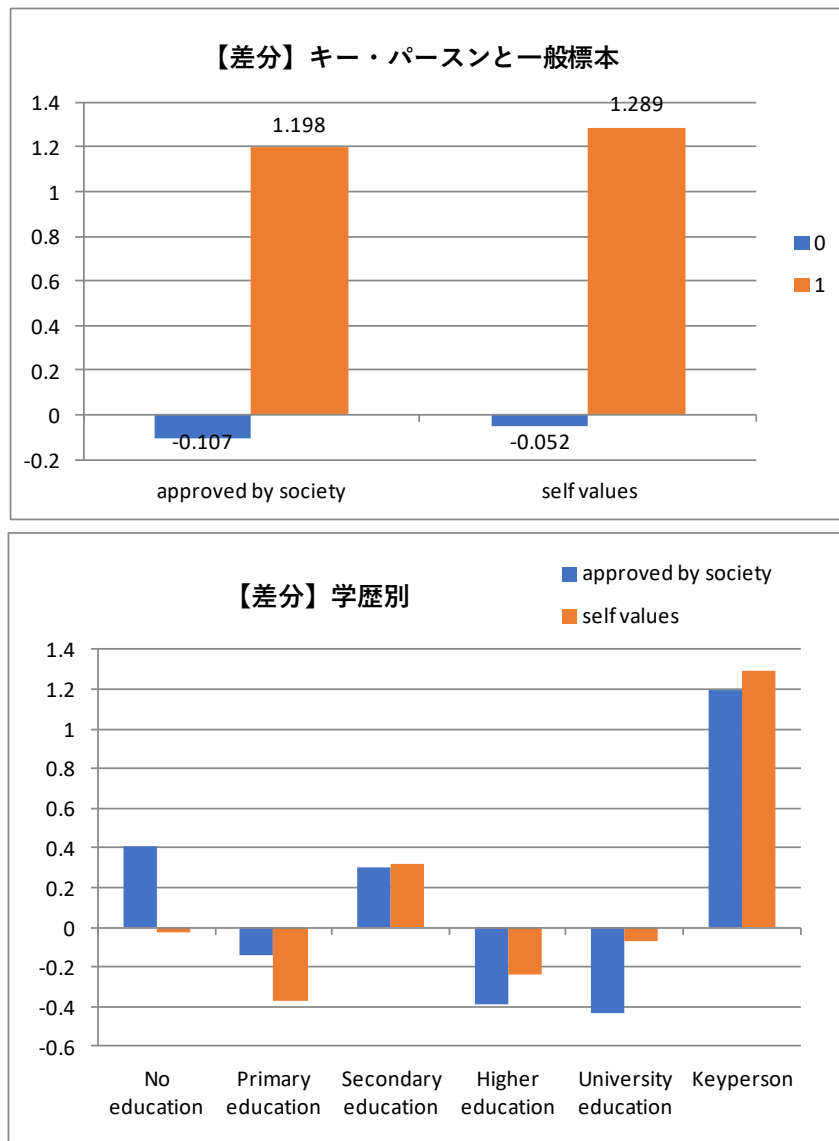


キー・パースン=1、一般標本=0（出典：筆者作成）

現在の分析では、有意になっている 3 項目は、それぞれキー・パースンと一般で差が大きくなっている。平均の差は 0.9 台である。学歴別にみた場合も、キー・パースンの平均値の高さが見て取れる。つまり、キー・パースンの方が、それぞれの項目で満足度が高いことが統計的に有意に認められるのである。

次に、現在の得点から過去を引き算した変化の差分、すなわち時間的に変化した量についての独立性検定を行ってみると、**Approved by society**（他者からの承認）、**Self-values**（自己の価値実現）が残っていることが分かる。こちらも、グラフで確認しておこう。

図 6-18：過去と現在の差分についての他者からの承認、自己の価値実現に関する平均値の差



キー・パースン=1、一般標本=0（出典：筆者作成）

キー・パースンと一般の平均の差は 1.3 台に上り、非常に大きい。学歴別で見ても、同様にキー・パースンが高いことが分かる。こちらも、キー・パースンの方が満足度が高いという意味で、統計的に有意な差が認められることが分かる。特に、差分の平均の差は大きく、キー・パースンにおいては、子供から大人にかけての変化が大きいということが分かる。

この検定結果から、一般標本とキー・パースンとの違いについて分かることは、前節の図 6-13 で最大値と最小値を比較して考察した際と同様に、「他者からの承認」と「自己価値実現」についてキー・パースンが際立っているように考えられたのと同じ計算結果が認められたことである。

以上、これまで分析してきた記述統計からの分析、平均値からの相関分析、11 因子による相関分析、そして 11 因子による独立性検定の総合的な視点から、キー・パースンとは、自尊心を高め、また自己を受容しただけではなく、さらに他者から承認されていると認識し、自己の価値を実現できているという意味で、一般の人々よりも高次の欲求を十全に満足させることができていると感じている人物であることが明らかとなった。

大人になってからの一般標本とキー・パースンの違いが、自己実現的欲求の階層に際立って集中していることから、当調査の仮説〈キー・パースンは自己実現的人間である〉は、キー・パースン 5 名というサンプルサイズにおいて認められた。また、〈一般標本とキー・パースンには違う特徴がある〉という 2 つ目の仮説も同様に認められた。

そして、これまでの考察の結果から、学校教育歴と、それを支えたであろう子供の頃の家庭のリソースの問題とは異なった、なんらかの別の要因があったがために、キー・パースンたちは一般の人々より高次の欲求を十全に満足したものとみられる。次節で、このような差異がもたらされた要因を探っていく。

#### 第十四節 人生のターニングポイント

キー・パースンが、他者からの承認や自己価値実現も含めて、高次の欲求を十全に満足できた要因とはいったい何だったのか。ヒアリングから得た人生についてのナラティブ分析から考察することで見えてきたのは、キー・パースンたちが人生の途中で大きなターニングポイントを迎え、人生の価値観や目標を持つようになったことであった。そこで本節ではその人生のターニングポイントの中身についてナラティブからの考察を深めることとする。

今回調査したキー・パースンがどのようなきっかけで今の活動に至ることになったのか、ヒアリングから得た情報を整理したものが次の表である。

表 6-23：キー・パースンの人生のターニングポイント整理

人物	A	B	C	D	E
変化の時期	21 歳頃	18 歳～29 歳頃	20 代	中学生頃・20 代	18 歳頃
内容	環境 NGO との出会い	国外の発展の様子を知る キリスト教との出会い	オランダの国際協力プロジェクトで職を得る	エッセイコンテストで入賞	フルートのコンテストで入賞
概要	環境 NGO に会うことで社会的活動を知る。養蜂を村に取り入れる流れを作るようになる	サウジアラビアおよび韓国に滞在し、外国の「発展」を目の当たりにし、発展について考える。キリスト教に出会い、目に見えない道を考えるようになる	大学に進学し、生物学を専攻し、大学院まで進学する。その結果、オランダの国際協力機関の養蜂プロジェクトで職を得る	勉強のために下宿生活を送った地方都市の学校のある地域のエッセイコンテストで 2 位になる	地域のイベントで吹いていた楽器、フルートの地域コンテストで 2 位を獲得する
影響	蜂蜜の取引先を見つけ事業が始まる	自国に帰国し努力・貢献することを選ぶ	養蜂と出会い、会社設立する	自分の特技であると認識した	音楽を専門的に学ぶようになる
自己犠牲の例	自ら資金を集めて地域に養蜂箱などを投資する	帰国直後、貯蓄がなくても起業し、低収入でも我慢する	民族で女性が社会進出することがほとんどない中、理解されなくても耐える	学ぶために自ら 14 歳のころから家族から離れて地方都市で暮らしはじめた	フルートの学校に行く交通費がなくても数時間歩いて通う
価値意識	村の人々の生活が、養蜂を通して共に改善されることが喜びである	国外で低賃金労働に従事して相対的にネパールよりよい収入を得るより、苦労してでも自国で居場所を見つけることに価値がある	女性でも社会に進出するべきであり、経済的に自立することは望ましいことである	美しいネパールを取り戻したい。NGO の活動で、歌をつくり環境について伝え、教材にも盛り込んでいる	国外に出る友人の話聞き、自らは国にとどまる価値を認識した

出典：筆者作成

ナラティブから抽出した内容で興味深いところは、どの人もある時期に大きな人生のターニングポイントを経験したことを自覚している点であった。しかも、そのターニングポイントが、言葉通り人生の分岐点となるほどの変化をもたらしているのが特徴である。またその際には、内発的発展論でも取り上げられている「外部との接触」がきっかけになっており、かつそうした経験の後、「自己犠牲」ともいえる努力を行っている。例えばキー・パースン A は大人になるまでは首都に行ったことがなく、舗装された道がない山の奥で暮らしていた。23 歳になったときに、はじめて国内の NGO の紹介でカトマンズの商談会に出席し、これが本人にとって初めての首都であったことに加え、商売の取引先に出会い、その後現在に至るまで 10 年以上にわたって続く今のビジネスにつながっている。B の場合は、田舎育ちで、学校教育歴の短い青年たちがよく選ぶのと同じように国外に出稼ぎに出た。しかし、そこで外国の発展を目の当たりにし、発展に関心を持った。この時、同時に韓国でキリスト教への信仰に目覚め、自らの魂の道を歩むことの意義を見出し、自国のために働くことを考えた。国外で割のいい収入を稼ぐより、国に戻り、貯蓄がなくても国の

将来を思いながら、起業をした。そして、15年以上続くビジネスに発展させている。Cは女性でありながら修士課程を卒業したことで、オランダのNGOで初めて職を得ることができ、女性として自立し、職を得ることに大きな達成感を得た。そこで養蜂に出会ったことをきっかけにスキルを身に付け、養蜂の会社を設立し、15年以上続けている。Dはもともと性格も社会貢献的で、子供の頃から青年グループを設立して村の支援活動をしているほどであったが、違う民族の女性と結婚したことで村を後にした。異なるカースト間の結婚は周囲には受け入れられず、村を出たことが一つのターニングポイントとなった。この時、同じ村出身の友人が首都で起業をしていたところに創業メンバーとして参画することになり、今に至っている。本人は、もし結婚がなかったら自分の村にいただろうと振り返るほどであり、したがって、人生にとって思いもよらないことで田舎を出たことが、社会貢献の活動の展開場所に変化をもたらすことになったのである。ただ、Dの場合は正確には文脈の違う2つのターニングポイントがあり、もう1つのターニングポイントは、中学生の時に勉強のために出た地方学校の地域コンテストで詩を書いて賞をもらったことである。エッセイコンテストでの受賞によって、自分の内面にある表現力、これを生かすことへの喜びに気づくことになり、現在、仕事現場で環境保全の詩を書き、詩を歌う特技を生かしている。この意味で、Dは結婚による物理的変化とコンテスト受賞という精神的変化ともいえる二つの大きな出来事が作用しているといえる。最後のEもまた、思ってもいなかったフルートコンテストで準優勝を飾ったことがそれであった。自らの音楽への興味に目覚めさせる出来事となった。お金がなくても音楽学校に通うために毎日徒歩で通学し、苦痛を惜しまず努力をし、その後10年にわたって活動は広がってきた。

それぞれのキー・パースンは、人生のターニングポイントにおいて、想定していなかった可能性や、価値観に出会うなど、何かしら本人の想定外の出来事を通して新しい世界に向かっていった経験を持ち、それが今の人生に直結する影響を与えている。Aであればカトマンズの商談会というビジネスへの接触、Bにとっては発展とキリスト教という価値観との出会い、Cにとっては修士号の取得とオランダの開発団体への就職という形でたらされた女性としての自立の実現、Dであれば詩のコンテストでの受賞（精神的）と結婚を機に田舎を出たこと（物理的）、Eであれば地域音楽コンテストでの受賞である。

これまで分析してきたように、キー・パースンの育った環境は学校教育歴も経済環境も暮らしぶりも様々で、子供の頃の欲求満足もばらつきがあった。一般と同じような多様性がある。そのためキー・パースンの特徴として共通点を考えるとき、彼らには、予期せぬ世界との接触から人生が変化した経験を持つという点で共通点があるといえる。この点は、内発的発展論を振り返る時、「外部との接触、外来の知識・技術・制度などを照合」という要件と一致してくることが興味深い。これは創造性という意味からも考えられる。鶴見は、心理学者のフィリップ・ヴァーノンの創造性（Vernon 1970 : 12）について引用し、創造性とは「複数の考えの新奇な複合または異常な結合」「そのような結合が、社会的もしくは理論的価値を持つか、ないしは人々の感情に影響を与える」とする（鶴見 1996 : 13）。本

調査でも、新しい可能性や価値観と衝撃的な出会いが新たな道を開いているのは上述のとおりであり、確かに、予期せぬ出来事は個人史に劇的な変化をもたらしていることが見いだされるのである。

内発的発展論の要件との共通点がほかにもあるかどうかを考えると、次のような点も見えてくる。キー・パースンはそれぞれ、国外在住経験の有無に関係なく、ネパールに対する価値意識を持ち、自国への社会貢献について自分なりの価値観を持っていることが見て取れることである。Aであれば、村の養蜂箱に投資し、村全体の発展に意義を見出していること、Bであれば、自らの魂の道はネパールに貢献することであると考える点、Cは女性でも社会で自立して活躍することに意味があると、現状のネパール社会について問題意識をもつ点、Dであれば、社会貢献意識がもともとあったと自覚している点である。Eは、子供の頃に外国に出稼ぎに行かないで国内で活動しようと早々に考えたことの他、楽譜の整備をして、伝統音楽の保存に価値を見出すことなどである。地域主義の意味で述べられているように、キー・パースンもそれぞれ、国家なり地域なり、自らが政治的な関係性を感じる範囲において貢献していく価値観を見出しているのである。こうした価値観に依拠した動機は、鶴見が内発的発展論は価値中立的ではなく、価値明示的であるとしている点に該当する部分であろう。鶴見は、「内発的発展論の担い手は、その目指す価値および規範を明確に指示する」としている（鶴見 1989a : 43）。キー・パースンが自己実現的人間であるとの仮説を通してマズロー理論の考察と分析をするなかで、同時に鶴見のキー・パースン論の見解を肯定する結果に繋がっている。

この他に得られた知見として、キー・パースンの性格面も興味深い。比較的慎重で、控えめに回答する者と、楽観的に回答する者がおり、子供のころにネガティブな厳しい環境で育ったと捉える者から、恵まれていたと捉えている者まで幅がある。単純に経済環境で判断することも難しいことが分かる。キー・パースンの性格面は多様であり、共通であるとは言いづらい。こうした違いにも関わらず、承認欲求については子供の頃からそれぞれ満足度が比較的高かった。承認欲求の満足は、キー・パースンが成長していく基本的な土台として見過ごしてはならないと考えられる。

これらの傾向から、性格や主観的な受け止め方、子供の頃の経済状態などに差はあっても、自尊心を持つこと、外的なものとの接触により人生の大きな転換期を迎えた経験があること、これに対し目標を見出して、犠牲を惜しまず努力をした経験を持つこと、そして社会に対する自分の価値意識を持つことが、自己実現に向かうキー・パースンとしての目的意識に貢献していたのではないかと考えられる。終章では、この調査結果から見出される「キー・パースン発掘」方法について考察し、内発的発展の起動方法、内発的発展の実践方法にかかわる結論を導くこととする。

## 第七章

### 予期せぬ出会いと内発的発展

#### —心理学的見地からの推論—

##### 第一節 調査結果の概要

本論文では、調査の結果キー・パースンの心理的特徴として、次のような知見を得ることができた。

(1) 自己実現欲求は、他の 5 段階欲求と比較的強い相関関係があるとみられ、特に承認欲求との関連は強いとみられる。

(2) 承認欲求は学校教育歴との間に比較的強い相関関係があるが、一方で自己実現欲求と学校教育歴とは相関関係が弱く、認められるとはいえない。したがって、自己実現欲求と承認欲求との関係は、学校教育歴以外の要素に媒介されていると考えられる。

(3) 一般標本と比べると、キー・パースンは、自尊心を見たし、自己受容ができているばかりでなく、他者からの承認や、自己の価値実現といった部分の欲求満足も高い。つまり承認欲求と自己実現欲求を総合的に満たしていることが特徴である。

(4) このように満足が高まった原因は、(2) により家庭環境や学校教育歴以外のところにあると推測される。したがってキー・パースンの人生を導いた共通点を分析すると、人生の目標を見出すきっかけとなった偶発的なターニングポイントの存在が重要であると考えられる。

(5) 偶発的な出来事は、外部社会との接触によって起こり、キー・パースンの人生に影響を与える社会的価値観・目標を与えていた。これにより多少の自己犠牲もいとわず目標に向かうエネルギーをキー・パースンに与えている。これらの共通点は、内発的发展論やキー・パースン論の要点にも一致している。

本章では、以上の分析結果から内発的发展論の実践方法を明らかにするべく考察を深めたい。特に、これまでの心理学的な研究成果から考えられることを整理し、キー・パースンへの理解につながるような知見を得たい。具体的には、調査を行ったキー・パースンにおいて、学校教育歴や家庭の経済的環境、都市部農村部という違いにもかかわらず、大人になって他者からの承認や自己価値の実現を満足するに至ったきっかけとみられる人生のターニングポイントの意味とその役割について、心理学を参照しつつ考察を加え、結論とする。

## 第二節 予期せぬ出会いと目標設定の関連性についての考察

今回は、分析の視点として学校教育歴を視点にしたコーホート分析を行った。一般標本では学校教育歴が高くても高い自己実現が実現していなかったこと、逆にキー・パースンは子供の頃の家庭環境や学校教育歴が様々でも大人になると自己実現欲求を満たしていたことから、キー・パースンの人生において、重要な転機が訪れたのが学校という場における出会いではないことに注目したい。

今回の分析では、学校教育歴は自尊心を満足させる効果はあるが、他者からの承認の満足とは直接関係がないという結果が出た。デシらによると、自尊心は 2 つに分けて考える必要がある。それは真の自尊感情と、随伴的な自尊感情である。真の自尊感情は安定し、統合され、価値や規範が伴っているとされる。一方の随伴的な自尊感情は、結果に依存し、それによって脅かされる不安定なものであるという (デシ, フラスト 1999 : 165)。マズローの欲求理論で捉えなおすと、随伴的な自尊感情とは満たされていない承認欲求であり、真の自尊感情とは、満たされた承認欲求ということではないだろうか。承認欲求は欠乏欲求であるから、満足していない時には環境依存的であり、満足すれば成長欲求に進むわけであるから、満たされた承認欲求は、それ以上外的環境に依存せずに維持できる。実際に、マズローも、次のように自己実現者の価値について説明している。

自己実現者は、自己の本質や人間性、多くの社会生活、自然や物理的現実を哲学的に受容することによって、自動的に価値体系の確固たる基盤を身に着けている。この受容という価値によって、日常の彼の個人的価値判断のほとんどすべてが説明される。

マズローによると、受容という価値は、二分性の解消など、一見、対立しているような様々な価値を、受容することで相互に合体して統一体としたものであり、それは楽しい差異であり、楽しい共同作業といった受け止め方になるとする (マズロー 1987, 267-272)。キー・パーソンたちは、他者からの受容 (Approved by society)、自己受容 (Self-personality) など、「受容」に関連する項目について他よりも満足度が高かったのは、分析結果で見たとおりである。すなわち、キー・パーソンは真の自尊感情に至っていると解釈できそうである。

キー・パーソンたちがこのように承認欲求、自己実現欲求を十分に満足させたのは、学校の影響によるものではなく、社会での偶発的な出会いによる人生のターニングポイントに関連する出来事によるという分析結果は、当研究において前もっては想定していなかった結果であった。内発的发展論ではこれに関連するものとして「外部との接触」を取り上げている。外部という言葉からも、出会いの場は常に知らない世界ということになる。「外部」というものが、そもそも想定していなかった事柄との出会いであろうから、鶴見の理路で考えても、やはり出会いの場は限定できないものである。人生や社会の変化が新しいものとの融合によって起るということは、抽象的な理論のみならず、今回の実例によるキー・パーソンたちが裏付けていることでもあり、興味深い結果である。

であるとすると、内発的发展の起動要因として、新たにキー・パーソンの誕生を期待するとすれば、多様な出会いがもたらされるような「場」が社会の中に必要だということになる。

現在、国際開発や協力において、教育は重要な支援となっているが、この中身は主に識字教育や学校教育である。つまり、教育を受けられる一定の機会を得ることができ、一定の場に行くことができ、所定の時間に教科書の内容を学び、読み書き、計算、社会科や理科を学ぶことである。このような機会が提供された場合、学校で友人と出会い、人間関係を豊かにし、家に帰れば宿題をすることになる。いわばある程度、限定的な出来事が繰り返される日々となる。

ところが、今回筆者がキー・パーソンとして調査した人々の人生のきっかけは、A であれば蜂蜜のマーケティングのツアーであったし、B であれば国外への出稼ぎと宗教との出会いである。C はオランダの国際協力団体への就職、D は地域のエッセイコンテストでの入賞と、民族間の結婚という出来事である。そして E にとってはフルートコンテストでの入賞である。5 名とも学校とは全く別の場において重要な「出会い」を果たしているのである。出会いはコンテスト・ビジネス・宗教・結婚など、予測のつかない幅を持っている。

したがって当研究から導かれうる結論としては、「多様な出会いがもたらされる場」が内発的发展のキー・パーソン発掘において必要である、というものである。「人生の価値観や目的意識に出会う場」の支援として、学校教育支援に限定せず、多様な社会的交流の場を、

子供から大人まで日常的に体験できるような環境作りが必要であるという含意が導き出せる。

現在、国際交流や国際協力、国際開発の場において、「出会い」そのものを提供することが意識された支援はどれくらいあるであろうか。

学校制度の整備であったり、教育教材の提供であったり、教員養成であったり、保健医療のサービス向上などは、いずれも人材・制度・技術・資材の支援であるが、それらはすべて社会において既存のものであり、知られており、有効であると認識された諸システムである。これらがインフラ的に整備されることが目指されているといえる。こうしたインフラは当然重要ではあるが、内発的な発展を目指すことにおいては、個人に特異な興味関心・特性・特技といった固有の機能そのものの発掘が重要な要素であるという意味では、既存の支援のフレームではカバーしきれないということである。

人々の固有の機能は、どのように明らかになるのだろうか。心理学の見地では自己概念や自己査定理論で重要になる「自らの能力の発見」として捉えられるかもしれない。今回、キー・パーソンたちは、偶発的な出会いによって、「自らのできること」と出会っていると捉えられるからである。そこで、心理学において議論されている自己概念や自己査定理論の意味を整理し、関連する議論から考察を深めてみたい。

### 第三節 自らに出会うこと、自己概念・自己査定理論からの考察

自己実現欲求は学校教育歴や家庭環境との関連は見られなかったが、承認欲求との相関がみられた。確かにキー・パーソンたちにとって、承認欲求は、5人の誰にとっても子供の頃から1番目か2番目に満足度の高い欲求階層であった。また、一般標本でもキー・パーソンと近い傾向を持つ人々が、承認欲求の中で自尊心の因子得点が高い層であることが認められた。承認欲求は、マズローの理論で言うと5段階のうち4番目の欲求階層であり、欠乏欲求の中では最上位の欲求である。キー・パーソンを考えるにあたっては、承認欲求との関連性において考えることも重要であろう。高いレベルの自己実現に至った背景に、承認欲求を満足させ自己実現に向けて離陸する心理的な要因があったと考えることができる。

心理学では、自己概念や自尊心といった概念が承認欲求に関連するものとして議論されているとみられる。自己概念とは、「自分は～だ」というように、対象化された自己についてのある統一的なイメージであるとされる（蘭 1992：170）。人間は、成長の過程で、自己概念を形成していくとされている。その過程は人格的な統合であり、心理学の辞典によると、統合（Integration）とは、①部分を全体にまとめること、あるいは、各部分を一定の秩序や関係に整えることを指す。②動因・経験・能力・価値観・パーソナリティの特徴が徐々に組織化された全体として形成される発達プロセスのことと表記されている（ファ

ンデンボス 2013 : 639)。すなわち、人格的な統合とは、自己概念を形成していく中で、能力、価値観といった自己についての多様な側面を明確にしていくことを通じて、自分が何者であり、何ができ、何がしたいかといった自己査定をしていくプロセスだとも捉えることができる。自己実現について語ったマズロー自身も、統合性について指摘している。大きな喜び、創造的瞬間に遭遇しているときとか、重要な課題、脅威、危険にめぐりあい、これらによく対処できているとき、有機体はその統合性が最も高いとし（マズロー 1987 : 47）、統合性はキー・パーソンを考えるうえで重要だと考えている。今回、キー・パーソンが偶発的な出会いによって自らの目的に出会ったということは、自己についての統合がうまくなされたのではないかと考えられる。

さらに、ジェームズ（James William）は、セルフという言葉について初めて自己概念を整理し、主体としての自我と、客体としての自己を分けて議論をしたと理解されている（遠藤 1992 : 9）。ジェームズによると、自己の意識状態は「知る主体としての自己（the self as knower）“I”」と、「知られる客体としての自己（the self as known）“Me”」からなる二重性として説明された。そして“Me”は、その形成領域として、物質的自己（Material Me）・社会的自己（Social Me）・精神的自己（Spiritual Me）を持つとされる<sup>67</sup>。そして、自尊感情の水準により、自己の発達が規定される、としている（蘭 1992 : 181）。ジェームズの自我と3つの自己の性質について整理すると以下のようになる。

① 主我（I）：主観的自己；自我

② 客我（Me）：客観的自己；自己

—物質的自己...自己の身体・衣服・家族、そのほか様々な自己の所有物

—社会的自己...他者から受けていると思っている評価・評判や名声

—精神的自己...自分の意識状態、心的能力、傾向

出典： 蘭（1992 : 181）から筆者整理

Me と I について、心理学者ミード（Mead）の解釈は、Me とは「自分自身が採用する他者の諸態度の組織化されたセット」<sup>68</sup>であり、I とは「自由とか自発性とかの観念をもたらす」ものであるとする<sup>69</sup>。特に、Me とは自己に関しての理解を環境に適応させる機能としてとらえられ、I とは社会を変容させる創造的主体としての一面を指すとしている（梶田・溝上 2012 : 8）。つまり、Me においては環境に対して適応的に行動をしようとし、実際に行動した実現値が I である。内面でさまざまな適応を行っても、その結果としての行動は、想定していたものから外れることが一般的である（周りの人はジャンプができ、自分も同じ人間だからジャンプができる、と思って飛んだにも関わらず、こけてしまった、など。もしかするとこの人は将来、誰でも上手にジャンプできる器具を開発するかもしれない）。こうし

<sup>67</sup> 遠藤・井上,他（1992 : 9）より、James（1890 : 1892）の和訳による説明を参照。

<sup>68</sup> 梶田・溝上（2012 : 8）より、Mead（1934 : 175）の和訳による説明を参照。

<sup>69</sup> 梶田・溝上（2012 : 10）より、Mead（1934 : 190）の和訳による説明を参照。

た想定からのずれが、予想していなかった新しい一面であり、創造的主体の一面であるとする。

上記から、人格的な統合のプロセスとは、さまざまな次元の自己概念を構成していく複雑な過程であることが分かる。遠藤は、自我・自己は定義として「精神的存在としての人を表す言葉」であるとし、人格を統合し、「行動・思考・感情の主体として機能する」ものを指しているとしている（遠藤 1992 : 8）。そのうえで、先行研究の考察より、セルフ・エスティーム（自尊感情）は「自分の個人的価値に関して、人が達し、維持する判断」であると整理している（遠藤 1992 : 20）。つまり、人は個人的価値について、さまざまな探究を重ね、その結果自己の価値を見出すことができれば、自尊心の高まりに寄与するのである。そして、マズローの承認欲求をこのセルフ・エスティームとして位置付けている（遠藤 1992 : 21）。

また、人は「自分の個人的価値に関して、人が達し、維持する」ために、まずは不確かな自己概念の解消に向かって人を掻き立てるとされる。これはヤコブ・トロープ（Yaacov Trope）の提唱した理論で自己査定理論と呼ばれ、自らの能力を自己査定しようとする欲求として考察されている（Trope 1975）。当研究の分析結果を考えると、キー・パーソンが経験したような「偶発的な出会いと目標の設定」と自己査定理論には関係があると考えられる。

マズローのいう承認欲求は、他者に認められたいという欲求として描かれるが、まさに自己査定理論のように、外部にある何らかの基準に基づいて自分の能力を査定している心的状態と捉えられる。例えば、外国語の試験で自分は何点取れるだろうか、と考えるとき、これによって自分の外国語の能力を査定するということであり、個人は自分の語学力に対する判断を行う。そして、その能力に応じ、人生において自分がどう外国語を活用するかについての選択をすることになる。同様に、例えば会社内で上司に認められるかどうかといった、点数には還元されないような自己査定に取り組んで熱心に働くことも考えられる。この場合は上司に認められたりその結果昇進したりすることで、自分にはその能力があるという自己査定を行うことになる。

自己査定では、外的な基準による客観的結果が下されるため、場合によっては自尊心が低下することも考えられる（蘭 1992 : 96）。例えば先の例で、思ったように外国語試験の点数がとれなかった場合、あるいは上司に認められなかった場合に、個人は自分が期待していた基準に到達しなかったことになり、自己査定結果としては自分に能力がなかったということから自尊心を低くする事態にもなりうる。自己査定の段階は、このように外的な影響を強く受けるものであり、マズローの理論の欠乏欲求の議論に沿うものである。自己査定は、マズローのいう自己実現の段階に到達するために（活動そのものに本質的な楽しみを覚えて取り組むために）、必ず通る必要がある段階であり、これをしないと安定して自分の能力を活用することができない。自分の能力に見合った活動をするためには、先行してこうした自己知識を得なければいけないのである（蘭 1992 : 96）。これはデシらの実験

においても述べられており、難しさの違うパズルに取り組む実験で、絶対に解けないように設定されたパズルに取り組んだグループは、実験後には内発的な取り組みが失われたが、解けるパズルに取り組んだチームはその後にも内発的にパズルの活動を続けたということである（デシ、フラスト 1999：90）。トロープが指摘するように、今後の自尊感情へのダメージの回避のためには、自己の長所のアピール、自分の能力水準にあった課題選択が必要で、潜在的な能力の実現とその発達などの効用を最大化するためには、まず、先行する自己知識が必要となる（Trope 1983）。デシらも、動機づけにおいては行動と目標との間に関係性があることが必要であり、有効な動機付けのためには、「できる」と感じている必要性があるとしている。また、外発的・内発的動機付けの両方にとって、「できる」という感覚が重要であるとしている（デシ、フラスト 1999：86）。さらに、自己知識はパーソナリティの統合を意味しており、自己知識を通じて人はより統合的になり、真の内的存在—内発的傾向や統合された価値—とつながりを持つようになるとする。個人主義は、理性の力と意志の強さはもっているが、それに自己知識が伴った場合にのみ、人は自律的になることができる、とする（デシ、フラスト 1999：193）。キー・パーソンたちも、偶発的な出会いというきっかけを通じて、自らの能力に出会い、それによって課題の選択をしていた。このように、自尊感情の性質について、自己概念や自己査定理論を考えると、キー・パーソンたちは、キー・パーソンになるきっかけとして自己査定の段階が完了していた、と推論できる。

今回の調査における承認欲求の質問項目は、「他者が自分を尊重し、尊敬し、大切にしているかどうか」「自分自身について自分で尊重し、尊敬し、大切に思っているか」といった抽象的な質問しかなかったため、自己査定の経験の具体的な内容について知ることはできない。しかし、人は自己の能力の判別性に関する情報に敏感であり、その情報量によって課題選択を行う（蘭 1992：90）。このことを考えると、キー・パーソンにとって、まさに偶発的な出会いは課題選択のきっかけであったと考えられる。例えば A では、自分の農村で起せる産業である養蜂を行うことに繋がった。きっかけは、国内の NGO が、首都でマーケティングツアーが実施されることを彼らに紹介し、案内したことから始まっている。A はおそらく、養蜂とその商売に対して、サポートを受けられるというアイデアに出会った時、「自分にできることだ」と判断したのではないだろうか。養蜂は、自分自身の村の活用しうる資源（や能力）の範囲であった。また、マーケティングツアーでは、良い取引相手に出会っているのである。また B であれば、国外への出稼ぎという経験の中で、自らがどれくらいの稼ぎを得られるのかに関する経験を積み、自分の稼得能力を判別したことに加え、キリスト教に出会ったことを通して価値観の土台を得た。これにより、自分自身の能力を天秤にかけ、国外よりも国内で社会貢献とビジネスを同時に行うことの意義を見出したといえる。そして C は、女性であっても大学院を卒業し、自立することができる、という自らの設定課題を実際にクリアし、能力の判定が実現しているとみられる。また養蜂の会社を設立したきっかけも、NGO で養蜂に関連するノウハウを得ていたからである。D は、子

供の頃から内発的に社会貢献活動をしていたため、こうした活動能力を持っていることを自らすでに経験していたことに加え、地方都市の学校に出た際には、詩のコンテストで優勝したこときっかけに、詩を書く自らの能力に目覚め、社会貢献活動の教育教材に自作の詩を活用するといった風に能力を無駄なく生かしている。E も同様であり、思いかけず準優勝に輝いたフルートコンテストにより、自らの音楽に対する能力の査定が思いがけず達成されたと見ることができよう。これにより、E も音楽の能力を生かした人生を展開している。実際の偶発的な出会いによって、自らのできることや能力を見極めており、その後目標設定したことについて行動に結びついているという点で、自己査定ができたといえるだろう。

自己査定理論との関連性は、マズロー自身の論考にも見いだせる。『完全なる経営』(2001)で、マズローが仕事について議論しているが、高度に発展した人間の場合、仕事はアイデンティティや自己の一部、すなわち、その個人の自己規定の一部となっている。仕事は一種の心理療法とも、心理高揚法ともなりうるとしている(マズロー 2001: 1)。自己規定の一部であるということは、まさに自己概念や自己査定に関連するであろうし、当調査におけるキー・パーソンたちも、自らの自己表現として、あるいはアイデンティティや自己の一部としての仕事を行っているといえるだろう。

#### 第四節 承認欲求、自尊心との関連性

今回の調査で浮かび上がった偶発的な出会いは、キー・パーソンにとって青年期以降の経験であることも特徴である。子供の期間における承認欲求がどうして高かったのかについては分からない。しかし 16 歳までの自己評価からも分かるように、子供の頃も承認欲求の満足度は相対的に高く、したがって周囲から自分自身が大切にされているという満足は得られていたものと見るができる。それに加えて 16 歳以降では、ターニングポイントとなった自己査定の経験をきっかけに自己実現への道に展開していったと見ることはできそうである。

また、キー・パーソンたちにとっては、学校教育歴や家庭の経済環境に関係のない事柄がターニングポイントとなっており、これが自己査定に繋がっていることが特徴である。人には多様な能力や関心があるということであり、それらは決して学校教育でのみ見いだせるとは言えない。心理学では自尊心の領域について、学校教育歴はそのうちの一つとして説明され、このうちのどれかを満たすことが自尊心にとって重要であるとの考察がされている。ポープ(Alice W. Pope)らのあげたセルフ・エスティームの 5 つの構成因子は、①社会的領域、②学力的領域、③家族のセルフ・エスティーム、④身体イメージ、⑤全体的なセルフ・エスティームであるとしており、学力的領域はその一部を構成しているに過ぎない(ポープ,他 1992: 4-5)。ポープらが子供の発達について研究した著書によると、非常に才能のある子どもは、たった 1 つ何かを間違っただけでもそれを失敗と見なすことが

あり、理想よりも少しでもまずい遂行をした時には、非常な衝撃を受ける。また、自尊心の低い者はしばしば非常に高い、達成の難しい行動基準をもっているとする。行動の基準が非現実的なきわめて高いものである場合、子どもは頻繁に失敗体験をすることになり、成功体験をすることはめったにないであろうとする。したがって、子供がどうしてもそのような行動基準を持ったのか、その原因を見極める必要があり、達成可能な行動基準を指導することが大切であると指摘している（ポープ、他 1992：111-115）。内発的發展論において鶴見が引用したアリエティも、同様の結果を示す研究成果を報告している。一般的な意味では、学校教育歴によって自尊感情に正の相関がみられるが、非常に知能の高い人の場合でも自己評価が逆に下がる場合もあり、この場合には自分に高い期待を持っているとする（アリエティ 1980：5）。

今回の調査においても、一般標本で SLC 以上の学校教育歴を持つ者たちが、自尊の欲求の満足が高まっていた一方で、他者からの承認は満足できていたとはいえなかった。また学校教育歴が高くても自己実現欲求が他の学歴層よりも改善されなかったのは、学力領域に課題設定を限定しすぎたからではないかとも考えられるだろう。

一方の学校教育歴が短い層では、学力における他人との競争や自己査定は途中で限界を迎えるわけであるから、社会のほかの領域で自らの能力を探すことになる。したがって、別の領域において自己査定を行ったと考えれば、それぞれの能力に出会って人生を切り開き、自己実現欲求の満足に繋げていったとも考えられる。キー・パーソンたちも、学歴は異なっているが、承認欲求も自己実現欲求も上がっているということは、多様な可能性の中から自己査定を行い、社会的自己を見つけ出すことに成功したのだということができるかもしれない。

## 第五節 自己評価の過程と「できること」の発見

以上の自己査定理論を参考にすると、本論文の原点となった問いである、内発的發展を意図的にもたらすには何ができるか、という問いに対する答えとして、「様々な可能性に出会う場」が重要であることが説得力を持ってくる。人には様々な関心事があり、自らの能力や関心に合った出来事と遭遇する必要がある。自己査定とは、自分の能力を判断し、適性を見つけること、できることやできる範囲などを見つけることであるから、自分の向いていないこと、できないことを見つけるだけでなく、できることとの遭遇が重要である。個々人には、学校では出会えない多様なニーズがあるのが自然であり、社会でそれに出会う必要がある。

できないことばかりに遭遇すると、ネガティブな反応に結びつく。例えば、自分がある特定の基準からかなり低いと考えられる場合、その基準より高いところにいる人とは自らを比較するのを嫌がり、自己防衛的になり自分より少し下の状態の人との比較をするなど

という行為につながるとされる。例えば、知能テストを被験者に対して行い、成績の結果について、嘘の順位を伝える。その時、悪い順位だったと伝えられたものは、その人が自らの悪評を恐れている場合、自分の自尊心が脅かされることから自己を防衛するため、自分より順位の低い人の点数を知りたいと申告することが多いことが実験で明らかにされている。防衛はネガティブであり、物事から距離を置く心理的状态に陥っているといえる。一方、成績が良かった者は、自分より少し成績のいい人の結果を知りたいと考え、接近の心理的な現れがみられるという（宮本（正）1992：110-114）。これは自己の統合性や自己評価、あるいは自尊心が低下しないように、不安を緩和・解消するための心理的仕組みであるとされる。心理学ではこうした防衛的措置を自我防衛的機制と呼んでいる（金城・鹿取 2015：232）。つまり、人は自らの自尊心を保護する本能があるため、長期間できないことに晒されて防衛機制に偏るのではなく、できること、したいこと、関心のある事に出会うことが必要であるということができる。心理学者プルチック（Robert Plutchik）によると、生体には、環境の刺激、状況、事象が自らの生存にとって有益か有害かをただちに評価しうる生物的機能が生来的に備わっている。有益と評価されればそれに対して接近する行動が、また有害と判断されれば回避する行動が生じるとする<sup>70</sup>。

内発的發展は、まさに接近行動に関係する必要がある、積極的に関わり、上昇していこうとする心と関係しているため、このような心理状態について知る必要がある。これは、自己評価維持モデルでも述べられている（田中 1992：78-84）。人は、自らの意識や関心の領域と関連のある分野の他者について考える場合、自分との比較においてその他者を考える過程に入る（比較過程）。一方、自らの関心領域と関係のない分野での高いレベルに到達した他者があれば、その人を称え、またその人が親密な間柄であれば、その人の威光のもとに満足感を覚えるという（威光過程）。内発的發展論は、自ら積極的に物事に関わっていく過程と言えるため、自らの関心領域における深まりが重要であろう。自らの関心領域との接触による前向きな比較過程において自己査定ができれば、自己実現の段階に繋がるはずである。内発的發展論における外部との接触は、単に外部の新しい物であればよいのではなく、社会のそれぞれの構成員の関心事と同じ領域における予期せぬ新しい接触が必要なのである。

## 第六節 自己犠牲的な努力の心理的な意味合い

キー・パーソンたちのように、自己査定がなされ、承認欲求もうまく満足された場合、課題達成に向けての努力も容易になるとされている。鶴見は市井三郎の言葉を引用して、自己犠牲的な努力を行うキー・パーソンについて述べているが、心理学の議論でも、そうした理論が成り立っている。前章の分析の際に紹介した心理学者ローゼンバーグの自尊心

---

<sup>70</sup> 鹿取・杉本・鳥居（2015：219）より、Plutchik（1980）の訳文を参照。

の心理学的効果<sup>71</sup>がその一つである。人は高い自尊感情を持つことによって、(a)ストレス耐性が強まり、(b)達成への強い動機付けをもち、(c)他者と接する際にあまり緊張せず好意的に評価される、などのポジティブな面がもたらされるとする。動機付けの研究分野において特に達成動機付けに関しては、「自分でもやれる」という抱負の水準に向けて、努力をす  
るとしている。デイビッド・マクレランド (David McClelland) によれば、中程度の困難度の課題が一番達成行動につながるとされる。成功率が 0.3 から 0.5 に収まるものがもっとも好まれるとする (マクレランド 2005 : 79)。自己犠牲的な活動の意味は、こうした適度な困難への挑戦の側面からも考えられよう。特に、成功は自尊傾向を強めてさらなる達成的行動に勢いが付くとしている (金城・鹿取 2015 : 226)。自らの自尊心を高めていく方向に目標設定することに関しては、自己査定理論からも説明が見られる。それは二つの自己評価の目的であり、一つは自己の能力水準を正確に把握しようとする自己査定 (self-assessment) であり、他の一つは自己の自尊感情すなわち自己の価値づけを高める、あるいは維持しようとする自己高揚 (self-enhancement) である (越 1997)。自己高揚過程の理論も、達成動機の一面を示している。これらの理論の示すところは、〔自己査定過程→成功体験→自尊感情の高揚→達成動機付けの促進→成功〕といった風に、サイクルとして連動していると理解できる。マズローの理論と関連づけるとすれば、はじめに自らの能力を正確に把握するための自己査定により、欠乏欲求から離陸する準備が整えられ、自己査定が終わり、自らの能力を生かしてさらなる目標を立てるとき、それが自己高揚過程として自己実現欲求の満足に向かうのではないだろうか。自尊感情は、承認欲求 (欠乏欲求) の満足にも、自己実現過程 (成長欲求) に対しても、両方に影響を及ぼしていくものであると考えられる。キー・パーソンたちも、自らの能力やできることを見つけて取り組んでいることを見れば、キー・パーソンの経験してきた活動の過程も、自己査定ならびに高揚過程に関連していると考えられる。

また成功体験は、動機付けを促進し、達成に向けての持続的な努力を可能とする点で、キー・パーソン論の自己犠牲的努力としても捉えられる。自己効力感の研究を行ったアルバート・バンデューラ (Albert Bandura) の理論も興味深い。人は高い自己調整効力感が知覚されるほど、ねばり強く自己制御の努力を続けようとし、自分の個人的基準を破るような社会的圧力にも抵抗できるとする (日本道徳性心理学会 1992 : 227)。キー・パーソンたちも、自らのできることを知覚し、目標設定をして努力してきた中で、まさに自己制御の努力をしたと解釈できるため、自己調整効力感を高め、努力の継続につなげていたと考えられる。実際、マズロー自身も、類似した見解を示している。例えば、自己実現者は、神秘的なことや先の見通しの立たないこと、あるいは、あいまいさや構造の欠如を楽しむことができ、予測不可能性や、未来に対する支配力などが欠如した状態に耐えられるとしている (マズロー 2001 : 305-206)。つまり、自己制御能力をもち、不確かさに向き合うという姿が説明されているのである。

---

<sup>71</sup> 第 6 章第 6 節にて。

心理学では、こうした多様な研究成果が、達成動機付けの理論を論証するように相互に関連している。キー・パースンたちが自尊心を育んできた背景として、自己査定を効果的に達成し、自らのできることを知り、それを自己高揚過程ともいえるさらなる達成目標として位置付け努力を重ねたことがあると考えられる。そして、マズローの言うような、構造の欠如や未来への不確かさにも耐えうるような、自己効力感を持った人物になったものと考えられる。学術的な考察は多様な角度から可能であるが、還元すれば「自分にできることとの出会い」という点がこのようなプロセスを踏む重要な契機であるとみられる。

## 第七節 キー・パースンの内発性と、創造性

ここまで、調査から見出したキー・パースンの特徴を、心理学から推論し、また内発的発展論の議論との関係の中で整理してきた。ところで、表 3-1 では、デシ・ライアンによって提示された有機的統合理論の図に関して、キー・パースンとは自律的動機付けを持つものではないかと推測していた（第三章）。キー・パースンの動機付けには、内発的動機付けである「内的調整」以外に、外発的動機付けの「統合的調整」が含まれるのではないかと、ということである。統合的調整とは、社会における規範や正義の観念と、自分自身の信念に葛藤がない場合に、そうした規範を自らに取り入れて動機付けを行っている場合である（櫻井 2012: 49）。今回調査したキー・パースンを見てみると、例えばキー・パースン D、E などは、詩や音楽といった、自らの純粋な興味や特技に目覚め、それを楽しんで行う動機があり、それを実践しているという点で、内的調整と呼べるであろう。しかし、例えばそれ以外のキー・パースンであれば、自らの持っている資源や能力と、外部から訪れたビジネスの機会が相互に合致し、地域や国の発展に生かそうとしている点で、統合的調整であるとも読み取れないだろうか。いずれも、内的調整を内に含みつつ、外的調整の側面もあるように捉えられる。したがって、キー・パースンとは、やはり自律的調整の範疇で活動しているものと推論できる。

また、アリエティやヴァーノンが創造性と独創性を区別していたが、今回調査したキー・パースンの経験も、自分の持っている能力や可能性、チャンス、他者と共有できる社会的活動に転換させている意味で、鶴見の創造性の議論に合致する。したがって、キー・パースンとは、鶴見によって描かれている人物像に合致しているといえる。しかし、そのような創造性に至った背景として、自分の中で眠っていた能力や可能性が、社会との偶発的な接点によって表面化し、自らに気づきをもたらしたという事実が重要である。ニールス・ボーアのように、夢の中で科学的な回答を得たといったことはおそらく珍しいことであり、今回調査したキー・パースンたちは自分自身だけの力で自分のできることに気が付いたというのではない。あくまで「外部との交流」が、自分自身に気づきをもたらしているのである。その意味で、創造性をもたらすためには、多種多様な社会的な活動との接触が重要

である。

## 第八節 結論

これまでの調査結果、また心理学からの推論として考察した通り、本論文では、多様な価値や可能性に出会う場を通して、人々が自己の可能性に出会う場が必要であると結論付ける。このような社会環境が整えば、南の国々においても内発的な活動をする人材が多く生まれると考える。学校教育により均一な知的機能を高めることも、大変重要なことであることは間違いない。しかし、学校で教えられることには、教える側の価値判断（何を教えるか）の影響もあり、それぞれの興味関心や潜在能力に適合するとは限らない。むしろ、人生に影響を与える関心事は、社会の多様な場において見つかることがほとんどであろう。その意味で、内発的発展のきっかけとは、人生のあらゆる機会や環境、偶然がもたらすものであり、北の国々でも南の国々でも当然起こるものであろう。そのためには、社会の様々な場で、多種多様なイベントが催され、人と人とが交流し出会う場を設けていくことが大切になる。

多様で幅広い出会いをもたらし交流に対する支援はどれくらい行われているであろうか。日本であれば、日本貿易振興機構（JETRO : Japan External Trade Organization）によって、世界中との貿易、商業の交流を促進する事業が実施されている<sup>72</sup>。国際交流基金（Japan Foundation）は、日本文化を世界に発信し、交流するための文化事業を行う機関である<sup>73</sup>。また、国際協力機構（JICA: Japan International Cooperation Agency）は、日本人材開発センターを世界の 9 か国に設置し、日本と世界の人々の間の人脈を豊かにするための拠点を運営し、文化交流にも取り組んでいる<sup>74</sup>。近年では、国の政策により、アフリカの学生を修士課程に受け入れてビジネス人材を育成する留学プログラムもあり、多くの大学にアフリカの留学生が学びに来ている<sup>75</sup>。日本の政府関係機関によっても、少なからず、商業や文化、学術交流がなされていることが分かる。しかし、こうした機関を通じて出会いの機会を得られる人は、ごく限られているであろう。一方、今回紹介したキー・パーソンたちは、現地の生活に根差した草の根に近い場面での社会交流から人生を転換している事例であった。地域のコンテストや地域の仕事での出会い、現地 NGO との出会いなどである。より草の根に近く、参加条件に限定がない社会交流の場での出会いの場づくりが重要である。例えば、オランダに拠点を置く国際開発 NGO である ETC-foundation が農村開発に取り組む COMPAS プログラムの内発的発展の研究によると、インドでは、少数民族のリーダーたちが集う Naik Gotna ネットワークが形成されており、2001 年にはインド各地の少数民族が

---

<sup>72</sup> <https://www.jetro.go.jp/jetro/>

<sup>73</sup> <http://www.jpff.go.jp/j/index.html>

<sup>74</sup> <https://www.jica.go.jp/japancenter/about.html>

<sup>75</sup> <https://www.jica.go.jp/africahiroba/business/detail/03/index.html>

文化交流を行うイベントが開かれた。400 もの村から 5000 人もの伝統的リーダーが集い、少数民族のもつ伝統的知識などを披露した。これは、伝統的リーダーたちの交流のみならず、行政に少数民族の持つ伝統や知識の価値を訴える意味もあったという (ETC-foundation COMPAS 2007 : 190)。さらに、2004 年には、アメリカで南北アメリカやアフリカから 13 人の少数民族の Grandmother が集い、現代世界において、子供たちがテレビや近代の物質的生活によって伝統的な暮らしの在り方を失っていることについて議論した。そして、現代世界の問題は精神的なレベルでのみ解決できるとし、Center for Sacred Studies<sup>76</sup>の下に、非営利組織としてグループを組んで活動をすることにした (ETC-foundation COMPAS 2007 : 71)。これらの事例は、少数民族のリーダーが集っているという意味で参加条件が限定的ではあるが、草の根のレベルの問題意識をつなぐ意味で大変重要である。それぞれ集会の結果、相互の交流が生まれ、また少数民族の価値や知識の重要性を訴えようとする行動に繋がっているという意味で、内発的発展にとっても重要な意味を持つであろう。これに対し、今回のキー・パースンの事例からも重要なヒントが得られる。キー・パースンたちに出会いのきっかけをもたらしたイベントは、参加条件がすべての人に開かれていた。地域のコンテスト (キー・パースン D.E)、国内の NGO によるビジネスマッチング企画 (キー・パースン A)、外国への出稼ぎ (キー・パースン B)、就職先での出会い (キー・パースン C) といったものだからである。国際機関や国際協力機関といった他国の財源による開発や国際交流プログラムではカバーできないような地域性の高い文化イベントは、多くの人を巻き込める可能性の大きさという点で見逃さないであろう。

北野のいうような草の根民衆知識人は、必要な知識は身近なところから随時獲得して、創造的活動を展開していく人々である (北野 2008)。当調査におけるキー・パースン A などは、ネパールにおいても最も辺境にある地方の貧しいといわれる民族の出身であるなかで、内発的な活動を展開している例であり、草の根民衆知識人のあり様を例証しているといえる。A は、養蜂によるビジネスと村おこしという目標に出会ったことをきっかけに、自らの努力で身近なネットワークや資源を探し出して活動を展開してきた。つまり、必要なのは目的に出会うような出来事の方であり、目標や目的があれば、必要な知識や技術は自ら獲得しに行くのが草の根民衆知識人であり、内発的発展論の可能性の広さを見せている事例である。このほかの事例も、自らの足で動き、きっかけを広げている意味で同様である。実際のこととして草の根民衆知識人は自らの意志で新たな世界を切り開くことが可能であることが分かる。必要なのは、「自らのできることや関心事に出合うこと」そのものだと言える。

自らの目的に出会うことにより新しいものを生み出す創造性と、自ら道を切り開く自己目的的な行動動機を持つ人間が生まれるのは、モチベーション 3.0 の〈自律性〉〈熟達〉〈目的〉の世界の始まりだとも考えられる。他律的なアメとムチではなく、自らの「フロー」の中で活動を遂行していくことができる世界である。

---

<sup>76</sup> アメリカの非営利活動団体 ; <http://centerforsacredstudies.org/>

マズローのように、自己実現的人間は非常に幸運で、珍しい人であるかもしれない<sup>77</sup>。しかし、実際には草の根民衆知識人はどこの農村にもいるものであり、起業家は世界中において数知れない。それぞれが自らのできることを探し、求め、実践し、能力を生かしていることは現実に事実である。このような人々が活動できている社会があるなら、それは内発的発展が着々と進行している社会であるはずである。お互いを承認する環境の維持と、何ができるのかという自己査定ができるような多様なイベントや学習、出会いのきっかけを持つことができる環境の整備が重要である。このように考えると、国際開発や国際協力として南の国の内発的発展を考えると、直接に開発や発展の目的に焦点を当てず、文化や暮らしの場における様々なテーマでの交流といったことを目的にしたイベントを行うことが結果的に内発的発展の萌芽の契機を作るうえで意味を成すであろう。

したがって、誰にでも参加できるような安い料金や、無料の行事やイベントごとが多いことも理想であると考えられよう。例えば南の国々の、もっとも不便な地域では、多様な文化的なイベントに参加し、様々な社会的な可能性を見聞きする機会が乏しいかもしれない。日々の暮らしに精一杯であったり、地理的に人が集まるイベントが開催しづらく、多様な能力を持つ人々や可能性に出会う機会が乏しい可能性があるだろう。その場合には特に外部からの支援に意味が見いだせるであろう。農村といった不利な地域にいる人々達でもアクセスできる多様な文化経済的なイベントが用意される必要があると考えられる。一人一人の人間が、自分の関心に沿ったテーマに出会い、どのようなときに「フロー」体験が伴うのか、楽しいと感じるのか、そして、その関心分野で何ができそうなのか、そうしたことを垣間見る瞬間を、世界のどのような場所においても経験できるような支援が理想的である。

## 第九節 本研究の限界、課題および可能性

本論文の関心は、均質的な近代化路線とは違い、持続可能で、地域に依拠した、固有の発展の経路を求めることである。特に、それが南の国々において起こることに着目して研究を行った。本論文の調査はネパールで実施した。この調査の課題として考えられるのは、この標本では世界という母集団を想定できないところである。ネパールは、例えば戦争紛争状態にない。果たして、たった今、内戦紛争で命を落とすかもしれない危機の迫っている社会で、今回ネパールで集めた一般標本に近い回答が集まるだろうか。おそらく、生理的欲求や安全性欲求の段階で問題が示されるであろう。同じような途上国であると解釈されていても、社会の在り方を「貧困」の一言で解釈できないそれぞれの状況がある。紛争下にある国において必要なのは、何よりも食料や安全の確保といった緊急支援なのであり、

<sup>77</sup> マズロー（1998：258）では、マズローの観測や他の研究でも、自己実現者は全体の1%にも満たないと考ええらるゝとし、その原因が人間の本性への危険視であったり、不確かさへ踏み出す必要があったり、または進むべき方向を示唆する人間の本能の微弱さによるとしている。

多様な文化的イベント、社会交流により才能を発掘する支援ではないだろう。マズローの 5 段階欲求は、こうした相違に注意を向ける意味でも価値があるはずである。

何を支援すべきなのかは、その地域の集団の欲求段階が示すであろう。したがって、このようなアンケート調査をそれぞれの国や地域で実施し、生命の基本的な水準で危険にさらされているのか、あるいは自己実現的人間の発掘の支援がなされるべきか、判断に活用することもあり得る。

今回、調査がネパールで行われたのには、この意味でも価値があったと考えている。ネパールは経済的分類では最貧困国に当たるとされている。しかし、この言葉では不適切な、伝統と歴史に依拠した暮らしの在り方があり、戦争状態ではない日常がある。このためネパールには、生理的欲求や安全性欲求といった欠乏欲求への支援というよりは、自己実現的人間の発掘、すなわち成長欲求への支援や関与が十分支援の対象になる国であると筆者は考える。一般標本において所属性欲求や承認欲求の満足度が高いサンプルが多かったこともその一端を表しているはずである。すなわち、豊かな人間関係というソーシャル・キャピタルがあるのではないだろうか。こうした社会だからこそ、キー・パースンと一般標本の違いを検討する意味があったともいえよう。内戦や紛争下のサンプルを利用するとなれば、かなり実証性が乏しい結果にもなりかねない。あるいは、平時と、非常時におけるキー・パースンは違う様相で現れるかもしれない。このような理由から、南の国で、最貧困国とされるネパールのサンプルを利用したのは、非常に意味があったと考えている。

また、社会運動としての内発的发展論との関係も課題である。鶴見は、政策に伴う緊張関係が地域住民との間に多かれ少なかれ存在しなければ、内発的发展とはいえないとしている（鶴見 1996 : 27）。今回、注目したキー・パースンたちは、決して国や行政の政策との間で緊張関係をもって活動しているわけではない。むしろ、それを利用しているといえる。例えばキー・パースン A は、養蜂のビジネスをする中で、国連や NGO が提供する助成金に自ら申請して資金を獲得したり、そうした機関の提供するトレーニングも自ら進んで受けている。B は、現代の世界の潮流の中でみられる出稼ぎに出ている。C もまた、オランダの NGO で職を得て働いた。D や E は、地域の任意団体や行政などが提供するコンテストを利用している。これらの事例は社会運動としての側面では語れない草の根の活動である。鶴見は、市井のキー・パースン論を引用する際に、エリートではなく、「地域の小さき民」を内発的发展論のキー・パースンだとしている<sup>78</sup>。とはいえ、鶴見の場合は、社会変革に至るような地域のレベルの社会運動を意識していた。本論文で取り上げたキー・パースンの事例は、内発的发展論の文脈にそぐわない事例であろうか。筆者はそう考えない。本論文で扱った事例は、社会に対して異議申し立てをしているというよりは、それとは無

---

<sup>78</sup> 鶴見は、市井のキー・パースン分析をエリートとしてのキー・パースンについてであったとしている。確かに、市井が分析したのは歴史上の英雄ではあるが、市井はキー・パースンと「英雄史観」との違いをあえて示しており、議論の性質から、農村などの地域の変革者なども含まれうると考えられる。市井（1972 : 34・40 ; 1963 : 507）を参照。

関係に、現代世界の制度機構や地域や人間関係をうまく生かし、逆にその弊害を癒すような活動を生み出そうとしているといえる。制度との緊張関係の中で発動する内発的发展の運動に価値があるとすれば、制度とは正面から戦わずに、制度との接点をニーズに合わせて再縫合していくような、草の根の賢い対処方法も、内発的发展論のあり方に含まれるのではないか。ある意味で、中国の模式論で語られた地域経済发展の事例も、制度を利用している事例であった。鶴見自身も、政策との緊張関係とはいっても、政策の一環としての内発的发展もあり、地域の住民の自然や伝統に基づいた地域发展の仕法を、政府または地方自治体を取り入れる場合もあると議論していた（鶴見 1996 : 27）。地域の主体の方が先に制度をうまく利用し、その間でのやりが、後に政策に反映されることもあるだろう。今回の事例についても、いずれ政策側が活動主体の意見を反映して制度に採り入れることがありえるのである。文明論としての内発的发展論という立場からみても、現行文明に異議申し立てを行う内発的发展もあれば、むしろ現行文明と正面からは戦わず、ニーズに合わせて制度との関係を塗り替えていくような草の根の挑戦もありえるのではないか。いわば、二段構えで臨む内発的发展の形というものが含まれるはずである。本論文のキー・パーソン研究が、少しでも内発的发展論のキー・パーソン論を深めるのに寄与できる点があれば幸いである。

## 付録

## 分析資料

※分析資料の出典に関してはすべて筆者作成。

【資料 1：因子分析の出力結果（過去）】

**p1回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
1p1	0.832	-0.004
1p2	0.793	0.151
1p3	0.603	0.545
1p4	0.647	0.411
1p5	0.712	0.177
1p6	0.585	0.173
1p7	0.450	0.552
1p8	0.523	0.431
1p9	0.553	0.564
1p10	0.533	0.476
1p11	0.101	0.809
1p12	-0.013	0.877
1p13	0.467	0.619

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分（括弧内因子コード）  
1:Past physical needs(p1.1)  
2:Past physical health(p1.2)

**p2回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
2p1	0.119	0.798
2p2	0.112	0.767
2p3	0.143	0.829
2p4	0.319	0.645
2p5	0.264	0.864
2p6	0.559	0.568
2p7	0.703	0.371
2p8	0.679	0.260
2p9	0.654	0.278
2p10	0.683	0.178
2p11	0.808	0.053
2p12	0.856	0.023
2p13	0.408	0.427
2p14	0.109	0.588

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Past environment security(p2.1)  
2:Past housing security(p2.2)

**p3回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分		
	1	2	3
3p1	0.314	0.641	0.268
3p2	0.551	0.440	0.246
3p3	0.791	0.156	0.116
3p4	0.782	0.374	0.081
3p5	0.388	0.526	0.469
3p6	0.164	0.842	0.229
3p7	0.286	0.764	0.056
3p8	0.147	0.711	0.512
3p9	0.831	0.087	0.104
3p10	0.757	0.107	0.316
3p11	0.420	0.369	0.644
3p12	-0.158	0.546	0.550
3p13	0.162	0.056	0.789
3p14	0.022	0.366	0.758
3p15	0.400	0.164	0.731

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 8 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Past family love(p3.1)  
2:Past community love(p3.2)  
3:Past share closeness & happiness(p3.3)

**p4回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
4p1	0.767	0.125
4p2	0.791	0.216
4p3	0.747	0.276
4p4	0.723	0.322
4p5	0.545	0.436
4p6	0.500	0.648
4p7	0.441	0.631
4p8	0.302	0.719
4p9	0.050	0.853
4p10	0.289	0.782

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Past approved by society(p4.1)  
2:Past self-respect(p4.2)

**p5回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
5p1	0.135	0.926
5p2	0.748	0.221
5p3	0.707	0.345
5p4	0.837	-0.061
5p5	0.725	0.209
5p6	0.761	0.332
5p7	0.789	0.276
5p8	0.644	0.529
5p9	0.758	0.195
5p10	0.800	0.307
5p11	0.789	0.360
5p12	0.672	0.369

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Past self values(p5.1)  
2:Past self personality(p5.2)

【資料 2：因子分析の出力結果（現在）】

**c1回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
1c1	0.643	0.197
1c2	0.712	0.238
1c3	0.679	0.113
1c4	0.720	-0.014
1c5	0.674	0.303
1c6	0.559	0.489
1c7	0.516	0.110
1c8	0.698	0.147
1c9	0.679	0.189
1c10	0.677	0.067
1c11	0.137	0.909
1c12	0.126	0.925
1c13	0.476	0.259

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分（括弧内因子コード）  
1:Current physical needs(c1.1)  
2:Current physical strength(c1.2)

**c2回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
2c1	0.859	0.055
2c2	0.886	0.118
2c3	0.726	0.338
2c4	0.605	0.381
2c5	0.487	0.414
2c6	0.430	0.579
2c7	0.342	0.668
2c8	0.250	0.655
2c9	0.242	0.699
2c10	0.208	0.625
2c11	0.187	0.739
2c12	0.030	0.773
2c13	0.604	0.362
2c14	0.669	0.226

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Current housing security(c2.2)  
2:Current environment security(c2.1)

**c3回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分		
	1	2	3
3c1	-0.036	0.701	0.307
3c2	0.367	0.554	0.239
3c3	0.024	0.097	0.864
3c4	0.187	0.420	0.693
3c5	0.250	0.627	0.200
3c6	0.274	0.609	0.303
3c7	0.188	0.652	0.443
3c8	0.430	0.655	-0.050
3c9	0.205	0.314	0.633
3c10	0.179	0.141	0.873
3c11	0.721	0.317	-0.078
3c12	0.737	0.091	0.265
3c13	0.698	0.004	0.219
3c14	0.736	0.361	0.128
3c15	0.665	0.326	0.164

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 8 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Current share closeness & happiness(c3.3)  
2:Current community love(c3.2)  
3:Current family love(c3.1)

**c4回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
4c1	0.721	0.199
4c2	0.758	0.230
4c3	0.705	0.290
4c4	0.745	0.080
4c5	0.166	0.595
4c6	0.083	0.813
4c7	0.217	0.730
4c8	0.473	0.553
4c9	0.471	0.447
4c10	0.285	0.696

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Current approved by society(c4.1)  
2:Current self-respect(c4.2)

**c5回転後の成分行列<sup>a</sup>**

	成分	
	1	2
5c1	0.046	0.862
5c2	0.665	0.402
5c3	0.678	0.272
5c4	0.770	0.314
5c5	0.684	0.153
5c6	0.658	0.468
5c7	0.532	0.594
5c8	0.411	0.712
5c9	0.717	0.319
5c10	0.827	0.081
5c11	0.657	0.276
5c12	0.699	0.181

四因子抽出法：主成分分析  
回転法：Kaiser の正規化を伴うエクマックス法<sup>a</sup>  
a. 3 回の反復で回転が収束しました。

成分  
1:Current self values(c5.1)  
2:Current self personality(c5.2)

【資料 3：因子分析の出力結果 2（過去）】

**p1説明された分散の合計**

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	6.210	47.772	47.772	6.210	47.772	47.772	4.261	32.773	32.773
2	1.444	11.107	58.879	1.444	11.107	58.879	3.394	26.105	58.879

**p2説明された分散の合計**

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	5.981	42.719	42.719	5.981	42.719	42.719	3.945	28.178	28.178
2	1.901	13.577	56.296	1.901	13.577	56.296	3.937	28.118	56.296

**p3説明された分散の合計**

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.174	47.829	47.829	7.174	47.829	47.829	3.556	23.708	23.708
2	1.937	12.915	60.744	1.937	12.915	60.744	3.462	23.078	46.786
3	1.153	7.685	68.429	1.153	7.685	68.429	3.246	21.643	68.429

**p4説明された分散の合計**

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	5.193	51.934	51.934	5.193	51.934	51.934	3.213	32.135	32.135
2	1.128	11.282	63.216	1.128	11.282	63.216	3.108	31.081	63.216

**p5説明された分散の合計**

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.259	60.490	60.490	7.259	60.490	60.490	6.203	51.695	51.695
2	0.881	7.344	67.833	0.881	7.344	67.833	1.937	16.138	67.833

【資料 4：因子分析の出力結果 2（現在）】

c1説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	5.365	41.267	41.267	5.365	41.267	41.267	4.603	35.407	35.407
2	1.500	11.538	52.805	1.500	11.538	52.805	2.262	17.398	52.805

c2説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	6.210	44.361	44.361	6.210	44.361	44.361	3.967	28.338	28.338
2	1.613	11.518	55.879	1.613	11.518	55.879	3.856	27.540	55.879

c3説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	6.276	41.843	41.843	6.276	41.843	41.843	3.140	20.934	20.934
2	1.887	12.579	54.422	1.887	12.579	54.422	3.064	20.429	41.362
3	1.079	7.196	61.618	1.079	7.196	61.618	3.038	20.256	61.618

c4説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	4.294	42.944	42.944	4.294	42.944	42.944	2.742	27.415	27.415
2	1.169	11.693	54.637	1.169	11.693	54.637	2.722	27.221	54.637

c5説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	6.369	53.075	53.075	6.369	53.075	53.075	4.968	41.399	41.399
2	0.997	8.307	61.382	0.997	8.307	61.382	2.398	19.983	61.382

【資料 5：因子得点の最大値・最小値の分析】

		p1.1	p1.2	p2.1	p2.2	p3.1	p3.2	p3.3	p4.1	p4.2	p5.1	p5.2
	A	-1.30	0.73	-0.47	-1.03	-0.51	-0.47	-0.31	-1.26	-0.54	-1.04	-1.05
	B	-0.46	1.47	-2.04	1.30	-0.93	-0.02	-2.08	1.67	-2.54	-1.27	-1.15
	C			1.37	0.49				-1.13	1.95	-0.32	1.23
	D	0.88	1.01	1.97	1.18	1.44	0.53	1.96	-0.84	1.23	0.00	0.54
	E	0.43	0.26	1.07	0.07				0.19	0.03	0.63	-0.11
	一般標本最大値	2.07	2.02	2.03	2.20	2.40	2.55	2.03	2.04	2.83	2.95	2.39
	一般標本最小値	-2.14	-2.68	-2.50	-2.42	-3.00	-2.67	-1.85	-4.10	-3.06	-1.94	-3.09
C4.1>0	一般標本最大値	2.07	2.03	2.20	2.20	1.41	1.76	1.99	1.99	2.06	2.39	2.39
	一般標本最小値	-1.81	-2.68	-1.85	-2.42	-1.79	-1.88	-1.85	-4.10	-3.06	-1.68	-2.26
C4.2>0	一般標本最大値	2.07	2.02	2.03	2.03	1.67	2.55	1.86	2.04	2.83	2.87	2.39
	一般標本最小値	-1.96	-2.68	-2.50	-2.42	-3.00	-1.88	-1.28	-4.10	-3.06	-1.94	-3.09
C5.1>0	一般標本最大値	2.07	1.88	2.03	2.20	1.67	1.50	1.76	2.04	2.11	2.06	2.39
	一般標本最小値	-1.67	-1.72	-2.50	-2.42	-1.79	-1.88	-0.77	-1.83	-3.06	-1.68	-1.98
C5.2>0	一般標本最大値	2.05	1.74	2.03	2.20	2.40	1.50	0.84	2.04	2.83	2.95	1.83
	一般標本最小値	-1.96	-1.97	-2.37	-2.42	-1.51	-1.88	-0.79	-2.68	-3.06	-1.88	-1.98

		c1.1	c1.2	c2.1	c2.2	c3.1	c3.2	c3.3	c4.1	c4.2	c5.1	c5.2
	A	-0.02	0.20	1.52	-0.06	0.32	0.40	1.62	-0.14	0.07	0.79	0.02
	B	1.49	0.36	-0.28	0.70	-0.33	-0.37	-1.21	0.58	1.55	0.05	0.11
	C	0.84	-1.96	-1.07	0.34	0.29	-0.93	-1.39	1.18	-0.63	1.24	0.84
	D	1.17	0.34	1.16	-0.05	0.59	1.86	0.93	1.23	1.08	1.54	0.85
	E	0.91	0.40	1.02	0.46				1.76	-0.10	0.82	0.57
	一般標本最大値	2.22	2.65	2.79	2.41	2.03	2.77	1.88	2.54	2.56	2.34	2.26
	一般標本最小値	-3.25	-2.53	-2.72	-2.74	-2.81	-2.48	-4.34	-2.44	-2.29	-2.66	-2.66
C4.1>0	一般標本最大値	2.65	2.65	2.32	1.98	2.77	2.77	2.54	2.54	2.34	2.34	2.26
	一般標本最小値	-2.01	-2.53	-1.57	-1.58	-4.34	-1.36	-2.09	0.01	-2.24	-2.01	-2.37
C4.2>0	一般標本最大値	2.22	2.65	2.41	2.79	1.88	2.77	2.03	2.51	2.56	2.19	2.26
	一般標本最小値	-3.25	-2.53	-2.74	-2.72	-1.72	-1.43	-2.04	-2.44	0.01	-2.01	-1.16
C5.1>0	一般標本最大値	2.22	2.54	2.41	2.79	1.88	2.07	2.03	2.51	2.11	2.34	2.13
	一般標本最小値	-2.01	-2.53	-1.98	-1.51	-3.15	-1.27	-1.97	-2.44	-2.24	0.01	-2.37
C5.2>0	一般標本最大値	2.22	2.65	2.32	2.79	1.88	2.77	2.03	2.51	2.56	2.34	2.26
	一般標本最小値	-2.51	-1.97	-2.74	-1.70	-3.15	-2.32	-2.09	-1.95	-1.49	-2.66	0.07

【資料6：独立性の検定におけるグループ統計量】

【過去】グループ統計量					【現在】グループ統計量					【現在と過去の差分】グループ統計量							
キー・パースンダミー	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	キー・パースンダミー	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	キー・パースンダミー	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差			
Past physical needs	0	115	0.0038462	1.00501500	0.09371813	Current physical needs	0	120	-0.0366211	0.99874100	0.09117216	physical needs	0	107	-0.0065	1.13079	0.10932
	1	4	-0.1105796	0.96662627	0.48331314		1	5	0.8789054	0.56483354	0.25260124		1	4	0.9996	0.76092	0.38046
Past physical health	0	115	-0.0301105	1.00058010	0.09330458	Current physical strength	0	120	0.0053701	1.00301115	0.09156197	physical strength	0	107	0.0038	1.05754	0.10224
	1	4	0.8656780	0.50525257	0.25262629		1	5	-0.1288834	1.02417664	0.45802572		1	4	-0.5377	0.51562	0.25781
Past environment security	0	107	-0.0177016	0.96967297	0.09374182	Current housing security	0	100	-0.0139283	1.02075821	0.10207582	housing security	0	88	-0.0357	1.04518	0.11142
	1	5	0.3788151	1.62640756	0.72735157		1	5	0.2785657	0.33159466	0.14829364		1	5	-0.1210	0.85147	0.38079
Past housing security	0	107	-0.0186697	1.00273771	0.09693831	Current environment security	0	100	-0.0235981	0.99501746	0.09950175	environment security	0	88	-0.0903	0.98712	0.10523
	1	5	0.3995324	0.94649160	0.42328391		1	5	0.4719611	1.09711692	0.49064560		1	5	0.0931	1.84643	0.82575
Past family love	0	50	0.0000132	0.99793339	0.14112909	Current share closeness & happiness	0	108	0.0004210	0.98634680	0.09491126	share closeness & happiness	0	46	-0.1401	1.05811	0.15601
	1	3	-0.0002208	1.26536920	0.73056125		1	4	-0.0113665	1.51671834	0.75835917		1	3	0.1933	0.91497	0.52826
Past community love	0	50	-0.0007866	1.02512415	0.14497445	Current community love	0	108	-0.0088745	0.99704480	0.09594068	community love	0	46	-0.3470	1.20670	0.17792
	1	3	0.0131098	0.50316846	0.29050444		1	4	0.2396115	1.21014023	0.60507011		1	3	0.6179	0.86779	0.50102
Past share closeness & happiness	0	50	0.0087544	0.94474265	0.13360679	Current family love	0	108	-0.0080900	1.01554410	0.09772078	family love	0	46	0.0312	1.13156	0.16684
	1	3	-0.1459075	2.02458714	1.16889593		1	4	0.2184301	0.38720986	0.19360493		1	3	0.5942	1.49923	0.86558
Past approved by society	0	121	0.0113294	0.99422183	0.09038380	Current approved by society	0	133	-0.0347448	0.99417547	0.08620595	approved by society	0	117	-0.1065	1.19805	0.11076
	1	5	-0.2741711	1.22386420	0.54732871		1	5	0.9242106	0.72488163	0.32417692		1	5	1.1984	1.35576	0.60632
Past self-respect	0	121	-0.0011169	0.97016078	0.08819643	Current self-respect	0	133	-0.0147270	1.00374659	0.08703587	self-respect	0	117	-0.0351	0.88463	0.08178
	1	5	0.0270291	1.73571052	0.77623334		1	5	0.3917383	0.89622927	0.40080592		1	5	0.3647	2.40539	1.07572
Past self values	0	110	0.0182587	1.00801382	0.09611035	Current self values	0	117	-0.0379184	0.99839760	0.09230189	self values	0	104	-0.0516	1.24980	0.12255
	1	5	-0.4016917	0.77500558	0.34659303		1	5	0.8872916	0.56276189	0.25167477		1	5	1.2890	0.64096	0.28665
Past self personality	0	110	0.0048543	1.00346248	0.09567639	Current self personality	0	117	-0.0203414	1.01369796	0.09371641	self personality	0	104	-0.0324	1.34490	0.13188
	1	5	-0.1067955	1.02277238	0.45739771		1	5	0.4759887	0.39340512	0.17593612		1	5	0.5828	0.65843	0.29446

キー・パースンダミーは、一般標本=0、キー・パースン= 1

【資料 7：分散分析による平均値の比較に関するグラフ】

【現在】平均値の比較：分散分析の記述統計

キー・パースンダミー		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
						下限	上限		
Current physical needs	0	120	-0.0366211	0.99874100	0.09117216	-0.2171510	0.1439089	-3.24754	2.21914
	1	5	0.8789054	0.56483354	0.25260124	0.1775719	1.5802388	-0.02248	1.49070
	合計	125	0.0000000	1.00000000	0.08944272	-0.1770322	0.1770322	-3.24754	2.21914
Current approved by society	0	133	-0.0347448	0.99417547	0.08620595	-0.2052686	0.1357791	-2.43687	2.54025
	1	5	0.9242106	0.72488163	0.32417692	0.0241512	1.8242700	-0.13627	1.75886
	合計	138	0.0000000	1.00000000	0.08512565	-0.1683301	0.1683301	-2.43687	2.54025
Current self values	0	117	-0.0379184	0.99839760	0.09230189	-0.2207340	0.1448971	-2.66428	2.34353
	1	5	0.8872916	0.56276189	0.25167477	0.1885304	1.5860528	0.04939	1.53808
	合計	122	0.0000000	1.00000000	0.09053575	-0.1792394	0.1792394	-2.66428	2.34353

学歴別		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
						下限	上限		
Current physical needs	No education	8	0.4664633	1.08383925	0.38319504	-0.4396489	1.3725756	-0.58212	2.21914
	Primary education	15	-0.3034226	0.60285661	0.15565691	-0.6372735	0.0304282	-1.16166	0.92360
	Secondary education	26	-0.1336870	0.85515197	0.16770910	-0.4790904	0.2117163	-1.56599	1.83504
	Higher education	22	0.0871007	1.09341939	0.23311780	-0.3976943	0.5718957	-3.24754	1.97534
	University education	30	0.4629682	0.90100426	0.16450012	0.1265277	0.7994088	-1.40202	1.69439
	Keyperson	5	0.8789054	0.56483354	0.25260124	0.1775719	1.5802388	-0.02248	1.49070
	合計	106	0.1500405	0.94202519	0.09149757	-0.0313823	0.3314633	-3.24754	2.21914
Current approved by society	No education	9	-0.0799501	1.12319968	0.37439989	-0.9433178	0.7834177	-1.10475	2.51361
	Primary education	14	-0.2493923	0.41225074	0.11017864	-0.4874188	-0.0113658	-1.03321	0.44376
	Secondary education	33	0.1386187	0.96993452	0.16884393	-0.2053052	0.4825425	-1.80463	2.54025
	Higher education	23	-0.1628243	1.11520330	0.23253596	-0.6450743	0.3194258	-2.43687	2.34673
	University education	34	0.2913610	1.05757024	0.18137180	-0.0776427	0.6603647	-1.89686	2.28718
	Keyperson	5	0.9242106	0.72488163	0.32417692	0.0241512	1.8242700	-0.13627	1.75886
	合計	118	0.0944555	1.00023486	0.09207908	-0.0879023	0.2768132	-2.43687	2.54025
Current self values	No education	9	-0.4010723	1.08732226	0.36244075	-1.2368622	0.4347176	-1.38154	2.11795
	Primary education	9	0.1451204	0.68821285	0.22940428	-0.3838869	0.6741276	-0.75012	1.48918
	Secondary education	23	0.1843719	0.92648461	0.19318540	-0.2162701	0.5850139	-2.01083	2.34353
	Higher education	23	-0.2904416	0.94020885	0.19604710	-0.6970184	0.1161352	-2.01461	0.99188
	University education	33	0.2349576	0.98675144	0.17177138	-0.1149293	0.5848444	-1.64371	2.19390
	Keyperson	5	0.8872916	0.56276189	0.25167477	0.1885304	1.5860528	0.04939	1.53808
	合計	102	0.0730087	0.96255458	0.09530711	-0.1160550	0.2620723	-2.01461	2.34353

キー・パースンダミーは、一般標本=0、キー・パーソン=1

【差分】平均値の比較：分散分析の記述統計

					平均値の 95% 信頼区間				
キーバースンダミー		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	下限	上限	最小値	最大値
approved by 0 society		117	-0.1065	1.19805	0.11076	-0.3259	0.1129	-3.22	5.10
	1	5	1.1984	1.35576	0.60632	-0.4850	2.8818	-1.08	2.31
	合計	122	-0.0530	1.22648	0.11104	-0.2729	0.1668	-3.22	5.10
self values 0		104	-0.0516	1.24980	0.12255	-0.2947	0.1915	-4.88	3.24
	1	5	1.2890	0.64096	0.28665	0.4931	2.0848	0.19	1.83
	合計	109	0.0099	1.25868	0.12056	-0.2291	0.2489	-4.88	3.24
学歴別						下限	上限		
approved by 0 society	No education	9	0.4108	1.73459	0.57820	-0.9225	1.7442	-1.90	3.73
	Primary education	13	-0.1384	0.60638	0.16818	-0.5048	0.2281	-1.38	0.46
	Secondary education	28	0.2995	1.47924	0.27955	-0.2741	0.8731	-2.71	5.10
	Higher education	19	-0.3850	1.13959	0.26144	-0.9342	0.1643	-2.37	2.22
	University education	28	-0.4357	0.94143	0.17791	-0.8008	-0.0707	-2.18	1.69
	Keyperson	5	1.1984	1.35576	0.60632	-0.4850	2.8818	-1.08	2.31
	合計	102	-0.0317	1.26534	0.12529	-0.2803	0.2168	-2.71	5.10
self values	No education	9	-0.0271	1.68726	0.56242	-1.3241	1.2698	-2.42	3.24
	Primary education	8	-0.3682	1.61406	0.57066	-1.7176	0.9812	-3.70	1.38
	Secondary education	20	0.3191	1.15848	0.25904	-0.2231	0.8613	-1.98	3.11
	Higher education	20	-0.2410	1.32322	0.29588	-0.8603	0.3783	-4.88	2.17
	University education	29	-0.0693	1.12481	0.20887	-0.4972	0.3585	-2.15	2.20
	Keyperson	5	1.2890	0.64096	0.28665	0.4931	2.0848	0.19	1.83
	合計	91	0.0309	1.28882	0.13511	-0.2376	0.2993	-4.88	3.24

【過去】平均値の比較：分散分析の記述統計

					平均値の 95% 信頼区間				
キーパースンダミー		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	下限	上限	最小値	最大値
self	0	110	0.0048543	1.00346248	0.09567639	-0.1847732	0.1944818	-3.08899	2.38878
personality	1	5	-0.1067955	1.02277238	0.45739771	-1.3767351	1.1631442	-1.14978	1.23057
合計		115	0.0000000	1.00000000	0.09325048	-0.1847285	0.1847285	-3.08899	2.38878
学歴別						下限	上限		
self	No education	9	-1.2814993	1.11511615	0.37170538	-2.1386535	-0.4243452	-3.08899	0.82239
personality	Primary education	10	0.0775904	1.14658090	0.36258072	-0.7426242	0.8978050	-2.12530	1.54356
	Secondary education	23	0.3255661	1.01052830	0.21070972	-0.1114191	0.7625513	-2.26267	2.38878
	Higher education	20	-0.0992814	0.72212249	0.16147150	-0.4372451	0.2386824	-1.46637	1.33657
	University education	30	0.4416744	0.74271869	0.13560126	0.1643387	0.7190102	-0.89308	1.76680
	Keyperson	5	-0.1067955	1.02277238	0.45739771	-1.3767351	1.1631442	-1.14978	1.23057
合計		97	0.0769181	1.00594830	0.10213858	-0.1258253	0.2796616	-3.08899	2.38878

キー・パースンダミーは、一般標本=0、キー・パースン=1

【資料 8：各キー・パースンのインタビュー調査の詳細】

以下は、当研究で調査したキー・パースン 5 名のインタビュー調査の詳細である。

まず、1 番目は、ネパールの僻地農村において、養蜂を通した農村ビジネスの振興と発展に取り組む青年である。この人物は、農村の多くの世帯に呼びかけ、家ごとに少しでも巣箱を置いて、蜂蜜を集めるようにした。できた蜂蜜を代表として収集し、マーケットへ出荷している。これを通して、農村の世帯収入の改善が進んだという実績を持つ。

(A)
年齢：34 歳（2018 年） 性別：男性 民族：チェパン 宗教：キリスト教・アニミズム 出身村：Makwanpur 郡 Shilinge 村 家族構成：夫婦、娘の 3 人家族 職業：はちみつ生産、卸
<p>ネパールのマクワンプル県のある村の話である。この村では、2008 年よりハチミツの販売を通して地域活性化が進んでいる。この村での事の起こりは、2007 年ネパールの NGO が開催するカトマンズ蜂蜜マーケティングツアーに、村の青年 A 氏（当時 23 歳）が参加したことであったという。この村に住んでいるチェパン（Chepang）民族はもともと狩猟採集民族で、ネパールのマハーバーラタ山脈の南斜面で定住せずに岩穴や洞窟で生活をする民族であった。当時、1990 年代半ば以降、政府の政策により狩猟生活が禁止され、定住化が推し進められていた。チェパン民族は、なれない定住生活と経験のない農耕生活に苦心し、なかなか食の方面が改善せず、貧しい生活を余儀なくしていたという。</p> <p>そのような中、村では伝統的に野生ミツバチのハチミツを食したり、時には取引することがあり、それまでは 1kg を 150 ルピー程で取引することがあったという。あるとき、村の青年だったチェパン民族の A 氏は、2007 年カトマンズではちみつ専門店を営むグルン民族の B 氏（キー・パースンの 2 人目）と出会った。B 氏は、ネパールの発展に心を砕く敬虔なクリスチャンであり、韓国への 4 年の出稼ぎを経験した Gurung 民族の男性である。B 氏は、A 氏から相場より高い金額でハチミツを買い取る約束をした。従来の経験より高値での取引となり、さらに B 氏は前払い金を支払うシステムを取ったため、村にとって保証感のある良い取引相手となった。この流れの中で、村での一年の現金収入は 10,000 ルピー程度だったものが、翌年には 25,000 ルピーまで増えていったという。</p> <p>生活の改善と、安定した取引相手を見つけたことにより、A 氏は村全体で養蜂を進めて取引を拡大するように努力することになった。それまでは野生のミツバチだけの取引であ</p>

ったが、効率の良い西洋ミツバチの養蜂も取り入れていった。また家の土地を外部の移動式養蜂家に貸出し、移動養蜂の季節になると巣箱を置きに来られるようにし、土地の貸し出し賃も収入にするようになり、事業が拡大してきた。

また、B氏は自ら養蜂のトレーニングを受け、マイクロファイナンス機関を通して資金を調達、村人に15,000ルピーで巣箱を渡し、村人に西洋ミツバチの飼育方法を伝えていった経緯もある。当時15,000ルピーの巣箱代はハチミツの販売収益で一年もあれば返済が可能であったため、飼育する人も増えた。また、2014年には国が開催する農業研修を自ら受講し、商品作物を栽培するためハウスなどを自主的に建設し、オーガニック野菜を栽培するなど、精力的に活動が続けている。

A氏は、村全体を巻き込んで養蜂を通して利益を高めようとしている。1990年初頭まで洞穴に住む狩猟民族だった状態からの展開としては急速なスピードで定住生活を社会化している。A氏は、自分がこの様に地域全体の発展へと意識を向ける理由を振り返っている。村で、学校教育をまともに受けたのは、自分だけであったという。このため、教育を受けた自分は、村の人々のために何かをしたい、しなければならない、そういう思いを持ったのだという。様々な葛藤を抱えつつも、村のために諦めずに動き続けている。A氏は「コミュニティや社会のために働くのって、やっぱりいいじゃない」と述べる。A氏にとって、ハチミツは活動への良いきっかけとなったようである。現在、村に近い主要幹線道路の傍に一部屋借り、ハチミツの精製所を持っており、そこで集めたハチミツを布で濾し、タンクに入れて出荷している。ハチミツの生産量は年々増加しているが、2014年に大きな不作に見舞われた。これも重なり、ハチミツを多く生産する樹木であるチウリの木を植樹する方向へと動き出した。村の土地を借り切り、チウリの種を丁寧に発芽させ、森に植樹出来るまで管理を続けた。また、森林管理組合の植樹トレーニングを2009年に一度受けたことのあったA氏は、組合のネットワークを生かしてUNDPからチウリの苗を調達した。さらに、ネパールの地元NGOの支援を受けるなどして、多様なネットワークを活用して苗の調達や研修への参加などに熱心に取り組んでいる。植樹をしているチウリの木は、ハチミツが採れるだけでなく、フルーツは甘い果実でもある。種も油を絞ることが出来、化粧品の原料になる。また、樹木の葉も文化的にお皿に利用されたり、枝も薪となったりするため、減少傾向にあったチウリの植樹はチェパン民族の村にとっては環境保全にもつながる。A氏はこれらも意識して植樹にのりだした。2015年には、路面に小さな実店舗も開いている。

A氏は自分の子供時代の厳しさを強調する。チェパン民族はネパールでも少数派でもっとも貧しいともいわれている。自分の親は教育がなく、そのため生活が苦しかった。子供の時には食べることや着ることに困っており、例えば服は1着を年中着ていたし、時間通りに食べるができなかったりした。家がないので、寒い時などはたき火に寄せ集まってすごした。そのための薪を集めることや、火をおこすことと、こうしたことに苦労を重ねた。服もいいものを着ていないので、作業ではいつも体が痛かったという。苦しく、貧しい家だったため、いい教育も受ける希望がかなわなかったのも、人生に目的を持つこと

ができていなかった。親が教育を受けていなかったので、社会の進展のために何をしたらいいのかもわからなかった。本来学ぶべき時に牛の世話やヤギの世話、草刈りなど仕事をして時間を使ってしまった。子供時代の苦労は一生忘れないという。しかし、子供のころの楽しい思い出もある。その一つに、学校に行かずに友達と、チウリの花の蜜を飲んだりしたいたずらな時間を思い出すという。

大人になり、転換期となったのは、21歳の時、CCDN（Center for Community Development）というネパールの環境NGOに出会ったことだった。そこでA氏は社会貢献活動を知り、養蜂を知るようになった。また、ヤギを飼って生計を立てることや、薬の利用の仕方など、様々なことを学んだという。2007年の蜂蜜マーケティングツアーは、このCCDNの企画で、このときA氏は初めてカトマンズの地に赴いた。

A氏の人生はこの時をきっかけに劇的に改善された。時間とともに変化を続け、現在では事業も安定している。また、養蜂を農村内で広めることによって、養蜂で生活もよくなっている。農村の人も喜んでおり、自分の活動を喜んでもらっていることがうれしいと感じている。さらに、友達の協力もあり、前向きになることもでき、自分の専門の仕事ができることに感謝していると述べる。

このような人生の結果、彼は人生の信念をいくつか持つようになった。それは、他人に依存してはだめであること、自分のために自分で何かをやり始めたこと、またそれ信じているし、それによって自分の人生も変わってきたと感じている。

2人目は、A氏の農村で採れた蜂蜜を、首都カトマンズで販売しているハチミツ専門店の経営者である。今ではA氏の村で採れた蜂蜜以外にも販売をしているが、A氏の村からビジネスがスタートした。今では年間数十トンの蜂蜜を販売をしており、国内国外問わず、多くの需要に対応している。A氏の村からは、一般より少し高い価格で蜂蜜を仕入れることで、農村の貧困改善を意識して協力してきた実績を持つ。

(B)

年齢：49歳（2018年）

性別：男性

民族：グルン

宗教：クリスチャン

出身村：Parbat郡Bhuka村

家族構成：夫婦、子供二人

職業：ハチミツ専門店のオーナー（1997年に設立）

8～9歳までのことは記憶がなく、この年齢までオネショをする子供であったと振り返る。性格は怒りっぽく、仕事が早く、肉体労働はいとわないタイプだった。

家族は父も兄もグルカ軍兵士で、家計は他の世帯よりは裕福だった。ただ、田舎なので、田畑を耕して作物を育てるといった基本的な肉体労働はする必要があり、それは年中大変な仕事であった。

父は酒のみだったため、家の中で両親が喧嘩するなどしてあまり働かないので、自分の教育面にも影響をして、教育については悪い環境だったと思っている。また、学校も田舎の公立学校は先進的ではないので、教育のレベルも悪かったと述べる。だから、村の子供は少し大きくなってくると、田舎より良い教育を受けたいと考え始め、あるいは仕事などで都会に出る考え方が出てくるのが一般的であるという。しかし、実際は都会に出たところでいい仕事があるわけではない。同じネパール人でも、英語が話せたり、より高い学校教育歴を持つ人と戦わないといけませんが、それに勝つことができない。そこで今度は国外への出稼ぎという考え方が自然に出てくるものであるという。B氏もまた、この考え方で、国外に出ることになった。

このように、子供のころは家庭環境と教育環境の悪さを、自らに影響を与えたこととしてB氏は強く振り返る。しかし、悪い時代だったかという点、友達とは楽しく遊んでいた、村での楽しい思い出も同じくらいあるので、子供時代がすべて悪かったとも言えないと話す。B氏は、18歳くらいまでは物質的な目的しかない青年であったという。いい食べ物、おいしい食べ物を食べて、いい服を着て、家を買って、車を買って、家族をもって、ということを通して人生の価値であると考え、それ以上の価値観のない青年であったと振り返る。

しかし、18、19歳のころから国外に出稼ぎに行くようになると、人生の見方に影響が出てきた。はじめは2年半の間サウジアラビアで仕事を体験した。そして、一時帰国をして、次に韓国に出稼ぎで出るチャンスを得たことが人生のターニングポイントになった。クリスチャン国家であった韓国で、毎週教会に通うようになり、精神的なものを知るようになった。神への道は一本であること、また死後の世界があることなどを信じるようになった。目に見えないものを信じて生きることを知った。その頃はまだ、本当の意味では神について考えたわけではなかったが、帰国してから、心の目を通して物を見つめる考え方が強まったという。独学で聖書を熱心に読むようになった。

国外での学びは影響が大きかった。外国で、大きな建物、整った道路、きれいな服を着て、きれいな町に住み、洗練された暮らしを送る光景を見て、どうしてその国が発展し、自分の国はそうではないのかと、発展についてよく考えるようになった。どうして40年前までは同じような環境だった国が、こうもネパールと違う道を歩んだのか、そうした疑問がB氏を発展というものに意識を向けさせていった。国外でたくさんの物事を見、習い、実際に仕事をして多くを学んだと振り返る。

韓国からネパールに帰国した直接のきっかけは、就労ビザが切れるということだった。これを機に帰国して、今後のことを考えた。その時、また国外に出たとしても、結局自分は外国人であり、しかも学校教育歴の低い人は下働きしかできないことをよく理解していた。国外に行けば、ネパールの2倍は稼げるだろう。しかし、下働きで何の意味があるだ

ろうかと考えた。それであれば、祖国のために生きて、発展に貢献したほうがはるかに良いと、はじめて心の目を通してまじめに決断をしたと振り返る。自らの国、社会、家族が良くなるために、実践的に取り組んでいく必要性を認識した。

ネパールに帰ると、ネパール語の欽定訳聖書を購入し、自分で聖書を読むようになった。人々は、教会でいわれたことをそのまま信じていたりするが、自分は聖書を読んで学んだ、という自負を持つ。また、ネパールでも宗教性のある暮らしを送る人が多いが、それは祖先から続いてきた慣習の継続だけであったり、儀礼的な行いにすぎなくなっていることがほとんどであるという。宗教的活動に熱心であっても、悪いことをしている人もいる。そういうことから、B氏は、形ではなく、目に見えないものを信じ、その道を行くことの大切さ痛感して、それを胸に生きている。

祖国の村はヒンズー教や仏教を信仰しており、当時クリスチャンはいなかった。このため、帰国した時は信頼関係が崩れ、勘当され、村から離れて数年暮らした。また、カトマンズでもはじめはお金がないので同じ村出身の人に頼ったが、クリスチャンに改宗したことで異端扱いされ、親切にしてもらえなかったと振り返る。それでも、B氏は、それは目に見えるものだけを信じた結果であるし、家族の愛情は変わらない、という信念で過ごし、その後は理解も得られるようになり、現在では家族関係は回復している。

こうして韓国から戻って、ネパールのために生きることを決意した時、多くのことを考えるようになり、自らの信念を見つけるに至った。帰国したときには、たったの10万ルピーほどしか所持金がなかった。都会の暮らしも容易ではない。都会はお金がかかり、収入の大きい仕事は学校教育歴のない人にはなかなかできない。そこで友達と一緒に20万ルピーを出し合って小さな店を構えた。しかし、始めた当初は毎月5000ルピー稼ぐのにも苦勞し、自分ひとり暮らすのも大変だった。あまりにもつらいので、アメリカに渡って、また働こうかと考えたこともあった。しかし、心の目を通して決意したことを貫くことにしたという。このように韓国から戻って自分を見つめなおし始めた20代後半は、大きな転換点だったという。人生の価値観を持つようになり、自分の道を自分の意志の下で歩み始めた。

また、現在のパートナーとの出会いも特別である。当時としては貴重なクリスチャンのGurung族女性で、なかなか運よく出会うことは難しい。そんな女性と出会えた理由としては「すべてのことには時がある」という。聖書にもそう書いてある、と述べる。

また、B氏は、毎日祈りも実践している。そして、自分のビジネスがうまくいったのも、自分自身の力によるのではなく、見えない力の導きであるという考え方を持つ。多くの人は、成功の原因に自分のアイデアや考え方があるというが、自分はそうではないという。自分自身の力ではないと思う、と強調する。

人生の苦難とは、お金がないことではないと、B氏は信念を語る。人生の苦難とは、精神的に病むことや、肉体的な困難のある事、それがB氏が認識する苦難である。ある人は先進国の人の親切さや町の美しさに感嘆するが、しかし、表面的な部分ではなく、その国

の人の内面が本当に平和で穏やかか、表面的には判断が難しいが、そちらの方が大事だという。種が土にまかれたとき、それは適切な土にまかれ、適切な水分や光を受け、適切な季節に花が咲き、実になる。このように、すべてのことに適切な時と環境があるという。

B氏は、韓国から日本に帰ってきたとき、祖国で仕事をしたいと、初めはCaféの設立を考えていた。しかし、タイミングよく口にした蜂蜜のあまりのおいしさに驚き、方向を転換し、蜂蜜ビジネスを始めることにした。蜂蜜生産地を訪れるようになると、村の人々の貧しい暮らしに自分も力を貸し協力したいと、通常よりも高い取引価格で買い取り、またあらかじめ前払い金を払うことで生産者の生産を支えることもしてきている。ネパールのために自分もできることをしたいと思った（それはある意味当然の思いとして）、という。その結果、生産地との信頼関係は深いものとなり、よい関係が発展した。

事業を始めた当初は200～300 kgの蜂蜜を購入し、売り切れたらまた購入するというやり方をしていた。お店も今の4分の1くらいのスペースでやっていた。しかし、赤字を出したのはこれまでたったの一日だけであり、1 kgしか売れない日があって厳しいこともあったが、それでも独身の身としては基本的な生計はなりたった。また、マオイストの政権打倒運動が続いていた時期、多くの店は経営が厳しかったが、自分の店はむしろその時期に一番売り上げが良かったとも振り返る。

現在は、さらなるビジネスの展開に向けて、養鶏場を始めた。2万4千羽の鶏を飼える養鶏場（2017年8月時点）で、8,000羽ほど飼っている。ただこの前3月に始めたが、すぐに鶏が病気になって300万ルピーの損失が出てしまった。筆者はオーガニック野菜を栽培したほうがいいのではないかと問いかけると、利益率や商売の確実性のないことはしない、と一蹴。野菜栽培は、栽培者の利益率から単価を考えると効率がどうも悪い、という。また、オーガニックへの認識がネパール人にどれくらいあるかわからないのに、今それを手掛けることの確実性が分らない。また、マーケティングも難しい。鶏であれば、卸売業者がいるので、そこに売ればよく、困ることがない。筆者が、外国人観光客であればオーガニック野菜を求めるのではないかと問うと、外国人向けではなく、ネパール人に対するビジネスを基準に考えているという。どうして新しいビジネスを始めたかという、家族がより良い学校へ進学するなどのさまざまな目標を持つとどうしてもお金も必要だからという。現在の収入は投資も多額なので、大きくはないという。

B氏は、長男次男と子供が二人いる。次男をインドの学校に下宿で出している。長男はともに住んでいるが、英語主体のBoarding Schoolに出しており、英才教育には熱心である。結婚したのは31歳の時であり、遅いほうだがそれで一向に問題はないという

3人目は同様に、ネパール地方農村から蜂蜜を仕入れて販売しているBとは別のはちみつ専門店経営者である。こちらは女性の起業家であり、ネパールでの女性活躍に関して高い意識をもってキャリアを積んできた経歴を持つ人物である。

(C)

年齢：52 歳（2018 年）

性別：女性

民族：ネワール

家族：姉 2 人、両親で 5 人家族、現在は結婚して二人の子供と夫との暮らし

宗教：仏教ヒンズー教ミックス

出身地域：Kathmandu

職業：はちみつ専門店（1995 年設立）

家族は、当時のネワール族の中でも保守的な方に入るという。C 氏が振り返るには、昔は今よりもっと女性は外で働かず、家を守るといった考え方があった。しかし、C 氏は、周囲の女性の苦勞と氣苦勞を見聞きしていた。「どうして女性が自立してはいけないのか」「どうして旦那さんに頼らないといけないのか」と C 氏は思い、11～12 歳のころには「ビジネスをして自分で稼げばいい」、と自立志向の考え方を持ち始めたという。性格は、正義感があり、曲がったことはしたくないという考え方があった。しかし自分自身は愛情深くもあると振り返る。リーダー気質もあったという。

家族では父親だけがビジネスをし、大黒柱として家計を支えていた。布の卸売り業者で、家族は周囲に比べると比較的裕福なほうであった。

学校に関しては、子供の時、最初は私立の学校に行っていたが、途中から公立に転校した。はじめは公立学校に転校することで勉強が簡単になってよかったと思っていたが、今考えると私立の方がよかったのではないかとも思っている。成績に関しては中学まではよかった。しかし、Ten+2 で不合格を経験し、それをきっかけにもっと努力が必要だと思われるようになり、努力するということに意義を見出すようになった。

家族に関して、一番上の姉は 18 歳、次の姉は 22 歳ころに結婚していった。しかし、自分は「人生にはいろいろなことがあるし、自分のやりたいことをすればいい」と思っていたため、大学まで行くことにした。もし学部を出れば、銀行で働いたり、会社で職を得たりして、別の道が開けて自立ができると考えた。本当は父親がビジネスをしていたので、大学に行けばビジネスを学びたいという願望を持っていたところがあった。しかし、「女性ではビジネスはうまくいかない」という判断で両親にサイエンスをやりなさい、と言われ、その意見を呑んだ。その関係で、学部、修士と植物学を専攻した。しかし、心の中ではビジネスの学位を取りたいと思っていた。

結果として大学には行けたが、残念なことがあった。保守的な家族だったので、女性であったために、大学でのピクニックなどの旅行には反対されて一切行くことができなかったことである。しかし、修士号を取得したことは、普通よりも上に到達したことでもあって、自信もついて嬉しかった。また、自分の意に反してサイエンスを専攻したが、それはそれでためになったと今は思っている。

修士号の取得後の 1992 年、家では初めて女性として職を得た。はじめて働いたのは、ネパールにおけるオランダの開発機関のプロジェクトであった。ネパールで様々なプロジェクトをしている機関だったが、そこで C 氏は養蜂に携わるようになった。

プロジェクトに携わると、オランダの人がネパールをよく知っていることに驚いた。しかも、控えめに一生懸命ネパールのことを考えて活動していることに衝撃を受けた。自分は都会で育ち、本だけを読んで学んでいたのも、外国の人よりネパールの田舎のことを知らないことに衝撃を受けたと笑いながら振り返る。プロジェクトマネージャーだった人については特に尊敬と印象深い記憶が残っている。田舎に行ったときに、住民が来客である自分たちに鶏肉を振舞おうという、「(たぶん、鶏は大切なものだから) やめておきます」と、小さい声で断ったところを見て、感銘を受けたと振り返る。さらに、このマネージャーは、しっかりとした活動成果を出すために心を砕く人で、この点も感銘を受けたとする。

このプロジェクトが終わる 1995 年まで、C 氏は養蜂プロジェクトに参加し、生産地情報、それから蜂蜜の効能や機能、養蜂の器具などをどこで仕入れるか、養蜂にかかわる細かい情報を入手することになった。

しかし、この素晴らしいオランダのプロジェクトも 1 点だけ弱いところがあった。それは、生産した蜂蜜のマーケティング機能がなかったところである。この点はビジネスをしたかった C 氏の気持ちに響くものがあり、1995 年にはお店を開く形で、生産した蜂蜜の販売先として、このお店を始めることとなった。

お店を開いたときは、始めは賃貸で物件を借りていて、店の持ち主との関係や家賃の支払いなど、とても大変な時期だった。またハチミツの仕事は、周囲にはよく理解されず、なぜそんなことをするのかとたびたび聞かれたが、気にせずにつづけた。

今は、自宅の一階でお店を開いている。事業を通して今はたくさんの人間関係もできて、とても幸せであるという。

C 氏は、当時のネパールとしては遅い 29 歳で結婚をした。それは、すでにお店を持つからのことである。パートナーは少し年上である。結婚は人生にとって大きな変化であった。はじめは仕事ができなくなるのではないかと思っていたが、旦那さんの家族を含めて両家がサポートしてくれたので、大丈夫であったという。今、お店を開いて 20 年が過ぎた。

C 氏にとってこのオランダの開発プロジェクトは、人生の一大転換点であったと振り返る。初めての仕事で多くのスキルを身につけ、プロジェクトから大きな収穫を得た。また、外国人開発担当者に感銘を受けたが、当時の開発担当者と、今の人では違うともいう。昔は、活動エリアに制限もなく、また現地について十分に知って心を配る利他的な心構えがあったという。しかし、今ではそれぞれ開発プロジェクトごとに活動地が制限され、また活動分野も制限され、競争社会でそれぞれが自分の業績を残すことにあくせくし、個人主義的な開発プロジェクトが多くなったと感じている。

開発についても、本来は現地の人の方が自分で考えて取り組むべきであると考えている。しかし、現地の人は、それを考えることができないし、外からの新しい情報もうまく消化で

きない。しかしまた、外部の人は、現地のことをよく知らないため、ピッタリとはまったことがなかなかできない。これが難しいところだという。

ただ、開発と言っても、例えばネパールでは台所に入る前に手を洗うなどの慣習がある。それ以外にもたくさんの慣習があり、それは科学的な根拠があつてのことではなく、慣習である。また科学的な根拠のないものもあるが、科学的根拠があるものもある。しかしそれを外国人がやってきて、改めて「手を洗う」習慣として教えていたりするから面白い、という。現地にある土着の慣習もあるので、それらの意味も理解して協力できればいいと、話す。

4人目は、環境保全の非営利団体の経営者である。創立者ではないが、創立メンバーであり、現在は首都カトマンズエリアの40000世帯からごみを収集し、処理をしているほか、ごみに関する啓発活動や環境教育といった教育事業を実施している。調査対象者は事業家でもあるが、詩をつくり環境教育に芸術的な要素を取り入れている人物である。

(D)

年齢：45歳（2018年）

性別：男性

民族：バフン

家族：妻、子供二人

宗教：ヒンズー教

出身地域：Bojpur 郡 Bhaikunthe 村

職業：環境保全団体 取締役員

現在勤務している環境保全団体は、1997年に設立された。D氏はその4年後の2001年にメンバー入りをした。設立当初は出身地であるBijpur郡の地元の仲間4人だった。

現在活動しているのは、Lalitpur/Kathmandu/Bhaktapur/Suryavinayak/Changu-Narayan/Myadhyapurなどで、このエリアでごみ収集をしている団体である。

当初D氏は28歳、大学では学部で社会学を修めて、3年間学校で教師をし、4年間銀行員の経験をした。学校教師の時代は、初めの一年と少しは全科目を教える小学校教諭で、残りの2年弱は7年生までを担当し社会科と数学を教えた。28歳の時、今よりは十数倍以上低い給料ではあったが、しかし教師や銀行員よりも給料はよい、仲間が始めた環境保全団体に仲間入りした。その環境保全団体は当初は7000人くらいの会員だったと振り返る。今は40,000人程度の会員がいて、カトマンズ市が一番多い。カトマンズ盆地全体には50万ほどの世帯があると考えられ、そうであれば約8%をカバーしているとも見積もれる。

一軒当たり平均300（/月）ルピーの支払いでごみの収集を行っている。トータルだと月間だけで1,200万ルピーの経常収入が発生する事業体になっている。実際、1.7億ルピー

ほどの経常収入がある。かつて入社したころは 40～45 人程度であった従業員数が現在は 300 人くらいである。

集めたゴミのうち 1～2%はリサイクル販売で収益となっている。リサイクル品の販売は 1 カ月に 6 万ルピー程度の収益であるという。リサイクルできなかったゴミはカトマンズのゴミ収集場に行く。

今、環境保全団体は、ゴミ処理以外に、環境についての住民意識啓発などの教育宣伝活動も行っており、それぞれ別部門として立ち上げている。営利部門がゴミ収集を担当して、非営利部門が教育関係の仕事をする形で運営がされている。行政のゴミ収集は、共有エリアに投棄されたものをダンプカーで回収するため、街の景観を破壊しており、住民も路上に投棄しやすい仕組みである。それではいけないと、環境保全団体は契約世帯の自宅までゴミの収集に行くサービスを展開している。

D 氏は、現在 NGO 部門のトレーニングや事務担当で、環境保全団体グループの取締役役員である。取締役役員は 10 名で構成される。

環境保全団体は、ゴミ収集を行う他の廃棄物処理業者と価格を協議するために上位組織を作っている。それは NGOFEC と言い、NGOFEC は廃棄物収集組織にも加盟し、協議を行っており、組織的な活動を展開している。

D 氏は Bojjpur 郡の出身である。村は Bhaikunthe という。D 氏は村に住んでいた子供の頃から社会活動に関心があり、自らユースクラブを結成し、文化行事のサポートを行う団体活動をしていた。例えば 10 月の収穫祭ではお祝いに葉っぱのお皿を使うが、葉っぱを摘み取って、編み込む作業は大変手間がかかる。そこで、ユースクラブでは、市場からガラスコップやお皿を仕入れ、それを格安で行事ごとにリースする仕組みを作った。これで主婦の負担が減るということである。また、イベントごとに音楽クラブを結成して、歌を歌ったりといったエンターテインメント活動も行っていた。それは現在でもユースクラブの活動として続いている。外国人の支援が村に入ったことはなく、D 氏自身の考えては、自分は生まれつき社会貢献をしたい人間であったという。

両親は普通の農民であった。家系の経済状態は周囲の世帯と同じようなものであったという。D 氏は外国や都市部の新しい情報も入ってくるのを耳にして、自分たちの活動への意欲の発揚にもなり、活動を展開していたという。

彼自身はコメディが大好きで、現在自主的にコメディ動画を撮影して YOUTUBE に乗せたりするなどのエンターテイナーでもある。また、詩を詠んで発表している。

14 歳の時、D 氏は田舎では受けられないよりよい教育を受けるために村を出た。一人で Bojjpur 郡の郡庁所在地のある町に下宿することになった。そして 6 年間、そこで学んだ。家族と離れて暮らすことを選択し、自ら学ぶために家を出たという。

こうして進学した学校のある地域のエッセイコンテストで、彼はおそらく 30 人くらいは応募があった中から、2 位に選出された。学校では、彼が詩を書いたり歌ったりすることはよく知られた話となり、こうした経験で彼は詩を詠うことを自分の特別な特技であると自

覚した。また、このコンテストでは、賞金があり、彼はその時人生で初めての収入、700 ルピーを得たという。700 ルピーといえば、今の 7000 ルピーよりも価値があったと振り返る。そして D 氏はさっそく町のバザールへ行き、いちばん素敵だと思った靴とカバンを購入、それぞれ 200 ルピー、300 ルピーくらいのものを買い込んだ。そして、いつもなら歩いて 5 時間かかる実家まで、喜びの報告をしに帰った。このときは気分が高揚していたので、3 時間で家に着いたと振り返る。

彼にとってもう一つの大きな出来事が、パートナーとの結婚であるという。同じ村出身の別民族で、当時では珍しい異なるカースト間の結婚となった。彼はアーリア系民族だが、パートナーはモンゴロイド系のライ族である。彼女は同じ村の出身であったが、こうしたことは村では当時、受け入れられることなく、結婚をしても、別民族の人と共に暮らすことは難しいことであった。このため、夫婦は村を出て暮らすことになった。その時は 21 歳であり、とってこれは D 氏にとって印象深い出来事であった。もし同じ民族と結婚していたら、彼は自分が引き続き Bhaikunthe で暮らしていただろうと話す。

そこで、新たな暮らしの場を求めてタライ平野にあるマホッタリ郡へ移動した。知らない街での暮らしだったが、結婚もしていたのでどんな仕事でも探した。そして、仕事を探すことの難しさを知ったという。肉体労働の仕事もしたし、それでもご飯が食べられない日もあったという。そして、希望としては学校で働こうと、何度も学校へ就職のお願いをして、やっとの思いで教師の仕事を得た。その後、D 氏は 3 年間学校で働いた後、銀行での職を得た。銀行は当時、農村へのマイクロファイナンスと併せてコミュニティ開発にも力を入れていた。これに関わるようになった D 氏は、PRA/RRA の手法を身に着けた。そして農村の暮らしに関する事、お金持ちの暮らしや、貧しい人の暮らしなどの知識を得た。しかし、この銀行での仕事は、あまりにも長時間労働で、普通であれば一日の勤務は 8 時間くらいでいいところを、10 時間以上働くことが普通だった。D 氏はこれに限界を感じ、仲間 13 人と労働組合を結成、会社を訴えることとなった。これは法廷訴訟となり、会社側はそれをよく思わなかったため、ついに D 氏は退職勧告を受け退職することになった。この銀行勤務時代、マホッタリ郡で 6 カ月、そしてダヌシャ郡で 3 年働いた。そこでは、現地民族の言葉を覚えたりといった新しい知識をたくさん得ることができた。

D 氏と家族はその後、仕事を求めて首都のカトマンズへ移り住んだ。そこでは、同じ村出身の 3 人の仲間が環境保全団体を設立していて、共に働かないかと声をかけられた。D 氏にとってこれが現職の環境保全団体に働くきっかけとなった。

環境保全団体では、現在はソーシャルマネージャーであり、また取締役役員でもある。D 氏は自分のことを社会活動家であると自認している。

カトマンズで仕事をしている間も、マホッタリの銀行との訴訟は続いていた。D 氏はほとんど忘れていたが、8 年後のある日、裁判所がこの訴訟に対して労働組合に勝訴の判決を下した。これにより、D 氏は 8 年分の給与を全額損害賠償として受け取るようになった。

これで D 氏はカトマンズに土地を購入したという。

人生で一番大変だった時期は、結婚してマホッタリに暮らした時期だったと振り返る。仕事を探すことの大変さ、家族が増えたことによる責任感などであった。しかし、これでも自分の人生についてはネガティブには捉えていない。

最後の 5 番目は、ネパールの音楽家で、バンスリ (Bansri) という木製のフルート奏者である。行事ごとに音楽隊が活躍する地域のコミュニティの音楽教育の指導者として活動してきたほか、モダンな音楽バントを組んで、国内での演奏や国外の文化イベントに遠征するなどの活動をしている。

(E)

年齢：34 歳 (2018 年)

性別：男性

民族：ネワール

家族：両親・妹／現在は妻と暮らす

宗教：仏教ヒンズー教ミックスだが信条は特になし

出身地域：Patan

職業：フルート演奏者、教師

E 氏はネワールの音楽家で、伝統的フルート Bansri の演奏者である。Patan 出身で、ネワール族であれば、年中行事ごとに街中を音楽を奏でながら行進するので、民族全体として踊りや音楽は誰もが経験する。E 氏はそんなコミュニティの一員として、子供のころから踊りや音楽をやっていた。E 氏の家族は父親がビジネスマンで、ネワールの行事では音楽隊にも参加していた。

18 歳の時、コミュニティ内の演奏コンテストで 2 位を獲得した。16 年前のことである。コミュニティレベルでは音階の勉強など形式的なことは一切なく、聞いた音を真似るという方法で演奏されており、この当時も、記憶にある音を奏でるというコミュニティの手法で演奏をしたところ 2 位を獲得した。1 位の奏者も同じである。

E 氏は、これをきっかけに音楽が得意になり、もっとバンスリをやりたいと、コミュニティの外まで足を延ばしてフルートを学ぼうと考えるようになった。その時はポケットマネーもない状態ではあったが、歩いていくなどしてお金を節約し、Maharajgunj にある音楽学校に行くことになった。はじめ、Nepal International Academy の芸能部門、Jamal Naach Ghar に通うようになった。その学校内のうわさで、インド大使館内で音楽コースがあることを知った。そこでは、Eastern Classical Music というオリエントアジア共通の音楽を教えていた。そこで、E 氏はこれに応募し、面接を受けて見事に合格、奨学金をもらって学ぶチャンスを手にした。学費は払わずに済んだが、お金はなかったので、学校までは数時間かけて歩いて通いつづけた。

E氏はこのころ、フルートのみではなく、ダンスからパーカッション、鍵盤まで興味のあることは何でも楽しんで挑戦した。学んだのはフルートだけであるが、真似をしてパーカッションや鍵盤演奏もできるようになった。18歳のころからステージ演奏も経験するようになっていた。E氏にとって、17.18歳は一生懸命に学んだ時期で、自らの力でたくさんのことを吸収した時期であると振り返る。

これまで彼に影響を与えた人物として、3人の音楽家のDai（ネパール語で年上の男性を意味する、兄の意味）がいる。一人目は、フルートに関心を持ったきっかけとなった人物である。17歳の時まで、ダンスをメインでしていたE氏は、ステージで、あるDaiのフルートの音色を聞き、衝撃を受けてフルートに飛びついた。これがきっかけでフルートを始めた。これが、コンテスト準優勝に先駆けての出来事である。次の一人はNepal International Academyの先生であり奏者である。当時、学校でフルート以外の様々な楽器を様々な好きなように楽しんでいたE氏であったが、そんな彼に、Daiは一喝。E氏の奏でるいろいろな音を聞いて「貴方はフルートの音が一番きれいに聞こえるから、バンスリ一本に絞きなさい」と怒られた。これを機に、E氏はバンスリ専門で取り組むようになったという。しかし、音楽に夢中であったにもかかわらず、実は仕事にしようという意思を持っていたわけではなく、このころまでは趣味として学んでいたという。学校で音楽を学ぶようになって、23歳24歳の時までには他の仕事をしていた。ここで3人目のキー・パーソンが現れる。同じように音楽をしているDaiがE氏に言ったのは、「貴方は音楽をきなさい、一つのことを極めてプロになりなさい。そうすれば、そこに満足感もある」ということであった。それから彼は仕事を絞り、音楽のプロになった。

E氏は、子供の頃は学校でも勉強しないような、いい加減なタイプだったという。友達と遊ぶことが好きで、動物が好きだった。池に魚釣りに行くなど、そういうこともよくした。今は家でハトを飼っている。昔、ストレスが多かった時に、鳥を見ると癒されたことがきっかけだった。

人生哲学は特になく、子供の時は頭の中は「カラ」だったと自らいう。それは今でも同じで、頭の中はカラだと繰り返す。しかし子供のころからネパールからは出ないという意思も芽生えていた。中学生くらいのころ、周囲の人が外国のことを言い出したり外国に行ったりするのを見聞きし始めたころからそう考えるようになった。理由としては、ネパールの中に十分楽しみがあり、いいものも、見るものもある。そんなネパールでは仮にお金がなくても、生きていけるような気がした、という。

E氏は今、34歳になり、年に何度か国外で演奏するなどグローバルに活躍するほか、国内のイベントでも招請されるたびにネパール全土で演奏をしている。今まで国外では北京・チベット・ブータンなどにも行った。それぞれの地域では、それぞれの自然環境・気候があり、演奏に衝撃を与えてきたことを懐かしく思い出す。例えばチベットでは、酸素

の薄さと乾燥した空気により、リハーサルの時点でまったく演奏できないことに気が付いて慌てたこと。熱帯の地域では演奏中にハエが顔を撫でていくので、我慢しながら演奏したり、それで聴衆に笑われたりしたこと。気候の違いでキーの調整ができなくて楽器のメンテナンスがいちいち必要になったことなど、懐かしく振り返る思い出がたくさんある。

ところで国内国外と演奏に招致されるのは、E氏がJyapu Society (Jyapu 地域共同組合のこと)の所属音楽家として活動しているからである。ネパールには民族ごとの、あるいは名字ごとの任意組織がある。E氏はネワール族で、カトマンズの土着民族である。ネワール族はネパールを代表する都市文明を高度に発達させた民族で、カトマンズ盆地が世界遺産になった由縁である歴史都市を作り上げた。この都市の特徴は宮殿を中心に強固なコミュニティをもつことであり、カトマンズ盆地はいくつかのネワール族の集住するコミュニティに分かれて構成されている。E氏はPatanのネワール族であり、Jyapuとはネワール語でネワール族を意味する別名である。彼はカトマンズでもっとも組織の強いPatanのJyapu Societyに所属し、ここで音楽のメンバーとして教師となっている。Jyapu Societyの音楽教師は現在10人強であり、フルート教師は2人である。Tole (町) レベルではなく、Patan (市) レベルの教師として技術的な音楽を教える立場である。

Jyapu Societyは、コミュニティの基金や政府からの補助金で運営されており、音楽以外にも年中行事運営、ソーシャルワーク全般それぞれにサービスを提供する。たとえば、農薬や堆肥を購入して、住民に安く提供する、曼荼羅などのチベット美術やヒンズー彫刻、音楽などの伝統工芸を学ぶ人の財政的補助など、このコミュニティのアイデンティティを保存するための活動を網羅的に行う。Jyapu Societyには大きなオフィスがあり、中では、様々な講座が開かれており、Jyapuの伝統を紹介する博物館、それから演劇を行うことができるホールも併設されている。PatanはLalitpur市という行政地域に所属するが、Jyapu Societyは政府機関ではなく、任意の民族的コミュニティ組織である。

E氏このような伝統ある居住地区の代表的音楽家であり、将来、先輩の音楽指導者の引退に合わせて、地位を継承していくことになる。

E氏はネパールに土着することを自分の意志としている。この意思を象徴する出来事は、E氏が長く付き合った恋人との別れにも表れている。同じく芸能を仕事とするダンサーであり国際的に活躍する女性と長く付き合っていた。しかし、彼女は国際派であり、ネパールにこだわって定着する生き方を望まなかった。それが原因の一つとなって、恋人と別れることになったのである。これはうつ状態になるほど彼にとってはつらい出来事であったが、世界に出ていく生き方に対して、ネパールを拠点に据える決意の強さが人生の選択に影響を与えた出来事であった。

E氏の生い立ちは家庭事情から多少苦労のあるものであった。比較的金銭面での苦労もあり、12歳の頃、私立学校であるBoarding Schoolを8年生で退学した。退学後E氏は1

年間ハンドクラフトの仕事をしながら生活をしていた。退学したことについて、同級生にいじめられたこともあったという。一年後、今度は公立学校に入学した。この時、退学に関していじめられたことが悔しくて、猛勉強をした。するととても良い成績を残すことができ、自分の中でいじめた同級生を見返せたような誇りを持ったという。また、8歳のころに胆石を摘出する手術を経験している。その当時は開腹手術だったので、今でも30 cm程の手術跡が残っている。子供だったので、両親からあまり運動をしないようにと、厳しく活動を制限された。しかしそれが嫌で、嘘をついて遊んだり、わざと風船を膨らませるなど、傷口によくないことをしたりした。

12～18歳の間、退学からフルートに出会うまで様々な出来事があり、人生は荒れたものであった。先輩が鳥のハンティングをするので、そのころそれを真似して鳥を射止めては飾ったり食べたりした。荒れた時期にも種々の事柄を経験した。しかし、そんな時期、E氏にとっていくつかの貴重な体験があったという。それは動物との交流であった。ある日、いつもと同じように鳥のハンティングをしていた時、自分の打った鳥が倒れて落ちてきた。それを手に取り、ハトを手中で看取った。そのハトは、彼の眼を最期にじっと見つめたが、死に絶えたとき、その嘴には、おそらく子供に与えようとしていた虫が咥えられていたことに気が付いた。その時、きっとその親鳥がいなくなったことで、その子供も生きていけなくなるのだらうと悟ったという。はっきりと罪の意識を覚え、それからは鳥のハンティングをやめ、逆に鳥を飼うようになったという。

さらに、このころ夜の帰り道で、何匹もの野良犬にかみつかれそうになったことがあった。その時、なぜか一匹の犬が、危険な野良犬を追い払って自分を助けてくれたという。それに驚き、その犬を飼うことになった。12～15歳のころに飼いはじめ、動物を家族のように思うようになった。その犬が死んだあと、また別の犬を飼ったが、父親が連れてきたその子犬についての思い出はさらに特別だという。その子犬は、12年間生きて、つい2年ほど前に死んだ。死ぬ1週間ほど前、その犬は急に姿を消したという。そして、突然帰ってきたのである。帰ってくると、別々の場所で日中を過ごしていた家族全員に会いに行き、それぞれの膝に座った。しかし、それが死の挨拶だと知ったのは、次の日にその犬が死んでからだった。その犬は、番犬さながら家族をよく守り、しかしよく遊ぶ楽しい犬だったと振り返る。この犬とは、時間を忘れて遊び、気分がリフレッシュしたという。このような動物たちとの触れ合いの出来事を通して、E氏は動物を愛している、また、自然を愛しているという。

また、子供のころ金銭面で苦勞をしたことで、様々な経済状況の人に同情の気持ちを持てるようになったという。そして今ではお金の使い方についてコントロール意識もあるという。このように、子供のころには苦勞したE氏であるが、動物や自然との愛情ある出会いと、音楽を始めたころからは音楽の仲間を通して、友達の大切さにも目覚めていったこと、そしてフルートとの出会いや転機など自分の人生の重要な出来事にも出会い、少しずつ更生したと振り返る。

音楽に出会ってからは、歩いて学校に行ったこと以外は、恩師との出会いなどは自然に導かれたものだと言っている。今、教師になったことで、子供の前で悪いことをしてはいけないという思いも強く持つようになり、道徳的な信念も持つようになった。E氏にとって、ネワール族に生まれたことは意味のあることだったという。それは、様々な楽器にふれ、演奏できるようになったからであるという。現在の収入は、仕事を掛け持ちしていた時より格段に多いわけではないという。しかし、適度な金額であるという。ただ、音楽家であるが故に、出ていくときには交際費として一気に出ていくという。そんな生き方であるが、満足感は大きいという。

## 参考文献

日本語文献

邦訳文献

外国語文献

日本語 Web ページ

外国語 Web ページ

＜日本語文献＞

- 浅野英一[2005],『国際協力・国際交流ハンドブック 基礎から実践へ』,実教出版.
- 阿部大輔[2017],「広域連携と都市間ネットワークの可能性:急速な人口減少への処方箋として」,(阿部茂行(編)),『人口減少、少子・高齢化社会におけるライフスタイルと社会保障のあり方』,(公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構,68-75 頁,所収.)
- 荒俣宏(監修)[1996],『小学館版 学習まんが人物館 南方熊楠』,小学館.
- 安藤隆一[2012],「地域活性化の政策において、内発的発展論が果たす役割に関する考察」『同志社政策科学研究』第 13 号 2 巻,127-137 頁.
- 石井博[2003],『ヒマラヤの正倉院』,山川出版社.
- 石川薫,小浜裕久[2018],『「未解」のアフリカ:欺瞞のヨーロッパ史観』,勁草書房.
- 石村郁夫[2014],『フロー体験の促進要因と肯定的機能に関する心理学的研究』,風間書房.
- 市井三郎[1963],『哲学的分析』,岩波書店.
- [1972],『近代への哲学的考察』,れんが書房.
- 茨木俊夫[1997],「人間性理論」(日本行動科学学会(編)),『動機づけの基礎と実際』,川島書店,63-68 頁,所収.)
- 今田純雄,北口勝也[2015],『動機付けと情動』,培風館.
- 今西錦司[1984],『自然学の提唱』,講談社.
- [1987],『自然学の展開』,講談社.
- ウィリアムス 春美[2012],『天空のネパール』,芙蓉書房出版.
- 上田吉一[1988],『人間の完成』,誠信書房.
- 上淵寿[2004],『動機付け研究の最前線』,北大路書房.
- [2017],「感情と動機づけ」(島義弘(編)),『パーソナリティと感情の心理学』,サイエンス社,59-80 頁,所収.)
- 遠藤辰雄,井上祥治,蘭千壽(編)[1992],『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探究』,ナカニシヤ出版.
- 遠藤辰雄[1992],「セルフ・エスティーム研究の視座」(遠藤辰雄,井上祥治,蘭千壽(編))『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探究』,ナカニシヤ出版,8-25 頁,所収.)
- 越良子[2005],『自己高揚過程における能力の自己査定に関する研究』,北大路書房.
- 越良子[1997],「自己査定方略としての対人選択に及ぼす自己高揚期待の影響」『心理学研究』第 68 号 5 巻,日本心理学会,376-389 頁.
- 小川真吾[2002],『ぼくらのアフリカに戦争がなくならないのはなぜ?』,合同出版株式会社.
- 小田切徳美[2013],「地域づくりと地域サポート人材—農山村における内発的発展の具体化—」『農村計画学会誌』,第 32 号 3 巻,384-387 頁.
- 小野一男,湯舟貞子[2009],『途上国における国際保健—ネパールの保健医療』,ふくろう出

- 版.
- 大林稔, 西川潤, 阪本公美子 (編) [2014], 『新生アフリカの内発的発展—住民自立と支援』, 昭和堂.
- 勝又進[2010], 『絵本・遠野物語』, 高文研.
- 加藤剛[2014], 『『開発』概念の生成をめぐって—初源から植民地主義の時代まで—』『アジア・アフリカ地域研究』, 第 13-2 号, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科, 112-147 頁.
- 垣見一雅[2001], 『OK バジ—村人の魂に魅せられ、ネパールの山奥に住みついたひとりの日本人—』, 星雲社.
- 梶田叡一, 溝上慎一[2012], 『自己の心理学を学ぶ人のために』, 世界思想社.
- 北野収[2008], 『南部メキシコの内発的発展と NGO』, 勁草書房.
- 木山幸輔[2013], 『世界的貧困への応答としてのグローバルな正義』, 修士論文, 東京大学大学院.
- 清沢洋[2008], 『村人の暮らしと国際協力』, 社会評論社.
- 金城辰夫, 鹿取廣人[2015], 「動機付け・情動」(鹿取廣人, 杉本敏夫, 鳥居修晃 (編), 『心理学〔第五版〕』, 東京大学出版会, 209-234 頁, 所収.)
- 久木田純[1996], 「開発援助と心理学」(佐藤寛 (編), 『援助研究入門』, アジア経済研究所, 281-320 頁, 所収.)
- [1998], 「エンパワーメント：人間尊重社会の新しいパラダイム」(久木田純, 渡辺文夫 編, 『現代のエスプリ』, 第 376 巻, 所収.)
- [2010], 「開発パラダイムはシフトしたか」『アジ研ワールド・トレンド』, 第 180 巻, 20-21 頁.
- 国連教育科学文化機関(UNESCO)[2015], 「全ての人に教育を 2000-2015 成果と課題」, 『EFA グローバルモニタリングレポート』, UNESCO.
- 後藤総一郎(監修), 佐藤誠輔(口語訳)[1992], 『口語訳遠野物語』, 河出書房新社.
- 小林トミ[1998], 「『声なき声』と和子さん」(鶴見和子 著『コレクション 鶴見和子曼荼羅』, 月報 5, IV 土の巻, 第 4 回配本, 藤原書店, 7-9 頁, 所収.)
- 齋藤文彦[2002], 「開発と参加——開発観の変遷と『参加』の登場」(齋藤文彦編, 『参加型開発—貧しい人々が主役となる開発へ向けて—』, 日本評論社, 3-25 頁, 所収.)
- 佐伯和彦[2003], 『ネパール全史—世界歴史叢書』, 明石書店.
- 坂本義和[1983], 「『地方』の『国際化』」(長洲一二, 坂本義和 (編), 『自治体の国際交流』, 学陽書房, 17-38 頁, 所収) .
- 櫻井茂男[2012], 「夢や目標をもって生きよう！—自己決定理論」(鹿毛雅治(編), 『モチベーションを学ぶ 12 の理論』, 金剛出版, 45-72 頁, 所収.)
- 佐々木雅幸[1990], 「地域問題と地域政策」(宮本憲一, 横田茂, 中村剛治郎(編), 『地域経済学』, 有斐閣, 113-140 頁, 所収.)

- [1992],『現代北陸地域経済論』, 金沢大学経済学部.
- 佐卷健男, 平山明彦, 九里徳泰(編)[2005],『地球環境の教科書 10 講』, 東京書籍株式会社.
- 猿谷要[2000],『歴史物語アフリカ系アメリカ人』, 朝日新聞社.
- 鹿取廣人, 杉本敏夫, 鳥居修晃(編)[2015],『心理学〔第五版〕』, 東京大学出版会.
- 鹿毛雅治[2012],「好きこそものの上手なれ—内発的動機づけ」(鹿毛雅治(編),『モチベーションを学ぶ 12 の理論』, 金剛出版, 19-44 頁, 所収.)
- 島義弘(編)[2017],『パーソナリティと感情の心理学』, サイエンス社.
- 清水万由子, 尹誠國, 谷垣岳人, 大矢野修, (編)[2014],『東アジア中山間地域の内発的発展 —日本・韓国・台湾の現場から—』, 公人の友社.
- 清水万由子[2014],「東アジア中山間地域の内発的発展」(清水万由子, 尹誠國, 谷垣岳人, 大矢野修(編),『東アジア中山間地域の内発的発展 —日本・韓国・台湾の現場から—』, 公人の友社. 8-31 頁, 所収.)
- 下村恭民, 辻一人, 稲田十一, 深川由起子[2016],『国際協力—その新しい潮流(第三版)』, 有斐閣.
- 白砂堤津耶[2007],『例題で学ぶ 初歩からの計量経済学 第 2 版』, 日本評論社.
- 鈴木清史[1993],『アボリジニー: オーストラリア先住民の昨日と今日』, 明石書店.
- スタピットラ トナラジャ[2011],『素顔のカトマンドゥ 日本が教えてくれた故郷』, 弦書房.
- 高橋信[2004],『マンガで分かる統計学』, オーム社.
- [2006],『マンガで分かる統計学 因子分析編』, オーム社.
- 武内善信[2012],『闘う南方熊楠「エコロジー」の先駆者』, 勉誠出版.
- 田中孝志[1992],「自己評価領域の拡大」(遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千壽 (編),『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探究』, ナカニシヤ出版, 71-77 頁, 所収.)
- 玉野井芳郎[1977],『地域分権の思想』, 東洋経済新報社.
- 鶴見和子, 大和田滝恵[1994],「内発的発展と模式論」(宇野重昭, 鶴見和子 (編),『内発的発展と外向型発展—現代中国における交錯』, 東京大学出版会, 101-131 頁, 所収.)
- 鶴見和子, 川田侃 (編) [1989],『内発的発展論』, 東京大学出版会.
- 鶴見和子 [1976],「国際関係と近代化・発展論」(武者小路公秀, 蠟山道雄 (編),『国際学—理論と展望』, 東京大学出版会, 58-62 頁, 所収)
- [1989a],「内発的発展論の系譜」(鶴見和子, 川田侃 (編),『内発的発展論』, 筑摩書房.43-64 頁, 所収.)
- [1989b],「アジアにおける内発的発展の多様な発現形態—タイ・日本・中国の事例—」(鶴見和子, 川田侃 (編),『内発的発展論』, 筑摩書房.241-262 頁, 所収.)
- [1994],「中国農民企業家にみられるキー・パーソン」(宇野重昭, 鶴見和子 (編),『内発的発展と外向型発展—現代中国における交錯』, 東京大学出版会, 155-185 頁,

- 所収.)
- [1990],「原型理論としての地域主義」(玉野井芳郎(編)『地域主義からの出発』, 学陽書房, 258-277 頁, 所収) .
- [1996],『内発的発展論の展開』, 筑摩書房.
- [1997],『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅰ 基の巻—鶴見和子の仕事・入門』, 藤原書店.
- [1998a],『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅲ 知の巻—社会変動と個人』, 藤原書店.
- [1998b],『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅳ 土の巻—柳田国男論』, 藤原書店.
- [1998c],『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅵ 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』, 藤原書店.
- [1998d],『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅶ 華の巻—わが生き相』, 藤原書店.
- [1999],『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅸ 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』, 藤原書店.
- 鶴見俊輔[1999],「弟の眼」(鶴見和子 著『コレクション 鶴見和子曼荼羅』, 月報 9, Ⅸ 環の巻, 第八回配本, 藤原書店, 10-12 頁, 所収.)
- 独立行政法人国際協力機構 (JICA) [2016],『現場の声からひもとく国際協力の心理学: 農村開発分野のプロジェクトを事例として』, 国際協力機構 (JICA) .
- 友松篤信, 桂井宏一郎 (編) [2006],『大学テキスト国際協力論』, 古今書院.
- 友松篤信 (編) [2005],『国際開発ハンドブック』, 明石書店.
- 中谷文美[2001],「バリ地域社会の内発的ダイナミズム」(西川潤 編『アジアの内発的発展』, 藤原書店, 231-254 頁, 所収.)
- 中瀬喜陽, 長谷川興蔵 (編)[2004],『南方熊楠アルバム』, 八坂書房.
- 中村剛治郎[1990],「地域経済学の潮流」(宮本憲一, 横田茂, 中村剛治郎(編),『地域経済学』, 有斐閣, 141-194 頁, 所収.)
- [2004],『地域政治経済学』, 有斐閣.
- 中村尚司[1989],「地縁技術と地域と地域自立運動—南アジアからの事例—」(鶴見和子, 川田侃 (編),『内発的発展論』, 筑摩書房. 215-240 頁, 所収.)
- [1994],『人びとのアジア—民際学の視座から—』, 岩波書店.
- [2002],「当事者性の探究と参加型開発」(斎藤文彦 (編),『参加型開発—貧しい人々が主役となる開発へ向けて』, 日本評論社, 215-236 頁, 所収.)
- 中村則弘[2005],『脱オリエンタリズムと日本における内発的発展』, 東京経済情報出版.
- 長洲一二, 坂本義和(編)[1983],『自治体の国際交流—ひらかれた地方をめざして』, 学陽書房.
- 西川秀和[2006],「ポイント・フォー計画の歴史的意義—冷戦戦略の一環としての発展途上国援助計画」『社会学研論集』第 8 号, 早稲田大学大学院社会科学研究所, 227-238

- 頁.
- 西川潤[1989],「内発的発展論の起源と今日的意義」(鶴見和子, 川田侃(編),『内発的発展論』, 筑摩書房. 3-42 頁, 所収.)
- (編)[2001],『アジアの内発的発展』, 藤原書店.
- [2000],『人間のための経済学 開発と貧困を考える』, 岩波書店.
- [2007],「はじめに」(西川潤, 八木尚志, 清水和巳(編),『社会科学を再構築する——地域平和と内発的発展』, 明石書店. 5-17 頁, 所収.)
- 西川潤, 八木尚志, 清水和巳(編)[2007],『社会科学を再構築する——地域平和と内発的発展』, 明石書店.
- 西川芳昭[2002],『地域文化開発論』, (財)九州大学出版会.
- 仁科克己[2008],「貧困削減政策の概観」(高橋基樹, 福井清一(編)[2008],『経済開発論』, 勁草書房, 215-238 頁, 所収.)
- 西村多久磨, 河村茂雄, 櫻井茂男[2011],「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス-内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?」『教育心理学研究』第 59 巻 1 号, 77-87 頁.
- 日本行動科学学会(編)[1997],『動機づけの基礎と実際』, 川島書店.
- 日本道徳性心理学会[1992],『道徳性心理学』, 北大路書房.
- 日本平和学会[2011],「グローバルな倫理」『平和研究』第 36 号, 早稲田大学出版部.
- 日本ネパール協会[2000],『ネパールを知るための 60 章』, 明石書店.
- 人間主義心理学会[1999],『人間の本質と自己実現』, 川島書店.
- バッタライ ナビン[2008],『もっと知りたい国ネパール』, 心交社.
- 林俊行(編)[2008],『国際協力専門員—技術と人々を結ぶファシリテーターたちの軌跡』, 新評論.
- 費孝通[1994],「内発的発展と外向型発展—回顧と展望—」  
(宇野重昭, 鶴見和子(編),『内発的発展と外向型発展—現代中国における交錯—』, 東京大学出版会, 251-276 頁, 所収.)
- 藤原武弘 編[2009],『社会心理学』, 晃洋書房.
- 保母武彦[1990],「内発的発展論」(宮本憲一, 横田茂, 中村剛治郎(編),『地域経済学』, 有斐閣, 327-349 頁, 所収.)
- [1996],『内発的発展論と日本の農山村』, 岩波書店.
- 馬淵浩二[2010],『倫理空間への問い—応用倫理学から世界を見る』, ナカニシヤ出版.
- [2015],『貧困の倫理学』, 平凡社.
- 峯陽一[1999],『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社,
- [2010],『アフリカから学ぶ』. 有斐閣.
- 南真木人[1997],「文化と開発「ビカス」をめぐる」(石井博(編),『アジア読本ネパール』, 河出書房新社, 316-321 頁, 所収.)

南真木人, 石井溥 (編)[2015], 『現代ネパールの政治と社会』, 明石書店.

宮本憲一[1989], 『環境経済学』, 岩波書店.

宮本憲一, 横田茂, 中村剛治郎(編)[1990], 『地域経済学』, 有斐閣.

宮本正一[1992], 「社会的比較」(遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千壽 (編), 『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探究』, ナカニシヤ出版, 108-114 頁, 所収.)

森友裕一[1991], 『内発的発展の道—まちづくり、むらづくりの論理と展望—』, 農山漁村文化協会.

諸富称彦[1999], 『トランスパーソナル心理学入門』, 講談社

八木澤高明[2004], 『ネパールに生きる 揺れる王国の人びと』, 新泉社.

米川安寿[2011], 『ネパールの母子保健に関する地域比較研究』, 修士論文, 同志社大学大学院.

蘭千壽[1992], 「パフォーマンスと自己評価」(遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千壽 (編), 『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探究』, ナカニシヤ出版, 7~9/13/17~19 章, 所収.)

劉晨, 盧志和, 石村貞夫[2005], 『社会調査・経済分析のための SPSS による統計処理』, 東京図書.

#### <邦訳文献>

アイゼンク, W. マイケル著、山内光哉 監修, 白樫三四郎, 利島 保, 鈴木直人, 山本力, 岡本祐子, 道又 爾 訳 [2008], 『アイゼンク教授の心理学ハンドブック』, ナカニシヤ出版.

アリエティ, シルバーノ著、加藤正明, 清水博之 共訳[1980], 『創造力—原初からの統合』, 新曜社.

アーレン, C. ロバート著、グローバル経済史研究会 訳[2012], 『なぜ豊かな国と貧しい国が生まれたのか』, NTT 出版.

カーソン, レイチェル著、青樹築一 訳[2001], 『沈黙の春』, 新潮社.

グラハム, コナー著、近藤義郎, 河合信和 訳[1993], 『熱帯アフリカの都市化と国家形成』, 河出書房新社.

コント・スポンヴィル, アンドレ著、小須田健, C.カンタン 訳[2006], 『資本主義に徳はあるか』, 紀伊國屋書店.

シンガー, ピーター著、児玉聡, 石川涼子 訳[2014], 『あなたが救える命』, 東京都, 勁草書房.

セン, アマルティア著、池本幸生, 野上裕生, 佐藤仁 訳[1999], 『不平等の再検討—潜在能

- 力と自由―』, 岩波書店.
- 著、東郷えりか 訳[2006], 『人間の安全保障』, 集英社新書.
- 著、東郷えりか 訳[2011], 『アイデンティティと暴力 運命は幻想である』, 勁草書房.
- ダール, ロバート A., タフティ, エドワード R. 著、内山秀夫 訳 [1979], 『規模とデモクラシー』, 慶応通信.
- チェンバース, ロバート著、穂積智夫, 甲斐田万智子 監訳 [1995], 『第三世界の農村開発 貧困の解決—私たちにできること』 明石書店.
- 著、野田直人 監訳[2007], 『開発の思想と行動 —「責任ある豊かさ」のために』, 明石書店.
- 著、野田直人, 白鳥清志 監訳[2000], 『参加型開発と国際協力 —変わるのは私たち』, 明石書店.
- チクセントミハイ, ミハイ著, 今村浩明 訳[1991], 『楽しむということ』, 思索社.
- 著、大森弘 監訳 [2010], 『フロー体験入門 楽しみと創造の心理学』, 世界思想社.
- デイリー, ハーマン E.著, 新田功, 藏本忍, 大森正之 訳[2005], 『持続可能な発展の経済学』, みすず書房.
- デシ, L. エドワード., フラスト, リチャード著、桜井茂男 監訳[1999], 『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』, 新曜社.
- デュウイ, ジョン著、東宮隆 訳[1960], 『人間性と行為 社会心理学入門』, 春秋社.
- フリーエ, チャールズ著、巖谷國士 訳[1970], 『四運動の理論〈上・下〉』, 現代新潮社.
- デシ, L. エドワード著、安藤延男, 石田梅男 訳[1980], 『内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ』, 誠信書房.
- ヌスバウム, マーサ著、池本幸生, 田口さつき, 坪井ひろみ 訳[2005], 『女性と人間開発：潜在能力アプローチ』, 岩波書店.
- ハク, マブーブル著、植村 和子, 沢 良世, 小山田 英治, 佐藤 秀雄, 富田 晃次 訳 [1997], 『人間開発戦略 共生への挑戦』, 日本評論社.
- バーガー, ピーター L. 著、加茂 雄三, 山田 睦男, 乗 浩子 訳[1976], 『犠牲のピラミッド：第三世界の現状が問いかけるもの』, 紀伊國屋書店.
- ピンク, ダニエル著、大前研一 訳[2010], 『モチベーション 3.0 持続する「やる気！」をいかに引き出すか』, 講談社.
- ファンデンボス, G. R 監修、繁榊 算男, 四本 裕子 訳[2013], 『APA 心理学大辞典』, 培風館.
- ブラッケン, A. ブルース著、梶田 叡一, 浅田 匡 訳[2009], 『自己概念研究ハンドブック』, 金子書房.
- ポープ, アリス W., ミッキヘイル, スーザン M., クレイヘッド, W エドワード著、高山

- 巖 監訳, 佐藤正二, 佐藤容子, 前田健一 訳[1992], 『自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる—』, 岩崎学術出版社.
- ポグゲ, トマス著、立岩真也 監訳, 安部彰, 齊藤拓, 岩間優希, 村上慎司, 石田智恵, 原佑介, 的場和子 訳[2010], 『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか：世界的貧困と人権』, 生活書院.
- ホワイト, W. ロバート著、佐柳信男 訳[2015], 『モチベーション再考：コンピテンス概念の提唱』, 新曜社.
- マクレランド, C. デイビッド著、梅津祐良, 菌部明史, 横山哲夫 訳[2005], 『モチベーション：「達成・パワー・親和・回避」同期の理論と実際』, 生産性出版.
- マズロー, H. アブラハム著、早坂泰次郎 訳 [1971], 『可能性の心理学』, 川島書店.
- 著、上田吉一 訳[1973], 『人間性の最高価値』, 誠信書房.
- 著、上野圭一 訳[1986], 「メタ動機：価値ある生き方の生物学的基盤。」(ウォルシュ, N. ロジャー., ヴォーン, F. 編., 吉福伸逸 編訳『ヴォーンフランシストランスパーソナル宣言—自我を超えて—』春秋社, 225–244 頁, 所収.)
- 著、小口忠彦 監訳[1987], 『人間性の心理学』, 産業能率大学出版部.
- 著、上田吉一 訳[1995], 『真実の人間』, 誠信書房.
- 著、上田吉一 訳[1998], 『完全なる人間—魂のめざすもの』, 誠信書房.
- 著、金井壽宏監訳 ; 大川修二 訳[2001], 『完全なる経営』, 日本経済新聞社.
- マルクス, カール著、高島素之 訳 [1925], 『資本論』, 新潮社.
- ミュルダール, グンナー著、丸尾直美 訳[1971], 『社会科学と価値判断』, 竹内書店.
- ミュルダール, グンナー., キング, セス S. (編)、板垣与一 監訳, 木村修三 訳[1974], 『アジアのドラマ：諸国民の貧困の一研究. 東京都：東洋経済新報社』.
- メドウズHドネラ., メドウズLデニス., ランダース, ヨルゲン., ベアランズ, ウィリアムW 著、大来佐武郎 監訳[1972], 『成長の限界：ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』, ダイヤモンド社.
- モリッシュ, ミッシェル著、保科秀明 訳[2000], 『第三世界の開発問題』, 古今書院.
- リオール, ノラン著、関根久雄, 玉置泰明, 鈴木紀, 角田宇子 訳[2007], 『開発人類学』, 古今書院.
- ロウ, フィリップ., ウォード, ニール., アタートン, ジェーン., キム, タイヨン., フィリップソン, ジェレミー., トンプソン, ニコラ著、安藤光義, 小田切徳美 訳[2012], 「大学・知識経済・ネオ内発的発展論」(フィリップ, ロウ., 安藤光義 (編), 『英国農村における新たな知の地平：Centre for Rural Economy の軌跡』, 農村統計協会, 189-205 頁, 所収.)

<外国語文献>

- Astroulakis, Nicos.[2013], “Ethics and International Development: The Development Ethics Paradigm”, *Journal of Economics and Business*, Vol.16, pp.99-117.
- [2010], “The Development Ethics Paradigm: Ethical Goals and Strategies for an Authentic Development”, *Working Paper for the EuroMemo: 16th Workshop on Alternative Economic Policy in Europe*, Crete Greece: University of Crete.
- Bernard, Jessie. [1973], *The Sociology of the Community*. London: Scott Foresman and Company.
- Berger, Peter L. [1976], *Pyramids of sacrifice : political and ethics and social change*, Garden city: Anchor press.
- Csikszentmihalyi, Mihaly. [2000], *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play*, 25<sup>th</sup> anniversary edition, San Francisco: Jossey-Bass.
- Crocker A, David.[2001], “Globalization. Ethical and Institutional Concerns”, In: Louis, Sabourin. and Malinvaud, Edmond., eds., *Globalization and Human Development Ethical Approaches*, Vatican City: Pontifical Academy of Social Sciences, pp.45-65.
- Dag Hammarskjöld Foundation. [1975], “What now: Another Development”, in: Dag Hammarskjöld Report on *A journal of international development cooperation*, prepared on the occasion of the Seventh Special Session of the United Nations General Assembly, Uppsala: Dag Hammarskjöld Foundation.
- Dahl A. Robert., Taft R, Edward.[1973], *Size and Democracy*, Stanford: Stanford University Press.
- De Sousa Santos, Boaventura., ed. [2007], *Cognitive Justice in a Global World: Prudent Knowledges for a Decent Life*, London: Lexington Books.
- [2005]. *Democratizing Democracy: Beyond the Liberal Democratic Canon*, London: Verso.
- Deci L, Edward., Ryan M, Richard.[1985], *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*, New York: Plenum Press.
- Dower, Nigel. [2007], *World Ethics, 2nd edition*, Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- [2008], “ The nature and scope of development ethics”, *Journal of Global Ethics*, Vol. 4(3), pp183-193.
- ETC-foundation COMPAS.[2007], *Lerning Endogenous Development*, Warwickshire UK: Practical Action Publishing.
- Friends of the Earth. [1972], *The Stockholm Conference-only one earth: an introduction to the politics of survival*, London: Earth Island.

- Gasper, Des. [2011], "Development Ethics – What? Why ? How?", Paper for conference on; *Rethinking Development: Ethics and Social Inclusion*, Mexico City, 17-18<sup>th</sup>, August UNESCO.
- Goulet, Denis.[1996a], "Authentic Developoment." in: Pirages, C. Dennis, eds., *Building Sustainable Societies*, New York: M.E.Sharpe, pp.189-205.
- [1996b], "A NEW DISCIPLINE: DEVELOPMENT ETHICS", *Kellogg Institute-The Helen Kellogg Institute for International Studies*, Working Paper, Vol.231.
- [1997], "Development Ethics: A New Discipline" Vol.24(11), pp.1160-1171.
- Government of Nepal, Central Beareu of Statistics(NPCS). [2012], "National Population and Housing Census 2011", *National Report*, Vol.1
- [2012], "National Living Standard Survey( NLSS)(3)-2010/2011", *National Report*.
- [2016],*Nepal and the Millennium Development Goals Final Status Report 2000-2015*.
- Government of Nepal, UNDP(United Nations of Development Programme)[2014], *Nepal Human Development Report 2014*.
- Guilford, Joy.[1959], "Traits of Creativity." In: Anderson, H.H., eds., *Creativity and Its Cultivation*, New York: Harper and Row, pp.142-161.
- Gurung, Harka.[2006], *Nepal Atlas & Statitics*, Himal Books.
- Haley, Alex. [1994], *Roots-Tha Saga of an American Family*, Vintage.
- Hull, Clark L.[1943], *Principles of Behavior*. New York: Applenton-Century-Crofts.
- James,William. [1890], *The principles of psychology*, New York: Holt.
- Khan, Akhter Hameed. [1998], *Orangi Pilot Project: Reminiscences and Reflections*, Oxford University Press.
- Kim, H Daniel.[2011], *Organizing for Learning: Strategies for Knowledge Creation and Enduring Change*, Pegasus Communications.
- Maslow, Abraham H.[1987], *Motivation and Personality* [3rd edition], New York: Addison Wesley Longman.
- Max-Neef, Manfred.[1992], "Development and Human Needs." in: Paul, Ekins., and Max-Neef, Manfred., eds., *Real-Life Economics*, London: Routledge, pp.197-213.
- Mead, George H. [1934], *Mind, self, and society: from the standpoint of a social behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press.
- Nagel, Ernest. [1961], *The structure of Science*, London : Routledge & K. Paul.
- Narayan, Deepa., and Petesch, Patti.[2002], *Voices of the Poor from Many Lands*. New York: Oxford University Press.

- Narayan, Deepa., Chambers, Robert., Shah, K. Meera., and Peteschi, Patti.[2000], *Voices of the Poor: Crying Out for Change*. New York: Oxford University Press.
- Narayan, Deepa., Petal, Raj., Schafft, Kai., Rademacher, Anne., and Koch-Schulte, Sarah.[1999], *Voices of the Poor: Can Anyone Hear Us?*, New York: Oxford University Press.
- Nerfin, Marc.[1987], "Neither Prince nor Merchant: Citizen-An Introduction to the Third System." in: Dag Hammarskjöld Foundation, *Development Dialogue*, Uppsala: Dag Hammarskjöld Foundation, pp.170-195.
- Niemiec, Chirstopher P., Ryan, M. Richard., Deci, L. Edward.[2009], "The Path Taken: Consequences of Attaining Intrinsic and Extrinsic Aspirations", *Journal of Research in Personality*, Vol.43, pp. 291-306.
- Persons, Talcott.[1961], "An Outline of the Social System", in: Persons, Talcott., et al., eds., *Theories of Society*, Vol.1, the Free Press.
- Plutchik, Robert., Kellerman, Henry. [1980], *Emotion: theory, reseach and experience*, New York: Academic Press.
- Ray, Christopher.[1999], "Reconsidering the Evaluation of Endogenous Development: Two Qualitative Approches", *Centre for Rural Economy*, Working Paper Series(39), University of Newcastle.
- [2001], *Culture Economies --a perspective on local rural development in Europe*, University of Newcastle.
- Rosenburg, Morris. [1965], *Society and the adolescent self-image*, Princeton University Press.
- Ryan, M. Richard.[2012], *The Oxford Handbook of HUMAN MOTIVATION*. New York: Oxford University Press.
- Skinner, E.A., Kindermann, T.A., Connell, J.P., and Wellborn, J.G.[2009], "Engagement and disaffection as organizational constructs in the dynamics of motivational development." in: K.R.Wentzel., and A.Wigfield., Eds., *Handbook of Motivation at school*, New York: Routledge, pp.197-222.
- Slee, Bill.[1994], "Theoretical Aspects of the Study of Endogenous Development." in: Ploeg, Douwe van dar Jan., and Long, Ann., eds., *Born from Within--Practice and Perspectives of Endogenous Rural Development*, Assen Netherlands: Van Gorcum, pp.184-194.
- St. Clair Lera, Asuncion.[2007], "A Methodologically Pragmatist Approach to Development Ethics." *Global Ethics*, vol. 3(2), pp.141-162.
- Stiglitz E, Joseph.[2005], "Ethics, Economic Advice, and Economic Policy". In: DeMartino, George., and McCloskey, Deirdre., eds., *The Oxford Handbook of*

- Professional Economic Ethics*, New York: Oxford University Press.
- [2007]. *Making Globalization Work*, expanded edition. New York: WW Norton.
- Taormina, J. Robert., and Gao, H. Jennifer.[2013], “Maslow and the Motivation Hierarchy: Measuring Satisfaction of the Needs”, *The American Journal of Psychology*, vol.126, pp. 155-177.
- Titmuss, Richard.[1997], *The gift relationship : from human blood to social policy*, New York: New Press.
- Trope, Yaacov.[1975], “Seeking information about one's own ability as a determinant of choice among tasks”, *Journal of Personality and Social Psychology*, vol.32, American Psychological Association, pp.1004-1013.
- Trope, Yaacov.[1986], “Self-enhancement and self-assessment in achievement behavior” in: Sorrentino, R.M., Higgins, E.T., eds., *handbook of motivation and cognition: foundations of social behavior*, Vol.1, New York: The Guilford Press, pp.350-378.
- [1983], “Self-assessment in Achievement behavior.” in: J. Suls, and Greenwald, A.G., Eds., *Psychological perspectives on the self*, Vol.2, Hillsdale: Erlbaum.
- Tsurumi, Kazuko.[1976], *Yanagita Kunio's Work As a Model of Endogenous Development*, The Japan Quarterly, Research Paper (Series A-26), Sophia University, pp.223-238.
- United Nations.[1964], *Towards a New Trade Policy for Development*, United Nations Secretary General.
- United Nations Development Programme.[1995], *Human Development Report 1995*, New York: Oxford University Press.
- Vanklay, Frank.[2011], “Endogenous rural development from a sociological perspective”, in: Stimson, Robert., Stouch, R.Roger., and Nijkamp, Peter., eds., *Endogenous Regional Development*, Cheltenham, UK: Edward Elgar Publishing Limited, pp.59-72.
- Vernon, E. Philip. [1970], *Creativity*, Penguin Books.
- WFP/FAO(Nepal). [2007], *Food and Agricultural Markets in Nepal*. United Nations of WFP/FAO Nepal.
- Woodworth, R.S.[1918], *Dynamic Psychology*, New York: Columbia University Press.

<日本語 Web ページ>

外務省., トップページ > 国・地域 > アジア > ネパール連邦民主共和国,

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asia.html> [アクセス日: 2018 年 4 月 24 日].

外務省 (日本) a., “国別開発協力方針 (旧国別援助方針)・事業展開計画”,

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000072266.pdf> [アクセス日: 2018 年 1 月 14 日].

外務省 (日本) b., “ネパール国別評価 (第三者評価)” 国際協力 政府開発援助 ODA ホームページ,

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/nepal/kn12\\_01\\_index.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/nepal/kn12_01_index.html) [アクセス日: 2018 年 1 月 14 日].

厚生労働省., 日本人の食料摂取基準,

<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/0000041955.pdf> [アクセス日: 2018 年 1 月 14 日]

在ネパール日本国大使館., 図説ネパール経済, 在ネパール日本国大使館,

<http://www.np.emb-japan.go.jp/jp/pdf/economy2013.pdf> [アクセス日: 2018 年 10 月 25 日]

総務省統計局 ., 労働力調査[2018],

<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html> [アクセス日: 2018 年 5 月 26 日]

特定非営利活動法人途上国観光支援センター., DTAC ネパール観光情報局,

<http://www.dtac.jp/asia/nepal/holiday.php> [アクセス日: 2018 年 1 月 14 日].

独立行政法人国際協力機構., 日本センター,

<https://www.jica.go.jp/japancenter/about.html>[アクセス日: 2018 年 9 月 20 日].

ー, ABE イニシアチブ,

<https://www.jica.go.jp/africahiroba/business/detail/03/index.html>[アクセス日: 2018 年 9 月 20 日].

独立行政法人国際交流基金.,

<http://www.jpf.go.jp/j/index.html>[アクセス日: 2018 年 9 月 20 日].

独立行政法人日本貿易振興機構.,

<https://www.jetro.go.jp/jetro/>[アクセス日: 2018 年 9 月 20 日].

ビタリア製菓株式会社., 食品別カロリー早見表,

<http://www.vken.net/diet/calory/01.html> [アクセス日: 2018 年 11 月 22 日].

文部科学省., 世界教育フォーラム 2015 (World Education Forum) について,

<http://www.mext.go.jp/unesco/002/006/001/shiryo/attach/1360520.htm>[アクセス日: 2018 年 10 月 9 日].

<外国語 Web ページ>

- Asian Development Bank(ADB).[2017], Country Poverty Analysis (Detailed) Nepal, *Country Partnership Strategy*, Asian Development Bank,  
<https://www.adb.org/sites/default/files/linked-documents/cps-nep-2013-2017-pa-detailed.pdf> [アクセス日:2018 年 5 月 24 日]
- AFP. BB News.[ 2009 年 12 月 8 日付],  
<http://www.afpbb.com/articles/-/2672385?pid=5004455> [アクセス日: 2018 年 11 月 22 日].
- Center for Sacred Studies.,  
<http://centerforsacredstudies.org/>[アクセス日: 2018 年 9 月 20 日].
- Centre Virtuel de la Connaissance sur l'Europe (CVCE).[1955], “Final Communiqué of the Asian-African conference of Bandung”, The Franke Institute for The Humanities, [http://franke.uchicago.edu/Final\\_Communique\\_Bandung\\_1955.pdf](http://franke.uchicago.edu/Final_Communique_Bandung_1955.pdf) [アクセス日: 2018 年 1 月 19 日].
- Credit Suisse., Global Wealth Report 2017,  
<https://www.credit-suisse.com/corporate/en/articles/news-and-expertise/global-wealth-report-2017-201711.html> [アクセス日: 2018 年 9 月 18 日].
- Dag Hammarskjöld Foundation.,  
<http://www.daghammarskjold.se/>[アクセス日 : 2018 年 11 月 20 日]
- Entymoline., Online Etymology Dictionary,  
<https://www.etymonline.com/word/development> [アクセス日: 2018 年 4 月 23 日].
- European Network for Rural Development.,  
[https://enrd.ec.europa.eu/leader-clld\\_en#\\_edn1](https://enrd.ec.europa.eu/leader-clld_en#_edn1)[アクセス日: 2018 年 10 月 6 日].
- FAO(FAO STAT)., Food and Agricultural Organization of the United Nations (FAO) -FAO STAT, <http://www.fao.org/faostat/en/#data/FBS> [アクセス日: 2017 年 11 月 22 日].
- Global Policy Forum., Average GDP per Capita In 20 High Income Countries And 20 Low Income Countries,  
<https://www.globalpolicy.org/component/content/article/104-tables-and-charts/46585-average-gdp-per-capita-in-20-high-income-countries-and-20-low-income-countries.html> [アクセス日: 2018 年 1 月 19 日].
- Government of Nepal Ministry of Commerce and Supplies., Trade and Export Promotion Centre Export Import Data Bank,  
<http://www.efourcore.com.np/tepcdatabank/countrywise.php?txtmode=search> [アクセス日: 2018 年 1 月 14 日].

- Government of Nepal Ministry of Forest and Soil Conservations., Chitwan National Park Office, <https://www.chitwannationalpark.gov.np/> [アクセス日: 2018 年 10 月 25 日].
- Harry S. Truman Presidential Library & Museum.,  
[https://www.trumanlibrary.org/whistlestop/50yr\\_archive/inagural20jan1949.htm](https://www.trumanlibrary.org/whistlestop/50yr_archive/inagural20jan1949.htm) [アクセス日: 2019 年 1 月 19 日].
- IMF., IMF Data Mapper, GDP per capita, Current prices,  
<https://www.imf.org/external/datamapper/NGDPDPC@WEO/THA/IDN/PHL/VNM/MYS/NPL> [アクセス日: 2018 年 10 月 25 日].
- James Martin Center for Nonproliferation Studies., “1st Summit Conference of Heads of State or Government of the Non-Aligned Movement, 1961”, Non-Aligned Movement (NAM) Disarmament Database,  
[http://cns.miis.edu/nam/documents/Official\\_Document/1st\\_Summit\\_FD\\_Belgrade\\_Declaration\\_1961.pdf](http://cns.miis.edu/nam/documents/Official_Document/1st_Summit_FD_Belgrade_Declaration_1961.pdf) [アクセス日: 2018 年 1 月 19 日].  
—, “2nd Summit Conference of Heads of State or Government of the Non-Aligned Movement, 1964”, Non-Aligned Movement (NAM) Disarmament Database,  
[http://cns.miis.edu/nam/documents/Official\\_Document/2nd\\_Summit\\_FD\\_Cairo\\_Declaration\\_1964.pdf](http://cns.miis.edu/nam/documents/Official_Document/2nd_Summit_FD_Cairo_Declaration_1964.pdf) [アクセス日: 2018 年 1 月 19 日].
- Nepal Tourism Board., Naturally Nepal-Once is not enough,  
<https://www.welcomenepal.com/places-to-see/must-see-national-parks-of-nepal.html> [アクセス日: 2018 年 10 月 25 日].
- Nobel Foundation., Nobelprize.org,  
[https://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/medicine/laureates/1948/muller-bio.html](https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/medicine/laureates/1948/muller-bio.html) [アクセス日: 2018 年 4 月 23 日].
- Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD)., OECD Aid at a glance charts[2015-2016],  
[https://public.tableau.com/views/OECDDACaidataglancebyrecipient\\_new/Recipients?:embed=y&:display\\_count=yes&:showTabs=y&:toolbar=no?&:showVizHome=no](https://public.tableau.com/views/OECDDACaidataglancebyrecipient_new/Recipients?:embed=y&:display_count=yes&:showTabs=y&:toolbar=no?&:showVizHome=no) [アクセス日: 2018 年 5 月 29 日].
- Promoting Local Innovation: PROLINNOVA.,  
<https://www.prolinnova.net/resources/wpaper> [アクセス日: 2018 年 9 月 18 日].
- South African History Online., South African History Online,  
<http://www.sahistory.org.za/> [アクセス日: 2018 年 1 月 19 日].
- UN comtrade., UN comtrade Database, <https://comtrade.un.org/> [アクセス日: 2017 年 11 月 20 日].

- United Nations Development Programme(UNDP)., Human Development Reports ,  
<http://hdr.undp.org/en/composite/HDI> [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].
- , Human Development Reports 2011,  
[http://hdr.undp.org/sites/default/files/reports/271/hdr\\_2011\\_en\\_complete.pdf](http://hdr.undp.org/sites/default/files/reports/271/hdr_2011_en_complete.pdf)  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].
- , WDI online database, <http://hdr.undp.org/en/data>  
 [アクセス日: 2018 年 9 月 20 日].
- United Nations Development Programme(UNDP)., Human Development Reports  
 Teble5: Gender Inequality Index, <http://hdr.undp.org/en/composite/GII> [アクセス  
 日: 2018 年 9 月 9 日]
- United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO)., World  
 Heritage Center, <https://whc.unesco.org/en/list/121> [アクセス日: 2018 年 4 月 24  
 日].
- United Nations Department of Economics and Social Affairs (DESA)a., “World Economic  
 Situation and Prospects 2018”,  
[https://www.un.org/development/desa/dpad/wp-content/uploads/sites/45/publicat  
 ion/WESP2018\\_Full\\_Web-1.pdf](https://www.un.org/development/desa/dpad/wp-content/uploads/sites/45/publication/WESP2018_Full_Web-1.pdf) [アクセス日: 2018 年 4 月 24 日].
- (DESA)b., “World Economic Situation and Prospects”,  
<http://www.un.org/en/development/desa/policy/wesp/archive.shtml#2011> [アクセ  
 ス日: 2018 年 4 月 24 日].
- United Nations of Human Rights Office of the High Commissioner., “Universal  
 Declaration of Human Rights”,  
<http://www.ohchr.org/EN/UDHR/Pages/Language.aspx?LangID=jpn> [アクセス  
 日: 2018 年 5 月 17 日].
- World Bank., World Bank Online Data, Population,  
<https://data.worldbank.org/indicator/SP.POP.TOTL?locations=NP&view=chart>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].
- , GDP (Current USD),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.MKTP.CD?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 5 月 22 日].
- , GDP growth(annual %),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.MKTP.KD.ZG?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].
- , Agriculture, forestry, and fishing, value added (% of GDP),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NV.AGR.TOTL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Employment in agriculture (% of total employment) (modeled ILO estimate)  
<https://data.worldbank.org/indicator/SL.AGR.EMPL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Nepal Unemployment, total (% of total labor force) (modeled ILO estimate),  
<https://data.worldbank.org/indicator/SL.UEM.TOTL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Japan Unemployment, total (% of total labor force) (modeled ILO estimate),  
<https://data.worldbank.org/indicator/SL.UEM.TOTL.ZS?locations=JP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Employment in industry (% of total employment) (modeled ILO estimate),  
<https://data.worldbank.org/indicator/SL.IND.EMPL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Employment in services (% of total employment) (modeled ILO estimate),  
<https://data.worldbank.org/indicator/SL.SRV.EMPL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Industry (including construction), value added (% of GDP),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NV.IND.TOTL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Service, value added (% of GDP),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NV.SRV.TOTL.ZS?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Service, value added (annual % growth),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NV.SRV.TOTL.KD.ZG?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Industry (including construction), value added (annual % growth),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NV.IND.TOTL.KD.ZG?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Agriculture, forestry, and fishing, value added (annual % growth),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NV.AGR.TOTL.KD.ZG?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, Poverty headcount ratio at \$1.90 a day (2011 PPP) (% of population),  
<https://data.worldbank.org/indicator/SI.POV.DDAY?locations=NP>  
 [アクセス日: 2018 年 10 月 11 日].

—, GNI per capita, Atlas method (current US\$),  
<https://data.worldbank.org/indicator/NY.GNP.PCAP.CD?end=2017&locations=XM-XD&start=1984&type=shaded>

[アクセス日: 2018 年 11 月 21 日].

ー, Urban population ,

<https://data.worldbank.org/indicator/SP.URB.TOTL?locations=NP>

[アクセス日: 2018 年 5 月 22 日].

ー, Urban population(% of total),

<https://data.worldbank.org/indicator/SP.URB.TOTL.IN.ZS?locations=NP>

[アクセス日: 2018 年 5 月 22 日].

ー, Rural population,

<https://data.worldbank.org/indicator/SP.RUR.TOTL?locations=NP>

[アクセス日: 2018 年 5 月 22 日].

ー, Rural population(% of total),

<https://data.worldbank.org/indicator/SP.RUR.TOTL.ZS?locations=NP>

[アクセス日: 2018 年 5 月 22 日].

World Bank., The DATA Blog,

<https://blogs.worldbank.org/opendata/new-country-classifications-income-level-2017-2018>[アクセス日: 2018 年 9 月 12 日].

## 英語省略記号一覧

CCDN (Center for Community Development : コミュニティ開発センター ※ネパールの  
NGO の名称)

EU (European Union : ヨーロッパ連合)

FAO (Food and Agriculture Organization : 国連食糧農業機関)

FAO STAT (Food and Agriculture Organization Statistics : 国連食糧農業機関統計)

GDP (Gross Domestic Products : 国内総生産)

GII (Gender Inequality Index : 男女平等指数)

GNI (Gross National Income : 国民総生産)

HDI (Human Development Indicator : 人間開発指数)

IDA (International Development Association : 国際開発協会)

ILO (International Labor Organization : 国際労働機関)

IMF (International Monetary Fund : 国際通貨基金)

JETRO (Japan External Trade Organization : 独立行政法人日本貿易振興機構)

JICA (Japan International Cooperation Agency : 独立行政法人国際協力機構)

JPF (The Japan Foundation : 独立行政法人国際交流基金)

MDGs (Millennium Development Goals : ミレニアム開発目標)

NPC (Nepal National Planning Commission : ネパール国家計画委員会)

NPCS (Nepal National Planning Commission Secretariat : ネパール国家計画委員会事務局)

ODA (Official Development Assistance : 政府開発援助)

PLA (Participatory Learning Appraisal : 参加型学習調査法)

PRA (Participatory Rural Appraisal : 参加型農村調査法)

UN (The United Nations : 国際連合)

UNDP (United Nations of Development Programme : 国連開発計画)

UN DESA (The United Nations of Development of Economics and Social Affairs)

UNESCO (The United Nation Educational, Scientific and Cultural Organization : 国連  
教育科学文化機関)

World Bank (世界銀行)

あとがき—いくつかの懸念

内発的発展論についての懸念として、鶴見和子は議論の中で「外部との接触」について、もっと紙幅を割いて説明しておくべきだったのではないか、ということがある。内発的という言葉が独り歩きすると、まるで「外部との接触」がない状態を示す概念であるかのよう受け取られかねない。しかし、内発的発展論では外部との接触は発展に必要なものと明記している。本論文では、幸いにして調査したキー・パーソンが、「偶発的な出会い」（外部との接触）によって人生を切り開いていたところに焦点が当たった。内発的発展論における重要な論点に光を当てる結論となったことを嬉しく思う。

また、内発的発展論が、結局は外部者の「開発」の手段になってしまうのではないかという懸念もある。そのことでかえって内発的発展論に抵抗を覚える場合もあるという。この点、筆者はネパール出身であるが、「内発的発展論」という名称、およびその議論の中身に違和感や抵抗感を覚えなかった。筆者の視点から見ると、鶴見の「内発的発展論」は、外部者によってなされる開発のための議論ではなく、あくまでの当地の人々のあり方をよく学びとり、相互に有効なものとしていこうとする学びの姿勢によるものである。一方的な支援ではなく、学びの相互関係として扱われることは、途上国と呼ばれ、支援されつづけている側にとっては大変ありがたい観点である。

また、本論文はこの研究のために心理学を参照した。しかし、これも、外部者が開発のために相手をコントロールしようとして研究したのではないし、そうすべきではない。そうではなく、近代化の勢いに飲み込まれず、当地の人々が自由に行っている活動こそが有効に生かされるように、そのような活動のきっかけとなる「触媒」を見つけたかった。それが何かを知りたかったのである。開発ではなく触媒をもって、より多くの人が夫々の場所で創造的な活動をし、近代化の波に対抗していけるような方法を見出したかった。外部者が関与するという視点から見れば、求めるべきは「外部者も参加できる内発的発展」であり、外部者が指導する内発的発展ではない。

自らの意志で国際支援をしている人を見てみると、どちらかといえば、その本人が「善いことをしたい」といった動機で、すなわち自分自身の動機で支援活動をしているように見える。つまり、その支援は第一に「その本人がしたいこと」なのであり、「相手がしてほしいこと」とは別物なのである。この区別をしたうえで、自分の活動を考えることが重要であると感じてきた。それは当地の人のニーズではなく、自分の物の見方に自分が応答しているということが分かるはずである。つまり、それは「外部者の内発的発展」であろう。その本人は、当地の状況の何をなぜ、どのように発展させたいのだろうか。このような問いが発生するであろうし、本人も自分自身の動機について哲学的に反省し、行動と思考の原点を見つけられるはずである。内発的発展といっても、「外部者の内発的発展」か、「内部者自身の内発的発展」かによって、大きな違いがある。また、「双方にとっての内発的発展」ということになれば、それはよいことであると思われる。

## 謝辞

本論を書くに当たり、指導教員としてご指導賜りました同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の峯陽一教授に心より深く感謝申し上げます。また、審査員を請け負ってくださった同研究科の松久玲子教授、同大学院経済学研究科の八木匡教授に心より感謝申し上げます。さらに、博士課程までのご縁を導いていただきました学部時代からの恩師、同志社大学名誉教授の阿部茂行先生に深く感謝申し上げます。

現地調査においてはネパールに住む友人、活動関係者、家族親戚の皆様にも大いに助けていただきました。心より深く皆様に感謝申し上げます。150件近くものサンプルを集めることは、私一人の足では決してできることではなく、これまでネパールで豊かな人間関係を築いてこられたことを心から嬉しく思います。

さらに、論文執筆にあたって、苦しい毎日の中、心を励ましてくれました家族親戚、友人と、活動関係者の皆様に深く感謝申し上げます。慣れない博士論文執筆は、長く苦しい道のりであり、励ましくして完成することはありませんでした。

最後に、今回の調査においてキー・パースンとして調査に協力していただいた5名の皆様に心から感謝申し上げます。大変に長い質問票と、何時間にも及ぶインタビューに協力していただけたのは、長年に及ぶ交友関係の賜物だったと感じています。

今回、内発的発展論に関する論文を書くにあたり、非常な幸運に恵まれました。それは、鶴見和子さんが生前利用された文献、資料等が寄贈された大学である京都文教大学が、自宅近くにあったことでした。鶴見さんは、晩年になると京都宇治にあるゆうゆうの里に來られ、後に書籍や資料を京都文教大学に寄贈されました。そのため執筆中は、京都文教大学の鶴見和子文庫に通い、直筆のメモや棒線の引かれた書籍類を参照することができるという想像を超えた好条件に恵まれることとなりました。

このようなご縁に恵まれ、京都文教大学で鶴見和子文庫の資料整理を担当しておられる杉本星子教授とお話をする機会を得ました。鶴見さんが、生活の綴り方運動にて集めた多くのインタビュー資料をはじめ貴重な資料がまだ多くあり、今も整理に追われているということです。これからも鶴見さんの研究成果は社会に還元されていくものと思われ、大変楽しみです。京都文教大学には貴重な資料収集の機会をいただき、心より感謝申し上げます。